

---

# ポケットモンスター グレー

ktaro0810

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポケットモンスター グレー

### 【Nコード】

N8545V

### 【作者名】

ktaro0810

### 【あらすじ】

あらすじはある程度話数が揃ってから書きます。

## 1. はじめてのポケモン

遙か昔、大地に二つの光が走った。

それらの光は、激しい稲光とあおいほのおをもたらし、土地に根付いた文化や命は、ろくに抵抗することもなくのまれていった。

死んでいった生命の輝きが、空に走った二つの光……それらにある尾へと向かって行き、収束する。

収束。つまりは、一つになったということだ。

だが、それ自体に悲しみの情を抱くということはない。自分がどういうことでこうなったのか分かったあとも、それは同じだ。尻尾へと取り込まれることによって、彼らは世界を見渡すことが出来るようになった。そして、そうってから一番最初にやったことが、英雄。

自分たちを導いて来た英雄たちの姿を見つめることだった。

ーいた。

変わらない姿のまま、そこにいた。だけど、見つめている目には、もう彼らに対する希望の光などは全く灯っていない。彼らの先祖が、そして自分たちがしてきたこと。

それを認識した瞬間だった。

ポケットモンスター。縮めて、ポケモン。

この世界には、そう呼称される生物がいたるところに存在している。人々は彼らと争うことなく、いっしょに暮らしたり、遊んだり、あるいは、鍛え上げたモンスター同士を戦わせたりしていた。

戦わせるといっても、戦争をやるわけではなく、野球やサッカーなどと同じ、いわゆるスポーツの一種としてのものだ。

彼らとの繋がりを維持しておく道具、モンスターボールが展開され、まばゆい光を放つ。それが拡がりきって、格納されていたモンスターが姿をあらわす。

二本足で立つネズミ。どことなくシマリスのように見えなくもない。多分、昔見たアニメーションのせいだろう。ただ、ミネズミという名前からも分かるとおり、リスではなく、ネズミに近い生物だということにされている。

断言することが出来ないのは、様々な学者が研究しているが、未だにポケモンのことについてわかっていないことが多すぎるからだ。

だけでも、とにかく、モンスターボールに入れておくことによつて、ポケモンを自分の相棒としておくことが出来た。

「……………」

その一連の、モンスターが出てくる光景を見つめてから、ユーユウは面白くない顔をした。

今年で17歳。学校指定の制服を着て、夕方の公園、ベンチに腰をおろしている。もうあと2時間もしないうちに太陽が沈むだろうから、彼がここにいることに何の不思議もない。

一度ミネズミから視線をそらして、それからもう一度目をやる。こんな顔はやめよう。そう思っても、制御がきかないから、せめてミネズミの持ち主……トレーナーには気づかれないようにする。

だが、そんな必要はなかったようで、ミネズミと、トレーナーである女の子は、どこかへ走って行ってしまった。

「はぁ……………」

短く息を吐く。

知らないうちに肩にかかっていた重さが抜けていく。

面白くない顔。別にさっきのミネズミに対して恨みがあるわけではない。

腰をあげて、カバンをとって公園を出る。自分の家への帰路につくということだ。

財布、学生証、携帯電話、その他諸々。教科書と筆記用具は学校に置きっぱなし。ここまでは、他の学生だってそうだろう。けれども、ユーユのカバンの中にはモンスターボールはない。カバンどころか、家にだってボールはないし、ポケモンだって一匹もない。ユーユに限らず、彼の母親もそうだ。

モンスターボールが買えないわけではない。ポケモンのことが、嫌いなわけでもない。さっきだって、ミネズミとボールを交互に眺めて羨ましがっていたのだ。ユーユウはまったく気づいてなかったが。

10分ほど歩くと家だ。ライモンシティには戸建てのものは少なく、マンションが多い。

彼の自宅も御多分に洩れずマンションだ。六階が家だ。分譲であるから、家が貧乏というわけではない。むしろ裕福な方だろう。

「ただいま」

短く、しかし、リビングに届くような声。今の時間ならば、ユーユウの母親は夕食の準備をしているはずだ。

いつもだったらちよつと料理が忙しくとも顔を玄関に覗かせてくれるはずだが……今日はそうじゃないみたいだ。

「……………?」

不思議に思いながらも靴を脱いで、その途中にもう一回帰ったと伝えてみる。

「おい、帰ったぞー?」

今度はもうちよつと大きな声で、聞こえるようにしてみる。  
してみるが、返事はない。トイレか? とも思ったが、これくら

いの声なら家のどこにいても聞こえるはずだ。

おかしい。鍵はあいていたんだから、家の中にいないということはないだろう。靴だって置いてあるから、本当は外に出かけてて、鍵をかけ忘れたなんてこともないはずだ。

だったら、なんで……………？

疑問が湧いて、身体中を巡っていくが、答えなんか出ない。

でも、嫌な予感などというのはこれっぽっちも無かった。いつも通りじゃない。いつも通りじゃないけれども、たまにはこういう日だってあるだろう。

だから、ユーユウはひとまず自分の部屋に戻る。部屋に戻って、着替えをすませて、それからリビングに出て、ソファ―ベットに寝転んで、テレビを見る。

それから、30分がたち、そして、ユーユウはいつのまにか眠ってしまっていた。

毎日夜遅くまで起きているから、たまにこうやって眠ってしまう事もある。

と、そこに、ユーユウが寝てしまったためにテレビの音が小さく鳴っている以外にないところに、別の音が鳴った。これは、女の声だった。

「…………ごめんなさい、ね」

女の声は、まさしく、ユーユウの母親のものだ。優しい声色でさやき、優しい瞳でみる。

ただ、彼女の格好はマトモじゃない。普通に暮らしている人間がする姿とは違う。

白と黒を基本としたローブのような服装。ところどころにある青色は、閃光をイメージしているように思える。右胸の部分には大きくPのマーク。

彼女は一度ユーユウの頭を撫でると、近くのテーブルに手紙と大きなタマゴを置いた。

テレビを伝いかけさせたさいみんじゅつによって、いつも以上にきつと夜中ぐらいまでは眠ってくれるはずだ。

けれど、それはわかっていただけけれども、彼女は若干急ぎ足で家を出ていくのだった。

ライモンシティには、ポケモンジムがある。時刻は夜の8時を過ぎたところだ。普通ならば、この時間はまだジムを開いていて、各地からライモンシティに来たポケモントレーナーが腕試しに訪れている。



だが、今日はもうポケモンジムは閉められていて、施設の周囲には誰もいない。

だから、この女ジムリーダー兼モデルのカミツレも、もうこの場所からは離れていて、何人かの警備員が残っているだけだ。

こうなったのは彼女の個人的な理由で、深い付き合いをしている友人がライモンシティに来るという連絡を受けたからだ。その人に久しぶりに会うために、無理言って早く閉めさせてもらった。

フキヨセシティにいるもう一人の友人も、今日はこっちに来てくれる予定になっている。

最近、ジムリーダーへ挑戦しようという人間が増えてきているが、その数に反して、刺激のあるポケモントレーナーというのは少ない。

酷い言い方をすれば、面白味がない。

「はあ……」

そんなことを思っ、自分の仕事につまらなさを感じて、カミツレはため息を漏らす。

けれど、今から会う二人はそんなことはない。いい刺激を与えてくれるポケモントレーナーでもあるのだ。

と、友人に思いを馳せていると、着信が入った。小さなディスプレイには、電話主の名前が表示されていて、その電話が友人からのものであることが分かった。

特に、出られない理由はないので、電話をとって耳にあてる。

「もしもし、トウコちゃん？」

『あ、カミツレさんですか？』

電話の向こうから聞こえてきた声は、まさしくこれから会おうとしている相手の一人だ。

3年前、今と変わらず刺激のないジムリーダー生活を覚えてくれた女の子。その子の元気そうな声を聞いて、ちょっとだけ安心した。

「久しぶりねトウコちゃん。……元気だった？」

『はい！ 元気してましたっ。カントー地方のお土産話、いっぱいありますから！』

イツシュ地方のポケモントレーナーの頂点に立ってから2年ちよつと経っているが、声だけ聞くと、あまり変わっていないさそうだ。

けれど、それはカミツレにとって嫌なことではない。

あの時に、ジムリーダーとして一人のトレーナーと戦った時に披露された輝きが、まだ失われていないという証拠だからだ。

『そつえば、酷いですよ！』

「……？ 何が？」

『聞きましたよ。お二人とも20になった記念だからって、二人だけでお酒飲んだり、美味しいもの食べたりしたそうじゃないですか

「！」

「あー、それは……」

『カミツレさんから誘ったんだって、フウロさんから聞きましたよ……！』

「それは悪かったけど……でも、あと三年も待てないでしょう？」

こうやって、電話を使って喋りながらも、カミツレは周囲に気を払うことは忘れない。

流石に、ジムリーダーが通話に気をとられて誰かとぶつかってしまっなんていうことは嫌だ。

今歩いている通りは、人が少ないわけではないのだから。

『でもだからって、黙っていくなんて酷いですよ。せめて、一言断ってくれないと』

「だから、ごめんなさいと言ってるでしょう？」

周囲の視線が気になる。

ジムリーダーというだけでも注目の的なのに、その上モデルだっ  
てやっているのだから当然かもしれない。

すれ違ったり、いつしよの方向に歩いていたり、反対側の歩道に  
いたり。色んな人がいたが、その視線が自分に集中しているのが分  
かる。

だから、なのだろうか？ 自分の方にまったく視線を向けていない人間がいることに気付く。自然と、カミツレはそっちに意識を集中させる。トウコに悪い気もしたが、しばらくは文句を言い続けるはずなので、空返事でも大丈夫だ。

男の子はどこか焦っている、必死な様子だ。額に汗を浮かべて、落ち着いていない。

その両手でタマゴを抱えているが、大きさから考えて、ポケモンのタマゴだろう。薄い黄色に、ところどころマゼンタの斑点が混じっている。

キヨロキヨロ周囲を見渡しているが、あの様子ではただ頭を振っているだけで、実際に見渡していることにはならないだろう。

『まったく、そんなのだから、彼氏の一人も出来ないんですよ』

聞き捨てならない言葉が耳に入ってきて、カミツレの意識はそっちに向けられる。

「トウコちゃんだって、一緒のはずだけど？ だいたい、私は作らないだけで、引く手数多だってことは知ってるでしょう？ 実際、そのシーンに立ち会ってるわけだしね」

『う………』

「しかも、一人だけじゃないわけだし」

こう言われてしまうと、トウコは黙るしかない。確かに二人とも付き合っている人間がいるわけではないが、可能性から言えば、カミツレの方が断然高い。

『わ、私だって、運命の出会いさえあれば……………ゴニヨ  
ゴニヨ』

うん。こういうところは、まだ子供っぽい。

クスリ、と微笑を浮かべながら、さっきの、あの男の子がいたところに視線を戻すと、もう姿はなく、どこかへ行ってしまった。

――

夜中まで寝ているはずだったユーユウは、夜の帳がおりはじめてきている道を一生懸命に走っていた。

だから、周りの様子なんてあまり見えていない。カミツレが思った通りだ。

起きた時に、口の中に苦さを感じた。いや、あれは渋味と言った方がいいんだろつか。すりりんごを食べた時の感触に似ていたのはよく覚えているが、誰が食べさせたのかは分からない。

一人で食べたのではないことは確かだ。

「……………」

気にはなる。なるのだけれど、今はそれどころじゃない。

ごめんなさい

急用が出来たので、しばらく家を開けます

お金は毎月送ります

あと、私がない間、ユウちゃんが寂しがることのないよう、ポケモンを一匹置いてゆきます

まだタマゴだし、強くはないけれど、可愛がってあげて……

書きなぐり。

一言で表すならばこれだ。読めるか、読めないか。子供であるユウにもやっと分かるような字だ。

……ただ事。返事が無かったところで、いつも家にいる時間になかったところで、何も感じなかった。

でも、これはそういうものとは違う。

（ユウちゃんのお父さんは、暮らしには困らせないからって、出てっちゃったの。すぐ後に、事故にあったって……身体だけは返って

来た。ユウちゃん、絶対、お父さんみたいになっちゃダメだよ？」

笑いながら、遠い目をして言っていたのを、よく覚えている。けれど、瞳の奥底は、その表情とはまったく合致していなかったのを、ユウは幼いながらに感じ取っていた。

「まさか、真似するなって言ってたことを、僕にするわけが……」

そうは言って見ても、あの手紙というかメモと呼ぶべきなのは分からないが、それには、同じことが書かれているような気がしてならない。

嫌な予感がある。

額を、背中を、汗がたつたって落ちていく。

でもそんなことは気にしないで、ユウは走った。眠っている間にあれを書いて出て行ったのだから、まだそれほど遠くには行けないはずだ。

だから、探す。普段動かしていない足にその機会を与えてやる。でも、無理だ。

ヒウンシティの次に人が多く賑わっているのに、小一時間やそこらで見つかるはずもない。そしてそれは、2時間経とうが3時間経とうが変わらなかった。

「クソッ、ダメだっ……こんなクソ広いトコで見つかるわけがない

っ

肩を大きく上下させながらも、走るのが辛くなろうとも、ユーユは足を止めたくなかった。

なかったのだが、道路の反対側にあるスポーツ施設、リトルコートを見て走るのをやめる。

もう夜の１１時になるくらいか、ということで、施設は閉まっている時間だ。

ふと、なんの気なしに道路を横切って正面入り口へと近づく。ここにいる保証なんて何もないが、歩き回っても見つからなかった。

その事実が、ユーユをドアへと近づけさせた。

人を感じするセンサーに身体を近づけてみる。やはり開かない。反応すらしていないみたいだ。

今度は、タマゴを地面に置いて入口のガラス製のドアを力いっぱいに横に引いてみる。と、

「ん、んんーっ！」

ちよつとの力では開かない。ならばもっと、と手に力を込めたところ、入口は開いた。

鍵を閉めてない。

それとも、誰かが開け直したのか。

タマゴを抱える。ドクン、と自分の心臓が鳴ったような気がした。



中に入ると、もう誰もいない。

あれ？ でも、この時間なら、まだ普通は誰かが残ってるんじゃないのか？

疑問が生まれる。

こういう時は、ちょっといつもと違うだけで、そこに何かあるんじゃないだろうか？ と思ってしまふ。

だから、ユーユウもゆっくりと歩いて、リトルコートの観客席へと歩みを進めていく。

「……………」

いつもより長く感じる廊下を抜けて、観客席に入る。

今日はテニスをやっていたらしく、コートだってテニスのもので、二面しかない。

ネットは片付けられていて、ポールは何かの力を受けて、ひしやげている。けれど、今のユーユウにそんな光景はうつらない。

ちょうど真ん中で、男女が向き合っている。どちらも巨大なポケモンを従えていた。片方はポケモンとともにボロボロで、もう片方はほぼ無傷。明らかな力の差だ。

そして、その無傷じゃないほうが、

「母さんっ……………!?!」

ユーユウの母親だ。

うめき。

思わず漏れたうめき声も、戦っている二人には届いていないらしい。

一生懸命に走って、何度か転びそうになりながら、ユーユウは最前列へと出て、コートと客席をとを隔てているフェンスに片手をかける。

それは、ユーユウのヘソに届くかどうかというくらいだったが、客席は最前列でも三階くらいの高さになっているので、飛び降りるのを躊躇ってしまう。それに、今は左腕全体で抱えているポケモンのタマゴのことだっであつた。

「どうやら、お客様がいらっしゃったようだ！」

男の太い声が、コート内に響き渡る。見た目は40代くらいだが、身体から出ている覇気というか、オーラというのは、年相応のものでない。

ユーユウの感じたことのない大人だ。

身にまとっているものは、よく見てみると母親が着ているものと同じ雰囲気を持っているが、ユーユウからすれば、その派手な装飾からは、威圧されているとは思えない。

母さんも振り返り、こちらを見る。

ただ、胸のワッペンはだいたい同じで、大きなPのマークをえぐるようにZの文字が走っている。

一通り見た後で、ユーユウは母親と、見たことのない服装に身を包ませた母さんと目をあわす。

その目は大きく見開かれていて、まさしく驚嘆した、という様子だった。本気で、心の底から驚いている。

そのために、自然と、次に口から出てくる言葉は大きなものとなった。

「母さん何をしてるんだ！？ そんなトコでっ！」

たった一言。

ただそれだけだが、うつむいてしまう。ユーユウがさっき思ったことと同じことを、彼女も思ったからだ。

けれど、この一言は、出さないほうがよかったのかもしれない。生命のやりとりをしているところに、邪魔をいれてしまった。

男は、ユーユウの声を聞いて、その意味を理解し、口をつり上げる。自分が勝ったことを確信したからだ。

最も、割り込みなど入らなくとも、このままいけば勝利していただろうが。

「ユウちゃん……」

「母さん……！」

もう、限界だ。

素人目でも、もう戦える状態にないのが分かった。

母さんの周りには立ち上がる力を無くしてしまったポケモンが四体転がっていて、おそらくは、今立っていて、彼女を守っているものも、長くは保たないだろう。

そのことを、ユーユウの母親もよく理解していた。

だから、ユーユウに目を向けるのをやめ、男と再び相対する。つまり、覚悟を決めたということだ。

ごめんね。

喋らないで、口だけを動かす。こうした状況の中で、それは、しっかりとユーユウに伝わっていた。

男が従わせるポケモンが、ゆっくりと大きな口を開く。そのポケモンなりの勢いのつけ方なのだろうか、オレンジ色の巨体を震わせ、大きな翼をひろげる。

フェンスを握るユーユウの手に、更なる力がこもる。けど、それだけしかない。飛び降りて、走って、親の盾になろうなんていうことは出来ないでいる。

大きな口よりも更に巨大な炎のエネルギーがあふれる。それは、遠くにいるユーユウにも感じられた。

死を与えるエネルギー。明確だ。

だけど、それを受ける側だというのに、動けない。なぜだろう？

限界。それは違う。

足は動かし、奴が放とうとしている炎タイプ最強クラスの技……  
だいまんじにどう対応すればいいのかも分かる。

でも、動かない。

それは、なぜか、最後に残った自分のポケモン、カイリユーも一  
緒だった。しきりに、腰にすえられた6つめボールを気にしている  
ようにも見える。

「……………！」

一瞬だった。

チャージの終わった炎が放たれ、直撃し、大の字を描く。そして  
それは、カイリユーを縛り付ける様にしてから、一気に炸裂した。

戦闘不能にする威力を超えていて、その直撃を受けて、踏みと  
どまりはしたが、耐えきれず、カイリユーは前のめりに倒れてしま  
う。

「しまった……カイちゃんっ！」

まだ、目は開けられている。

しかし、身体はもう動く様子は無く、息も絶え絶えだ。いつ、そ

の瞳を閉じ、他の四体のあとを追っても不思議ではない。

そして、そんな大きなダメージを受けても、視線はただの一ミリも逸れてはいない。強い意思をもった目。抵抗では無く、これは願望なんだと、ようやくと理解する。

「分かった……」

と、その6つめのモンスターボールを取り出し、それを思い切り投げる。中にポケモンは入っているし、今の状況では、当然捕まえるためではない。

上手くコントロールされていて、それは、ユーユウがいる観客席のすぐ近くに落ちる。

ボールを追っていくのを視界に焼き付けてから、カイリユーの目を覗くと、ありがとうと言っているんだろうと思える目をしていた。

それから、見開かれていた目が、ずっと開かれていた瞳が、ゆっくりと下に落ちて行き、やがて、閉じる。

これでもう、他の四体と同じになってしまった。再び目が開くことはないだろう。

手をのばし、頬を撫で、おでこにのせる。まだ熱は残っているが、動くことはない。そう思うと、手が震えるのも仕方がなかった。このあとに待っているであろう運命を、まだ受け入れ難いということだ。

「でも、カイちゃんは、ちゃんとしたのだから……」

ゆったり立ち上がる。

カイリユーのおでこに当たっていた手を離して、男に再度向き直す。男のポケモンは、もう一度だいもんじを放つ構えだ。防ぐ手だてはない。全て、失ってしまった。

だが、逃げない。

こういうのは、本当は見せなくなかったし、巻き込みなくなかったが、こうなってしまったのは、もう運命なんだとして受け入れる他ない。

それに、やっと、嘘をつかないですむようになった。

悲しい思いはさせなくなかったけど、そのことだけは、ほんのちよつと、嬉しいことだ。

「ユウちゃん………！」

だから、最後に名前を呼ぶ。それだけで十分なんだ。

炎が、目前まで来ていた。

――

また、巨大な炎が大の字になる。

その瞬間を、ユウユウははっきりと目に焼き付けた。

なんでこういうことになったのか。

それは、説明も何も無いので分かるわけもない。ただ、

「母さんっ!」

炎に包まれてゆく身体。さっきと同じ技なのだから、縛り付けて、炸裂するはずだ。けれども、その必要はない。

ポケモン相手に撃ち、大ダメージを与えるような技だ。それを人に向ければ、最初に炎が直撃した時点で、対象がどうなってしまうのかは想像がつく。

そして、母親の身体は、ユーユウの想像した通りになっていた。皮膚が焼け落ち、ドロドロに垂れさがる。そんなレベルでは無く、命中した段階でもう、半身は吹き飛び、もう片方も数瞬後に灰塵と化していた。

「あ、あ………?」

頭が一気に真っ白になる。

一体、何が起きたのか。それは分かる。でも、受け入れたくない……受け入れられないでいる。

しかし、目の前に広がる光景が、自身の目で見ていた過程が、どれほど嫌なことでも、避けたいことでも、その意味を認識させる。

そして次に頭を染めたのが、



「貴様……なんだ……？ 何をした！？」

真っ黒な気持ちだった。

その声を聞き、カイリユーの亡骸から目を離し、男はフェンスの向こうにいるユーユウと目を合わせる。

「なに？ 見てわかったろう？ 彼女に死んでもらったのだよ」

「な……！？」

あんまりにも当たり前のように言う。まるで気にしていない言い方。だから、頭に血が登っていくのを止められない。

「なんで、当たり前のように言う！？ なんで、ポケモンバトルで使う技を人に向ける！？ あんた、自分が何をしたか分かっているのか！」

フェンスをガタガタ揺らしながら、はっきりとした口調で言う。かなり攻撃的な喋り方だったが、男は特にどうするわけでもなく、ただ肩をすくめた。

「命のやり取りをやっていたのだよ？ こちらが殺されるかもしれないのに、手加減などなぜ出来る？ 私は、彼女のように、ちゃんとしたところに守られているわけではないからな。敗れ、捕らえられでもしたら、何もされないという保証も無い」

「何がやり取りだ……！ よく言う！ あんた、圧倒的だったじゃないか。決まっていた。僕が来た時点で、もう勝敗は決まっていたのに……！」

本当は、こういう風に喧嘩腰にならないほうがいい。不用意な一言で、死んでしまう可能性だってあるのだ。

けど、冷静じゃ無い人間に言っても無駄だ。

「なんで、なんで……殺したんだ！ 殺す必要があったっていうんだ！？」

「必要があったからだ」

「必要……？」

「裏切った人間には、罰を与えなければならん。血の代償を払わせる。だから殺したのだっ！」

「なに……！？」

言っている意味が、いまいち理解出来ない。血の代償？ 裏切った？ どういうことだ？

状況がのめない。

だから殺された。理由づけて……故あって？

そんな言葉が頭のなかで反芻するが、混乱しているのが変わることは無い。でも、裏切ったということは、以前、母さんがあの男と同じ側に立ってた……？

「ふ、ふふ……」

思わず、笑ってしまう。

あまりにもいきなり過ぎたために混乱してしまい、相手の言葉をそのまま受け入れようとしてしまったが、なんのことはない。

人を殺すような連中と自分の母親がつるんでいたなどということ、信じられるわけもない。あの男の口から出てきている言葉を素直に受け取るなど、出来るはずもない。

ためらわずに観客席から飛び降り、ユーユウはテニスコートの中へと、ゆっくり足を進めはじめる。

男は怪訝そうな顔をしていたが、やがて高圧的にこう告げた。

「……それ以上寄れば、お前を殺さなければならなくなる。無駄な殺生をさせるな。私は目的は達した。じきに追っ手も来よう。危害を加えるつもりはない」

言ったところで、ユーユウの足は止まらない。

彼の左腕に抱かれているポケモンのタマゴが暴れるが、まるで興味のない風にして、それを足下に置き去りにした。

三歩歩いた時に割れ、中からポケモンが飛び出してくるが、ユーユウはまったく気にかけていない。

茜色をした頭に、濃いグリーンの身体をした、ムカデの様なポケモン。

「フシデ……？」

「……………！」

男がそう呟いたことによって、ようやく、ユーユウもそのことに気づく。だが、孵化したフシデを一瞥すると、ユーユウは再び男へと歩き出した。

けれど、今度は男だって本気だ。

「っ……………」

ポケモンに小さな火の粉を出させ、ユーユウの進行方向にひろげさせる。

だが、それに構わないでユーユウは歩く。足下の炎によってあぶられ、まるで、熱された鉄板の上を歩いているかの様な痛みが襲ってくるが、歩み寄りには止まらない。

異常。

まともじゃない。

きつと、目の前で親が殺されてからずっと、普通な気分では無いのだろう。致し方ないか。こうなってしまうのも、わからないわけでもないが、早く逃げなければならぬから、邪魔だてするならば排除するしかない。

そう結論づけると、男は自分のポケモンにだいもんじの準備を命じた。

先ほどと同じ様に、チャージをスタートさせる。

だが、準備はさせているが、撃たせる気があるかどうかというのは、微妙なところだ。

無駄に力を使わせたくはないし、それに、実際に自分が死ぬということを実感すれば、今のユーウの態度だって変わるかもしれないと思ったのだ。

人が死んでゆくのを眺めることと、自分がそうなるのではまったく違う。

恐怖を覚え、動けなくなり、何もせずとも、黙らせることが出来るはずだ。ひのこの中を歩くところ、普通の人間よりいくばくかは精神力は強いらしいが、何の訓練もしていないのに、死ぬ間際までそれがもつとは考えられない。

だが、

「やれよ……！」

「……………死にたいというのか？」

「やってみろってんだよっ！ 僕を、母さんをやったみたいに殺して見せろおっ！」

足は、確かにとまった。

火の粉がひろがっている部分、その中央で。そこで仁王立ちにな

った。

ユーユウの後ろ。火の粉の後ろにいるフシデは、自分のトレーナーを守りたいらしいが、むしタイプであるために、火の粉の中に飛び込むことは出来ない。

鍛えられたモンスターならば、耐えることは容易だろうが、だが、生まれたばかりのフシデはそうじゃない。

けれど、火の粉による壁の前に、何度も前に出たり戻ったりを繰り返している様子から、このポケモンがどこういう気持ちでいるのか簡単に想像出来た。

想像出来たから、男に一つの疑問が生まれる。

（生まれたばかりなのに、助けようとしている……もう懐いている？）

それは、普通の状態じゃない。

生まれたばかりの、しかもこういう状況にいるポケモンが、自分のマスター……トレーナーが誰かを判断し、守ろうとするなど。

分からない。

ただ、きつと、火の粉で足を焼いているこの子は、トレーナーとしての才能があるんだろう。

それを感じて、フシデは最初から彼に懐いた。

「だいもんじだ！」

といって、手心を加える様なことはない。邪魔をするのだから、殺す。それに、味方になってくれないのだから、こいつは脅威以外のなにものでもない。

心を決め、だいまんじを放つ。

必ず殺せる様に、一撃で死ぬ様に、さっきのものよりもその威力は高い。

だから、直撃すれば、それで終わりだ。直撃すれば。ユーユウも覚悟を決めて、目をキツく閉じた。

が、

「スワンナ！ アクアリング！」

突然聞こえてきた声。

はつきりとした、透き通る様な声の持ち主は、きつと女なんだろう。

ユーユウに向けられただいまんじは、水のベールに包まれその威力が減衰され、数瞬あとに続けて入ってきた電撃により弾き飛ばされ四散していた。その衝撃で、ユーユウの足を焼いていた火の粉も消えてしまう。

驚き、だいまんじを防いだ技が飛んできた方を見つめると、三つの影があった。そして、そのいずれの影も、知っているものだ。

思わず、男は舌打ちする。

眼前の少年に目をやると、やはり同じ様に驚いている。

「……すまないが、分が悪いようだ。下がらせてもらっ」

「なに……！ 逃げる、つもりかっ」

「違うな。今のお前では、まるで相手にはならん。トレーナーになつてすらいない、お前ではな？」

それだけ言うと、ふところから何かを取り出して、それを思いっきり地面へと叩きつける。

まばゆい光があたり一面に広がり、たまらずその場にいた人間は目をつむる。

しばらくすると、視力が戻ってきて、周りの様子を見られる様になったが、当然、あの男はもういない。

立っていた場所には大きな穴が出来ていて、きつと、ポケモンに掘らせてそこから逃げたのだと想像出来た。

ゆっくり近づいてみるが、そのとき初めて足に痛みを感じて、倒れこんだ。今更になって、自分の身体が、無理をしていたのだということを認識したのだ。

そのユーウの正面に、いそいそとフシデが出てくる。心配そうにこつちを見ていると思う。きつと、間違いじゃないはずだ。

「僕の、はじめてのポケモン、か……」

それは、その呟きは、結構感慨深い。



けれど、意識がもったのはそこまで。そのあとは、限界を超えてしまった様で、もう眠るしかなくなっていた。

## 2・貰ったものは、返さないとな

話し声が聞こえる。

声色から想像するに、三人で話していて、全員が女だろう。

ユーユウは、今ベッドの上にいた。わかっているのはそれだけで、どのこういった施設のベッドで寝かせられているのかは分からない。

意識はあつて、ちゃんと起きている。なのに、その瞳が閉じられたままなのは、こうやって寝たふりをしている間に、もし敵だというのであれば、大事な情報でも漏らしてくれないかな？　と考えているからだ。

それに、もし敵じゃないにしても、本人には言いにくい話というのをやってくれるかもしれない。

つまり、いま一番ユーユウが話して欲しいことを喋ってくれるかもしれないのだ。

だから、気づかれるまではこうしておこう。

「でも、この子以外に残っていないかったですよね？　なら、重要参考人として、連れていくべきではないの……？」

ハンサムさんから任されているのはあなただから、任せるけど、とカミツレは続ける。

その言葉を受けても、トウコは少し渋っていた。視線の先には、保護した男の子の両足があつて、そこは適切な処置の後、包帯が巻かれている。

だが、ひのこで自身の足を炙っていた時間が長かったために、元の通り歩ける様になるためには、ちよつとばかりの静養が必要だ。

「その……この姿を見てしまうと、あまり、そういう気には……」

「トウコちゃんの気持ちは分かるけどね、カミツレちゃんの言うとおりにするべきだって思うけどなあ。プラズマ団がいたんだから、尚のこと」

「フウロさんまで……」

プラズマ団。

ユーユウにはあまり聞き覚えのない単語だ。団と言うから、何かの組織なのかという想像はつく。

（それに、母さんとあの男は、Pマークのシンボルを、右胸につけていた……）

ということは、きっとそうなのだ。関わった人間を重要参考人にするだのしないだのという議論が行われるならば、プラズマ団というのは、よい組織ではないのだろう。

そういうところとどういう繋がりがあるのか、それは分からないが、ユーユウにとって、母親がプラズマ団と関係があるかもしれないというのは、気分の落ち込む話だ。

「別にカミツレちゃん鼻屑ではなくてですね？ ほら、ポケモンの死体もあつたんだから、それだけのことがあつたつてことでしょ？ それだけのことが出来るトレーナーとポケモンがいて、プラズマ団が関わっている。早く解決しなきゃ、だよな？」

「でも、怪我人……大怪我をした人から話を聞くななんてこと、私はイヤです」

「……分かっているから、こうして病院に連れてきたんでしょ？」

なるほど、いまは病院のベッドにいるらしい。確かに、少し鼻をきかせてみると、それとなく消毒液の二オイと、病院独特の香りが感じられた。

こういった類いのものはあまり好きではなかったが、どうやら、妙な施設に連れていかれたわけではないらしいので、ちょっと安心する。

「そろそろ12時か……」

トウコがボソリと呟く。ユーユウはさつき薄目で見たが、三人の中で一人だけ大人の雰囲気を出していない子がいた。

茶色混じりの黒髪で、ポニーテール。はっきりと容姿を眺めたわけではないからその程度しか分からなかったが、きつとこの子がそうだろう。

「まだ起きないね。ヘンな顔してないから、だいじょぶなんだって

「いうのは分かるけど」

ユーユウの記憶だと、この人はフウコと呼ばれていた。トウコとは違い、フウコの姿ははっきり確認していて、赤ワインのような髪を、花の模様をした髪留めを使って一つにまとめていた。

明るい表情をしていて、見るからに優しそうだ。

「半日以上経つても、起きる気配なしか……」

ということは、最後のこの人が、カミツレなんだろう。姿は見えない。見ていないが、名前は聞いたことがある。

テレビに出るほどのモデルで、確かうちの、ライモンシティのジムリーダーだったんじゃないだろうか。

ユーユウが意識を取り戻して、もう少しで一時間経つ。その間ずっと声は聞こえている。

もしかしたら、自分が運び込まれてからずっといてくれたんだろうか？ そう思うと、ちゃんとしたところに連れてきてくれたとわかった今、三人に対してすごく悪い気がする。

「……いったん休憩しましょう。もう結構な間いるのだし、屋上にいって何か飲まない？」

そう提案したのはカミツレだ。

近くのイスがきしむ音が聞こえた辺り、トウコとフウコもそれに同意したようだ。三人分の足音が耳に届く。

「カミツレさんもフウロさんも、ジムは良いんですか？」

「ポケモンジムというのは、こういうときに対応できるように出来てるから、心配する必要はないの」

「だいたい、これぐらいのことを出来なくちゃ、フウロも私も、トウコちゃんと会うことなんて出来なかったでしょう……？」

扉が閉められ、三人の話し声がだんだんと遠くなっていくのを確認してから、ユーユウはゆっくりと上体を起こす。

どうやらここは個室のようで、ユーユウがいるもの以外にベッドは一つもない。

掛け布団をあげて、自分の身体を見てみる。両足に包帯が巻かれているのには驚いたが、それ以外はなんともない。どこも固定されていないから、動けるには動けるが、まだ立って歩くのは厳しそうだ。

身体から部屋全体へと視線をやるが、特に変わったものは何もない。普通の病室だ。

サイドテーブルに目をやると、その上にはモンスターボールが置いてある。

きつと、あの時観客席に投げ込まれたボールだろう。

中に何のポケモンが収納されているのか、それは確認しなければ分からないが、あのときの状況から考えるに、これは、母親から託されたと思っただろう。

「そうだったにしても、あのポケモンのタマゴといい、僕にどうし

ろってんだ……」

カタキをとってくれ、というつもりではないと思う。けれども、唐突すぎて、その意図がまるで読めない。

と、入り口近くに何かがあるのに気づいた。よく見てみると、それは、あのとキタマゴから生まれたポケモンの姿だ。フシデ、あの男はそう言っていた。

ユーユウは足が痛いのを我慢しながらベッドから抜け出て、フシデの正面でしゃがむ。

瞳は閉じられ、穏やかな寝息をたてて眠っている。

「寝てる姿は、かわいいな……」

フシデのおデコを撫でてやると、気持ち良さそうに身をくねらせる。長い間起きてくれていたのか、この程度では目を覚まさない。

だが、こういう姿を見ても、ユーユウの頭の中に繰り広げられるのは、あのとときの光景だ。巨大なポケモンと、それに立ち向かおうとしている母の姿。

そして、畏怖すら覚える炎にその身を焦がせていく。

「確にかわいいけど、でも、そんなポケモンが、あんなことも出来るんだ……」

ため息が自然と漏れてしまう。身体中に憎さと恐怖心が蔓延していくのを止めることが出来ない。

このあと、自分の身がどうなるかなどは全く分からない。分からないことであつたが、自身の感情がどういった方向に行っているのかははっきりと分かっている。

だから、自然と顔が強張ってしまうのだけれど、

「……そんな顔を見ると、幸せが逃げていくっていうけど、良いの？」

「……！」

突然ドアが開き、そんな声が聞こえてくるものだから、ユーユウはビクリと一度身体を震わせる。

それからゆっくり顔を上げて入り口を見ると、美しい金髪の女の人がいた。

トウコやフウロと比べると髪は短く、肩に届かないくらいの長さだったが、スレンダーな体型にはよく似合っていた。

「カミツレ、さん……？」

「あら、やっぱり起きてたのね？」

それに、私のことも知ってる。そう言いながら、ユーユウの後ろを通ってベッドの方へと向かっていく。

しばらくは固まっていたが、やがてベッドからモゾモゾという音が聞こえて、そっちに首を向ける。

「なにやってんです？」



「人が起きてすぐだから、暖かいわね」

目をやると、カミツレはベッドに潜っていて、顔だけ出している。ベッドの端の方をポンポンと叩く。きつと、ここに座れということなのだろう。

ユーユウはため息をつきたくなるがなんとか飲み込んで、彼女の指定した通りのところに腰をおろす。覆いかぶさろうと思えばすぐ出来る距離だが、あいにく、そんな度胸はない。

それを分かってかカミツレはニヤニヤしているが、気にしないようにする。

「……なんで、分かったんです？」

「フフ、ちょっと前ね、アナタ、目をちょっとだけ開けて、フウロのことを凝視していたじゃない？……本当はその時に気づいたのだけれど、あんまりにもフウロの胸ばかりを見ていたものだから、可愛くなっちゃって。……それで、黙ってた」

「……………」

「おっきいのは、良いものよね？」

たまらず、ユーユウは額に手を当てる。フウロをはっきり見ていたのは偶然だ。無意識。見たいと思って見たわけじゃない。

では、カミツレが喋ったことが事実とは違うのかというと、そうではない。どういう風にしてそうなったかはともかく、見ていたこ

とに対して否定は出来ない。

「否定しないってことは、事実だったということよね？」

「それはっ！ 否定は、しませんけども……」

「うん。そういう風に誤魔化しが下手なトコは、アナタとトウコちやんは似てるのかもね」

子供がイタズラをしかけて、それが成功した時にする顔がまさしく今のカミツレの表情だ。

正直、ユーユウにとってはあまり得意なタイプではない。

「だけど、ずっと目を開けとくってわけにもイタズラをいかないのは分かるでしょ。だったら、一人を注視しなきゃなんないってことだって、分かっていますよね？」

「ふーん……私には、イヤラシイ目で見てるようにみえたけど？」

とりつく島もない。

カミツレはユーユウを、フウロのことを良くない目で見ていたということにしたいらしい。

多分、ただからかいただけなのだろうが。しかし、言い返せる様な言葉をもっていない。

「まったく……今聞くことはそんなことじゃないでしょうに……」

こういうことを呟いてしまうということは、それはつまり、ユー

ユウの降参を意味していた。

だけれども、その眩きが漏れてしまったあとで、とあることに気がつく。それは、今日の前で人のベッドの中にいる人間が本当にライモンシティのジムリーダー、カミツレであるならば、確実に効果的な一言だ。

「フフフ……！ 降参？ フウ口のことをやらしー目で見ていたというのを認めるの？ だったら話をしましょう？ バラされたくないければ、あるとき何があったかを全部話してー」

その、魔法の一言を、

「ライモンポケモン強いもん」

「ーっ！？」

刹那、カミツレの顔が一気に真っ赤になる。それはまるで、お湯を沸かしているヤカン。すぐにでも口から蒸気を発しそうな位に、瞬間だった。まさに瞬間湯沸かし器。

顔だけは出していたのに、ガバツと勢いよく掛けられた布団に、それは隠されてしまった。

けれど、見る必要は全然ない。

カミツレが布団の中でどういう顔をしているかは、簡単に想像できる。

「いやあ、とんでもないセンスですよ？ ビリビリスーパーモデ

ルさん？」

今度はユーユウが意地悪い顔になる番だ。口調も、どこか相手を小馬鹿にするようなものへと変わっている。

「わ、私は知らない……………そんなこと知らないもん」

「そうですよね？ まさかシャイニングビューティーと謳われる人が、自身のセンスの無さを公共の電波に乗っけるわけではないですね？」

「ぐ……………」

「で、いまはどんな顔してるんです？」

さらに意地の悪いことに、ユーユウはカミツレが顔を隠している掛け布団に手をのばして、それを引っぺがし始めた。

もちろん、今の茹で上がっている顔を見られたくない側としては、必死に抵抗する。

単純な力比べならばユーユウが断然有利だが、いまは両脚の踏ん張りがきかないために、拮抗していた。

「じ、こらっ。やめなさい……………！」

「やです。人をからかったんだから、それなりのしっぺ返しを食らうことくらい予想してたんでしょ……………！」

そうした押し問答を繰り返すと、どうしてもベッドと、二人の着衣は乱れてしまう。

カミツレのスカートは大きく足をはだけさせ、ユーユウの着衣のボタンは何個か外れてしまっている。

「ジムリーダーって、忙しいんでしょ！　なら、たまには真っ赤になるようなことを言っちゃってもいいと思いますけどねー？」

「う、うるさい！　布団めくるなあ！」

二人だけだったら、こんなことをやっても何の問題も起きない。少なくとも、これ以上は。

けど、カミツレの側はその条件から外れてしまっている。連れがいた。二人。

そして、その二人はちょっと休憩で出ているだけだ。もう5分は経つたろう。言い出しっぺのカミツレがまだ来ないことに疑問を抱くはずだ。

となれば、あの二人のことだから、三人分の飲み物を買って、部屋で休もうという考えに到るだろう。

ということとは……？

「あ、れ……？」

「カミツレ、ちゃん……？」

ユーユウが押し倒している様に見えなくもないこの瞬間に部屋に戻ってくるのだって、あるということだ。

---

あれから落ち着くために、ユーユウは外へと出ていた。

ほっぺたにはトウコから頂戴した、平手打ちのダメージが残っている。そのトウコが、一応ユーユウの見張り人として今は一緒にいた。

頬をさする。

もうあと10分程度は、痛みは引いてくれないだろう。引つ叩いた本人は、ユーユウの目の前で、日の光を浴びながら身体をのばしている。

「ったくよ、思いっきりやるんだからなあ……」

「戻ってきたらずっと眠っていた人が起きてて、カミツレさんを襲ってる。だったらそーするでしょーが」

「だからって、こんな思いっきりやんなくてもさ……」

トウコの言いたいことは分かる。分かるが、誤解で思いっきりやられる方からすればたまったものじゃない。

一応、あのあとカミツレがよく説明してくれたお陰で事なきをえたが、あのままだは室内でポケモンを出されかねなかった。だからというわけではないが、今だって中庭のベンチにいるわけだけども、モンスターボールと眠り続けているフシデを足の上に置いている。

「だいたいそうだったのも、あんたが寝たふりなんてしてるからでしょ？　ちゃんとしてれば、こんなことしなくたって良かった」

「そりゃ、そうだろうけどさ……」

トウコが喋っているが、ユーユウの耳にはあまり届いていない。さつきは起きたばかりということと、カミツレが賑やかにしてくれたから嫌なことを忘れさせてくれたが、いまは違う。

トウコが物静かだということではないが、ここは病室ではない。中庭のベンチの上だ。

こもりやすい室内とは違って、こういう開放された空間では、トウコの声だっすぐに風に消されてしまう。

青空の下だから元気になれるという人だっているが、ユーユウはどうも、そんな気分にはなれない。

太陽の光と涼しさを運ぶ緩やかな風が、人の心を傷つけてしまうこともある。

今まで忘れることが出来ていたことを、ここにきて一気に認識する。つまりは、どうあっても明るい気分にはならないということだ。

考えてしまう。

あのときのことを。

さっきまで目の前にいた母親が消え去り、今度はそれをした力が自分へと向けられたあのとき。

なんで、わざわざ痛みを背負う様なことをしたんだろう？ 自問して見るが、分からない。それに、あの男が人殺しをやった理由も分からないことには、母さんを亡くしたことで泣くことも出来ない。

なんで！ どうして！ こんなことをされなくてはならなかったんだ！？

こんな気持ちばかりが先行してしまう。

「何よ……いきなり黙って……」

トウコもユーユウから出ている雰囲気にあてられたようで、一緒に静まってしまう。

同じ様にベンチに座って、慎重にユーユウの様子を伺った。

「もしかしたら、なんだけど……僕は、もの凄く冷たい人間なのかもしれない」

「冷たい？」

「うん。なんでかな？ そう感じるんだ」

そんなことを言っても、トウコにわかるわけが無いことは、ユーユウだって想像出来る。



「ただ、こうやって隣に座ってくれたということは、少なくとも、話し相手にはなれるよという意味のあらわれだろう。」

「なあに？ あんたの手持ちポケモンに愛着が湧かないってどういう？」

「ああ、いや、そうじゃない。アレらが本当に僕の手持ちかどうかは怪しいが、嫌うなんてつもりはないよ。そういうんじゃない、もっと大っきいことさ」

「大っきいこと？」

「やっぱり、トウコはよく分からないといった顔をしている。」

「ただ、退屈そうではない。」

「話しながら、ユーユウはそのことは良かったと思った。自分のことを聞いてもらっているのに変な話だが、つまらない……心がまったく動かないような話はしたくない。」

「トウコには、家族っている？」

「お母さんなら、カノコにいるよ。お父さんは、早くに死んじゃった」

「そうか……」

「でも、もう長いからね。私もお母さんも、もう気にしてないし、お互いがちょっと寂しいなって思った時は、ライブキャスターもあるしね！」

「そっか、そういう気持ちになるのか……」

「……………」

少しだけ怪訝そうな表情。無理もない。けれど、トウコがそんな顔をしていたのはわずかな時間だ。なるほど。トウコの勘は悪くない。

「ユーユウ？ まさか誰か……？」

「いた。そして死んだ。そう僕が言えば、警察は真剣に捜査してくれるのかな？」

「それは……………」

口を閉じる。

今の話を聞いて、警察がちゃんと捜査をやるかどうかと聞かれれば、トウコとしてはノーと言えない。

「死んでいたポケモンのレベルは相当高かったっていうのがとりあえずの速報。で、そのポケモンたちを死なせて、あの、ね……………ユーユウの、その……………と、とにかく、ね？ そういうことが出来る人間を相手取るのは、警察には出来ないの」

「……………そう、だよな。結構前にポケモンリーグであったテロ行為も、阻止したのは警察じゃなくて民間人だったもんなあ……………」

あの時、報道局に大きく取り上げられて、最後には警察当局が結

構な批判を受けていたはずだとユーユウは記憶している。

ただ結局、どういう内容のテロ行為だったのか、民間人が防いだというが、誰が守ったのかは明らかにされることは最後までなかった。

「……となれば、だ。もし！ もし、だ。もし僕が親の敵をとりた  
いとなった時は、自分でやるしか無いってことになるじゃないかっ」

「だ、ダメダメっ！ それはダメだよ。あんたも、あんたのお母さんかお父さんみたいになっちゃうかもなんだよ？ ？そんなこと、誰も望んで無い！」

「……………うん。誰も望んで無いつてのは、分かる。知ってるよ。けど、じゃあさ、もし僕の親が殺されたのだとしたら、誰が敵をとるってのさ」

「それは……………」

トウコは言葉をつまらせる。今のユーユウの言葉をそのまま受け止めたくはなかったからだ。

だいたい、本当にプラスマ団がポケモンを使って人殺しをやったというのも、ちょっと疑わしい。

二年前の時は、プラスマ団の団員にいたっても、ポケモンバトルはやってトレーナーを殺そうとする事などはなかったはずだ。

けれども、あの時見たのは、確かにプラスマ団団員の制服だった。

「かたき、ね。それをとってさ、その後あんたどうすんの？」

「その後……？」

「そ。確かにさ？ あんたの気持ちは分かるよ。でもね？ それをやったとして、何が残るっての？ 何にも残んないって、私は思うけどな」

「……何が残るか、なんて、やってみないとわかんないよ」

「分かるよ」

「どうしてさ？」

「私は、三年前から色んなトコを旅して色んな人を見てきた。あんたみたいな気持ちをもった人だっていっぱいいた。けど、怨を返せた人も返せなかった人も、みんな、最後は同じ顔をしてた。だったらさ？ 他に楽しいこと見つけて、怨念を忘れていって、一年に一度や二度、思い出してあげる方がいいって思うよ」

「……………」

ユーユウはトウコをジツと見つめる。瞳に嘘が無い事はすぐに分かった。分かった。確かに、彼女の言ってる事の方が、よっぽど正しいことなのかもしれない。

でも、それはやはり、傍観者の視点だ。

実際にやられた側からすれば、そんなことなど出来るはずもない。

（ごめん。僕は、その話を聞いても、奥底から上がってくる衝動に、

身を任せることになっちゃいそうだ……)

声にはしない。

出してしまったらまた問答。面倒なことになってしまふ。  
だから、心の中だけでそつと呟く。

(貰ったものは、返さないとな……!)

それが礼儀だ。

一度は見えなくなってしまった炎。あの時、母親が目の前で殺された時には確かにあった炎が、今再び点火された。

### 3 ヴァルとケイト

ユーユウは家に帰ってきた。

初めて使う松葉杖に慣れるのは大変だが、これはもうしょうがない。

あのあと、ジムリーダー二人とトウコに事の顛末を話し、ひとまず今日は家に帰れる事となった。本当ならば安静にする必要があるのだが、本人の強い意思を尊重した、というやつだ。

玄関のドアをなんとか開いて中へと入る。もう、窓から夕陽が差し込んでくるような時間だ。

そして、いつもユーユウが帰る時間もこのくらい。

でも、いつも台所から聞こえてくるはずのおかえりはない。

ただの一日開けただけだというのに、寂しさを感じる光景に様変わりしてしまった。

「はあ……」

深く、ため息をついてしまう。

けれども、ため息が出たのは、昨日見ていた光景といま見ている光景が変わってしまったからではない。

「へえー、結構広いだねー」

ユーユウの横を抜けて行く、明朗快活な声。優しげな表情。

フキヨセシティのジムリーダー、フウロも一緒だ。本当は連れてきたくはなかったのだけれど……彼女がいなければ、こうやって夕陽があるうちに家に着く事はなかったらう。

「ユーユウ君の部屋ってどこ？ 入ってもいいかな？」

そんな声がリビングから聞こえてきて、感慨にふけていたユーユウは苦笑する。なるほど、彼女はだいたく無防備らしい。

フウロに送れてリビングへ行くと、ご丁寧に部屋のドアすぐ正面でお待ちだ。しかも、ノブにまで手をかけている。いいよと言えば、一秒もたたずに中へ入ってしまうだろう。

「まったく……家宅搜索に来たわけじゃないでしょ？」

表情を変えないまま、しかしながら近くのソファに杖を置き、若干早足でユーユウはフウロの手をとり、ドアから離れさせた。苦笑いのまま。

表情は変わっていないかったが、内心では緊張していた。

部屋の中には、昨日母親が身につけていたプラズマ団団員が着込むらしいローブのスペアが置いてある。

昨日家を出る前に、母親の部屋の中を覗いて見たのだが、その時にダンスからはみ出していた見たことのない服装……それがプラズマ団のローブだ。

最も、プラズマ団が着るものだとは知ったのは病室、ベットの上だったのだが、そうであるならば見せるわけにはいかない。

ユーユウは三人に事の顛末というのを喋ったが、母親がプラズマ団らしいということだけはどうしても言えなかった。プラズマ団同士の戦いだとなれば様々な対応が変わってくるだろうし、きっと違うだろう、とユーユウも認めたくないというのもある。

母親がプラズマ団。

どういった組織なのか、どういうことをしていた組織なのかは知らないが、きつと、良く言われることはないだろう。死んでしまっ  
てから、いなくなってしまうてから悪く言われる。

そんなことに耐える自信なんてこれっぽっちもない。

だから見せられない。見せるわけにはいかない。

「……案外けちんぼなんだね？」

フウロは頬を膨らませて不満をアピールしたが、ユーユウがもう少しだけ強い力で手を引っ張ると、納得した様子になってくれた。

（はあ。普通だったら、態度が大きすぎるって言えば済む話なのに……）

こんな態度だが、彼女だってジムリーダーだ。なんの気もなくてこういう事をしているんじゃないと簡単に想像出来る。

「この子だって、入りたがってるんじゃないかな？」



言いながら、ユーユウにフシデを見せるが、彼としては、そんなものに反応するわけにはいかない。

けれども、このポケモンが部屋を覗いて見たいのは事実らしく、フウロの声に大きく声をあげてみせた。余計なことを。

「ほら、ね？ この子も見たいみたいだよ」

そう言っ、腕に抱いているフシデをちょっと前に出して見せる。ユーユウに近づく度にフウロの腕の中にいるフシデが元気良く動き、自分のトレーナーに飛びつこうとする。見た目から想像するに、このポケモンはむしタイプではなく、どくタイプとの複合だろう。そう考えると、あんまり飛びつかれたくない。

だからそうされる前に手をのばしフシデを撫でてやった。

そうすると、ユーユウの指に弄ばれて、フシデはご機嫌そうだ。心温まる光景。だけど、

「ねえ……キミ、ホントにトレーナーやったことないの？」

それは、フウロにはあまり納得いかないものだ。不思議そう、ではなく、ある種疑うような瞳をこちらへと向けてくる。

「言ったでしょ。ありませんよ。ボールに入っただまのコイツを外に出すやり方だって分からないんですから」

言いながら差し出したボールは母親から受け継いだというものだ。

言わば形見。けれども、ポケモンを展開するやり方を知らないから中身は分らない。

確かに、病室にいる時にこちらからなにも言わずにモンスターの展開をやらせてみたが、出来ていない。

しかもその仕草に嘘は感じられなかった。なかったのだけれど、フシデがこうやって生まれて一日でなつき始めているところを見ると、疑問符を浮かべざるを得ない。

「……開けていい？」

ユーユウの手からボールをとって、代わりにフシデを抱かせてから、フウロは尋ねる。部屋の時とは違って、今度は頷いてくれた。

モンスターボールの中央にある出っ張りを押し込み、手で叩いて衝撃を与えてからリビングに置いてある大きなテーブルの上に置く。それから三秒もしないうちにボールは中央から割れて、中からポケモンが現れた。

「わ………凄い………！」

ユーユウには今目の前にいるのがどういうモンスターなのかは知らなかったが、フウロは良く知っているようだ。

ボールより展開されたポケモンを見て、感嘆と羨ましさのおり混じった声が漏れる。

水かきのような両耳、大きくつぶらな瞳、青と白、細くしなやかな身体。古来より伝わる竜を思わせるが、それにしては背丈がだい

ぶ小さい。

とは言っても、細い身体をいっぱい伸ばせば、ユーユウの身長と同じくらいにはなるはずで、小さく見えるのは蛇のようにとぐるを巻いているからだろう。

「ミニリュウだ。珍しいなあ……」

ちら、と瞳を覗き込んで見ると、そこには羨ましさの色が見てとれた。

ジムリーダーである彼女がこんな目をしているということは、本当に珍しいポケモンなんだろう。

「そんなに珍しいんですか？ コイツ……」

「珍しいなんてものじゃないよ！ もうレアもレア、激レアだよ！ 何年もトレーナーやって、色んなトコにも行ったけども、初めて見たくらいなんだもん。多分、カミツレちゃんやトウコちゃんだって生では見たことない。それぐらいだよ！」

フウロはちよつと興奮しているようだが、ユーユウは曖昧だ。珍しいみたいだが、あまり現実感がない。そんな気持ちだ。

でもそれは当然だった。

自分が苦勞してやつの思いで手に入れたわけも無く、彼女の長きに渡るトレーナー人生を把握しているわけでもない。

ミニリュウがレアなポケモンだと言っているフウロを疑っているつもりはないが、ユーユウにしてみればなんの苦勞もせず手の内に入ってきたものだ。分かるわけがない。

「フウロさんの喋ることが嘘じゃないってのは、分かりますよ？」

「うん」

「けど、僕にとっちゃ、コイツと同じです」

ユーユウは、目線をミニリュウから外し、自身の腕で抱いているポケモンの方へ向ける。

「どっちも、母さんのもの。母さんから受け継いだ連中です。……そりゃあね？ ミニリュウの方が珍しく、力をもっているのかもしれない」

ユーユウはフシデをテーブルに乗せてミニリュウと対面させた。姿形が異なるポケモンだ。全く種類が違い、タイプだって一致してない。

だから最初はお互いに戸惑っていたが、しばらくしてお互いが身を寄せ始め、鳴き声をあげる。意思疎通はそれでできるらしい。

「だけど、変わりません。変わり様がありません。どれだけ珍しかろうと、ポピュラーだろうと、こいつ等は、母さんが母さんの意志に則って僕に預けてくれた。それだけなんですよ」

「そっか……」

「まあ、僕はトレーナーじゃないから、一般的な考えではないのかもしれませんが……」

笑みを浮かべながら、ユーユウはフシデとミニリュウの両方に手をのばし、身体を撫でてやったり顎下をさすってやったりした。

だいたい一分くらいそうしてから、ユーユウはポケモンから手を離し、一番近くにあった椅子をひく。

「座っても良いですか……？　良く効く痛み止めでも、流石にこれ以上立ってられない」

時間にすれば、車を降りて、階をあがって、部屋に入っただから、10分もない。病院を出る直前に痛み止めをやってもらったが、もうだ。

ということやはり、基本歩くようなことは今日は無理なんだ。明日になればちょっとは歩けるらしいから車イスは貰わなかったが、もしかしたら失敗だったかもしれない。

フウロから返答がくる前に、重たい腰をおろす。どうやら、考えていた以上のダメージが身体に残っているみたいだ。

「はぁ……」

ゆっくり息を吐く。

それと同時に少しだけ足に痛みが走り、ユーユウは顔を陰しくさせる。こいつは、ちよっぴり厳しいぞ、という覚悟をした。

「大丈夫……じゃないよね。痛む？」

「……痛みはありますが、だいじょうぶです。さっきみたいに、足だけではもう立ちませんから」

額を汗がつつたっているのが見えたが、きつと、これ以上何か言つたとしても、彼が認めて、病院に戻る様なことはないだろう。

仕方がないのでフウロも同じように近くに腰をおろした。

「何か飲むのであれば、冷蔵庫に確か開けてないペットボトルがあるんで、それをお願いします……」

「うん」

まあ、無理もない。

まだ痛み止めが切れるには早すぎるが、これだって完全じゃない。誤魔化し得ない痛さを紛らわすのは厳しい。

しかし、医者は明日になれば若干は引くと言っていたが、本当にそうなのだろうか？

とてもそんな風には見えない。

だが、そんなことを思っても、今のフウロに出来ることは少ない。痛みに襲われはじめているユーユウに対してなど、ほぼ皆無だと言つて良いだろう。

けれども、そう。せめて、何か話してあげて、こちらに集中させて、痛みを和らげることは出来るんじゃないだろうか？

(うーん……)

あたりをそれとなく見回してみる。特に、なんの変哲もない。普通の家、どこにでもあるような一般的な部屋に見える。

（何か……何か話す事、無いかな……）

正直、フウロにとって沈黙は堪え難いものだ。だから、今だって、こうやってソワソワしながら話の種を探している。

「そういえば」

「は、はいっ!？」

そんな中でいきなり声をあげられたら、フウロだってこういう反応をしてしまうというものだ。

ガタツと大きな音を立ててイスを揺らし、身体が緊張し背中を張らせる。

こついた静かな部屋の中でそれを破れば当然なのだろうが、恥ずかしさと気まずさがおり混じり、ほんのり顔を赤くさせる。

ユーユウは少しだけ不思議そうにこちらを見たが、それについて尋ねてくる様子はない。

「こいつらってさ、性別は何なのかな？」

「性別？」

「そ。まあ、ミニリュウはタマゴから出て来たわけじゃないんだから、先にニックネームをつけられているかもしれないけど」

なるほど、そこまで言われてやっとわかった。

言われたミニリユウは一生懸命に首を横に振っている。あんまりにも勢い良くやるものだから、フウロもユーユウも少し笑ってしまう。

「ニツクネーム、付けるんだ？」

「変かな？　きつと、当たり前のようにやってるもんだって思ったけど」

「ううん。何も変なトコなんて無いよ。私だって、キミと同じ。ニツクネームは付ける主義なの。昨日ユーユウ君を助けたスワンナにも、シャゴって付けてるもん」

「そいつは、僕は見てないな……」

「私も見せてあげたいけど、ここじゃあげられないよ。でも、ユーユウ君のポケモンがオスカメスなのは教えてあげられる」

フウロは携帯電話を取り出した。普通の、何の変哲もない折りたたみ式のもの。多分、ライブキャスター機能がついた頃に出たやつだろう。

「カブトムシのオスメスは、ツノがあるかないかで簡単に見分けられるよね？」

「ええ」

言いながらも携帯を操作する。

彼女の何をやってるか、対面しているユーユウには分からない。



「ポケモンにも、そこまでハッキリして無いんだけど、そういうのがあってですね？　で、この電話にはライブキャスター機能を応用して、そういうのを判別するアプリがあるの」

「オスメスの差って、鳴き声とか、体格とか？」

「針の太さとか、身体の中の様子とかも、だよ」

フウロは携帯電話のアプリケーションを起動させ、備え付けのレンズを二体のポケモンに合わせる。

そうすると、一秒も経たないうちにポケモンを認識した。

ユーユウも自然とフウロにイスごと寄り添って、興味深そうに電話のディスプレイを覗き込む。

（え、え……？）

近い。

そう感じてフウロは戸惑っていた。自分の顔のすぐ横には彼がいて、真剣な、しかし楽しそうにアプリケーションの導き出す結果を待っている。こっちのことなんか、まるで気にした様子はない。というよりも、彼の目には多分、携帯のディスプレイと、その向こうにいるフシデとミニリュウしか見えていないのだろう。

彼はそれでいい。じゃあ自分は？

どうなんだろう。よく、分からない。そう、分からないから、戸惑ってしまっている自分がいるのだ。

なんで、この子は悲しそうにしないんだろう。

なんで、泣かないんだろう。

ただ一人だけの親を殺されたというのに。

なんでこんな表情が出来るの？

なんで、昨日の今日なのに、部屋の中に人を迎え入れられるの？

出来ない。

私には、出来ない。

次の日に、他の人と喋ることも。ポケモンに対してニックネームをつけることも。気持ちを殺して、例えば本物ではないにしろ、あつたばかりの人と笑い合うことも。

どうでもいい。どうでもいいこと。

少なくとも、ポケモンの性別を見ようとしている今、まるで必要の無いことだ。

けれども、戸惑ってしまったから、経験がないから、いきなりだったから、こんなどうでもいいことをフウ口は考えてしまう。彼に対する疑問が頭の中を逡巡してしまう。

そして、そうなってしまったら、頭の中を巡る疑問に従って、フウ口の目線はユーウが今見ているものから外れ、その表情を追ってしまふ。それは仕方が無いことだった。

そうすることで、これまでまるで見えていなかった表情が見える。かりそめの顔が消え、隠れた顔、もう一つ、本当の気持ちがうつすらとあらわれる。

誰にでも分かるものなのか、あるいはジムリーダーとして数えきれない程の人を見て来たからなのかは分からないが、そんなことはどうでもいい。

今フウロにとって大事なものは、分かるということ。彼の気持ちが、少しばかりだが理解できるということだ。

だがそのために、今まで彼女が味わったことのない未知の感情がうまれ、同時に増幅していることに気づいていない。いや、気がつけるわけがなかった。

（そうだよな。幾らなんでも、泣きたく無いわけ、ないよね……）

これはもう確信。フウロの確信だ。

そうだ。

彼のホントの気持ちは、分かることができた。で、これからは？  
これからは、どうすれば良いんだろう？ 私たちに、あまり気にかかせないようにしている彼に対して、何をしてあげられるんだろう？

考えてみるが、成果は出ない。

傷を癒してあげられれば良いんだろうけれども、どうやってやるというのか。

と、

「あ……………」

フウロは気づいた。

自分の両手が、他人の暖かさに包まれていることを。重なる手。そして、今この部屋には自分以外には一人しかない。

「ユーユウ、君……………」

自然と、言葉が熱を帯びてしまう。それに呼応してか、更に互いの距離は近づいているように感じる。

そう、自分と同じようにして向き合ってくれれば、お互いの吐息がお互いの肌を刺激する程の距離。

けれど、照れているのかどうなのか、ユーユウはさっきと視線が変わっていない。

それが、フウロにとって物凄くいじらしい。

（なんで…………？ どうして、こんな…………！？）

彼の方から近づいて来た。それは確実だ。そして、互いの距離がこれでもかと狭まったことによって、フウロは次に起こり得ることを想像せざるを得なくなっていた。

しかし、そういうことをするのに、彼女の心は抵抗していない。むしろ、さっきよりも胸の高鳴りの音が大きくなっていつている様

に感じる。

その事實は、フウロに一つの覚悟をさせる。そう。このまま。このままいけば、フウロは喜んで彼とことに及ぶだろう。

だったのけれど、

「フウロさん。携帯、ズレてますよ？ ミニリュウが、画面に半分くらいしか写せてない」

聞こえて来た冷静な言葉に、フウロは一気に現実へと戻ってきた。そして、一度ユーユウから目を逸らし、電話のディスプレイを見る。なるほど。

確かに自分の手の上に彼のものが重なっている。それは間違いない。けれどそれは、ズレていたターゲティングを元に戻すためのものだ。

ユーユウの言葉を聞いたあとだと、自分が考えていた様なことは全く起きる気配はないということが分かる。

「ふうふううつ……」

長いため息。

気持ちを落ち着かせるものだ。

一度目をつむってなんにも見えなくしてから、再度目を開きユーユウを見る。

何故かその視線は、さつきより遙かに高い熱、エネルギーをもつていて、ユーユウが何もしなければ、おそらくすぐに気づいたろう。

「あ、結果出たな……………どちらもメス？ フシデも、ミニリユウもか？」

しかし、今のユーユウは携帯電話の画面に集中していて、フウロを気にかける暇はないようだ。

顔を見ているのを悟られないのは、フウロにとっては良いことなのかもしれないが、手を重ねてもらっていて、こうやって表情を眺めて……………そういうことにドキドキしている自分がいる。なのにユーユウはまるで気にしていないというのは、少し気に入らない。

「メス……………女の子の名前か……………」

そして、目的を達して、ユーユウは手を離していつてしまう。それがあんまりにも名残を残さなかった。気に入らない、が少しではなくなっていく。

ポケモンが大事。それは分かる。

だって、さつき、彼の心の中を、一瞬だけ覗くことが出来ただから。だけど、今ここにいるのは、ポケモンだけじゃない。

（ミニリユウや、フシデだけじゃないのに……………）

ちょっとだけ、に出来れば良かったのだけれど、出来ない。気に入らない、という感情が徐々に大きくなっていく。

この瞬間瞬間でも、膨らむ。存在感。ゆっくりだが、順調に膨らんでいつているのが分かる。

「決まった……？」

今度はさっきと違って、フウロの方からユーユウに寄っていった。右手は肩を掴んで、左手は、しょうがないけど手持ち無沙汰で。

それと、慎重に、気づかれることのないように、ゆっくりと体重をかけていって、最後には身を預けているように見えるくらいになった。

そして、今度はディスプレイもなにもない。だから、ユーユウはフウロを真っ直ぐに見て、ニッケネームを伝える。

「ヴァルとケイト。どっちも女性の名前です。フシデがヴァルで、ミニリュウがケイトですね」

「そっか、うん。中々、良い名前なんじゃないかな……」

「なら良いんですけどね。……しかし、あれですね。自分でつけた名前を人に教えるのは、なんとなく小っ恥ずかしい」

自然と手がのびて、苦笑いをしながら頬をさすった。

その仕草を見て、またフウロは胸の高鳴りを覚える。ない。こんなことは。少なくとも、今までは。多分、一度もなかったはずだ。

今日は何度も、ストッパーがないかのように鳴り続ける。そして、そうなってくれば、フウロに一つ思い当たることが出てくるのは当

然と言えた。

でも、信じられない。本当に？ と、疑う心だっただけある。  
しかし、しかし。

病気。

彼女は結局、そういう結論にいたった。

それはつまり、今日はとりあえず長居をしようという心意気になったということだった。



#### 4 ・分かったような気がするよ（前書き）

これまで小説を読んでくれた方、ありがとうございますm（――）

今後ともよろしく願いますね。

いつかは四万文字埋め切った文章を投稿してみたいもんだ。

#### 4・分かったような気がするよ

「ああ、そ。大丈夫。うん、分かってる。明日は行くよ」

最後に短く挨拶をかわして、ユーユウは通話を終了させた。

ライブキャスター機能を使っていたので、お互いに相手の様子を見ながらの通話だった。学校……同じクラスで仲良くしている男友達からの電話だ。

本当は出たくなかったが、余計な心配をかけさせたくない一心で、ユーユウはなんとか電話をし終えていた。

時刻は夜の8時を5分程過ぎたくらいだ。はじめての独り。今までだって一人きりで過ごす夜があつたにはあつたが、今日からは独りという言葉の重さがまるで違ってくる。

「はあ……」

ソファアに座り直し、短く息をはいた。疲れている。体力を消耗していることを実感する。

今は、家の中には自分ただ一人だけで、フキヨセシティジムのリーダーはいない。とは言っても、出ていったのは一時的で、トウコとカミツレの用件が終わったらしいから、迎えに行っているだけだ。きつと、あと十分もしないうちに戻って来るだろう。

「明日は行くよ、か」

さつき、自分が喋ったこと。

しかし、本当に出来るのだろうか？ 日が暮れるにつれて、両足の痛みは無視できないものになっていき、今はもう、どうやったら彼女らに痛みを悟られないのだろうということを考えなくてはならなくなっている。

そして、痛み止めはなく、受け入れるしかない。なにもしていないのに体力を消耗してしまっている。

「……痛み止めが切れる頃には、火傷による痛さはだいぶ和らいでいる、か」

これは医者と言ったことだったが、外れてしまっている。和らいでいるどころか、今が一番痛いんじゃないだろうか、という感覚。それは正しかった。

ひのこを受けていた時は気にしている余裕などなく、治療を受けていた時は眠っていた。起きた時には痛み止めが打たれていたらしく、そして、病院を出る前にも打たれたのだから、確かに、今が一番辛いというのは正しい。

けれどもそんな中で、自分の部屋にあるプラズマ団のローブだけは、押入れにしまうことが出来た。部屋に入れられないというのは変わらないが、もし強引に入られたとしても、多少の時間稼ぎは出来る。足がこんな状態でなければ、意味のあることだ。

結局、そういう無駄なことをやって、少しでも心を他のところに向けてやらないと、苦しさでどうにかなくなってしまいそうだったからなだけだ。まだ一日だけ。いや、正確には一日も経っていないのだ

から。

そういう意味では、フウロについて来て貰って本当に助かったんだろ。いや、三人揃ったらどうなるかは考えられないが。

ヴァルとケイト。フシデとミニリュウは両方ともテーブルの上で眠っている。

フウロが言うには、ヴァルだけでなくケイトの方も相当レベルが低いらしい。そこは、ちょっとだけガツクリ来た。

足が治り次第すぐにも奴を追わなければならないと考えていたが、どっちともレベルが低いのであればそんなことはできない。無理はさせられない。

「しかし、なんでボールに入ってくれないかね……」

ケイトのモンスターボールはユーユウの手元にあって、戻し方を教わりさえすれば、直ぐに戻すことはできるだろう。

けれど、問題なのはヴァルの方だ。フウロから貰ったモンスターボールは、中身が空になった状態のまま、すやすやと眠っているヴァルの目の前に置かれている。

まずモンスターボールに入ってくれと聞いて首を横に振られ、このまま出しておくわけにもいかないからと強引に入れようとしたが、何度ボールを投げ、ヴァルを取り込んでも、最後には口が開かれ飛び出して来てしまう。

「嫌われるようなことをしたつもりはないけど……」

無いのだけれども、拒否されてしまう。その度にヴァルが寄り添って来て、身体をすり寄せて慰めてくれた。

うん。やっぱり、嫌われているということは無いらるう。フウ口だって不思議がっていた。

「ボールの閉塞感が嫌いだっていうのもいるって、フウロさんは言うってたけど……」

もしそうなら、ヴァルの意思を尊重してやりたい。けれども、どうしてか？ というのは知りたい。

ただ単に、彼女の言うとおりに閉塞感が嫌いなだけなのか、それとも、もっと別な理由があるのか。

「それが分からないんだから、僕は素人だってんだな？」

けれど、こういう時にポケモンがいると、だいぶ気が楽になってくれる。フウロがいてくれたことと一緒に。

居てくれれば、考えることが出来る。やりたく無いこと、認めたく無いことから目を逸らすことができる。

（やりたくないこと、か……）

ユーユウは初めて深くため息をついた。一緒に、お腹の奥底にしまっていたはずの悲しみや憎しみといった感情が、一気に喉まで押し上げられる。

それをなんとか飲み込んで、黙らせる。叫ばないようにする。

ユーユウだって、寝るのは大好きだ。いつまでだって寝ていたいんだと喋ったこともある。

「ダメだよな、そういうの。寝てることが好きなのに、安眠妨害みたいなこと……」

黙っていると、嫌なことばかり考えてしまう。そう思ったから、別に声に出す必要のないことを喋る。

例えばそれが虚空にむけられているものでも。

人は、独りでは生きてはいけない。けれど、独りならばどうとでも生きていける。どうなんだろう？ 自分はどう思うのか。きっとそれは、これから段々と、時間をかけてわかっていくんだろう。

「ただいまー！」

思いに耽っていると、玄関から明るく元気な声。迎えに行っていたフウ口のものだ。意外に早かった。

そのあとで違う声が聞こえて、それから三人の笑い声。釣られて、ユーユウもクスリと笑う。

ドタドタと三人分の足音。ドアが開いて、三人が入って来る。

「ただいま」

「はい。お帰りなさい」

改めてフウロが挨拶するものだから、ユーユウも座ったままだったが挨拶を返す。

「トウコと、あとライモンポケモン強いもんさんも」

ピクリ。一番あとから入ってきたカミツレの眉がピクピクと揺れる。それでいて表情は変わっていないところが、かなり不気味だ。

「ふーん。そんなこと言うの……？　なら、私に馬乗りになって襲おうとしたのは、誰だったかしら？」

両方の手に持っていたビニール袋をトウコに預け、ゆっくりとカミツレが近づいてくる。

その表情は変わらないが、何か企んでいる。そういう雰囲気を感じることが出来た。

嫌な予感がする。部屋の中が暑いわけではないのに、額を汗が流れる。

謝った方が良いんじゃないか？　そう思ったが、仕掛けた側が早々にごめんなさいというのは情けない。足は痛むが、少しぐらいならば耐えられるはずだ。

「ねえ？」

足を広げ、ソファーに膝たてになって、ユーユウにまたがる。てっきり足を痛くするかと思っていたが、それは違っていた。

違っていただけれど、これでは、まだ痛くされたほうがマシだ。  
またがられ、両肩をおさえられ、至近距離からまっすぐとこちら  
を見つめてくる。

「あ、あの……?」

声が上がらず。

いや、おちよくられている、おちよくられているというのはよく  
理解している。だがそれでも、上ずってしまう。緊張してしまう。

「よいしょ……」

顔をにやけさせながら、カミツレは自分のズボンのポケットへと  
右手をのばす。当然、そのままの体勢を維持することは出来ないか  
ら、ユーユウに預けることになる。

「か、カミツレさん……卑怯、ですよ……こういつ、女の手を使う  
のはっ」

ここではじめてユーユウに負荷がかかって、足にも若干の痛さが  
走るのだが、正直それどころではない。

はじめは一筋だった汗も、今ではもう数えることは出来ないくら  
いになっている。

「これ、なーんだ?」

しかしそんな抗議は無視して、カミツレはポケットから取り出し  
たものをユーユウの顔正面にもってくる。



錠剤だ。見覚えがある。

病院から出る時にのまされた痛み止め。

「それって、僕の……？」

ゆっくりと手をのばす。

痛み止めを見せられたからか、今まで忘れていた痛覚が一気に戻ってくる。これを悟られないようにするのは、だいぶ苦労しそうだ。

「だーめ」

無情なことに、ユーユウがのばした手は空手のままだ。なにも掴んでいない。

カミツレの顔は、まだ笑っている。ということは、ユーユウは誤魔化せているということになる。

「欲しかったら、謝りなさいな。カミツレさん、ごめんなさいって」

「……………」

なんだろう。

そりゃあ、言ってしまったたら楽になれる。痛み止めを貰えるんだ。服用してどれだけ楽になれるかはよく知ってる。

だけど、この目の前の勝ち誇った顔。モデルをやっているだけあって、それは整っているが、なんと言うか、気に入らない。

謝るにしても、こっちがドキドキしっぱなし、相手はなんでもな  
いような顔では、どうにも納得出来そうにない。

「ほらほら、どうしたの？ 欲しいんでしょう……？」

こちらの気持ちを完全に把握しているのだろう。カミツレは見上  
げるようにしている顔を、さらに近づけてくる。

これはもう、普通じゃない。さっきだって、一般的な間合いでは  
なかったが、これではまるで、

「い、良いんですか？」

「……？ 何が？」

「カミツレさんだったら、その……付き合ってる人ぐらい、いるで  
しょ？ こんなことして、その人、怒りますよ……」

「……何言ってるの？」

「だ、だから、僕にそういうことすると、彼氏とか……怒らないん  
ですか？」

「……ふう。そんなことを気にしていたの？」

「そ、そりゃあ、気にします。ですから、離れてくださいよ。いく  
らなんでも、限度つてものがあります」

「気にしないでいいわよ」

「は？ そりゃあ、どういふんです？」

「私は、そういうのはいないよって意味よ」

「……なんですか？ カミツレさんだったら、そういうの、掃いて捨てるほどいるでしょ？」

「……そうね、そうかもね」

ふと、ユーユウは痛み止めばかりだった視線をカミツレへと戻す。そこには、さっきまでの表情はない。ただ、なんと云うか、品定めをされている気分だ。

「結局のトコロ、群がってくる様な連中には、刺激を与えてくれるようなのはいないの。だから、掃いて捨てるほどいたとしても同じなのよ」

「はあ。そういうもんですか……」

あまり、というか全く告白などされていない人間からすれば、カミツレの感覚などわかるわけも無く、ただこうやって漠然としたイメージを持つことしか出来ない。

「僕には、ちょっと考えられないな……」

「そう？」

グラグラと微妙に二人の身体が揺れるが、それで体勢が大きく崩れるようなことはない。ただ、見上げるようにしていたカミツレが姿勢を変えて、ユーユウの首に両腕を通し、逆に見下ろす様に変わ

っていた。

その一連の流れによって、ユーユは自身の心拍数をあげざるをえない。視線をそらしたかったが、意外にキツチリと腕が巻かれていた様でうまくいかない。

「アナタはどうかしらね？」

「は……？」

「私に、刺激を与えてくれる？」

「そ、そんなの……わかるわけないでしょっ」

「フフ……ま、こうやってドキマギしてるんじゃ、ムリね」

こ、れ、は、一体どういうつもりなんだ！？  
ユーユの頭の中は、かつてない程に混乱している。こういう風に女の人を近くに感じたこともなければ、挑発しているかの様な目で見つめられたこともない。

かろうじて言葉を返したが、顔はこれでもかと言わんばかりに真っ赤っかになっている。  
「だけど、どうだろう？」

それでもなんとか目を凝らしてカミツレを見つめ返すと、若干ではあるが、彼女の頬だって赤くなっているのがわかる。

それが分かった瞬間、ユーユはなんだかおかしくなって、

「フフフ……なんだ。カミツレさんだって、僕と同じ。変わらないじゃっ!?!」

けれど、全部は喋れなかった。

腹部に感じる強烈な圧迫感。もし、今何かを食べていて満腹状態だったならば、確実にリバーシしてしまっただろう。

同時に、感じていたカミツレの感触が一気に離れていくのを感じる。

涙目になりながらもユーユウはいまだ誰かの足にグリグリと蹴りを入れられているお腹を気にすることなく、ふせてしまっていた顔をあげる。と、そこには同じく涙目になっているフウロがいた。カミツレを羽交い締めにながら、こちらに足をのばしている。

「フウロ、さん……」

蹴られながらの状態で声を出すのはだいぶ難しい。手をのばして何とか足を外そうとするが、微動だにせず……まったく外れる気配はない。

いきなりの行動に、冷蔵庫に何かをいれていたトウコも驚いているようだ。さつきから、スピードが落ちている。

「も、もう！ ユーユウ君もカミツレちゃんも！ 何やってるの！？ そういうのは、いけないんだよっ！」

声が微妙に涙に滲んでいるのはどうしてなんだろう？ いや、まず、だいたいどうしてこんなに怒っているんだ？

理由など、ユーユウに想像出来るわけもなく、ただなんか理不尽じゃないか？ と不満を感じるくらいしかできない。

ただ、まあ、尋ねたところで認めてはくれないだろうが、泣きそうになっているわけだから、こっちが悪いんだと言い切る何かがあるんだろう。

ただ、ユーユウとしても、そりゃあふざけていたというのはあるが、思いつき蹴られるぐらいなんだろう？ と、あまり納得は出来ない。

「あの、ですね？ 別に、僕は、僕らはですね？ いけないことをしていたわけじゃなくてっ」

グリグリ。そこまで喋るが、フウロの足に更に力がこめられてしまつて、ユーユウは何も言えなくなる。いや、言おうと思えば言えるのだけれど、許してくれない雰囲気あまりにも強すぎる。

カミツレはもう、喋る気力も無さそうだ。頭に大きなタンコブをつくつて、うなだれている。

トウコはもう、この件に関して触れるつもりはないのだろう。冷蔵庫にものを入れ終わった後は、テレビのスイッチを入れ、意識を画面に集中させている。

トウコの助けは期待できない。それを感じてか、カミツレはユーユウに絶対に聞こえないようにしながら、ボソツとつぶやく。

「……焼き餅焼き」

「っ……………！！」

「……………」

ユーユウからはまったく聞こえなかった一言。それのおかげで、フウロの力が緩んでくれて、カミツレは抜け出すことができた。そしてそのまま、テレビを見ているトウコの隣につく。

まるで、最初から自分はまるで関係がないみたいに。裏切り者め。

「も、もう……！とにかく、ユーユウ君もカミツレちゃんも、分かったね！？」

我に帰ったフウロはユーユウから足をどかして、若干呂律が回りにくそうだったが、そう告げることができた。

そのことを使って話の種にすることはできたが、また蹴られてはたまったものではないので、ユーユウは素直に頷く。カミツレも同じ気持ちのようだ。

そんな二人の様子に満足したのか、腕を組んでウンウンと二度頷いてから、フウロはユーユウのすぐ隣に腰を落着かせた。

なんでは分らないが、本当にすぐ隣だ。ユーユウとフウロの間にはほとんど隙間などはない。

ちょっと顔が赤いように見えるが、さっきのこともあるので、迂

闇には声をかけられない状態だ。

気になる。

いや、気になってしょうがない。だって、ユーウからしてみれば、蹴られる理由も、反対にこうやって寄り添われる理由もまるで分らないのだから。

けれども、直接聞くのは、なんというか嫌だ。蹴られた理由は気になるが、聞くのは怖いし、逆に今こうされている理由を尋ねるのも恥ずかしい。基本、ユーウはほとんど女慣れしていない。同じ学校のクラスの女子と、休み時間なんか喋るくらいだ。

だから、そうだ。

別のこと、他に気になることを話せば良い。幸いにも、他の話の種類も、フウロたちが帰って来た時にできていた。

「そういえば、さっき帰って来た時、手にもってたビニール袋はなんですか？」

「ああ、あれね？ 飲み物とか、スーパーのお惣菜とかよ」

「は……？」

トウコの答えに、ユーウは固まる。

いや、こいつらは、一体何を言ってるんだ？ わけが分からない。

「なんで……？」

「今日くらいは、一緒に、ご飯くらい食べようかって。昨日の今日だし、その、誰かいた方がいいよね？ だから買って来たんだけ



ど……」

言葉を選びながら、フウロはユーユウに提案をした。これは、ありがたい提案なんだろうか？ 考えてみる。考えてみるが、どうも今の自分は素直にそういう風には思えないらしい。

「出来れば、今日は、今日くらいは、一人だけで家にいたいのですが……」

低い。

その声色。それは、さっきまでの声とは格段に違っていた。三人は瞬時に理解する。特に、あらかじめ分かっていたフウロは、理解した上で自分は何をしているんだと罵ってまでいた。

怒っている。けれども、自分たちにじゃない。行き場のない怒りだ。

「三人がそういう気持ちでいてくれることには、ありがたいなっと思っています。……けど、何も、今日じゃなくなっただけでいいでしょ？ 明日とかでも良いはずです……」

声が震えている。

それは微妙な変化だったが、この場にいる全員が気づく。正直、その気持ちは分かる。痛いほど理解している。けれども、

「……悪いけれど、そういうわけにはいかないわ」

「っ！ なんです！？」

カミツレの一言に我慢できなくなったのか、ユーユウは立ち上がって声を荒げる。

本当は掴みかかるつもりだったのだけれども、隣に座っていたフウロがユーユウの腰にきつく抱きついていたので、それは許してくれなかった。何度か振りほどこうとしても、拘束は解かれない。

だから、代わりに、自分の気持ちを思いっきり言葉へと乗せた。

「……ぼく、僕が、今、どういう気持ちでいるか、分かっているんでしょう？ 母さんを殺されて、自分の足だって使い物にならなくされて、家に戻った。誰もいない。誰もいない現実。その現実。事実でもって！ 僕はそれで、打ちのめされなくっちゃいけない！ 悲しまなくっちゃいけないんだ！ それでようやく、現実を享受することが出来るんだ！ 受け入れることによって、明日へ行くことが出来るんだ！」

「……………」

「僕は弱かった。何も出来なかった。だからこうなった。受け入れなくちゃならない！ でもこうやって、やりたくないことをやってこそ、人間だろ！ 生きているっていうことなんだろ！？ やらせろよ僕につ。人らしいことを！ 生きてるってことを！ ……こうやって、打ちのめされなきゃならない時に、あんたらが居たら、居てしまったら、ブレてしまう。そういう気分にならなくなってしまっ！ だから、だからだ！ 頼むっ！ 他の時は、いつだって居てくれても構わない！ 今日だけ、今日だけは、僕に独りでいさせてくれっ」

ユーユウの頬を、一つ、二つ、三つと雫がつたい、フローリング

へと落ちて、跳ねる。

懇願することと、涙を隠すこと。その両方の目的を達するために、ユーユウは力強く頭を下げる。

フウ口の、腰を抱く力が少し弱まり、カミツレは、ユーユウのことを見ることが出来ず視線をそらす。

よかれ……よかれと思ってやっていること。それが嫌だと言われたのは、そんなにシヨックじゃない。ただ、なんという風に言葉を返せば良いのか、それに悩んでいる。

変な風に返すことは絶対に出来ない。だから、慎重にならざるを得ないのだが、そういう風にして選んだ言葉で、果たして彼が納得してくれるのか？　そういう気持ちがある。出来なかった時のことを考えているのだ。

けれども、トウコはちょっと違っていた。ゆつくりと、口を開く。そしてその瞳は、しっかりとユーユウをとらえていた。

「ゴメン。それは出来ないよ」

「……それは？」

「人間だから、だよ」

「……………」

「苦しいことを受け入れるのが、人間だって言っただしょ？　ならば、私はどれだけ邪険にされてもアンタの近くにいるわよ」

下げていた頭を上げ、ユーユウはトウコを瞳にうつしだす。そこには、さっきまでの真剣な表情はなく、まばゆいばかりの笑顔があ

った。

「苦しい人を放っておかずに、気にかけてあげる……………人間のやることでしょ？」

その顔があんまりにも純粹で、あんまりにも汚れがなかったから、ユーウだって、浄化されたような気分になる。

目の前で腕を組んで、履いているホットパンツがずり落ち気味なことなんて何も気づかないで、こうやって言葉に気持ちを乗せたことが恥ずかしくなるぐらいの笑顔をこちらに向けている。

そうか。

なるほど、と、納得出来た。

ゆっくりと腰に巻きついているフウロの腕を振りほどいて、三人から絶対に表情を悟られないところまで移動する。

足は変わらず痛かったが、今の自分の心を考えればまだまだどうってことはない。

「さっき、待ってる時間を使って、携帯で三人のことを調べてみたんだ。カミツレさんのこと、フウロさんのことも。けれど、トウコのことは、特に書かれていなかった」

ふと、ヴァルがこちらを見ているのに気がつく。ポケモンの気持ちはまだよく分からないが、戸惑っている様子はなく、安心して印象を抱かせる。

「だったら、なんでトウコが二人といえるんだろって疑問だったけれど、今、なんとなく、分かったような気がするよ」

「分かった？」

「うん。三人とも、ゴメンな？ あんなこと言っちゃったけど、やっぱり、側にいて欲しい」

きっと、今のユーユウは自分とまったく同じ表情をしているんだろう。

トウコのその想像は、当たり前前の様に的中していた。

## 5 ・その名はカトレア！（前書き）

ロイズの生チョコって美味しいよね（  
、  
、  
（  
）

## 5・その名はカトレア！

翌日の10時、ユーユは学校にいた。

足はまるで回復していないが、痛み止めを服用してから来ているので、授業を受けることに支障はない。

とは言っても、今は授業中というわけではない。いや、厳密に言えば、時間的には授業をしているはずなのだけれども自習となっている。

教師がいないのであれば、授業もやり様がない。つまりは、休み時間と一緒に。後で咎められる事がない程度に騒いでいる。

「はぁ……」

ユーユは窓際、真ん中の列に位置している。寝るには一番いいポジションだと言える。話しかけてくる人間はほとんどいないから、普通ならば眠りにつくのだけれども、そうもいかない。

また色々と言われるだろうからと、早くに家を出た。誰も目を覚ましていないうちに、登校しはじめたのだ。

一応書置きを残し、何かあった時のためにと携帯の電話番号を書いていったのだけれど、さっきから内ポケットがズーッと震えている。当然でられない。

そう、結局あの後、ご飯だけ、お風呂だけ、一晚だけ、とうまい

具合に話を運ばれてしまい、結局泊めることになってしまった。もちろん、女の人を家に泊める経験など皆無だったので、とても苦労した。色々、様々なことに。

ちなみに、カバンの中にはヴァルとケイトがいる。ケイトは素直にモンスターボールに入ってくれていたが、ヴァルは入ってくれていないはまだ。

今も、机の横にかけてあるカバンからひょっこりと控え目に顔をのぞかせている。もしもユーユウが真面目にその日ごとに家に教科書をもって帰る様な人間だったら、ヴァルは学校には来れなかったろう。

ライモントレナーズハイスクール。ユーユウが通っている学校の名前だ。その名の通り、エリートポケモントレーナー養成学校である。

ということつまり、この学校にいる全員がポケモントレーナーであり、しかも選りすぐりということになる。

ただ一人だけ、ポケモンを持たずに学校に通っている人間がいたが、それは昨日までの話だ。

今は違う。

大きめのカバンの中に手をのばして、手探りの状態でヴァルを撫でてやった。

とは言っても、そのことを誰かに話すわけではないから、クラスの人間からのユーユウに対する評価は基本的には変わらない。



ポケモンを持ってないくせに、トレーナーズハイスクールにいる妙な人間。大多数の生徒はこう思っているはずだ。

優れたポケモントレーナーを輩出する目的で建てられた学校なのに、ポケモンを持っていない人間がいる。

そうなつてくると、あまり好ましくないことをして無理やり入って来たのではなからうか？ という想像を必ずしてしまうわけで、なので、ユーユウは好かれているということは全くない。一部の人間を除いて。

「閉めるぞ」

短くカバンの中にいるヴァルにそう告げると、ユーユウは呼吸ができるぐらいしか残さないでチャックを閉めてしまった。フシデの聴覚がどの程度のものなのかは分からないが、カバンが左右に小刻みに揺れているところを見るあたり、納得してくれてはいないらしい。

けれども、見られて騒がれるのは嫌だったのだ。チャックを閉めてから数秒したあと、一人の男が机から立ち上がり近づいて来て、今は誰も座っていないユーユウの前の席に腰をおろした。

180を超えるくらいの背丈と、肩を過ぎるくらいの金髪。およそこの学校では他にみられない中性的で端正な顔立ち。そして、腰につけられた6つのモンスターボール。

昨日ライブキャスターで連絡をとってきた人間で、ユーユウの友

達。そして、この学校では一番のポケモントレーナーだ。

「ロイズ」

「よ、ユーユウ。その足、どうしたんだ？」

朝はユーユウがギリギリで学校に到着したがために、今日こうやって会話をするのははじめてだったりする。

と言っても、机に座っている時からどことなくソワソワしていたり、こつちをチラチラ見てきていたりしてはいた。

そして、こうやってロイズが話しかけてきた途端に、一度は静かになっていた携帯が、また激しく震える。これも、みなくても誰からのものかは分かった。

このクラスにいる人間からだ。男女問わずに、メールの一斉送信。しかも、気分のよくなる内容じゃない。

「どーした？」

「いいや。なんでもないよ」

多分、だけれども、クラスどころか学校で一番強いトレーナーと、ポケモンすら持っていないのにこの学校にいる人間とがつるんでいるのが気に入らないんだろう、とユーユウは勝手に思っている。

実際、こういう内容のメールは、ロイズへは送られていないし、彼はユーユウ以外の人間とも、普通にクラスメイトとして、友達としての付き合いをしている。

そのことにはユーユウだって気づいているから、こうやってロイズと話するのは楽しいが心苦しくもあった。だから、一週間に一度はこう言うのだけれど、

「なあロイズ。良いのか？ 僕なんかと、一緒にいてさ」

「おい、またその話か？ 言っているだろ？ 私はさ、話したくない人間とは話さないんだぞって。ユーユウはそうじゃない。だから話している」

この調子である。

だから、なるべくユーユウも気にしない様にしているのだけれど、周りがそれを許しちゃくれない。

「で？ どうしたんだよ、その足は？ 先週はそんなのなかったし、昨日だって、怪我したなんて一言も喋ってなかったじゃないか」

「……まあ、言わなかったのは悪かったけどさ、言うほどのものでもないかってな」

「ほう？ 時間ギリギリに松葉杖で入ってくる様な怪我が、どうとでもない？」

その声は、ちょっぴり怒気を含んでいた。なるほど。どうやら気がつかなかっただけで、結構心配してくれていたらしい。

ちなみに、自分のことを私と呼んでいるが、れっきとした男性だ。彼の家は結構な名家らしく、しかも長男なので、こういう呼び方を

強要されているらしい。姉がいると言っていたが、その人はどうな  
んだろう？

ロイズとしてもそんなのに納得してないらしく、ユーユウの机  
に倒れこむ様になっている。

「だからさ、悪かった。そう言ってるでしょ？」

「……………私は、納得してない」

そんなこと言われても、ユーユウとしては肩をすくめるしかない。  
本当にあったことなど喋るつもりはない。このことで誰かに心配さ  
れるのも、騒がれるのも嫌だ。

出来ることならば、カミツレもトウコもフウロも完全に振り切っ  
てしまって、一人だけあの男に怨念返ししたい。

だから、苦笑いをしながらなんとか話をそらす。今出来ることは  
それだけだ。

それに、奴を追うことを全てとするならば、この場所だって離れ  
なくちゃいけない。今日は、そのために来たのだから。

「しかし、なんだって今は自習なんだろうな？ 教師がいる雰囲気  
もしないし」

「……………話をはぐらかすのがヘタだな」

「なんで自習なんだろうな？」

「おい、ヘタクソ」

机に突っ伏している状態なのでどんな顔をしているのかユーユウからは見えないが、多分呆れ顔だろう。返ってくる声に、それがあらわれている。

顔をつかんで無理やり上げようとすると、力を込めて抵抗してくる。けれども、ユーユウだって力には自信は無いが、ロイズよりは上だ。徐々に、ゆっくりと顔が上がって行く。やっぱり、呆れ顔だった。

「納得しろ、とは言わんがね？ 言えないこと、言いたく無いことを聞かない様にするのも、大人つてことなんだから、跡継ぎとしては、そういうところも気にする必要があるんじゃないかい？」

「……………」

ロイズの顔は、呆れ顔ではなくなっていた。けれど、ユーユウに對して言葉を返さない。いきなりボーツとして、なんというか、普段は見せない様な顔だ。

穏やかな表情でも、苦笑いでも、一度だけ見せた怒った顔でもない。そりゃあ、ボーツとした顔を見たことが無いわけではない。見たことが無いわけではないが、けれども、こういう風に、ロイズのことを言った時にこんな顔をされた覚えはない。

「どした？」

長い金髪が微かに揺れるが、表情は変わっていない。その金髪は、

言葉にするならば一緒なのだけれど、カミツレのように、本当に金色と呼べるようなものとは違い、どちらかと言えば、金色というよりもキツネ色に近いのかもしれない。けれど、真っ黒なユーユウの隣に立てば、ロイズのキツネ色はかなり映える。

「全く……古いパソコンのOSじゃ無いんだからさ」

今度はユーユウが苦笑する番だ。しばらくはこのままなんだろうか。

と、ロイズがフリーズしてしまったがために、ユーユウは周りの様子をそれとなく伺った。

嫌な感情を抱かれているというのは分かる。知っているが、それでも気になってしまう。それはしょうがないことだろう。

「……………」

どうしたんだろう？

なぜかクラスメイトは窓にへばりつくようにしている。いつもは、こういうような時間は、窓際は自分たちの専用席みたいなものなのに。今日は、クラスの人間のほとんどがそうしてる。

ユーユウも窓を開けて左右を見ると、両隣の教室の人間も、ほぼ全員が窓際に集まっているようだ。みんな校門を見つめている。その先には、学校の先生がいて、何かを待っている様に見える。

「なあ、今日、何かあるのか？」

さっき聞いたことを、もう一度尋ねてみる。もちろん、ボーツとした状態から抜け出しているのは確認済みだ。

実力主義、という名の通り、良い成績をおさめているトレーナーは、一季に一度、有名なポケモントレーナーとのポケモンバトルを行っている。

バトルした人間は自分の実力をあげられるし、出来なかった人間は、明日からより高みを目指すために発奮する。見ている側にも勉強になることは多い。

けれども、今季はもう、一度そういう機会が設けられている。同じ季節に同じことをやるというのは考えにくいが……？ でも、それ以外に何かあるのかというと、別のものは思いつかない。

で、ポケモンバトルであるならば、確実にロイズに声がかかるはずなので、何か知っているはずだ。もしトレーナーが来るならば、誰がくるのかも。

「分からない……私は、聞かされてない」

「そっか。じゃあ、なんなんだろうな、ありゃあ」

おかしい。

どうにもロイズの歯切れがよくない。聞かされていないと言ったが、そういう風にはまったく見えない。多分、そうだ。聞かされている。このあと、正門に誰がくるのか知っているんだろう。

でも話してくれない。それはどういうことなんだろうか？ 気になる。気になるが、聞けなかった。だから、というわけではないが、ユーユウはロイズから視線を外して、自分のバックを見る。どうやら、ヴァルは大人しくしてくれているようだ。

「ユーユウ、なぜ聞かない？」

「ん？」

「私が、嘘を言っているのだと分かっているのに、なんで聞かないんだ？」

どうやらお見通しだったらしい。

今までだって、歯切れのよくないことを尋ねたことはあった。けれどもそれは、学校関係のことじゃない。学校絡みのことならば、知っていても知らなくても、その都度はつきり言って来たのだ。

それが、今回は知らないにしては歯切れの良くない答え。何かあるんだろ。同じことが起きたら、ロイズだって絶対に不審に思う。ならば、ユーユウだったら間違いないと気づくはずなのだ。

名前を呼ばれて、ユーユウは再びロイズへと視線を向ける。一瞬だけぶつかるが、入れ替わって今度はロイズの方がよそを見てしまっている。

「ま、何となくね。何かあったんじゃないかとは思っただけ……」

「けど？」



「けど、ロイズは聞いてないって言ったからな。言われちゃったら、僕には、お前が今喋ったことは嘘だろ？　って言えるものは無いからな。どれだけ信じられなくても、納得するしか無いんだよ」

「だいたい、こっちだってはぐらかしたからな？」とユーユは続ける。だから、これでおあいこだとも。

と、そこまで言ったところで、クラスの連中……いや、学校中の生徒という生徒が一斉に騒ぎ出した。

当然、何事だろう、とユーユの注意もそちらにいく。すぐ近くでロイズが顔を赤らめモジモジしているのも知らずに。

窓の外の光景、さつきと違うのは、校門前に大型の車が停止しており、そこに教師連中が群がっていることだ。

教室にいる生徒らも、歓声をあげたり手を振ったり……誰が来たんだろう？

黒塗りの大型車。映画でしか見ない様な高級感あふれる車のドアが開き、中から何人かの人が降りてくる。

中でもひときわ目立ったのが、金色の髪をした女の人だ。遠目に見るしか無いが、なんというか、不思議なオーラをまとっているように感じられる。

金色の髪、と言ったが、よく見てみると、金色は金色なのだけでなく、キツネ色ともとれる色合いだ。

（ん？　キツネ色っぽい金髪？）

疑問符。

ユーユウの頭上にうかぶ。なんだろう？ さっき似たようなカラーを目にしたような……？

しかし、そんな疑問も、周囲の雑音にかき消されてしまう。

「間違いない！」

「やっぱそうだ、Aクラスからのリーク通り！」

「なんて人だっけ、俺、あんまエスパertypeって使わねーんだよなあ」

「知らんのか！？ イッシュポケモンリーグ四天王の一人、エスパ―タイプエキスパート、しかも家は実力者を輩出し続ける由緒正しき名家！ 長女で貧乳。その名はカトレア！」

……最後は要らない情報だった。そんな感想。けれど、興奮した様子で周りは盛り立てているみたいだけれど、ユーユウとしては、フウロやカミツレと一緒に。具体的なすごさを、ちっとも想像出来ない。

ただ、髪留めに使っている大きなハートが印象的だ。

「凄いな。リーグ四天王が来るなんてさ」

ポケモンバトルはしたことが無いが、四天王の一人がくることかどうということかは考えることができる。

確かにライモントレイナーズハイスクールはエリート養成所なのだろうが、ここだけではない。

そして、四天王がこういう施設を訪れたという話も聞かない。そう考えれば、クラスの人間、学校全体がこういう空気になるのもわかるというものだ。

ただ一人を除いては。

「なあ、本当、どうしたんだ？」

再度、ユーユウは声をかけてみるも、ロイズは動かない。また、机に突っ伏し、顔をあげてくれない。彼のこういう姿は見たことがない。少なくとも、学校関係、ポケモン関係では。

けれども、こうなってしまうている原因がまったく分からないので、対処のしようもないし、かけるべき言葉も思いつかない。

だから、自然とユーユウはその視線をまた校門に向けるのだけど、そこにいる人物を見た瞬間、一気に目が見開かれた。

来ていたのは、一人ではない。カトレアの、ボリウムたつぷりの髪の後ろから、見知った顔が3つ、ユーユウの視界に入った。

「すげえ！ カミツレ、フウロ……ジムリーダーもいるぞ！ 今までこんなことあったかよ！？」

「あの、一番後ろのポニーテールの人は？」

「ん？ そっぴや、ありや誰だ？ 見覚えがあるような気も、するんだけどな。でも、一緒にいるってこたあ、ありや相当なはずだ」

歡喜の声が、さらなる高まりをみせる。見回りに当たっていたらしい教師たちの注意の声も聞こえて来るが、素直に歡聲のポリウムが落ちると思えない。

まさに渦。歡喜の渦と言って良いだろう。

だがしかし、そのために机に突っ伏したいと思った人間が一人増えてしまった。

『ユーユウ君、まだ、足治って無いんだから、明日、絶対に家で安静にするんだよ！ わ、わた、私がつ、ユーユウ君の看病、してあげるからっ』

昨晚の会話。

多分、きつと、いや、絶対にフウ口は怒っているだろう。メモに学校名までは書かなかったから、ここにいると思われるのが唯一の救いだ。バレたら、ただでは済まない。

冷や汗。それが背中をゆつくりとくだっていく。とりあえず、立ち上がっている状態だったが、自分の席に腰をおろして、気持ち頭をさげる。

なんの打開にもならないが、ちょっとは落ち着いたんだとユーユウは思っている。

とりあえず、席に座った。それと同時に、机に伏せていたロイズは立ち上がる。なんだろう？ なんとというか、何かを覚悟したかの

ような表情だ。

「……出迎えてくる。私の、役目なんだ」

心底落ち込んだような、やる気の無い様な声。だったら行かなければいいだけの話なのだが、彼の立場から考えて、行かないというのはあり得ない。

ため息をついて、それでも歩き、教室を出ていく。

校庭に目をやると、学校の人間に連れられた四人がゆっくり校舎へと歩いて来ていた。ロイズが来ていないからか、教師たちはちょっと慌てている様に見える。

ユーユウも机の横に立てかけてあった松葉杖を手に取り、反対側の力バンを上手いことかついで教室を出た。

ロイズはいないので、その一連の行動を制止する人間はいない。いつもなら視線ぐらいは向けるが、今日は状況が状況だ。それすらもない。

廊下を歩き、階段に差し掛かる。

転んでしまわないように杖を使いながら慎重に一階に降りた。さつき、校庭には学校長は居なかった。バッテリーがしてしまうかもしれないが、このあといつも通りに講義が始まるならば、校長に会うには今しかない。

一階の職員室の隣。廊下のちょうど真ん中に校長室がある。

他の部屋よりも立派な装飾が施されている扉をノックすると、ほ

どなく入室を許可する声が扉の向こう側から聞こえた。

「失礼します」

学校長室にはいる。

思った通りだ。いつも通り校長は、著名なトレーナーが講義をしている様子を写真におさめるため、カメラの準備をしていた。

かなりの高齢、おじいさんなので実務的なところは他のメンバーに任せているが、これは趣味も兼ねているため、他の人間にやらせるつもりはないらしい。それでも昔は名の通ったポケモントレーナーだという。

「君か……」

「はい」

沈んだ声。入室を許可されたときに聞こえて来た浮ついたフワフワしたようなものとは真逆だ。

そう。この人とも、ユーユウは仲が悪い。当然だろう。ポケモンを持たず、貸出も受け入れず、座学だってマトモに聞いているかどうか分からない。

可能性を広げてもらおうと招き入れたのに、そういう素振りを全く見せないというのだから、そりゃあ気に入らない。しかも、一人だけ。入学許可を下したのは自分だが、それだって、彼の力によるところではない。実際のトレーナーとしての力などは全く知らない。見せてくれていない。

何度かちゃんとやってみないか？ と話してみたりもしたのだが…… まったく効果はなかった。

「何だ？ 見ての通り、私は忙しい。君の相手をしている暇はないのだよ？」

邪魔だと言わんばかりの冷たい声色。実際そうだ。邪魔になっ  
ている。けれど、それも今日で終わりだ。

「……やめたいと思います」

「……………」

「この学校を、退学したいんです」

「本気が……………」

ユーユウは小さく頷く。カメラを弄くる手が止まった。そのまま校長は自身のデスクまで歩き、引き出しから一枚の書類を取り出した。

退学者ようのものだろうか、しかし、一度だしたそれを、再び引き出しへと戻す。

「……………？ なぜ、しまったんです？」

「普通なら、まあ、これで出来るがね。しかし、君は無理だ」

意味が分からない。つまりはまあ、普通じゃない。特別な事情が絡まっているということらしいが、ユーユウは知らない。知らされ

ていない。

「……そのまま帰っていい」

「なに……！？」

「心配するな。書面上は在学ということになるが、もう、こちらから君に対してちよっかいを出すようなことはしない。それが君の意思ならば、我々は最大限それを尊重しよう」

どういうことなんだ？

分らない。分らない。この学校に入ることが出来た理由も、書面上で退学除籍とすることが出来ない理由も。

ただ、なんとなく。本当になんとなくであるが、これも、母さんが死んでしまったことと何かしらの関係がある。そんなことを感じていた。

しかしながら、感じたからといって理由まで想像することは出来ない。

分かったことと言えば、退学したいと申し出てから校長室を出るまで、なんとか表情に出さないようにしていたらしいが、校長がずっと嬉しそうにしていたということだけだった。



## 6・苦かったらう？

あれは、どういうことだったんだらう？

行きつけの公園、ベンチの上に腰掛けてから、ユーユウはさっきの校長の話を思い出していた。

こちらからは除籍処理を行うことは出来ない。普通じゃないこと。なんなんだろう？ ユーユウには、それが何故かなんて想像する力はないが、きつといい話じゃない。

「意外に呆気なかったな……」

だから、そのことから目は背けて、あの時、退学すると告げることからの流れの早さに気を向けることにした。

本当に呆気なかった。引き止めなどないし、逆に、とんだ迷惑をこうむったと文句を言われることもなかった。あつさり。

もつとくだらないことでも、これよりかは時間をかけるだろうというくらいにあつさりだ。

だからつまりは、本当に、どうでも良いものだと思われていたということなんだろう。そう考えれば、確かに、あのあつさり加減にも納得がいくというものだ。そしてそこまで考えられると、急に、ライモントレーナーズハイスクールに対する興味が失せていく。

こつちだつて、そつちのことをどうでもいいと思ってしまう。

ただ、ロイズはちゃんと四人を迎え入れたのか。それだけは気が

かりだった。

さて、終わったことを考えても仕方が無い。そう自分に言い聞かせ、これからのことに思いを馳せる。

これからどうすべきか……いや、やることは決まっている。決まっているが、目的を達するためには今のままではダメだ。

それに、足も痛くなつて来てしまった。痛み止め切れ。これだつて、なんとかしなくてはならない。完全に治るのを待っていては、機を失ってしまう。とは言っても、痛いまままで追つて、追いつけたとしても、こんなのでは勝てないだろう。

ヴァルとケイトに迷惑をかけてしまっただけだ。

と、ようやくユーユウはカバンにヴァルをいれたままだったのを思い出して、チャックを全開にする。

閉じ込められたままだったために、ヴァルは一瞬だけ目を細め、それから一度大きく飛び跳ねてから、カバンの中から出る。

平日の昼ということもあって、人影はまばらだ。むしタイプのポケモン、特に、フシデのようにムカデの形をしているものはあまり好かれていないらしいのだが、これだったら周りを好きに歩かせても大丈夫だろう。

ケイトも、珍しいポケモンみたいなので、騒がれるのは好きじゃないからあまりボールから出す機会はないんじゃないかと思っていたが、こういう日ならば問題ないだろう。

フウロがやってみせたようにして、ボールを展開させる。そうするとミニリュウのシルエツトが浮かび上がって、ケイトの参上だ。

「お前ら、僕の目が届く範囲なら、好きにしていーぞ。特にケイトは、あんま街中じゃ出してやれないかもしれないから、今のうちに楽しんどけよ？」

そういう風に言っではみるのだけれど、ヴァルもケイトも動かない。ユーユウの左右にいて、二匹ともが身体を寄せてくる。

楽しめと言っただけなんだが……いや、まあ、目が届く範囲ならば好きにして良いと言っただけは自分だ。別に、こうされても構わない。けれど、

「……懐かれる様なことをした覚えがないんだが……」

むしろ、あの三人のせいであまり構ってやれない。そんな状態だ。それなのに、あの男も、フウロだって、ヴァルもケイトも懐いていると言っていたし、こうされているということは、少なくとも、嫌われてはいないんだろう。

どういうことか。

こう、分からないことばかり積み上がっていくと、どこからどう手をつけて良いのか分からなくなってしまう。

けれどもきつと、自分がそこまで混乱することはないんだろう。そんな感じがしていた。

というのも、こうやって分からないことが積み上がっていった

るが、やるべきことはハッキリしているというのはぶれていないのだ。

ユーユウが二匹の頭に手を置いて、近くに寄せてやつたり、撫でてやつたりすると、小さく細かく鳴き声を発する。人間の耳で聞いているだけだが、それが、気持ちいいという意味のあらわれみたいだというのが実感だ。

「……………お前らには、後々、心も身体も痛くなってしまうようなことを、やつてもらわなくちゃならんからな……………」

それは、本当にすまないと思う。

そういう気持ち伝わってくれたのか、結構声を低くして、脅す様に聞こえるぐらいだったのに、怯えるような仕草は見せない。

本当、すまない。

もう一度、胸の内にてヴァルとケイトに謝る。もっと違う境遇だったなら、違うトレーナーだったら、そう思ってしまう。

「母さんが、生きててくれたらなあ……………」

低い声から一転して、今度は情けない声色だ。だけど、これだつて本音。ユーユウの中に渦巻いている気持ちだ。身勝手だけでも、正しい。

周囲にはさつき見たとおり人影は少ないから、こういうセリフが言えた。周りが騒がしかったらこうはいかない。

思えば、あれが起こったあとで静かに過ごすなんて、今が初めてなんじゃないだろうか？

昨日の夜、ユーユウは仕方なくリビングのソファで眠り、ベツトを譲ったのだけれども、寝る間際までずっと騒がしくしていたのをよく覚えている。

ユーユウとトウコは普通の飲み物だったのだけれど、カミツレやフウロが飲んでいたのはアルコールだった。二人とも酒に弱く、すぐによってしまう癖に、味は大好きなんだとか。

まだ飲めないユーユウにはいまいちよく分からないが、何か惹きつけられるものがあるんだろう。

とにかくそういうことで、今はじめての静かな時間だ。学校に行って、そこから抜け出すことでようやく手に入れた。

色んな事が頭の中を駆け抜けていく。いっぱい詰まっている母親との思い出と、少ししかない父親の表情。

『ユウちゃん』

『ユウ、見えるか？』

『ユウちゃん、どしたの？ お昼なら、もうちょっと待ってね』

『ユウ。はははっ。風呂の中で暴れるんじゃない。こらっ。しびきがかかるだろっ』

『二人とも、ご飯出来たわよ。いつまで遊んでんのっ』

「ん。ポケモン？ トレーナーになりたいのか。……そりゃあ、ダメだ。悪いけど、お前をトレーナーにはさせられない」

「そう怒らないの。父さんには父さんなりの、母さんには母さんなりの考えがあるの。ね？ ポケモンがダメでも、他に楽しい事がいっぱいあるんだから。ユウちゃんなら見つけれられる」

「ごめんな、ユウ。やりたいこと、やらせられなくて。ポケモン、ポケモン以外ならば、なんでもやらせてやるから……」

悲しいものと、笑っていたもの。本当は、楽しい思い出はもつといっぱいあるのだけれど、こんな状態で思い出すのは不可能に近い。

自然と、良い思い出とは言い難いものになってしまふ。だけど、多分仕方ないんだ。こういう思いをしなくっちゃ、実感出来ないということだ。

空を見上げると、快晴というにはほど遠い空だ。今にも、雨が降ってきそうな天気。

しかし、ユウユウの手持ちに傘はなく、このまま雨が降ったとならず術はない。

自分だけが濡れる、というならば、別に構わない。今は、そんなことを考える気分じゃないし、むしろちょっとビショビショになって、ひどい格好をしたい気持ちになっている。

けど、ヴァルとケイトがいるのだからそんなことは出来ない。

「雨が降りそうだから、とりあえずケイトはボールに戻すぞ」

言いながらモンスターボールを構えて、ケイトの反応を見ないうちの中へと収納する。

強引だが、こうでもしなければ戻ってくれそうにない。ヴァルほどでは無いが、ケイトもあまりモンスターボールを好んではいなさそうなのだ。

困ったもんだ。肩を竦め、ケイトのモンスターボールをカバンの中に入れる。ヴァルは相変わらずだ。身体全部を使ってスリスリと寄ってくる。多分、カバンに戻れと命令しても戻ってくれないんだろう。

空がご機嫌斜めなせいか、公園にいたまばらな人影はほとんど無くなってしまっていた。それとなく周囲を見てみても、まったく人の気配は感じられない。

だからだろうか？ こんな天気なのに傘も持たないで公園に入ってくる人間に注目してしまうのは。

初老を迎えたと思しき男が公園の入り口に立っている。見知らぬ顔。

この時間帯には、ユーユウは公園に来ることは無いが、それでもほぼ毎日のように訪れている。いるのだが、この人の顔知らない。

とは言っても、これだけならばユーユウだって注目なんかしない。いつもは公園にこない人が、何かの気まぐれで今日は来ることとな

った。それだけのことだからだ。

けれども、ユーユウの視線を奪う。他人の目を集めるという点では、カミツレと一緒になるのかもしれないが、意味合いが違ってくる。

入り口までは、少し距離があった。しかし、彼が身に纏っているオーラは強烈に感じられる。冷酷で無慈悲、だが暖かさもある。それは奇妙だった。

まだ寒い時期とは言い切れないのに、黒いコートをし、マフラーを首にまわして、重たそうなカバンを右手に持っている。チラリ、とベルトの辺りにモンスターボールが見えた。

(……あんな人もポケモントレーナーなんだ)

だとすれば、かなりの実力者なんだろう。確証はないが、確信していた。研ぎ澄まされた刃。例えるならば、これが適当なんだろう。

男は、ゆっくりとした足取りでこちらへと向かって来る。

視線があった。本当、本当に不思議な人だ。そう感じる。威圧的、威圧的で、触れれば斬られてしまいそうなのに、逃げる気を起こさせない。手も足も、動こうと頭で思ってもそうなってくれない。

やがて、男はユーユウの正面にきた。雰囲気にあてられたのだらうか？ ヴアルは身体を小刻みに震わせている。

「いいか？ 隣に座って……」



低い声。

しかし、よく通る声だ。ユーユウは気づかれない様につばを飲み込む。

「……はい。構いませんよ」

返事を聞いてから、男はユーユウの隣に腰を降ろした。短く息を吐く。身体をリラックスさせているのか？

けれども、表情はそうだが、ユーユウにはそう思えない。まるで隙のない雰囲気。母親のことがあって、過剰になっているのかもしれないが、この人はただならない人間だと考えざるを得ない。

「君、あの時は大丈夫だったか？」

「は、い？」

あの時？

何をいつてる……？

そういう風には思えなかった。あの時。母親が殺された時。両足を炙った時。否が応でもそれを思い出してしまふ。同時に、この初老の男に対する警戒レベルが一気にはね上がった。

「カゴのみをすり潰したものを君に飲ませたんだ。苦かったろう？」

「は、はあ……」

「流石に、ポケモン用のねむけざましを使うわけにはいかなかった

のでな。だが、それのおかげで君は、母さんの最期の時に立ち会うことができた」

「……………！」

一気に背筋が張り、眠っていた感覚が呼び起こされる。知っている。こいつは。あの時あった事を。カゴのみと言った、起こしたと言った。最期の時に立ち会えたというのだから、あの時あの場所にいたという可能性が高い。

そうなってくると、ユーユウの心情としては、この男にはもう敵意しかわかない。いきなり掴みかかる様な真似はしないが、眉間にシワを寄せ歯を食いしばる。どんどん表情が険しくなっていく。

「……側に、側にいたのなら、何故、助けられなかったのですかっ」

「奴の力は、正直なところ未知数だ。そして、君の母さんでも、まるで太刀打ち出来なかった。私が居たとしても、勝てはしなかったろっ」

今の言葉には、まるで納得出来ない。

つまりは、ユーユウの母親を、あの男の力を見定める為に使ったという事ではないか。

かませ犬。母さんがそれにあてられた。ユーユウが納得できるわけがない。

「私には、奴を止める力はない。……もちろん、君にああいう所を見せたのは悪かったと思う。だが、本当の事を知らないままよりは良いだろう？」

「そんな……！ だけど……、そうだけどっ」

「ならば？ あのまま何も知らされずに、独りであの家に閉じこもって居た方が良かったと？」

「……別に、その、直接見なくたって、あとで知るぐらいは、わかる事ぐらいは出来ましたよ……！」

「無理だな。私がジムリーダーも、君も呼ばなかったら、あの現場はただの一時程度で片付けられる。君の通っている学校の校長によつてな」

「は……！？」

なんとというか、これだけ短い間にこんなに混乱させられる事など無いと思っていたのだが……なんだ？

いまいち状況を把握し切れていない。どうしてプラズマ団とライモントレーナーズハイスクールの校長とで関係がある？

「あの学校の校長はな？ プラズマ団の団員ということだ」

「ばかな！」

「馬鹿な考えだと思うか？ ならば、なぜ君はあそこに入れた？」

ろくに授業も受けず、ポケモンすら持っていないのに、なぜ君が言い出すまで学校を辞めさせることが出来なかった？　なぜ十年、二十年もずっと校長でいた？　なぜもっと上へと行けたはずなのに校長のままだ？」

「それは……」

「言い返せまい。君だって、きっと今日、その疑問を抱いたはずだ」

つまりは今日ユー・ユウが学校で何をしてきたかを知っているということだ。盗聴か、あるいは繋がりのある人間が学校にいるのか。

それは分からなかったが、そういう情報を得る為に打たなければならぬことを、この男は打てるということだ。

「ユー・ユウ君が学校を辞めると言った時、校長は喜んでいたな？」

つまりは、君の力を見抜けなかったということだ。きっと、あの男も。つまりは、将来君がプラズマ団にとって重要な戦力になると確信していた人間が君を学校においていたということになる。恐らく、君の母親を殺させたのも……」

「ちょ、ちょっと待ってください。矛盾してるじゃ無いですか？」

仮に、僕にトレーナーとしての才能があるとして、なんだってそんな、恨みを買う様なことを……？　意味が無いじゃないですか。現に僕は――」

「あのまま君が起きなければ、確かにそれで良かったかもしれん。だが、起こされた。そして、真実を見てしまった。見ていなければ、後はどうとでもなる。殺人の事実を都合よく改ざんし、君に嘘を吹き込みプラズマ団に入れることが出来る。父親を殺し、母親を殺し、

ユーウ君がずっとポケモンを持てなかった理由、足かせを取り外し、迎え入れることができる」

「……………」

そんなのは絵空事だ！ と否定する気持ちがないわけでもない。だが、言葉では言い表せない説得力があった。

これで正しいのかは判断出来ないが、ある種の必死さを感じたのだ。

「そういう意味では、僕は、母さんが殺されるところを見なくっちゃならなかったってわけですか……………」

そうは言ってみたものの、やはり、自分の生の目で見てしまったというのはやはりユーウにとって重い。

「……………だけど、あなたは何でそんなことを？ 僕を起こして、ホントのことを見させて、教えて、あなたに何の得があるっていうんです？」

「同じだからだ」

「同じ……………」

「家族を殺された、ということだ。もっとも、君の様な状態ではなかったから、知る為に結構な時間を必要としたがな」

「……………」

「確かに、私と君とはなんの関係もない。今日初めて出会い、今初めて言葉を交わしている。だが、私と君と、その目的や行動理由に、なんら変わりはないはずだ」

大事な人、家族を殺された。

だから、殺されたもの同士で、奴に死をもって償わせようということか。

「ユーユウ君。別に、君に力があると確信しているわけでもなく、力が無いと切り捨てるつもりも無い。ただ、同じ境遇のものとして、手を組み、奴を殺すつもりはないか？」

初老の男は立ち上がって、ユーユウに手を差し出して来る。じつくりと目を見つめ、喋っていることに嘘はないことを確認する。

どうする？

独りでやる。そのつもりだった頭の中に、別のカラーが滲み出し広がってゆく。短くため息をついて、一度目を閉じる。何も見えない。見えないはずなのに、モヤモヤしたものが見えて、心が落ち着かない。

目を開くと、そこには変わらずに男が差し出した手があった。どうやら、ユーユウが返事をするのを待っているらしかった。

「僕……僕は、その、誘いを、受け入れて良いんでしょうか……？」

「ん……、質問を返して来るのは感心しないな」

「……本当に分からないんです。その提案を、受け入れてしまつて良いのか」

ユーユウも同じように立ち上がって、松葉杖を片手で持ちながら、ヴァル入りのカバンをもう片方の手で持つ。

痛み止めの効果が切れ始めている状態では歩くのは辛い。

「足、痛めているはずだろ？」

「……大丈夫です。痛い、痛いけれど、でも、歩きたいんです。僕は、歩くの好きですから」

うまいこと杖を扱って歩き出す。気づいたら、ポツポツと雨が降ってきていた。雨粒は小さく、この程度なら傘は必要ない。

ヴァルが不安そうに鳴き声をあげるが、ユーユウはそれを無視した。

「今頃、あの学校の校長は捕まっているな」

「そうなんですか？」

「ああ、私がリークした。しかし、奴らの尻尾をとらえることは、きつと出来ないな」

残念そうな声が背後から聞こえてくる。

なるほど。ということは、カトレアという人や、カミツレ、フウロ、トウコなんかは、校長をどうにかしに来たということらしい。いつものじゃない。

（ん？　じゃあ、ロイズもか？）

出迎えて、案内すると言っていたのをユーユウは思い出していた。思えばあのときちょっと様子がおかしかったのも、それが関係していたのかもしれない。

もつとも、もう辞めたつもりだった学校のことだ。ただ、このゴタゴタが起きてしまったがために、辞めるというのが取り消しにならないかどうか。

それだけが心配事だ。

初めに抱いていた敵意がほぼ完全になくなって来ているのが分かる。でも、それでも、やはり、

「僕は、あなたと手を組むつもりはありません……」

「そうか。理由だけ聞かせてもらおうか」

「怖いんです」

「怖い？」

「今の僕は、言わば、でっかい砂漠の真ん中に連れてこられたようなものです。どこに行けばいいのかも分からないし、何をどう手をつけていいかも分からない。ただ、すべきことがはっきりとしているだけ。そんな状態なのに、身を固めてしまうのが怖い」

「しかし、何も分からないところから始めるというのは苦しいぞ。



現に、私がそうだった」

「分かっていきます。苦しいのも、貴方の誘いを蹴ることがどんなに愚かなことなのかも。でも、そういう風に樂をしたら、いつか苦しいのが帰って来るんじゃないかって。それに、貴方と同んなじ事をしないで貴方の仲間になったとしても、そんな人間は、戦力になりそうにないですからね？」

男の少し先で、ユーユウは足をとめて振り返る。

まだ慣れていない足取りで、向けた顔には笑みがあつた。きつと、これは嘘。嘘の笑顔なのだろう。

だけど、本物の表情じゃなかったにしても、この子は一週間とたらずに笑うことが出来る。

それで、自分の目が間違いではない事を確信することができた。もちろん、何もしていない今では力になりようがないのだが。

「……ですから、断るというよりは、まだ決めかねるという方が正しいのかもしれないですね」

こっちを見るのをやめて、また歩き始める。が、男は足を動かさずに、ジッとユーユウの背中を見つめる。

止まっていることにユーユウも気づいていたが、振り返ったり、なんで歩かないのかと尋ねるようなことはしない。ただ、歩みを遅める辺り、気にかけてはいるようだ。

男は少し考えるような素振りをしてから、ユーユウの後について

いく。

「そう言えば、貴方は、僕のことを知っていたようですが……僕は、貴方の名前すら知らない。なんて言うんです？」

「サ……いや……、エバーグリーン。エバーグとも呼んでくれ」

「……………」

どうして本当の名前を覚えてくれないんだろう？ 教えたらずいことでもあるのか？ 分からない。分からないが、一度名乗ってもらった。

どういう意味で偽名を使うのか。気にはなるが、敵意は感じないのだから、敵ではないのだから、本当の名前を聞かなかったところで、こちらに不利になるようなことはないだろう。

「嘘をつくのは感心しませんよ。エバーグさん？」

「ついてるように思うか？」

「そうでしょうか？ まさか、いま思いついたように言っというて、本物の名前なんだ、なんて言えませんかね」

「そうだな。ま、いずれ、だ。ユーユウ君に教える時期がくるだろう」

「その間に、僕は死んでしまつかもしれませんよ」

「私は、そうは思わないな。君は頭が良い。運は悪そうだがね。生きることは出来るはずだ」

何時の間にか、ユーユウたちは公園のちょうど真ん中に位置する場所に来ていた。

そこまで広い公園ではないのだけれど、ユーユウの足には痛みがある。雨は激しくなっていないが、降り続いていて、二人を徐々に濡らしていく。

「雨が降っているとはいえ、今日は人の気配がなさすぎますね」

結構な時間ここにいて、ちょっとは歩いたはずなのに、一人と会っただけ。他には誰もいない。少し不気味なくらいだ。

けれども、こういう状況でなければ、二人は話すことは出来なかった。

きっと、この人は、もう少し早くにこの話をもって来るつもりだったのだろう。しかし、なかなか一人になれなかったが為に、会うことが出来なかった。

多分、あの場にカミツレたちをよこしたのもそうなのだろう。助けに来るのは予想の通りだった。が、家にとまるまでは考えられなかったに違いない。

（そっか。今思えば、今日学校に行ったのって、危なかったんだな……）

本当はそれまでに教えるつもりだったのだろう。  
なるほど、そう考えれば、運とかはともかく、巡り合わせはよくないのかもしれない。

「ユーユウ君。私は、今日は退散させてもらおうよ?」

いいながら、近くでモンスターボールを展開させる。

ユーユウは見たことなかったが、その姿から、エスパータイプのポケモンらしいというのは想像出来た。

「エバークさん。さっきのは、返事は、保留ってことにはならないですかね」

「……分かった。では、機を改めて、伺うとしよう」

「はい」

ポケモンにテレポートを命じる。

それで、身体全部が輝き、一秒もたたずに公園にはユーユウしかいなくなってしまった。

同時に、弱かった雨足が強くなり始めていく。さっきまでは感じられなかった雨が降っているというのを意識する。

けど、まあ、たまにはこういうのも良いだろう。ヴァルも、気にしてはいるようだが嫌がっている様子はない。

「はあ」

ため息。

状況は待つてくれず、常に流れていく。ユーユウはそれに取り残された人間だ。

と、雨もあいまってそんな気分浸っていたところで、制服のポケットがブルブルしているのに気付いた。それは数秒して止んだことから、電話ではなくてメールが届いたということになる。

雨に濡れるのは嫌だ。大事な文面が書かれているわけでもない。今見る必要はきつと無いだろう。

けれども、いつもそうしているから習慣で携帯を取り出し、画面を眺めてしまう。

思ったとおり、メールが来ていたようだが、連絡先リストに登録されていないものらしく、アドレスがそのまま表示されている。

「……なんだ？」

不思議に思いながらもユーユウはメールを開封する。そこに表示されている文面を見て、神経が尖った。

いま、どこにいますとおもっ？  
きみのすぐちかくにいるんだよ

恐らくは、急いで文章を打ち込んだのだろう。うまいこと変換されていない。しかし、近くにいますというのはどうということなんだ？

電話をポケットにしまって、空いた手をカバンに突っ込んで、周

困の様子を伺う。特に変わったところは見られないが、強くなってきた雨によって、こちら側に向かってくる殺気のようなものを感じにくくなっている状態だ。

感覚はあてにならない。

しかも風まで吹いてきたから、これでは見つけることなんて到底出来ない。

「……飛び出したっ!？」

一瞬だった。注視していた植え込みの向こう側が輝きに包まれ、黒い影が飛び出す。

高く舞い上がったそれは、ある地点に到達すると、いったん停止した。そこに雷が走り、それがなんなのかを知覚する。

ワシ。巨大な鷲だった。

ところどころに赤と青の混ざった黒い巨体に立派な白い鳥冠があった。

ウォーグルという名前は、ユーユウは知らない。ただ、強そうな相手。そういうイメージだ。そして、そのイメージは当たっている。

一秒にもみたない空中静止の後に、ウォーグルはユーユウ目掛けて急降下をかける。雨の影響などまるで無いような突進。

「ヴァルっ!」

一気に戦闘モードへと変化していく。

ユーユウはヴァルをカバンから出して、地面に立たせる。  
それだけでヴァルはユーユウの意図を分かったようで、自身の尾を急降下し突っ込んでくるウォーグルへと向けた。

正確に狙いを定め、細い針をいくつもウォーグルに向け飛ばす。  
どくばりの連射だ。体力を奪ったり、麻痺させたり、眠りにつかせたり……様々な効果がどくばりにはあるが、この時ヴァルが放ったのは麻痺させるもの。

しかし、狙いは正確だったのだけれども、ウォーグルの凄まじい機動性に翻弄され、命中弾は得られない。

「撃ち続けるっ！ こっちに寄せ付けるな！」

だが、ウォーグルが回避運動をとったが為に、こちらへは突っ込んで来られない。とりあえずの突っ込みは、阻止することが出来た。

弾幕に突っ込むつもりはないのか、ウォーグルは一気に高度をあげる。ヴァルのどくばりは、粒が大きく、勢いの強い雨の為に、近づいてくる対象にしか効果を発揮していない状態だ。

だから、距離をとってしまえば好きにわざの準備をすることが出来た。

大きく、速く、一度、二度、三度羽ばたく。もちろん、ただそうしたわけではない。素早くそれらの動作を行うことで、ウォーグルは真空波を生み出し、それをユーユウへと飛ばしていた。

「なっ……」

気づいたのは、最初の一撃によってもたらされた空気を裂く音がユーウの耳に届いた時だ。

その時にはもう既に、エアスラッシュの第一撃目はユーウの足元に炸裂していた。地面がえぐれ、圧縮された風が拡散していくのを感じる。

たまらず、ユーウはヴァルを引っ張りあげて走る。エアスラッシュの射程から逃れる必要があった。

だがウォーグルはそれが狙いだっただけ。対空砲火が出来るヴァルを潰す。そうすれば、またユーウに向けて突っ込むことが出来る。

所詮エアスラッシュは本命じゃない。強靱な体躯を最大限活かしての強力な一撃が、ウォーグルの特徴だ。

あらかじめ予想していたかのように、ユーウの走るルートを遮るかの様に真空の刃が炸裂し、逃げることは出来ない。

その合間にもウォーグルは突撃をかけてきていて、彼我の距離は急速に縮まる。ユーウは舌打ちをし、こうなってしまっただけ迎撃するしかないと腹をくくった。

だが、牽制され、逃げたあとで再度のどくばりでは、一度の迎撃しか出来ないだろう。しかし、それでいい。ヴァルをおさえていた手を真っ直ぐにのばし、ウォーグルの進行方向に向ける。



カバンから飛び出すのと、どくばりを放つのはほぼ同じだ。そして、それは正確にユーユウの指示の通りにウォーグルに向かっていく。だがしかし、当たることはない。機動性でかわされてしまう。

そう。かわされた。

避けられたのだけでも、

「よしっ……！」

ウォーグルの真横には、モンスターボールがあった。いままさに展開さ

れようとしている。

（狙い通りの動きっ！）

ユーユウが勝利を確信し、ボールの中からケイトがあらわれる。いきなりだったが、やることははつきりしている。もう戦闘体制をとれているのも、その為だ。

身体をしなせ長い尾を使ってボールから出た勢いそのままに、ウォーグルを一気に叩きつける。突っ込みをかけていたウォーグルはよけることが出来ない。

「っ……………！？」

絶叫をあげる。

勢いがさらに強くなってしまったウォーグルは、もう自身のコン

トロールは出来ない。全力で突っ込んでくる相手を叩きのめすには、そう、ちよつとだけ、ちよつとだけの力でもいい。それだけで、ウォーグルはもう勝手に地面に激突してくれるだろう。

だが、それだけでは終わらなそうだ。  
追撃。

ウォーグルが落ちてくるコースにヴァルが陣取っていた。強力な力を秘めた尾を、向かってくる敵に向けている。

「……とどめだ」

ユーユウの眩きは、ヴァルには届いていない。けれども、どうするべきかはハッキリしている。どくばりじゃない。

鋭い尾に力が集まり、紫色に鈍く輝く。ウォーグルの勢いと、ヴァルの一撃が組み合わせることによって、ようやく命を奪うことが出来る。

勝った。

もう、確定的だった。

「やめてユーユウ君っ！」

「え……………!?!」

ふわり、と背中に感じる柔らかさ。それは、女性特有のものなの

だと、ユーユウは最近勉強することが出来ていた。

声には聞き覚えがある。

ここ二日あたりで一番聞いた声だろう。それに動揺して、戦闘への集中が一気に削がれた。

「フウロ、さん……？」

雨の中でも、彼女の身体から溢れてくる匂いがユーユウの鼻をつく。相変わらず、いい香りだ。

トレーナーの集中がきれてしまったことによって、どくづきをしたようとしていたヴァルもそれをやめてしまった。どっちにしろウォーグルは地面に叩きつけられることになってしまったが、とどめの一撃は入らなかったで死ぬことはないだろう。

「じゃあ、メールを送ったのって、フウロさんなのか……？」

「ゴメンなさい。ユーユウ君。私、何でもするから……これ以上、イーグルを虐めないで……」

「いや、ただ、僕は……自分の命を守りたかっただけで……」

「ホント？」

「うん」

こういう風に聞かれる。

ということは、フウロからは、かなり圧倒的な戦い運びに見えたということなのだろうが、そんなのはユーユウには分からない。

やられないように一生懸命だった。生き延びる為に必死だった。だから初めての戦いで、自分が死なないように、相手を殺す指示をしたのだ。

「うえっ……うえええん」

「な、なんで泣いてんですかつ」

「ユーユウ君のいじめっ子……」

「はあっ?」

無茶苦茶だ。

半ば呆れ顔でユーユウはフウロと向き合う。せつかく背中から回されていた腕を外したというのに、どうやらそれは無駄だったらしく、向き合ってからもう一度抱きつかれた。

あからさまにため息をついても離れてはくれないし、動こうともしてくれない。ついでに言々と傘も持っていないから濡れ放題だ。

とりあえずケイトをボールの中に戻し、ヴァルもバックへと勢いよくジャンプして戻る。

「ほら、フウロさんも。ウォーグルの傷を癒してやらにやらないでしょ」

「……うん」

最後に制服の胸元でおもいきり鼻をかんだから、フウロはウォーグルの元へと向かって行った。

何度目かのため息をつかざるを得ない。どっちみち洗わなくてはならないのだけど。

また、家にまでついてくる気なんだろうか。そうなってくると、また色んなことを聞かれることになるのだろう。

けれども、今回はちよつと違っていて、こっちからも、彼女に問うことがいくつがあるというところがある。

そう考えれば、このままフウロと一緒に帰るのも、悪いことじゃないのかもしれない。

## 7 ふつとばしガールじゃない（前書き）

そろそろあらすじでも書くかな

## 7・ぶつとばしガールじゃない

ひとまず、ウォーグルはなんとかあった。フウロがすごいキズぐすりを飲ませたお陰だ。いまはボールのなかでゆっくりと休んでいる。

あのと、ユーウとフウロはびしょ濡れになりながら家へと戻ってきていた。スピアのカギはいまカミツレが持っているらしい。置いて行って正解だった。

先にフウロにシャワーを浴びてもらい、いまはユーウの番だ。ノズルの先から出てくる暖かさに、思わずホッと息を吐く。

同時に、さっきの戦いの熱も、ゆっくりと冷えていくのを感じていた。

（君のすぐ近くにいるんだよ、か）

あのととき。

あのととき、フウロが送ってきた文面。

アドレスの出どころなどはどうでもよかった。大体の想像はつく。しかし、近くにいたということは会話を聞かれていたということで、当然このあと警戒されるということになるだろう。

学校の校長がプラズマ団。

ということは、必然的に、トレーナーズスクールの校長を任命す

る権利をもつポケモンリーグにもプラズマ団の人間が紛れているということになるのか？

鵜呑みにするならば、そうなるだろう。間違いない。それは、フウロから確認できるはずだ。けれども、言われたこと全部が本当なのかどうか。

そもそも、なんで母親がプラズマ団でなくちゃならないんだ？

分らない。混乱する。なにが正しくて、なにが正しくないのか。混乱したままに、風呂場の壁に拳を打ちつけた。

大きな音が反響する。

「クソツタレっ。誰を信じて、誰と戦えばいい……？」

混乱から、こんな言葉が出る。流石に、シャワーの暖かさではこれは誤魔化せなかった。と、

「ゆ、ユーユウ君どうしたの！？」

「……………！？」

開かれた扉。フウロの視線の先には当然素っ裸でシャワーを浴びているユーユウがいる。

何事かとユーユウも開いた方を見てしまうから、二人の視線はもちろんぶつかる。

そうやって目を合わせてからの静寂。シャワーノズルからのお湯が、風呂場の床に当たる音だけが耳に届く。だが、数秒が経過する



と、その様子は少し変わってきた。

ユーユウは変わらず固まったままだが、フウロの方は違う。その視線が徐々に下がってきて、やがてある一点で止まった。

最初、ユーユウは彼女がなんでそうしたのか全く分からなかった。が、時間を置いて、混乱のなかから抜け出した時に、どこを見ているのか気づくことができた。

「ちょ、ちょちょ、ちょっと！ どこ見てるんですか！」

「……………」

「ふ、フウロさん？」

名前を呼んでみる。

が、フウロは答えてくれないし、視線をそらそうともししてくれない。ただ、じーっとユーユウのあれを眺めている。

もちろん、そんなものユーユウに耐えられるわけも無く、

「フウロさん、出てくださいってば！」

「ええー？」

「なんで不満そうにしてんですかつ」

無理やりにフウロを風呂場から追いやると、ドアを閉じる。向こう側からは抗議の声があがったが、ユーユウはそれを無視した。

だいたい、なんで抗議なんて……。

風呂と脱衣所とを隔てているドアにはカギがついておらず、もう一度侵入しようと思えば簡単に出来る。

けれど、再びフウロが入ってくるような気配は感じられない。思わず息を吐いた。

（いったい、なに考えてんだか……）

いや、もちろん、逆のパターンならば自分だってそうすることをユーユウだって自覚している。しかし、やられる側からすればこんなのは堪ったものではない。

少しばかり興奮した気分でいるのを自覚しながら、ユーユウはタオルを濡らし、ボディークリームを馴染ませ身体を洗っていく。

そうしている途中に、さっきまで、フウロに乱入されるまでであった混乱した気分が少しだけ晴れているのを感じた。

（……いや。それは、ないか）

ユーユウの気分を少しでも紛らわせる為にわざと乱入してきた。

一瞬そんなことを思ってみるが、さっきの様子から見てもそんな気持ちにはまるで無かったというのは明らかだ。

壁に響いた音にびっくりして、心配になって様子を見に来た。それは分かる。どうやら、フウロはそういう人らしいというのはユー

ユウも理解している。

だが、あの時に大事なヤツをじっと見られたことについてはさっぱりだ。まったく分からない。

普通は、ああいうのは見たくないものなんじゃないのか？

「はあ、この後、僕のアレを見た女と話し合いをせにやらんのか……」

そう考えてしまうと気分は落ち込んでしまうのだが、これは軽いものだ。別の種類だけでも。

ここ何日かで経験したことに比べれば全然どうってことない。別の種類だけでも。

つまりは、どうあってもため息が出てしまう。なら、もうユーユウとしては、出来るだけ意識しないようにして話すしかない。

仕上げてシャワーで念入りに洗い流して、ユーユウはタオルをもって風呂場を出ようとする。向こうに誰もいないことを確認してから、ようやく脱衣所へと出ることができた。

シャツとパンツ、その上からスウェットを着込んで部屋へと戻る。

「……………」

フウロはソファで横になっていた。とはいっても、眠っている

わけではなく、その視線はテレビに集中している。しているが、テレビの画面は真っ暗。電源は切られたままだ。

（やっぱり、さっきのこと気にしてるのかな？）

直接尋ねるわけにもいかず、ユーユウも部屋に広がっていく静かな雰囲気身を従わせる。

ただ、髪を乾かさないうけにはいかなないので、ドライヤーを手にとってスイッチを入れた。

静寂。窓の外から聞こえる雨音が支配的だった部屋のなかに、ドライヤーの音が充満していく。

が、それでユーユウやフウロのやることが変わるわけでもない。

ユーユウは髪を乾かしているし、フウロはソファに寝っ転がったまま、一点を見つめたままだ。時々気になって彼女の様子を伺ってみるも、こちらを気にするようなこともなく、視線は動かない。

そんな時間が二分ほど続く。髪を乾かし終えて、ユーユウはドライヤーをしまった。そこまではいい。良かったのだが、

（これは、どうしたもんか……）

足のこともあるからユーユウは座らなければならないのだけれど、どこに腰を落ち着かせればいいのか、それに悩んでいた。

向かいのソファーに座る度胸はない。だが、そこに座らないとなると、他に座れるのはちょっと離れたテーブルのところにあるものになってしまふ。そこに座るのは流石に気まずい。

で、突っ立ってしまったままだともっと気まずい。しかし、どうしたもんか。

「ユーユウ君……？ 座らないの……？」

「え。あ、はい。座りますよ……？」

フウ口の声色は、ユーユウが思っていたよりもよっぽど落ち着いていた。その声に安心して、ユーユウはフウ口の対面に腰を落ち着かせることとなった。

座ってから、もう一度ホッと息を吐く。これは安心のあらわれだ。

これで、テレビでもつけてしまえば、もしこのあと無言のままでも、あるいは公園のことを問い詰められても、そこから流れてくる音が、例えばミニボリウムだったとしてもユーユウを守ってくれるだろう。

「違うでしょ……？」

「え……？」

さらに低くなったフウ口の声色。

そこから発される否定の意思に、ユーユウは焦り冷や汗を流す。うん。これはもしかしたらシャワーを浴びなおさなくちゃならない

のかもしれない。

「ユーユウ君は、ここに座らなくちゃ……」

そう言って、フウロは自身が寝転がっているソファをポンポンと軽く二度叩いた。

「え？」

ユーユウからすれば、意味が分からない。

あきらかに冷静そうな声をしているのに普通じゃない事を言う。どう見たって、さつき風呂場にぶっ飛んで来た時よりかは落ち着いているように見える。

が、それはユーユウの見当違いだった。

よく見てみると、頬は紅潮し息遣いもわずかに荒い。何より、視線はテレビに向けられたままだがまったく焦点があっていない状態。これは、確かに普通じゃないのかもしれない。ユーユウもしばらくしてようやく気づいた。

「で、でも、フウロさんが座ってるじゃないですか」「座って」

これは、もう、ユーユウはフウロの言いなりになるしかないだろう。

怒っている。しかも、結構な程度で。

理不尽な、と思わないでもないが、思い返してみれば、色々なことをやっている。

なにも言わないで朝出て行ったり、ウォーグルに怪我を追わせたり、素っ裸を見せたり、後は、知っていれば、学校をやめたり。それに、あの男……エバークと名乗った男とのことも。

「ふう……分かりましたよ」

だから、観念してユーユはフウロが寝転んでいるソファの空いたスペースに座る。が、

「そうじゃなくて……！」

「ちょ、ちよつと!？」

抗議する前に、ユーユはフウロに抱き込まれていた。だから、二人して一つのソファに抱き合いながら寝ていることになる。

振りほどくのは簡単なのだが、それはユーユの足の踏ん張りが聞いたらの話だ。どうやら、思った以上に両足に無理をさせているらしい。

「ふ、フウロさん……?」

「ふふ、これが狙いだっただよ? ポケモントレーナーなら、相手の考えてることをキチンと読まなくっちゃいけませんよ?」

まるで最初からご機嫌だったように、フウロはユーユウの腕のなかで笑顔を見せる。

しかし、引き込まれた側からすれば冗談じゃない体制だ。女性独特の柔らかさが、身体全部を通して伝わってくる。

抱き合ったままうまくいって体を動かされてしまい、何時の間にかユーユウが下になってフウロを受け止める格好になった。もう本当に逃げられない。

「なにやってんですかつ」

「なにつて？」

「こういうのは、普通、恋人同士でやるもんでしょ！」

「それをユーユウ君とやるの、おかしい？」

はあ？ なに言ってたんだコイツ？

と、瞬間的に浮かんだ言葉が口から漏れそうになって、精一杯飲み込む。まずい、そんなことを言っでは。怒らせたのは、こっちなんだから。

「……………」

一方フウロの方と言うと、風呂場を追い出されてしまってから、仕返しにこういうことをしようと考えていたことが全部できてしまっただけ、それに驚いていた。



そして、最初は冗談でやるつもりだったのに、意外に本気になっている自分にも。

いや、ユーユウのことはどうやら本気らしいというのは分かっていた。それは、今朝……と言っても9時を超えていたが、その時間に起きて、彼を探してそしていなかった時に心底心配したときにもう気づいていた。自分が抱き始めた感情。

けれども、彼になんでこういうことをしたんだと聞かれた時に答えようとした理由も、ほとんどまるつきり本気なこと。これは気がつかなかった。

いま、ギョツしてもらえて、ようやく気づくことができたのだろう。

（ああ、困らせちゃってるなあ）

少しだけ目を上に向けると、困惑しきったユーユウの表情。だけど、こういう顔はあまり見せたがらない。ホントは、もっと苦しいことがあるのに。

分かち合えれば、と思うけれど、きつと、いや、絶対にユーユウはそんなことしない。だから、そうだ。多少強引でも、こういうことをやって、別の方向の悩みや楽しいことを与えてあげて、忘れさせてあげるしかないんだ。そのフウロの考えは、間違いではない。

確かに、ユーユウの気はフウロの思惑通りに別の方へと向いている。

困らせるのはちょっと悪い気がしていたのだけれども、実際に困

っているユーユウの顔を見ると、そんな気は無くなっていた。

「ねえ、ユーユウ君。公園で話してた人は、ユーユウ君の知り合いだったりするの？」

もう無理だというくらいに身を寄せて、普通の状態ならばなかなか聞きにくいことをきいてみる。こういう言葉がすんなり出てくるということは、なるほど、つまりは、自分も困っているのだ。ユーユウと違うのは、その末に、こういう行動が出てきて、それを楽しんでいるところだろう。

「いや、特に、そういうんでは、無いんだけど」

「焦ってる。可愛い」

「っ……！」

鼻っ柱をつついてやったら、それでユーユウは顔を真っ赤にしました。そう、お返しだ。

ただ、うつむいたところにフウロの顔があるので逃げ道がない。そこは違うところだ。

そうだ。ポケモンを、お気に入りのなかの一体を倒されそうになったのもある。その分ぐらいは、もっといじらないと気が済まない。

「さあ、ユーユウ君。こうやって抱き合って、その次は？」

「え、そ、それは、ですね……」

ユーユウは縮こまってしまふ。

そしてフウロは、本当に普通じゃない。仕返しとか、そんなのはもう自分の行動を思い切り出来るようにする為のものでしかない。

計画通りじゃない。本来ならば、フウロだってこんなに段階をすっ飛ばすつもりじゃなかった。なのにどうしてか、いま二人はこうしてソファアーの上で抱き合って、フウロの方は顔を摺り寄せもしている。

「ユーユウ君が話していた人は、サカキって言ってね？ 国際的なテロ集団のリーダーなんだよ？」

「……？ でもあの人、大事な人を殺されたって。僕と同じなんだって。そう言っていました」

「それでも、危険な人に変わりはないよ。……何かされなかった？」

「……いえ。何も」

若干、ユーユウの声のトーンが落ちる。それは仕方が無いことだ。彼には何かあるだろう。そう、はじめから分かっていたことだ。

そして、事実らしいことが告げられたことによって、蒸気していた頭は急速に冷却されていく。まさに冷却剤だ。

「フウロさんがここにいてってことは、フウロさん達の方は、うまくいったんですね」

「上手くいった……？」

「聞きましたよ。うちの校長を、捕まえにいったんでしょ」

「……………」

フウロは答えない。

ということは、ユーユウの言っていることが本当にあったことだということだ。そして、誰から聞いたのか尋ねないということは、彼女のなかで誰が教えたかの想像がついたということ。

まあ、この場合、一人しか頭に浮かんでこないわけだが。

「それが上手くいって、で、ロイズに聞くなり名簿を見るなりして僕があそこに在籍してるのを知って、探しに来た。そんなところでしよう?」

「ちょっと違うかな」

「ちよっと?」

「うん。教えてくれたのは校長。逮捕したって時に言ったの、私よりももっと危険なヤツがいるって」

「それが僕、だ……?」

「そんなわけないって分かってたけど、あんまりにも必死に言うものだから、ね。だから、本当かどうかイーグル……私のウォーグルをぶつけてみたんだけど……」

これは、もしかしたら、あのときやられていた方が良かったんじ

やなかるうか？ そんなに暑くも無いのに、いやな汗が背中をしたたり、フウロの身体がもつ柔らかさを強く実感し直す。

緊張しているのに、こういうことが分かるあたり、もしかしたら無意識のうちにどうすればいいのかをわかっているということなのかもしれないが、それが頭に出てこないから、結局どうすることもできない。

そして、フウロの詰問してくる瞳はだいぶキツイ。未だ抱き合ったまま、寝転がったままで、至近距離で見ってくる。適当なゴマカシは通用しないだろう。

どうすればいい？ 平常ではない感覚で、物事を考える。が、上手いこと考えることなんかできない。

その加熱した頭が、それでも必死に考えて、どうすればいいのか道の先を照らした。もちろん、普通じゃ無いことだ。

「ユーユウ君？」

名前を呼ばれる。

ああ、もう、逃げることなんてできない状況だ。だから、冷静に考えればマトモな神経をした人間がやることじゃ無いことにも手のばすしかない。

そして、それをつかんだ瞬間に、ユーユウは実行した。

「フウロさんっ！」

「えっ？」

突然のユーユウの行動に、フウ口はまったく反応できなかった。そして、何をされたのかしっかりと理解することも。

ただ、ソファア上での二人の上下が入れかわって、今度はユーユウがフウ口の腰とお腹の中間あたりに馬乗りになっているのが分かった。

「ゆ、ユーユウ君……！？」

抵抗力はまるで無いと言ってよかった。上のユーユウから来る圧迫感心地よく、つまりは、彼がこっちのことを思って、体重がからないようにしてくれているのが分かる。どういう状況かを理解した上でも、まるでユーユウをどかさうという意思はうまれない。

だけどもあまりにも突然だったので、言葉の上では、一応驚いたような声をしているが、中はそんなことはなく。次にされるであろう行動を受け入れる準備を整えていた。

そもそも、こうなるのは、自分が望んでいたことでは無かったか？ そう思い出した時、一度冷えていたフウ口の体温は、もう一度上昇を始める。

顔が真っ赤になって、温度が上がってしまつて、脳内回路を焼き切ってしまうぐらいの勢いだ。

そしてフウロの中であがっている温度が、ユーユウへと伝播していく。それは素早く、一気に熱を生み出した。

「ユーユウ君……」

熱っぽい声。それは、ユーユウのみならずフウロをも更におかしくさせる。そして、その熱を放出させるかのように、何もつかまなくなってしまうていた彼女の腕が、彼の頭へとまわされた。

「……………」

同じように抵抗は無い。

というよりも、ユーユウだってフウロと同じくおかしくなってしまうているのだ。抵抗するという考え自体が出てこない。

だから、ゆっくりと身体をフウロに重ね合わせ、その片腕は彼女の頭を包みこみ、もう片方は細めの肩を抱いた。そして、ためらいを見せながらもユーユウは自身の唇を彼女のそれに近づけてゆく。

フウロの柔らかさも、いまはユーユウには実感できない。唇と唇、それに全神経を注いでいた。それは、フウロも同じ。どちらとも、これを止めることも出来なければ止めるつもりもなかった。

外部からの影響が無ければ。

「ユーユウ……と、フウロさん……?」

信じられない。

そんな意味が込められた声が、静かすぎる室内に木霊する。いや、そういう風に聞こえてくるわけではないのだけど、ユーユウからすればそんな感じた。

不意に届くフウロ以外の声にユーユウは我にかえり今まで自分がしていた行動を冷静な目で分析出来るようになった。けれども最初にやったのは分析することじゃない。

耳に届いた声が誰のものなのか、過去のデータベースを振り返ることだ。

そして、それは昨日散々聞いたものだということに気づくのは一瞬だ。気づくと同時に顔を離し、手をどかし、飛び跳ねるようにソファから起き上がる。そうやってから玄関側のドアへと目をやった。声と顔がすぐさま一致する。

「と、トウコ？」

「……………」

トウコは答えない。

ポニーテールはそのままだが、肩が震え、何度も拳を握り直しているあたり、穏やかに話すことはできなそうだ。

ユーユウがフウロに覆いかぶさっていた。トウコからだってそれが見えたらう。どう考えたって弁解出来る状況じゃない。



第一、二人がそれぞれの自分の意思にのっとして行動した為にあなつたのだ。弁解もなにもない。

しかしながら、経験もなにもないユーユウにはとんでもない気恥ずかしさがあつたために、言い訳をしてしまう。偶然こうなつただと言おうとしてしまう。

「あ、そのつ、これは、その、ちが……そう、違うんだ。だから、これはっ」

ユーユウからすれば、上手いこと言いくるめているつもりだったが、しかし、実際には喋ろうと思ったワードが頭に浮かんだ瞬間に闇の中にとらわれ消えていく。しかも、その言葉はまったく適切じゃない。

だから、文になっていない未完成のものが口を突いて出て行くのだけれど、それはトウコの怒りを増進するだけ。火に油を注ぐだけだった。ついでに言えば、ユーユウは気づいていなかったが、フウ口はまだ熱から開放されていない。

「ナニヲシテルノカナ？」

「い、いやさ、だから……………さ」

出てこない。

トウコ怒りの形相を前に、ユーユウにはやっぱり上手いこと言いくるめるのは出来なかった。

そもそも、なぜそんなに怒っているんだ？

その一言を出せばいいだけ。ただ告げるだけでいいのに思いついてもいない。だから、トウコにされるがままだ。

助走し勢いをつけこちらに走ってくる。

「このっ、エロ変態男ーっ！！」

言葉と一緒に衝撃が走りユーユウはぶっ飛ばされる。体重の乗った飛び蹴りに抗うことが出来ない。

床に落ち、お腹の空気が一気に口から抜けていく時、一緒にトウコに対して言葉を返した。

「け、怪我人にすることじゃないでしょ！」

「う、うっさい！ あんたがいかかわしいことやってんのが、いけないでしょ！」

二人がそんなことを言い合う様子を見て、やっとフウロは熱を冷ましきっていた。とはいっても、その視線は床に落ち大の字になっているユーユウに集中する。

確かに怪我人で、普通ならトウコがやったことに対して怒らなくてはならないのだけれど、フウロは微笑むばかりだ。

大空のぶつとびガール。

最近知ったのだが、自分は他人からはこう呼ばれているらしい。パイロットもやっているからだろうか？ フウロにはその二つ名の由来が分らない。いや、嫌なわけではないのだけれど。

ただ、もしも自分のとっている行動によってそういう名前がついたのならば、それは間違いなんじゃないだろうか？

だって、今、この行動によってぶっ飛んだのは自分ではなくユーウなのだから。ぶっとびガールというのはちよっと相応しくない。

（どっちかというと、ぶっとばしガールじゃない）

そんな下らないことを考えてみるが、こうなったそもそもの原因を作ったのが自分だということをフウロは完全に忘れてしまっていた。

だから、そういう意味では、ぶっとびガールというのは全く間違っ  
つてはいなかった。

## 8・僕ほどじゃないよな（前書き）

作者が一番苦手なのは、キャラが着ている服装がどんなのかを書くことです。

なんというか、うまいこと言葉が浮かばない。

なんで、割り切って服装についての表現はしてません。皆さんの頭の中で、色んなのを着せてやってください。

## 8・僕ほどじゃないよな

時刻は12時30分をまわったぐらい。つまりはお昼時だ。

今家にいるのはユーユウとフウロ、トウコの三人で、カミツレはしばらくは戻ってこないらしい。だから三人でお昼をとることになる。

ユーユウとトウコはまったく料理が出来ないので、フウロがキッチンに入ることになった。エプロンをして、腕まくりしている。着込んでいるエプロンは、長い間母親が使っていたもので相当に年季がはいっているが、特には気にならなかった。ユーユウに許可をもらえなし、使うこと自体になんの問題もない。

ただ、本音を言えば、カミツレがここにいて、彼女に料理をしてもらい、自分はユーユウとくっついていたかった。

フウロは料理ができるが、得意というわけではない。ただ、とりあえず味に問題がない物を提供できる。それぐらいのレベルだ。

（トウコちゃんが、料理、出来ればなあ……）

嘆息とともに、恨めしい目で同じくソファに腰をおろし対面しているトウコを見る。見られている本人は、ユーユウとお喋りに夢中らしく、こちらの視線に気づく事はない。

……若干、本当に極僅かなのだが、いつもより楽しそうに見える。

一瞬、まさか、と思わないでもないが、それは馬鹿な考えなんだろう。

ものすごい顔をしながら引つ叩いたり飛び蹴りをやったりしている人間が、実はされている人を好きだなんていうのは、どうにもムリがある解釈だ。フウロには、そんなのは全然理解出来ない。

「あんた、ウォーグルに勝ったそうじゃない」

「はあ？ 誰だよ。そんなこと言ったのは」

「やられた本人から聞いたんだけど？」

やられた本人。

言い方は悪いが、フウロからしてみれば確かにやられたわけだから間違いじゃない。

間違いじゃないが、ちょっとムツとしてしまうのはしょうがなかった。

それから、ユーユウの目。余計なことを言わないで欲しいという意味が読み取れたが、事実を報告したまでだ。

「はあ……………フウロさんがお前にどういったかは知らんがさ、僕は勝っちゃあいないよ」

とりあえず、お昼なんだから簡単なものでいい。レポートリーは多くないが、昨日買って来たパスタがある。ついでにレトルトのソースも。

これぐらい簡単なものならば、よそ見をしようと聞き耳を立てようと問題ない。

「でも、ユーユウ君、イーグルにトドメを刺そうとしてたもん」

少しふてくされたようにしながらフウロも会話に参加する。鍋に水をいれながら、ジツと見て、入れ終わると料理をいったん中断し、ユーユウが座っているソファアのすぐ後ろまできてしまった。

「ほら、フウロさんもこう言ってる」

問い詰めるような目と、なんだか面白くなさそうな目。その二つの目を向けられて、ユーユウも観念したかのように肩をすくめる。

一度ため息をついて、それからあの時の状況について話し始めた。

「あれは、な。僕らにとっちゃ有利すぎる状況だったんだよ」

「有利すぎる?」

「雨が降ってたから、こっちの方が有利だと思ったんだけど……」

今度は疑問の目が二つだ。

詳細を知らないトウコはともかく、フウロまでこういう目を向けてくるというのは、ユーユウからすればちょっと信じられない。

けれども、強すぎるから見えないということもあるんだろう。今回はまさにそれだ。

「確かに、雨が降っていたからヴァルのどくばりの射程はだいぶ短くなってましたよ。ケイトは遠距離攻撃出来るようなワザを持っていないし、そういう点では不利でしたね」

「だよね？ だから、驚かすぐらいなら簡単に出来ると思ったんだけど……」

「そうです」

「……？」

相変わらず、フウコとトウコは頭に疑問符を浮かべたままだ。そんな二人の様子を見て、やっぱり、この二人は強すぎるんだろうなとユーユウは確信する。特にトウコの方はまるでピンと来ていないみたいだ。

「ということは、まさか、トウコはただの一度も負けたことがないってことか？」

（いや、まさか、な。いくらなんでも、負けたことがないってことは無いはずだ。一度くらいは負けて、賞金をとられてるはずだ）

「そうでないとおかしい。」

「負けたことが無い人間なんていないはずだ。漫画でも、アニメでも、小説でも、つまりは、作者が自由に出来るところでの主人公でも一度は負けたことがあるはずだ。」

「もし負けたことがないというなら、それこそ神様だ。人間ではないもののすることだ。」



「……僕の喋ってることがいまいち分らないってことは、二人は、本当に強いんですね」

「はあ？」

なにを言ってるんだコイツは、と、トウコは頭を傾ける。嫌味とか、妬みとか、皮肉とか。ユーユウの声にまったくそういうものを感じなかったので、きつと本心からそう言っているのだろうけど……、

「あのね、馬鹿にするのはいいから、なんでそうなのかとつと教えてなさいよ」

ああ、どうしてこういう時に自分は素直に気持ちを吐露出来ないんだろう。トウコは自分の口を呪いにくくなった。今だって、本当はああいう風に言われて、嫌な気はしなかったのに。

ああ、もしかして今、ユーユウはため息をついたんじゃないだろうか。あああ、ちょっと呆れたような顔も見える。

そこまでやってから、ユーユウは一度目を閉じて、それから開く。それにどんな意味があるのかトウコには分からなかったが、これは気持ちをちよつとだけ変える時にたいいていユーユウがやることだった。

「……意識の違い、ってやつだな」  
「意識？」

「いや、油断大敵、なのかもしれないけどな」

ふむ。

まあ、喋っていることの意味が理解出来ないわけじゃない。油断したらやられる。それは言われるまでもなくフウロもトウコも分かっていることである。

「僕は、フウロさんやトウコが、どういう状況でポケモントレーナーになったかは知らないけど……」

そこで一度、ためらうような顔。あんまり言いたくなさそうな表情になる。

本当なら、ここで止めるべきなんだろう。もういいよ、と。言いたく無いことなら無理に喋らないでもいいと。

だけど、トウコにだって立場がある。

国際刑事警察機構から、プラズマ団の件に関して協力をお願いされているというのがある。

だから、どんなにユーユウが言いにくそうにしても、彼にそれを言わせなくちゃならない。

「どんな思いでポケモントレーナーになったとしても、でも、僕はどじゃないよな」

「ユーユウ君……」

「……ごめんなさい。そんな顔をさせるためにこんな話をするんじゃないのに」

今にも泣き出しそうな顔をしながら、フウロはユーユウにそっと寄り添う。

流石に入れ込みすぎなんじゃないかと思ったが、きっとそれはあつてるんだろう。きっと、他人から見ても入れ込みすぎだと思われるくらいに、フウロはユーユウのことを好きになってしまつてるんだ。

ひよつとしたら、お邪魔虫なんだろうか。そんなことを考えるが、逆に、今自分がここにいないければ、特にフウロの方は、ユーユウに対してどんなことをするのやら。自分は、いわばストッパーの役割なんだ。

「いや、まあですね。他の人は今は良いんです。僕の話をしてんですからね。で、だ。僕は、その、トレーナーになる時に色々あつて、ポケモンのために命をとられるトコから始まつた。それは、普通の人はだいたい違いますよね？ だから、その、ポケモンバトルっていうのが、実のところ、よく分かつてないんです。例えば相手はどういう意図でいたにせよ、殺し合いと捉えてしまう。今回は、フウロさんはポケモンバトルをさせるつもりだった。僕の方は、命を守るために、ヴァルやケイトと一緒になつて、相手を殺しにかかった。そういう意識の違いがあつたればこそ、ですね」

ゆっくり、ちゃんと伝わるようにユーユウは説明する。自分に来る限りの懇切丁寧な説明をしたつもりだ。けれど、二人は目をパ

チクリとさせている。なんでだろうか。

それも直ぐに変わって、フウロの方は、納得したかどうかは分からないが、問うような雰囲気は出さなくなった。キッチンに引っ込みました。

だが、依然としてトウコはあまり納得できていないようだ。考え込むような様子が見える。そうして、一通り考えるのを終えると、もう一度疑問を口にした。

「あんととフウロさんの意識が違ってたことは、分かったわよ。確かにそれなら、バトルする時よりかはよっぽど力を発揮できるのかもしれない。けれど、レベルも違えば能力も違う。トレーナーとしての経験値差なんてそれこそ歴然。そんな状態で、気持ちのいれようだけで勝てるほど甘くはないはずなんだけど？」

「……………」

まあ、それはそうだ。

どれだけ気持ちが強かろうと、なんの練習もしていない状態では、野球でもサッカーでもラケット競技でも陸上でも、その道のプロには絶対に勝てない。

そういう意味では、ユーユウはあるとき、フウロと対戦したのが始めて。ならば、その道のプロには普通は敵わないはずなのだが。

「ポケモン同士の戦いで、トレーナーは指示するだけだからな」

「……………」

ユーユウはゆっくりと腰をあげ、立ち上がる。家に帰ってきて痛み止めを飲みなおしたので、特には気にならない。

これが一昔前だと、どんな薬を飲んでいても、こんなことをすれば嫌というほど痛みを感じたのだろう。化学の力ってすごい。

ただ、痛みはないにしろ両足火傷をしたとき以来どうにも喉が乾きやすい。

「僕だって、元トレーナーズスクールの生徒だ。ポケモンを持ってなくったって、他のやつバトルを見ることはよくある」

「……そっぴや、生徒名簿にあんたの名前があつたわね」

「いつも思ってたよ。なんでこいつらはこんなヘタクソなんだ？ ってな。もしかして、本気でやろうとしてないんじゃないかって」

感覚としては、車の助手席に座ったときに、ドライバーの運転に対して色々注文をしたり、文句をいったりする感覚に似ているかもしれない。

もちろん、色々注文した人間の運転技術が優れているかどうかはまた別の話になるのだが。

「あのときで言えば、イーグルは真空波攻撃をやり続けてりゃ良かったんだ。あの程度の雨なんてまるで気にならない実力を持ってるんだから」

ユーユウは喋りながら、食器棚からコップを取り出して、そこに水を注ぐ。

「けれど、フウロさんのちょっと脅かしてやるうって意識が、それを潰してしまった。上手くパワーコントロールが出来ないワザだったんだな。もし間違っただけであれが当たれば、ヴァルもケイトも傷ついてしまっただけではすまない。牽制にしか使えない」

注がれた水。

それを一気に飲んでみた。喉の中に清涼感が漂うが、少しだけだ。まだ足りない。

だから、蛇口は開けっ放しにしてある。

「だから、十分に制御出来る接近戦で、ポケモンが大きな怪我をしない程度に軽くないなしてやれ。そういう意識。ケイトは飛び道具を持ってなくて、ヴァルは射程外。遠距離じゃ絶対に勝てない」

何度かコップを口に運び、何度か口に水分をとらせてみるも、結局は変わらない。単純に喉が乾いている。そういうわけじゃないのか？ だけど、こんな感じは初めてだ。足に負っている火傷が、そうさせているのはなんとなく想像出来るのだが……。

しかし、そうだというならば、なぜ今頃なのだろうか？

「勝つんなら接近戦だ。でも、馬鹿正直にぶつかってたんでは勝ち目がない。だから、そう……ほんの少し。僅かばかりでいい。認識の及んでない攻撃をすれば、それで、イーグルの勢いを殺すことが出来る」

結局、喉を潤し切ることをユーユウは諦めてしまった。杖もなにも持っていないので、ちよつとばかりヨロヨロしながらも、もといたソファアへと座ることができた。

「イーグルは、明らかにこっちをなめてかかってきていたからな。だから、視線は僕に集まっけていても、細かい拳動は追えなかった。当然だ。なんせ、ロクに育ってもないポケモンと、一度だって戦ったことのないトレーナーだ。油断する。そりゃあ油断するさ。だから集中出来なかった。どくばりで視界をばやけさせ、ケイトで後ろから攻撃すれば、あとはヴァルがやってくれる」

なんというか、水分が足りないためか、いまいち落ち着かない。特に、足のあたりはさっきからムズムズしっぱなしだった。

あまり心配されるのはどうかと思ったので、自分のことを態度に出さないように注意してきたが、もう我慢の限界に近い。

足に触りたくてしうがなかった。

そうして、ついには前かがみになってしまつて、少しばかり力を込めて、足をさすつてみる。ウズウズしていたのがちよつとは開放されたような気分になる。そんな状態でも、口は動かし続ける。

「単純にみれば不利なことも、結果的にはこちらに有利になるよう働いていた。ならば、勝つさ。負けようがないものだったんだよ」

「ふーん。なるほど、ね」

「ん？ 何か分かったのか？」

「あんたが素人じゃないってことはね」

「……………」

あれ？ どうしてだろう。あんまり理解してもらえていないような気がする。たまらず、ユーユウは助けを求める様にフウロへと視線を向けるが、どうやらもうそろそろ茹で上がりのようで、こっちに助け舟を出すのは無理そうだ。

少し、ため息をつきたくなるような気分になってしまっ。なってしまったが、ついには必ず突っ込まれるのでグツと堪える。

「出来たよーっ」

そうしているうちに、キッチンの側からそんな声が聞こえてきたので、会話は打ち切られてしまった。

ユーユウは座ったままだったが、トウコは立ち上がって食器の準備をはじめた。

フウロが直ぐにわけられるように三人分の皿を用意して、冷蔵庫からミネラルウォーターのペットボトルを持ってくる。その後でフオークを持ってきて、ソファから少し離れたテーブルの上に置いた。

もちろんソファとソファの間にも三人分の皿を置くことが出来る低めのテーブルはあるのだが、行儀が悪くなってしまっ。だから、ユーユウには悪いけれども、イスに座ってちゃんとした姿勢で



食べなければ。いや、トウコー人だったらそんなことなど絶対にしないのだけれど。

「お待たせ。私も、こんなのみか作れないけど……」

えへへと苦笑しながら、フウロは三人分の皿をテーブルの上に置いて、またキッチンに引込んで行く。茹でるのに使った鍋を先に洗うつもりらしい。同時に、ユーウはソファから腰をあげた。

四人がけのテーブルだから、片側は席が埋まるが、もう片側は埋まらない。フォークもミートソースがかけられたスパゲティの皿も適当にのせられていたので、キッチンと並べてからイスに座った。ユーウの方が、埋まってない側だ。

だが、食器棚から三つのコップを持ってきたトウコは、なにを思ったかユーウの隣にコップを置く。もう一つはユーウに渡して、最後の一個は向かい側だ。

あれ？　なんでそこに置く？

不思議におもってトウコを見ると、当然の様に皿を置き直していた。

ユーウの隣と、そこからの正面に皿を置き、コップにミネラルウォーターを注いでいる。

「なに？」

「……いや、なにも」

あんまりにも当たり前の様にそうするから、ユーユウはなんにも言うことは出来なかった。そして、当たり前の様にトウコはユーユウの隣に座る。

なんだろう。ちょっと緊張している様に見えるのは気のせいだろうか。それに、心なしか、昨日よりイスとイスの間が短くなっている様な気がする。

少しばかり注意してやらないと、食べてる時に肘と肘があたってしまいそうだ。

「あ」

そこにフウロが戻ってきた。

どうしてか、ユーユウとトウコの座っている様子を見て、若干身を硬くしている。顔は笑っているようだが、よくみると結構引きつっている。

楽しみにしていたことがいきなり裏切られてしまってパーになった。そんな風に感じられる。

おかしいな。ついさっきまでは、こういう風な感じじゃなかったんだが。

いきなりの雰囲気、ユーユウはトウコとアイコンタクトしようと考えただけで、トウコの意識はまるでこちらに向いていない。

じーっと、フウロの方を見ている。見られているフウロも、表情

を変えないで同じようにトウコを見ている。ユーユウは蚊帳の外だ。

「あれ？ フウロさん？ 座らないんですか？」

フウロはなかなかイスに座ろうとしない。座ってくれないと食べ始められないのだから、言ってることは全然間違っではないのだが……しかし、どうして挑発的な口調になってるんだ？

聞くこと自体にはなんの躊躇いも無いが、場に充満し出した嫌な空気がそれを許してくれそうもない。

「おかしいな……トウコちゃんは、全く、そんなことする理由なんてまーったくつ！ ないはずなんだけどな！」

……なんで声まで大きくなるんだろう。それに、そこに含まれている明らかな怒気。トウコの行動がちょっと変だったのはユーユウにも理解出来るが、こういう風にする理由はなんなんだろう。

「知ってます？ 10000人に1人らしいですよ。女の方は。初めて見た時に、その、あの………あ、ああー良いなあーってなる確率は。10000に1つ。低いですけども、私に起こったって、なんら不思議は無いですよね？」

なんなんだ。

途中、トウコの歯切れがいきなり悪くなった。それに、確率の話。一万分の一って、それはどんな確率なんだろう。

トウコにそれが起こったらしいが、宝クジかなんかでもあたったのだろうか。確か、ユーユウの記憶によると、今週のトレーナーID一致商品は、わざマシンNo.15の【はかいこうせん】だったはずだ。

訓練を積み、その結果会得するよりかは威力は落ちるが、一回ポツキリ使い捨てではあっても、その場ですぐにワザを覚えることが出来る。

もしそれが当たったのだとしたら、ちょっと羨ましい。それに、目の前で見てみたい。

「……私はトウコちゃんと違って、ちゃんとして段階を踏んで上がってるんだけど？」

「だからって？　どうなるっていうんです？　そんなの、経緯がどうだろうとも、心が一緒ならそれで良いじゃないですか」

ギギギ。

そんな擬音がしっくりくるくらいに、二人の動きは切れ切れになってきていた。そう、グリスが切れたマシンみたいだ。きっとこういう時は、ユーユウがグリスを塗りたくってやらないといけないんだろう。

で、段々とフウコの顔も曇ってくる。きっと、トウコの顔もそう大差ないだろう。

「い、いただきます……」

やっと出た自分の声は、びっくりするぐらいに小さかった。小さな声と一緒に、小さな動き、つまりは出来るだけ目立たないように手を合わせる。

我関せず。一口麺を腹の中にいれて、それから様子を伺って、無関係を貫く予定だ。

触らぬ神に祟りなし。

原因すら分かってないことに口出しをするほど、ユーユウはバカじゃない。端から聞いていても、どうも自分にはあまり関係のない内容みたいなのもある。

しかし、

「ちょっと、なにしてんの」

ギュツと隣にいるトウコに腕をつかまれる。なぜかは分からないが、その過程で近かった距離がさらに近くなったような気がする。

あまり力はこもっていないのだけれども、振りほどくことは出来ない。

「隣、どうすんのよ」

若干凄みを帯びているようにも見える顔が、フウロからこちらへと向く。

せめてフウロくらい距離が離れていれば良いのだけれど、あいに  
くの至近距離だ。

アイフィルターガードもきかないので、画像処理無しでそれを直  
視しなければならぬ。怒っていないければ、普通の状態であれば、  
トウコ自身の可愛さもあいまってこの距離はドキドキの距離になる  
のだが、今は同じドキドキでも意味は真逆だった。

「となり、って、なんだよ。トウコが座ってるのに隣も何も……」

「そ、そうよねっ」

少し、トウコを纏っていた怒気が抜けていくのをユーユウは感じ  
ていた。声もちよつとばかりの喜びの色をもっていた。それと一緒  
に、フウロの方からはこれまで以上のプレッシャー。

けれども、彼女からしてみればユーユウの返事は予想どおりのこ  
とだった。あまりの予想どおりに、怒り半分呆れ半分の視線といっ  
たところか。

だから、対抗は簡単だ。だって、予想どおりにことが運んでいる  
んだから。

「フウロさーん？」

また煽るような口調でトウコは名前を呼ぶ。だが、フウロはそれ  
を無視して、自分に割り当てられているお皿とコップを移動させる。

「……？」

移動先は、ユーユウの皿やコップが置いてあるスペース。空いた部分に強引に割り込むようにする。

なんだ？

その行動の理由を頭のなかで考えているうちに、トウコとは逆の方から、すさまじいほどのふっくら感がユーユウの腕を襲った。

「え？」

ユーユウはその感覚にまた戸惑う。覚えたはずの感覚だったが、まだ全然慣れていない。

言わずもがな、フウロがイスをくつつけるようにして置いて、そのイスの距離以上にユーユウにくつついたのである。

「あ、フォークもってくるの忘れちゃった。ユーユウ君、食べさせてね？」

確かに、フウロがもってきたのはスパゲティが入った皿とミネラルウォーターが入っているコップだけ。もともところにはフォークはおいたままだ。歩けば5秒もしないのに。

そしてフウロは知っていた。こういう風にお願ひすればユーユウは黙ってしまうということを。好きに解釈が出来る。ということは、思い通りになってくれるというのを意味していた。

「え……？ あ……は、はあ」

しかしそれはちょっと違っていたようで、ユーユウは絞り出すか

の様にどっちつかずな返事をした。  
それがいけなかった。

「ユーユウ……？ 早く、フウ口さん引っぺがしなさいよ……」

「ユーユウ君、早く、食べさせてよ。ねえ？ 分かってるでしょ……」

声が低くなつて、一度は抜けたはずの怒気がまた戻ってきた。  
しかも、今度はまったく関係のないはずの自分に向けて。声と視線、オーラのステレオ。そして、左右両方からの圧迫感。サンドイッチの中身になってしまっていた。

わけがわからない状態で怒られ、無茶を言われ、段々と左右からその距離をつめられる。もうユーユウとしてはたまったものじゃなかった。

（な、なんで昼食をとるだけで胃に穴があくような思いをしなくちゃならないんだ！？）

もちろん、その心の叫びが誰かに届く様なことなどはまったくなかった。



## 9・守ってあげる

空が暗くなり始めたくらいに、カミツレはユーユウの家へと戻ってきていた。

ライモンシティに自分の家があるし、フウロかトウコ、どちらかを残しておけばここに泊まる必要は無いのだけれど……けれどもきつと、今日もここに泊まることになるんだろう。

帰ってきてまず最初に目についたのは、ぐったりした様子のユーユウだった。ソファアーでもいっきりくつろいでいたが、疲れていそうだ。

その対面に座るフウロとトウコが頬を膨らましているのを見て、だいたいの想像はついた。

けれども、あえてそれには触れないようにしながら、カミツレはユーユウの隣に座った。

瞬間、正面からなにやってんだオーラが届くが、カミツレはそれを完全に無視することができた。

「けど……フウロのウォーグルに勝ったんですってね？」

無視をして、ユーユウと話すといったら、まず最初に出てくるのはやっぱりこの話だ。

カミツレはトウコからのメールで知っただけけれど、ただの文面からでも、トウコが興奮しながら送信したんだろうなというのが良

くわかった。

ユーユウからしてみれば、またか、という感じだ。一度したことをもう一回やるのは、すごく面倒なことのように感じる。だから、二回目が簡単なものになってしまふのは仕方が無い。

「勝ったというよりかは、勝っちゃったって言い方のほうがあつてますね。もし二対二だったり、あるいはマンツーマンだったり、ウォーグルが真面目に戦つてたりしたら、僕は逆立ちしたって勝つことは出来なかったでしょうね」

「そういうもののなの？」

「そういうもんです」

「そっかそっか。……ま、流石にそういう状況になってれば、あのウォーグルは早々にはやられないわね」

カミツレは、何度か自分のポケモンをフウロのウォーグルと戦わせている。基本的に、カミツレの手持ちポケモンはでんきタイプで、フウロが好んでいるひこうタイプのポケモンには一般的には相性が良いとされている。

レベル、フィールド、状態などの条件が一緒ならば、まず負けはないというのがひこうとでんきの相性だ。しかし、ひこうタイプであるはずのウォーグルには、一対一の勝負ではあまり勝った覚えがない。

真剣じゃなかったと、彼はそう言っていたのだけれど、正直なと

ころ、まともに育てられていないフシデやミニリュウなんかではどうやっても敵わない相手だ。

やはり口ではああ言っているがトレーナーとしての能力が備わっているのか、あるいは、ヴァルやケイトが特別で、強力なワザを予め心得ているのか。

（いずれにせよ、油断ならない。ちょっと、悪い気がするけれど……）

もちろん、ユーユウは被害者だ。その認識は、カミツレの中でまったくぶれていない。

しかし、ただの被害者ということでもない。ワケありの被害者。やっかいな例だ。

これまでに、プラズマ団の被害者というのは何人も出ている。トウコの幼馴染だってそうだ。だが、彼らの犯行によって殺されたものがある、なんて話はただの一度も聞いたことがない。

なにかをしていた現場を見られたから口封じをした……？ いや、考えにくい。そもそも、プラズマ団の活動なんて、二年ちよつと前のあの日からずっと少ないままだ。それが、いきなり人殺しだ？ 考えられない話だ。

カミツレがこう考えるのも、ユーユウの母親が元プラズマ団の間人だというのを知らないからだ。知っていれば、もうちよつとぐらいは考えを広げることができる。

「……カミツレさん？」

「……？ なに？」

「いや、いきなり黙っちゃったんで、どうしたのかな、と」

ユーユウからすれば、やっと到着してくれた、まともにしゃべれる人なのだ。より気になけようとするのは当然だった。

昼のことがあるから、トウコとフウロに声をかけようだななんて思うわけがない。

もちろん、ユーユウがカミツレばかりを気にかけているというのが二人の実感だから、当然面白くない。面白くないのだけれど、イライラをぶつけてばかりいたらかえってまずい事になるのは経験が全然無いながらも分かっているので、ユーユウに強い視線を向けることはできない。

「対したことじゃないのよ。晩御飯時だから、どうしようかって考えてただけ」

「夜めしね……やっぱり、ウチで食べてくつもりなんですか？」

「それどころか、このままだと、今日もお泊りさせてもらうことになりそうよ？ 私はともかく、フウロもトウコちゃんも、ホテルはキャンセル済だしね」

それは、ユーユウにはあんまりありがたいことではない。これで二日連続だ。昨日はじめて思い知らされたのだが、人を自分の住処に泊まらせるのは相当な心労がたまる行為だ。

しかも、同性ならまだしも、異性……女の人だ。しかも、全員が申し合わせたかのように容姿のレベルが高い。しかも、うち二人はことあるごとに強烈なプレッシャーをかけてくる。

正直なところ、昨日一日と今日今まででお腹いっぱいを通り越してしまっているくらいなので、お帰り願いたい。

「迷惑なのは、わかってる。でも、私たちにとってはこういうのが義務になるの。こういうことをやって、そばにいることで、アナタを守ることになるなら、私たちはそれをしなくてはならない」

こういう風に言われてしまうと、無下に扱う訳にはいけなくなってしまう。本当、ずるいよなあ。そんな嘆息がカミツレに届くわけも無い。

途中どうあれ、結局は今日も泊めてしまうことになるんだ。

「義務義務って……じゃあ、やんなくて良いつて言われれば、カミツレさん達はこんな真似はしないってことですか……？」

「さあ？　どうかしらね。ユーユウ君はどうなの？　私たちに、今すぐ出て行って欲しい？」

「……そついう言い方は、ちょっとズルいんじゃないですか？」

「そつかもね。ま、ユーユウ君の気持ち分からないわけではないわ。私だって、逆の立場で男三人を泊めるってなったら、力づくで

追い出すもの。けど、今のユーユウ君を取り巻いている状況は、ちよつと普通じゃない。プラズマ団がらみで、これまで誰もなかった、命の危険がある。だから、私たちがここにいて、あなたのことを守つてあげる」

「命の危険、か……」

考えなかったわけではない。本当に考えていなかったら、イーグルと戦った時に、止めを刺す命令なんて出しはしない。

そして、三人がいる理由だって、今更言われるまでもないことだった。だけど、こうやって直接言われたら、やっぱり嬉しい。

たとえ義務感からきているのだとしても、こうやって大事な人を失ったあとに、いろいろ氣遣ってくれるというのは、非常にユーユウの助けになってくれていた。助けてもらっている人間は、なかなか気づいていないというのがあったのだけだ。

「そう。命の危険。ユーユウ君も分かつてるわよね？ だから、フウロのウォーグルにトドメを刺そうとしたのよね？」

「……………」

「私、おかしなことを言つた？」

「……参つたな」

「参つた？」

「僕の思つてること……………カミツレさんには全部筒抜けになつて

るみたいだ。カミツレさん、エスパーですか？」

「……じきに、本物を見れるわ」

「本物？」

どういうことだろう？

本物をみれる。エスパータイプのポケモンも持っているよという意味なんだろうか。それとも、本物の超能力者がいるとでも……？  
よくわからない。

とりあえず、ユーユウが、カミツレに対して考えていることが筒抜けになつてると言つた瞬間に、フウロとトウゴから来る視線がキツくなつたのは事実だ。

この二人、昼の間からずっと喋らないで各々の様子をうかがっているみたいだが、強烈な存在感があつた。

で、ユーユウとしては、そんなキツイ視線を向けられるのはたまらないから、そこから逃げるようにテレビのリモコンをとって、電源をいれた。

《続きまして、ポケモンリーグからの通達です。最近、イッシュ全域において野生のエスパータイプのポケモンが、捕獲過多によりわずかながら他のタイプよりも減少傾向にあるようです。各トレーナーは、捕獲しすぎないように注意を……》

だがしかし、理解することができたのはそのぐらいだった。それ

以降も、テレビからの音声は流れ続けているが、BGMにすぎない。雑音を作り出して、視線から意識をそらそうとしたのだが、どうやらこれは失敗したらしい。怒気の含まれた目は未だにこちらへ向けられている。

怒気。ということは、自分に原因があつて、それでトウコとフウ口は怒ってしまったているのだが、しかし、何でかは分からない。分からないから、原因を取り除くことは出来ない。だから、さらに怒りを買ってしまう。悪循環だ。

（エスパークタイプの乱獲、か……）

テレビを使っているところを見るあたり、その減少はわずかではないのだろう。本当にわずかだというなら、こういうことはしない。けれども馬鹿正直に、大量に減っているのが見受けられるので捕まえないでください、なんて言ってしまったら、愛護団体という名をしたテロリストどもに大義名分を与えてしまう。

ポケモンリーグには、ポケモンを管理することなど出来ない。テレビからの情報を見ても分かるように、ポケモンを苦しめているものを、浄化するようなことも出来ない。こういうことが出来ない人間たちこそ、ポケモンたちを苦しめている元凶の一つであると言える！ だから我々はここに宣言する。リーグ関係者を殺害し、ポケモンたちを開放することを！

演説としては、こんなものだろうか。ユーユウみたいな17歳の子供でも、こんなのは簡単に想像することが出来た。



つまり、愛護団体の人間たちだって、今のテレビの情報をそのまま受け取るようなことはしない。

なのに、なぜ数多ある団体が抗議しようとしなのか。  
簡単だ。

彼らは、一応、対外的には愛護団体、保護団体を名乗っているが、実際の活動が伴っているわけではない。ポケモンリーグが握っている権力をこの手にしたいだけだ。あるいは、スケープゴート、金をもらって表沙汰にしたいことをさせたり。そういうのばかりだ。そこらへんは、他のトコもそうかもしれない。

本当にポケモンを守りたいなら、平和を大切にしたいならば、実際にポケモンを脅かしている人間、戦争をやってる国に行って訴えかけるべきだ。野生のポケモンがまるでないところで、あるいは、戦争をしていない国の街中で、大きなスピーカーを使って演説をしても、本当に、ただ大きな雑音を出しているだけ。ただの迷惑行為だ。

分かっているのかいないのか、ユーユウにはそれが想像出来ないが、先週だってライモンシティの駅にいけば、そういった団体が平和の大切さをわめき散らしながらビラを配っていたところをみた。わざわざ平和なところに寄生虫のごとく居座り迷惑をかけていたのを何度も目にするあたり、きっとああいうのは狙ってやってるんだろ。狙って迷惑をかけている。

いや、もともと迷惑しかかけられん連中だから、ああいった団体をつくるのか？ 子供には分からない。分からないが、そんなこと

を考えているうちに、一人の男が頭に浮かぶ。

（エバーグさん……）

エバーグリーンと名乗ったその人。フウロの言ったことを信じるなら、本当の名前はサカキ……国際的なテロ集団のリーダー。

あの人も、ならば、そうなんだろう。駅前のトコとか、いきなり人の家まできて、自分たちの考えがどれだけ素晴らしいかを頼んでもいないのに喋っている連中と。

「だったら、あの手をとっていたら、僕は、骨までしゃぶられた後に、捨てられていたんだろうか……」

ユーユウとしては、ちょっとだけ考えたつもり、ボソツと呟いただけだった。そのつもりだったのだが……。

実際には、いきなり黙り出して長い時間考えて、それでいきなり新しい話題を出すように普通に喋り出していた。そして、ユーユウはそれに気づいていない。三人の視線を集めていることに。

「エバーグさん………そんなことないよな………」

ふ、と頭を抱えるようにして、でも、途中でやめる。でも、気持ちちはあがってしまったまだから、座ったままではいられない。

なにやってんだろ？ という三人の視線を無視して、ユーユウは立ち上がり、歩き出す。そのまま、あまり入ったことのない部屋のドアを開け、ためらうことなく入って行く。

ここは、ユーユウの母親の部屋だった。

「っ……………ホントのことが見えない方がいい時があるっていうけど……………」

きっと、今はそんな状態ではないだろう。確実に、本当はどんなのかというのが分からなくて、心を痛めてしまっている。

この部屋には、ユーユウはあまり入ったことはなかった。母親が家にいる時に入ろうとするといつも止められていて、いない時は、たいてい力ギがかかっていた。

今回のことがなければ、きっと、ここに入ることは……………。

「母さん……………」

ああ、こういう思考が出来るのは、もしかしたら初めてなんじゃないだろうか？ 母親を失い悲しむ気持ちがうまれるのと一緒に、こんなことを思う。

ゆっくりと歩みを進め、部屋の奥の方へと入って行く。最初、あれがあった当日……………プラズマ団のローブを見つけた時よりかは、部屋にはいることに比べると、ドアを開けた時と同じくまるで躊躇いはない。

中の様子は、最初に入った時となんらかわりはない。小さな頃から注意されながら見てきた部屋の様子はそのままだ。ただじつくりと見れなかったというだけで、中が特別変わっているということはない。

けれども、それでも、何かが違っていているような感じがするのはな  
んでなんだろう？

「ユーユウ君、ちょっといい？」

と、突然の声。

ドアの向こうからの声、フウ口の声だ。様子を見るような感じと、  
でも聞かなくちゃという感じ。

「……どうしたんです？」

「あの、ね？ その、誰か来たみたいなんだけど……えっと、私達  
じゃ、出られないよね？」

「そうですね……」

ちょっと考える。

いや、考えるまでもないのだ。まさか家を訪ねてきた人間に、そ  
の家の人間とまったく関係ない人を出すわけにもいかない。

だから、そう。ユーユウが個人的に、ちょっとの間が欲しいだけ

だ。

催促のチャイムが聞こえる。

本当はもう少し部屋を見たかったのだけれど、それは次の機会にするのかなさそうだ。

「あ」

ドアを開く。

自分で呼んだくせに、ドアが開いた瞬間にみた顔は驚きに満ちていた。そんなフウ口をみて、ユーユウは苦笑する。

「なにやってんだ。自分で呼んだんじゃないか？」

そのまま、ユーユウは自分の手をフウ口の頭の上に置いた。それなりに力を込めて、わしゃわしゃさせる。撫でるというのはちよつと違っていた。

ほんの一秒程度そうしただけでユーユウは手を離し、玄関へと向かう。後ろからの抗議の声は届かなかった。

「ユーユウ君、その……もっと……あ、行っちゃった……ユーユウ君……ズルいよ……」

また、もう一度呼び鈴が鳴らされる。今度は、連続して二回だ。どうやら急いでいるらしいが、早く動くことなんて出来ない。

こっちの事情はお構いなしだ。

もう一度、チャーム。今度はノックのオマケ付きだ。なんなんだ、まったく。

ずっと眠ったままのヴァルとケイト入りのモンスターボールが入っているカバンを横にしながら、ユーユウはドアを開けた。

「はいはい。どちら様……」

開けながら、ユーユウはもう少し警戒するべきなんじゃなかったかと後悔していた。

リビングにある訪問者確認用モニターをみなかったし、ドアの小さな覗き口からも見はしなかった。

だが、もうドアを手にとってしまったので戻りようはない。思い切って、開くしかないのだ。

開けた瞬間に、瞳に飛び込んできたのは二つの金髪だ。一方は、肩をこえ、腰をもこえるくらいの長さを有している。もう一人は、よく見知った顔だ。

「ロイズ……？」

「ユーユウ……」

なんだろう？

なにか、思いつめた様な顔をしているが。

「どうした？」

声をかけてみる。

だが、ロイズは黙ってしまっ、そのままうつむいてしまっている。

どうしたんだろう。

仕方がないのでユーユウは隣にいる女性に目を向けることにした。この人は、今日遠目ながらに見た人だ。なんと言っていたか……今日もいろいろなことがあったがために、いまいち思い出せない。

「なんだっけ……」

ちょっとだけ、考えてみる仕草。目の前の女性は無表情だが、少しだけ、困惑しているようなイメージを受ける。

と、ああ、そうだ。

今日、学校にいた人間が言っていたことを思い出した。全部、というわけにはいかないが、でも、この人がどういう人かは分かる。

「ユーユウ、中、入るぞ……！」

と、ロイズが意を決して中に入っていく。ユーユウの返事を聞くようなことはしない。

いや、たとえば待つてくれたとしても、すぐに返事は出来なかった

というのがあるか。それだけロイズの顔に凄みがあったということになる。

「アナタ、ね……？」

「は？」

と、なにも喋らなかつた女性がいきなり話しかけてきたので、ユーウは驚き、微妙に肩を揺らす。

綺麗で透き通るような声が、両方の耳から入り、抜けて行く。つまりは、あんまり意識を向けられていない。中に入って行ったロイズのことばかりだ。

ただ、この人をこのままにしておくことは出来ないから、自然と意識はロイズから外れて行く。

「な、なぜここにいますかっ！？」

リビングの方から聞こえてくる大きな声に、諦めもついてしまった。はあ、と一つため息をつく。

不思議そうな目で見られるが、そんなもの知ったこっちゃあない。

「来てはいけなかつた……？」

「そうではないよ」

おそらくは年上の女性なんだろうが、ユーウはこの人には敬語を使う気になれなかつた。いや、別に、この人を敬っていないわけ



じゃない。

四天王。ポケモンリーグを代表するトレーナーの代名詞だ。そんな人を蔑むことなんてない。

ただ、この人から出ているオーラみたいなものが、ユーユウに敬語を使うのをためらわせた。保護欲を掻き立てるという表現に近い。あつてはいないが。

「いけないという事はないが、あまり騒がれるのは厭だ。好きじゃない。だから、そういう意味では、あなたが中にはいるのを、拒むという事はないよ？」

ああ、なんというか、大人っぽい喋り方をしてしまう。しかも、無意識のうちに、だ。喋った後で、恥ずかしくなってしまう。

「そう」

ユーユウが許可をくれたのをしっかりと確認してから、女の方は歩みを進め、中へと入って行く。

後ろ姿。ポリウムのあるキツネ色みたいな金髪のせいでそれしか見えないが、だからこそ、さらに思い出す事が出来た。

四天王である。

それしか分からなかったのが一歩前進する。だから、言ってはいけない一言だというのに、なんのためらいもなく口に出してしまっていた。

「ああ、あなた、ポケモンリーグの貧乳担当の人か」

「は……！？」

ピキリ。

そんな擬音が聞こえて来てもおかしくなくくらいに、一気に場の雰囲気が豹変する。

だが、ユーユウはまったく気づいていない。

「……そうだ。エスパークタイプの使い手で、貧乳の人。名前は……カトリヤーだったわけ？」

「アナタ、ね……！」

振り返られ、ユーユウもやっと気づいた。自分がいったいなにを言ってしまったのかを。その目尻にうつすらと見える雫がどういう意味を持っているのか分かることによって。

唇をキュツと結んで、キュツく目を尖らせてこっちを見てくる姿は、怒っているとは分かるのだけど、すごく可愛かった。

だけど、だからといって、怒っていないわけではなくて、

「じのっ……！」

何時の間にかニヤニヤしていたユーユウの顔を、カトリヤー……ではなく、カトレアはおもいきり引っ叩いていた。

「バカ。デリカシー無しのバカ男……！」

もちろん、もちろん。

当然、今のに関しては、悪い。間違いない。こっちが全面的に悪いというのは理解している。

しかしながら、一日に女子からこうパンパンパン引っ叩かれるのはすごい抵抗がある。

だいたい、今回のことはともかく、トウコに蹴っ飛ばされたり、強い目で見られたり、なんであんなことをされなくちゃならないんだ？

で、極めつけに、いま引っ叩かれた。

これは、このまま一緒にいたら、本当に胃に穴でもあいてしまうんじゃないか？ 多分、早急に、追い出してしまわなくちゃならないんだろう。自身の身体の健康を守るために。

だけど、もちろん、こんなことがあったら、自分の家だということに、そのことに対する発言権というのは大きく低下してしまうだろう。

だから、後一ヶ月はこういうのが続くことになるのだけれども、とりあえず、ユーユウの胃は意外に頑丈だったんだよ、というのは、先に言っておかなければならないことだろう。

## 10・あれ？

ああ、人生は最高だ。

誰なんだろう、こんなことを言った奴は。ふざけるな。ぶん殴ってやる。

いまのユーユウの気持ちがかうだ。

もう、結構遅い時間になってしまった。だけれども、ユーユウはまだお風呂にはいれていない。今は確か、トウコがはいっているはずだ。

「はあ……」

この後にロイズがはいって、それで、最後にユーユウだ。待つしかないので仕方なくリビングのテーブル、イスに座っている。

「ため息をつきたいのはこっちだ」

正面からくるロイズの声に、ユーユウは再びため息をつきたくなった。ただ、今度そうしたらなにを言われるか分からないのでしょうがなく黙る。

トウコは風呂に入っていて、カミツレとフウロは近くのコンビニにいろいろ買い込みに行っている。だから、部屋にはよく見知った二人しかいないのだが、あまり会話は弾まない。

そのくせ、何かをやらうとすると、その度にロイズが反応してくるのでたまったものではない。

「こつちだ、ってさ……そんなことは無いんじゃないか？」

「お母さんが酷い目にあつたことも、その過程でポケモントレーナーになったことも、あと、その……ジムリーダー達とこんなことをしていたことも……なにも言ってくれなかったじゃないか」

「それは……悪かったって思ってるよ」

「……………」

そこまで言うとは話は途切れ、ロイズは黙り込んでしまう。これを何回か繰り返した。

そうしているうちに、どうやらこのやりとりをやるたびにロイズが不機嫌になっていくのをユージュウは感じていた。しかし、ため息をついただけでこれでは、そのうち呼吸すら出来なくなってしまうんじゃないだろうか。

ならば、ロイズのことは無視して、別の誰かと話しても、ということになるのだが、いま、この部屋には二人以外にはカトレアしかない。

いつのまにか上がり込んで、我が物顔でソファーに寝転びながらテレビを見ている。腰をとびこえるほどの金髪と、幼さを残した顔、さらには自己主張しない身体。本人たちには言えないが、ユージュウの見た目の好みでいえば一番になるだろう。

だが、言わずもがな機嫌が良くない。それは当然自分の発言のせいだというのをユージュウは認識している。頬を叩かれもした。こんなことがあって、話す気になてなれるわけがなかった。また頬つ

ぺたでも引っ叩かれて、それで終わりだ。

しかし、そんなにユーユウを嫌っているのに出て行こうとしないのはなんでなんだろう？ 流石に既に三人いて、それでも保護するのには足りないから、なんてことは無いだろうし……。

そう言えば、時折視線を感じることがあった。さっきまでは、まだ怒ってるのかな？ などと考えていたが、もしかしたら、自分をみているのとは違うのかもしれない。

そう考えると、ユーユウの視線は自然とロイズに引っ張られていく。

（ってことは、ロイズとはただならぬ関係だってことか？）

考えてみる。

バカバカしい。最初はそう思ったが、本当に最初だけだ。よくよく考えてみれば、二人はさる名家の者同士というし、例えばテレビドラマなんかでよく見る、親同士の話し合いによる婚約相手だったりしても、不思議じゃないんじゃないだろうか。

それに、思い返してみれば、トレーナーズスクールの時も、ロイズはしょっちゅう女生徒から手紙……いわゆるラブレターというやつを受け取り、告白されていた。あの時は、家のことも知らなかったから、ただ単に容姿のおかげでモテていたんだとばかり思っていたが、もしかしたら、告白した側は、後ろにある家のことまで考えてそうしていたのかもしれない。

(……なんか腹立ってきたな)

今更だが、ユーユウはモテない。見た目で寄ってくる人間は多少なりといるかもしれないが、少ししたらもうサヨウナラだ。

理由は言うまでもなく、ユーユウだってそれを自覚してはいるが、だがしかし、それがモテる人間をひがまない理由にはならない。

だから、そう。

ちよつとおちよくつてやろう。そんな気持ちで不機嫌なままでいるロイズに声をかけた。

「あの、さ」

「……………なんだ」

極力カトレアに聞かれないようにしながら尋ねると、いつもより低い声が返ってきた。

やっぱり怒ってる。その理由は、見当つかないが。なんというか、怒ってる様子は、カトレアに似ているかもしれない。

「お前とカトレア。一体どういう関係なんだ？」

細心の注意を払い、周りの様子をそれとなく伺いながら聞いてみる。

そつえば、これは本当にどうでもいい話になるのだけれど、フウロから聞いた情報によると、カトレアは21歳らしい。カミツレ、

フウロよりも1つだけとしを喰っている。

だから、カミツレもフウロも呼ぶ時は【さん】付け。本当はユーウだって、二人を呼ぶ時と同じようにすべきなのだろうけど、玄関先の時に感じた空気がそのままになってしまっている。ついでに、初対面が初対面だった。挨拶がわりに一発もらったので、もうこれは変わらない。

カトレアさん、と呼ぶことはきつとないだろう。  
いや、そもそも話すかどうか……、

「か、関係、とは……？」

少々動揺したようなロイズの声。

ああ、これはどうやらビンゴらしい。ユーウは自分の考えに確信を持つ。本当はちよつと、……いや、かなり悔しいのだけれど、こういうのはもう慣れっこだ。

過去、ユーウが良いな、と思った女子は、決まってロイズのトコロへ行ってしまう。ロイズ直行率95%だ。残り5%はそもそも相手をしてくれない。

そんな悲惨な状況だから、もうユーウとしては、街を歩いている自分と同年齢くらいの女子は全員が守備範囲だ。もう誰でもいい。酷いようだが、これが現実。変えられない現実だった。

だから、腹いせ。

腹いせに、ちよつとぐらいロイズをネタにしてもバチはあたらな  
いはずだ。



「あれ、お前の彼女なんだろう？」

「な……！？ なにを言ってるんだお前はっ！」

耳の近くで囁くようにすると、いきなりテーブルをドン！ と叩きつけて、ロイズは勢いそのままに立ち上がる。

（あれ？）

思っていた反応と違う。いつもは、おちよくってやった時はこんなではなく、耳を赤くしたり、迷惑そうにしたり、あるいは呆れた様子になったりしていたのに。

ムキになって否定しようとするのは初めての反応かもしれない。ユーウの頭の中で、デフォルメされた自分の分身が巨大な地雷を踏む。しかし、一度構えた矛を、なかなか収めることは出来ない。

だから、口は動いてしまい、余計なことを言ってしまう。

「なんだ？ もうやっちゃったのか」

「ち、ちが……！」

「不公平だよな。かたや気に入った女の子を片っ端から奪られ、かたや呼んでもいないのに女子が寄って来るなんて……しかも、決められた相手だっている」

ちら、とカトレアの方を見ている。相変わらず、目線はテレビへと向かっていたが、耳がこっちにのびている。

やっちまったとか、そういうマズイ表現は声のボリウムを絞ったから聞こえていないはずだが、彼女だとか、女子が寄ってくるだとかは聞こえているはずだ。

「違う？　じゃあなんで一緒に僕んどこに来る？　あー、なんというかさ、自慢されてる気にしかないわけだ」

少し前に、ガタン、と風呂場のドアが開く音がした。トウコが風呂からあがったのだろう。だけど、……あれ？　ドライヤーで髪の毛を乾かす音がしないし、その姿も見えない。それどころか、脱衣所から出てくる様子もない。髪を乾かさなくて良いのか？

「これを不公平と言わずしてなんと言う？　ズルい。ズルいよなあ。お前みたいのが乱獲するから、僕があぶれっちゃうんだ。ハズレくじすら掴ませてもらえない」

本当は、こんな風に聞こえるようにする必要はない。だけれども、そんな気分なんだ。これだけじゃなく、色々なストレスがあったために、結果、大きな声になってしまふのだ。

しかし、なんというか、ユーユウ自身、自分で言っているものすごく情けなくなってきた。

だが、この口はとまってくれない。

「だから、そうだ。僕だって作る。作ってやる。彼女を、明日、ナ

ンパかなんかでもして。世の中……世の中は、統計上は女の方が多いんだ。だったら楽勝なはずだ！」

「ただいまー」

「帰ったよ」

玄関の方から二つの声。コンビニ買い出し組だ。大声で宣言しているはずなのに、フツーに帰ってきてフツーの声で挨拶をしたフウロとカミツレにユー・ユウは負けそうになる。

「だけど、そこは男の端くれ。負けるわけにはいかない！……ユー・ユウはなにと戦っているのか。」

「そう。明日、彼女を作って、ここにいる全員にそれを見せつけてやるっ。それで、僕にだって作れるってことを、女はお前だけのものじゃないんだということを証明してやる！」

さて、なんでこんな話になってしまったのか。目を合わせようとしなかったカトレアには、耳だけで意識していたカトレアにはよく分からない。

ただ、いまの宣言をした男がどうやらバカみたいだというのは理解できた。ああ、なんだ。やっぱり、第一印象の通りなんじゃないかと。

けれども、今は単純にバカなことを言っているだけだけでも、普段の彼はどうなんだろう？ やっぱり、今みたいにバカばかり

やってるのか？ いや、だけど、そうは思えない。

カトレアは、普通の人間とは少し違う。四天王だから、というだけでもない。人の力を見定めることに長けたジムリーダーよりも人のことが分かりやすく、そして、人間としての能力でも他の追隨を許さない。

そのカトレアが、ユーユウに対してのこれまでの印象は、やっぱり、バカ男。これが一番最初に出てきてしまうのだけれど、きっとこれは、ちよつと時間をかければ小さくなっていくんだろう。あのバカ男は、ほんとうの姿を見せてくれない。

けれど、あのバカ男も、いきなりとんでもないことをいう。周囲の怒りを買ってしまうことに気づいていないんだろうか？

因みに、自分はロイズとそんな関係じゃない。密接なつながりはあるが、それは、恋人とは違う。

それも含めて、ちゃんと本当のことをロイズが告げればなんの問題もなくなるのだが、多分出来ないだろう。カトレアは、ロイズが抱いている気持ちを知っている。ユーユウはどうやら、自分の心を偽って接してくれているようだが、ロイズだってそう。偽っている。つまりはどっちもどっちだ。

けれど、それに気づける立場にいるロイズは、自分の心に従ってしまっている。

『言いたいことは、それで終わり……？』

ステレオの音声。

両方の耳から入って来るまったく同じ言葉に、ユーユウは戦慄を

覚える。知っている。知っている声色にはなるのだが、身体の微妙な震えを止めることはできない。

いや、左右と、あとは正面からだったから、ステレオという表現が正しいのかは分からないが、どうやら言わなければ良いことを言ってしまったらしい。その理解は正しいものだ。

左からはビニール袋の擦れる音が聞こえ、右からは暖かな湿気を感じる。正面はもう感じるとか感じないとかではなく見るからに怒っていて、その正面からの声の低さと、左右からの声の低さがほとんど同じだということから、顔は見えなくとも表情を想像できた。

(……なんだか嫌な予感がする)

こういう予感あまり外れたことがない。外れたことがないくせに、いつまでもその後のうまい対応の仕方が思い浮かばないあたり、自分は相当に学習能力の無い人間なんだろう。

「フウロ、これ、しまっておくわね」

「ありがと、カミツレちゃん」

「トウコ、髪、乾かした方がいい……？」

「いえ、大丈夫です。わざわざありがとうございます、カトレアさん」

「……………」

あれ？ おかしいぞ。

どうしてだろう。カミツレもカトレアも、今どうなっているかよく理解していないのだろうか。

特にカミツレ。彼女の方は、こういう状況になったあとにユーユウがどうなってしまうのかは、カトレアよりも長く一緒にいる分、わかっているんじゃないだろうか。

いや、カトレアが、カミツレが、ではなく。誰だって、こういう不穏な空気の中、男一人が責められていれば、原因はともかくとしてその後どうなるかについては容易に想像がつくはずだ。

なのに、どうしてこの二人は何事もないかのようにしているんだ？ 普通、こういう時は援護というか、不利にならないようにするものじゃないのか？

そんな意思を込めた抗議の視線を送る。送り先は当然カミツレだ。カトレアへ送ったとしても、まともな援護は期待できない。嫌われているんだ、当たり前だ。

しかし、

「……………」

来ない。

ちゃんとカミツレの方を見た。カミツレだって、ちゃんとユーユウに目を合わせた。それでもこの状況を打開する一言をくれようとはしない。

無言のまま、肩をすくめるだけだ。なんとなく、口元が緩んでい  
るようにも見える。

だからもう、仕方ない。

自分の力でこれをなんとかするしかない。だが、原因がはっきり  
していないのに、すぐに解決などできるわけもなく、

「あ、あー……トウコがあがったんなら、次は僕が風呂入ろうかな  
ー」

逃げる。とりあえず、安全地帯の確保が第一。そう思ったのだけ  
れど、上半身は左右からガッチリガードされていて、足の方は思う  
ように動かない。

「は、入ろうかなー……」

動かない。

それどころか、左右および正面から来るプレッシャーが一層強く  
なった感じだ。しかも無言。いまの発言に対して誰もリアクション  
してくれない。

こういうのが一番苦手だ。行動を非難されるわけではなく、かと  
いって行かせてもくれない。いったいどうしろっていうんだ？

「あの、さ」

だから、思い切って話しかけてみる。この時点で、とりあえず、トウコに何か知らされるかもしれないというのは覚悟した。

「な、なに？」

ユーユウの声に答えたのはフウロだった。トウコとロイズは気を逃し、各々が唇を噛む。

「いやさ、その……………こういう風にされると、僕、動けないんですが……………」

「……………こういうの、嫌？」

「嫌とかではなくてですね？　こうされちゃうと、何もできなくなっちゃうから」

「……………はぐらかしたわね」

今度はトウコだ。

自然と、ユーユウを固める力を強くし身を寄せてしまう。フウロよりは遥かに劣る部分だけは、意識して寄せた。そうでもないときつと気づいてくれない。

だが、軽く見られるのはトウコは嫌だったので、意識して寄せたといってもそれが触れることはなかった。

「元と言えば、ユーユウが悪いんじゃないか」

ロイズは淡々とした声色。しかし、それでも震えている部分があ



って、決してなんの動揺もなく喋っているのではないというのは、ユーユウとカトレアには理解できた。

理解できたということに関しては、両者に差はない。ただ、なんでも動揺しているのか。それは、カトレアにしか分かっていない。

「悪いって………僕が、明日、彼女を作るってことがか？」

「そ、そう！」

「………なんでさ？」

「え………」

率直な疑問。

なんでだ？ そう尋ねた途端に、三人から勢いが消えていき、責める視線もなくなっていく。

ユーユウからすれば、わけのわからない現象だった。いきなり勝手に怒り出して、で、謝るにしても言い訳をするにしてもその原因が分からなければどうしようもないからと聞いてみれば一斉に黙り込む。

怒るんだけど、その理由は教えません。理不尽極まりない。しかも、怒らせてるといのは明らかなのだから、こちらからは強く出れない。

ロイズはともかく、フウロとトウコは付き合いは長くないが、だ

がそれでも、三人が適当な理由で怒り出すような人間じゃないことはわかってる。わかっているからこそたちが悪い。教えたらマズイことでもあるのか？

「……なんなんだか」

ボソリ、と呟く。

もちろん、誰も会話をしていないのだから、それはみんなに聞こえてしまっている。

「……………！」

と、ズボンのポケットにしまったままになっていた携帯が震える。誰だろう。思い当たる人間がいない。

いつもかけてくる人間はここにいる。だったら誰なんだ？

ポケットから取り出して、ディスプレイを見つめる。そこには、今日見知ったばかりの人間の名前が表示される。

それを見た瞬間に、ユーユウの目が急速に鋭くなっていく。鈍くなっていた感覚も無くなり、あのときの痛さを思い出す。

「ユーユウ君……？」

不安そうなフウコの声。一気に変わったユーユウの様子を気遣ったものだ。

フウコが気づいているということは、トウコも気がついていているということ、その二人が不安そうにすることによって、残りの三人もユーユウの様子が変わったことが分かった。

けれども、誰もユーユウの携帯を取ろうとしなければ、誰からのものか確認しようとしてもしない。いや、できなかった。

行動を見守らなければならなかったが、流石に、そこらへんは氣を使ったのだ。

「……………切れちゃいましたね」

言いながら、ユーユウは電話を再びポケットへと戻した。

「かけ直さないでいいの？」

「……………そうなんですけどね」

ユーユウは微笑しながら、ゆっくりと歩き出す。両方の拘束はすでに解かれている。歩き出したのを誰も止めようとしない。

「ホントは、かけ直さなくっちゃならないんですが、きっとムダだな……………」

と、ソファーの前まで来て、手をのばす。カトレアへ。

だが、カトレアに触るわけではない。何時の間にか彼女の下敷きになっている自分の着替えをとるためだ。

「カトレア……………ちょっとどいて。僕の着替え、下敷きになってる」

「……………そう」

案外、彼女の機嫌は悪くない。

悪いどころか、引つかかっていたものが多少取れたようで、無表情ながらもどこかご機嫌そうに見える。

素直にカトレアがどいてくれたので、ユーユウはすんなり着替えを手にとることが出来た。

「……………アナタの本当の姿を、少しだけ見させてもらったわ」

「本当、ね。……………自分でも、よくは分かっちゃいないのに」

ちよつとだけ自嘲気味に笑う。

その表情を真正面でとらえたカトレアは、思わず息をのんだ。そうして、ロイズやフウロやトウコなんか、このバカ男に入れ込むうとしている理由が少しだけだが理解できた。

「ロイズ、僕、先に風呂入っちゃうからな」

それだけ行って、ユーユウは脱衣所へと抜けていく。その間、カトレアはずーっとユーユウを見ていた。

別に、好きになったとかそういうわけではない。だが、そういう行動があの人三人に誤解を与えてしまうのは確実で。

「姉さん……………」

いつもだったら絶対に出すことのない低い声をロイズに向けられ

る。濡れ衣だ。濡れ衣になるのだけれども、何かを言うことはない。言っても多分ムダだろうし、それに、人を惹きつける何かを持っているらしいというのは事実だ。

（いろんな意味で、アタクシの眠りを妨げる、野暮な人間、ね）

そんなことを思う。

本当は、このあとにため息が続くのだけれども、今は出さないほうが良いんだろう。

風呂場のほうからシャワーの音が聞こえる。三人は聞き耳を立ててしまっているの、しばらくは役に立たない。ちょっと助かった。きつと、ユーユウがシャワーを浴びはじめなければ、しばらくの間、ロイズの冷たい視線を浴びつづけなければなくなってしまう。

事の推移を見守るだけだったカミツレを手招きして、一緒にソファに座らせる。彼女の両手にはコンビニで買ったとおぼしき缶のアルコール飲料が握られていた。片方はすでにプルタブがあげられていて、カミツレが口をつけている。

カトレアだってこういうのは飲む。ビールなんかは苦手だが、ジュースの延長みたいなこれは、結構好きだった。

無言で缶を受け取り、タブをひとりでに開けさせる。一度口に運んでから、カトレアは口を開く。

「カミツレ。あの子、どういう子なの……？」

「どついつ子？ カトレアさんも、ユーユウ君に興味がありますか？」

「そうではないわ。……ただ、あのバカ男、ホントの姿を見せてくれないのが気になってるだけ。普通なら、泣いて、誰かに甘えたいでしょうにね」

「……私たちがいるから、なんでしょうね。自分で言っていました。一人にしてくれないから、あんたらがいるから、出来ないんだろ、って。そのすぐ後に、だけど、側にいてくれ、とも」

「なにか情報は得られた……？」

「ユーユウ君自身、なにか隠してるみたいですが……」

カミツレは首を振る。

あの校長だって、結局のところ、大事な事はなに一つ知らないみたいだ。

トカゲの尻尾の部分。もうすでに切られてしまったと考える良いだろう。

サカキは、ユーユウに接触して来た。フウロからの話によると、勧誘をしていた。ユーユウが何かしらの情報を持つてると考えたほうが良いのだけれど、強引にはできない。

それどころか、なにをどう間違ったのかは知らないが、偶然昔から一緒にロイズはともかく、フウロやトウコさえ成果をあげるところからユーユウに取り込まれそうだ。

すぐに知るべきなのに、強引にはできない。  
ならばカトレアがなんとかするところにいるのだが……慎重にや

らなければならない。

やることは決まっているのだが、カトレア自身、やったことのないことだ。最新の注意を払うが、それでも万全かどうかは分からない。

そしてなにより、ユーユウだけにバレるならまだしも、あの三人にまでバレてしまったら、恨まれること間違いなしだ。さっきの敵を見るような視線が後二つ増え、カミツレからも変な目で見られるだろう。対象のバカ男からは……まあ、いいか。

とにかく、そういうことにならないようにしなければ。事前にこの場で話すことが出来ないことだ。バレないように、ポケモンバトルの時よりもずっと集中して臨まなければならない。

11・や……（前書き）

R - 15 なんだから、このくらいは良いですよね？



人生の話をしよう。

一生。人の命の長さには大きな差異があるのだけれども、まあおおよそ、事件事故にあったり重い病気になったりしなければ、七十余年程度は生きられる。

その間には、大小様々な事があつて、当然よかった事があつて、もちろん悪かった事もある。

よかった事がずっと続く事はないだろうし、悪い事が延々とつきまとうという事もきつとないはずだ。

だからきつと、合わせてみればちょうど良いくらいなんだ。ぴつたり真ん中、というわけにはいかないけれども。

たとえ若い頃に苦勞をしたとしても、晩年には樂ができるかもしれないし、その逆もある。全員が全員そのはずだと断言は出来ないけれども、きつとそのはずだし、そうであつてほしい。

そう思えば、思う事ができれば、明日へと進んでいく足に必ずかかっている枷が、なくなる事はないだろうけれども、その重さを減らす事は出来るだろう。

そう思えば、生きていける。生きていく可能性が高くなり、心の余裕が出来る。

心に余裕ができれば、頑張っているご褒美を自分に与えられるだろうし、自分で自分に「ご褒美出来なくとも、もしかしたら誰か他の

人がくれるかもしれない。

そんな風に考えると、確かに、人生は最高だ、なんてのたまいたくなる気持ちも多少はわかるというものだ。

まあ、つまりだ。なにを言いたいかというと、

「……………」

「……………」

真夜中、ユーユウは、自分の母親が使っていたベッドのなかで、カトレアのことをギュッと抱きしめている状態にあるという事だ。

さて、どうしてこうなったのか。

いや、別に複雑怪奇な理由があったわけじゃない。夜になって、寝なければならぬのだけれども、様々な事があつたためか、ユーユウの眠りは浅くなってしまい、少し眠っては起き、また少しだけ眠り、を繰り返していた。

何回目だったろうか。浅い眠りからさめたユーユウのすぐ前に、これまでにはない大きな影があつた。最初は目が慣れていなかったから分からなかったが、少し時間が経つと、それがどうやら人のものであるというのは分かった。一緒のベッドの中で、外に出されない様に必死に身を寄せている。

もともとユーユウをあわせて六人全員がベッドで眠る事は出来ず、

ベット組とソファー組とで別れる事になった。ならば何人かはカミツレかロイズのところに泊まればいいだけの話じゃないかと提案してみたが、誰一人、特に、フウロ、トウコ、ロイズの三人が強く反対したがためにそれは却下された。

それぞれの部屋のベットに二人と、ソファーに二人。トウコが持っていたキャンプなんかのアウトドアで使う寝袋が二つあったのでとりあえず、眠る分には困らなかった。

両足がやられたままなのと、流石に最近亡くなった家族のベッドに、一応ではあるがお客様を眠らせるわけにはいかなかったのでユーユウがそこを使うことになった。

だから、自分の部屋に置いてあったバレるとマズイものを、孤独で特別な一人の時間のときに使うものと一緒に持ち出して、分らないように隠し、部屋の鍵を閉めた。

人影が見える、といっても入れるわけがないのだ。だからこれはそう。いるはずのないものがあるということは、夢であることに違いない。

ユーユウはそつと右手をのびし、その人影の股間にあたる部分をまさぐった後で、胸のあたりに手を置いて、さするようにした。

男ならばあるべきものがなく、また、普通ならばないところが出ている。なだらかではあるが。

「や……」

抱き寄せるようにする左手に伝わる感覚によって、こいつはどうやら華奢な体つきをしているらしいというのははっきりしたので、女だと断定するのに時間はかからなかった。

女。女が、どうやら目の前にいる。そして、今は夢の中だ。なんの遠慮もする必要はない状況だ。

正直力ミツレたちが来てからというもの、ユーユウとしても溜まる一方で、もうそろそろ我慢の限界というところだった。目の前の人間には絶対にならないものが自己主張をし、女とおぼしき身体に擦り付けられる。

そう、これは夢。

夢なんだから、ためらう必要性は皆無で、戸惑う心を持ち合わせる必要もなかった。

「……………！？」

本心の赴くままだ。

左手で腰を寄せさせ、右手は頭の後ろにまわして唇を重ねる。

やけに力強く抵抗するあたり、自分の想像力もたいしたものだとユーユウは感心する。もしかしたら、あんまりにも毎晩の訓練を積み重ねたために、熟練度が上昇し新たなとくぎを会得したのかもしれない。それは、ちよつと情けないことでもあった。

唇と唇をあわせ、ついにユージュウは舌をいれる決意をした。どういう風にやるのかは映画なんかでしかみたことがないので分からなかったが、どうせ夢のなかなんだ。ヘタクソでも誰も文句は言わないし、じっくりやればいい。

どうせ起きたらなかったことになる。

だから、起きていたら絶対ためらってしまうことをなんの躊躇もなくやってしまえる。感覚がいつもの夢よりクリアーなのは、きっと、夢を司る神様がオマケしてくれたに違いない。

だけれども、ちょっとは焦らすんだろうか。舌を絡ませようとしたのだけれども、向こうのシャッターはさがってしまっている。

でも、きつとこじ開けれる。

そう。この前、ネット上に転がっていた動画では確かこうやっていた。

腰を寄せさせている左手を、さっき右の手がそうしたように女の股の間へと滑り込ませる。

手探りで割れ目の部分を探し、その間、女は逃げるように身体をよじらせるのだけれど、ユージュウが足とあしをしつかりと絡めさせていたので、逃げることは出来ない。

1分かからないくらいで探しあて、これも動画から得た要領で、気持ちよくなってくれる様にとこすってみる。

「ん、ん……………」

効果が出たのか諦めてくれたのか、相手はユージュウの舌を受け入

れる気になってくれたようだった。すかさず絡ませて、だけど左手の動きはやめない。

相変わらず、相手のほうは身をよじらせているが、ユーユウの行為に抵抗するのではなく、まるつきり受け入れての行動のようだった。動きの一つ一つに、さっきのような必死さはまるでない。

それが分かったユーユウは、ズボンのなかに手を入れて直接触ってみることにした。びっくりした様子が伝わってくるが、それだけみたいだった。

手を入れて、ズボン越しに触れていたところを、今度は下着越しに触れる。湿り気を感じた。

(……………湿り気?)

え?

今度は、ユーユウが驚いて身を固める番になった。夢の中。それは間違いない。夢の中にいるはずだ。

なのに、湿り気、だ? 明確にわかるくらいに濡れている? おかしい。

よくよく考えてみれば、触感だって、口の中の感覚だって、どこか妙だ。ユーユウは、こんな感じの夢をふた月に一度くらいのペースでみているのだけれど、しかし、これはちよつと、感覚がクリアー過ぎるんじゃないか?

それに、いつもだったらこんな風に考えることも出来ないし、後

から思い返すとなんでこんなことをしたんだという行動も今のところない。夢の中でこんな風に疑問を感じること。

ブブブブ。

「……………!?!」

枕元においていた携帯がバイブする。頭に浮かんでいた疑問と、携帯の挙動によって目が一気に覚醒した。

本当は空になっていくとちやならない右手をのばし、電話を手に取り顔の正面でロック解除させる。

暗くなっていたディスプレイに光がとまり、ユーユウは目をくまらせる。それはすぐに慣れて、どうやらメールが届いたらしいというのは分かった。

それを開封すると、どうやらアダルトサイトから来る金額請求に関する内容が記載されていた。このサイトには登録した覚えはない。当然架空請求になるわけだから、こんなものは無視すればいいのだけれども、一つ、とても無視できそうにないものをユーユウは視界にいれてしまっていた。

見知った顔だった。

だけれども、それは、自分が今まで見たような無表情じゃない。そして、怒らせたときに見た顔とも違っている。目はトロンと垂れ

下がり、息は荒く、興奮した様子のカトレアがいた。

夢じゃなかった。認めたくないことを、認めざるを得なくなってしまうて、ユーユウはなにを思っわけでもなく右の手でカトレアをキツく抱きしめていた。

引っ叩かれるか、と思った。いや、むしろ、抵抗して欲しかったというのが正しいのかもしれない。だって、抵抗してくれれば、やっぱり夢なんだと考えられる。

舌をいれるときとか、下着越しに触るときに弱い抵抗しかないで、こっやって抱き寄せるときには引っ叩くというのは、とうてい納得できるものではない。

だが、そんなことはない。

引っ叩くどころか、抵抗するどころか、カトレアの側から、ユーユウの背中へと自身の腕をまわして来た。ちなみに、ユーユウの左手は未だ下着越しだ。カトレアからも抱きついて来たがために、もう自分の意思だけで抜くことはできないだろう。そして、そこには変わらず湿り気があって、何かが溢れてきそうな気配もあった。

「……………」

「……………」

密着している部分から、互いの鼓動を交換する。どちらの鼓動もとんでもなく早い。



……どうすれば良いのだろう。全く分からない。

しかし、現実か夢かの区別もつかないなんて。確かに色々なことがありすぎて感覚が麻痺してしまっているのかもしれないというのはあるけれども。

一生。七十余年程度。

それだけ長ければ、良いことも悪いことも起きる。想像していたよりもはるかに上手くいくことがあれば、まったくからっきし上手くいかないということもあるだろう。

しかし、これは、あまりにも酷い。

人生は最高だ？

誰だそんな無責任なことをのたまった奴は。ぶっ殺されたいか？

「……………」

「……………」

お互いに何も言わない。いや、言えない空気のままに時間がすぎる。カトレアとしても、潜り込むのは覚悟の上だし、バレるかもしれないとは考えていたが、まさかちょうどタイミングよく起きられ

て、おそらく寝ぼけた状態のままで襲ってくるとは思わなかった。自分の意思でやっているのかと疑いもしたのだけれど、そんなはずはない。フウロやロイズ、トウコなんかがどうして怒っているのかも理解できない人間に、まともに起きている状態でできるわけがないのだ。

もつと驚いたのが、それを享受しようとしている自分がいた。いてしまっているという事実。思い知らされる。

このバカ男のことを好きなのは分からない。だが、受け入れた。受け入れられた自分がいる。

(……殺される、かもしれない)

そんなカトレアの気持ちなどつゆ知らず、ユーユは自分の身を案じ、それから諦めていた。

さすがに、これで許してもらおうというのは絶対に無理だということぐらい、理解できる。

だが、

「……………ねえ」

「……………な、なに……………」

「つ、続き。アタクシにしたことをやり遂げるつもりは……?」

「は、はあ?」

こういう反応をしてる、ということは、許してくれるという解釈で問題ないんだろうか。でも、なんでだ。なんでここにいる? 入れるはずがないのに。いや、そもそも、なんでベットに潜り込むなんて事をしなくちゃならない。

「ないよつ。そんな……」

「でも、あんなこと、してきた」

「そ、それは、僕は夢だと思っていたからで」

「夢だったら、良かったの……?」

ああもう!

どうにもならない。説明したくないところに食い下がってきて、本当はこっちが質問したい側なのにそれをさせてくれない。

物欲しそうな視線は痛く、ユーユウの中にある、質問しなくてはという意識を削いでいく。引つ叩かれたときのイメージが強いのに、今のカトレアとそれとはまったく合致していない。

頭の中にあるとげとげしかった印象は一気に抜け落ち、最初に容姿を見たときの、保護欲をそそられるイメージが戻ってくる。そう、そうだ。

自分は、カトレアの見た目は、だいぶ気に入っていたんじゃないか  
ったか……？ ロイズに、今までの不遇の愚痴をぶつけたくなるく  
らいに。

「良かったとか、そういうんじゃない……」

「そうね。夢だったらとか、夢じゃなかったら、なんて関係ない。  
あつたら、アナタ……ずっとこうはしていない……」

カトレアはユーユウを見つめたまま。見つめたままなのだけれど、  
彼女の言っていることのさすところは伝わっている。

もじもじと足を擦り合わせる。カトレアとしても、もう辛抱なら  
ない。ユーユウもそれを自分の左手、指先を通して感じ、だがしか  
し、どうすれば良いのか分からず、ただ戸惑っていた。

「か、カトレアだって、ろくに抵抗しない。むしろ、くつついてき  
たじゃないか。自分だって、本当は、僕にこうされるために潜り込  
んだんじゃないか？」

動揺しながら、カトレアに言葉を返しながら、ユーユウは左手を  
ズボンの中からなんとか抜けないかと苦心する。下着越しに触って  
いた指は、あまり動かすようなことはしていないはずなのに、もう  
びちょびちょになってしまっている。

そして、カトレアは片方の手を背中から離し、ユーユウの左腕を  
おさえる。

どうということなんだ！？ それを口に出そうとしたのだけど、出

せなかった。

さつき寝ぼけた状態のときはユーユウからだったが、今度はカトレアの側から口を塞いでいた。

（は……？　なんで………！）

まったく意味の分からない行動だった。カトレアは、自分の意思でここまでできた。どんな目的があったかは知らないが、こんなことをするために来たのではないはずだ。

なのに、なんでこんなことをされている？

確かに、カトレアは夕飯時にアルコールを飲んでいて。だけど、こんなにも時間が経ったあとにもそれが残っているわけがない。それに、こういう行為を自発的にやるほどには飲んでいない。

つまりは、そうだ。

今、間違いなく、カトレアは自分の意思でこうしている。

唇は、それほど長い間くっついてはいなかった。たとえ二人にとって果てしなく長い時間に感じようとも、実時間は10秒にすぎない。

「……………な、ん、で？」

自分からするのと相手からされるのでは感じ方がまるで違うというのをユーユウは実感していた。だから、カトレアの唇の感覚は、

二度目になるのだけれども、ああ、気持ちいいなあ、というくらいのものでしかなかった。

そして、それはもう離れてしまったから、本当はどうだったのかなんていうのは分からない。

ユーユウの問いに、カトレアはなにも言えない。というのも、さっきのあれは、咄嗟にやってしまったことで、考えてそうしたわけではないことなのだ。

ポケモンバトルのときもそうなのだけれど、あまり思い立ったら、とか、咄嗟の判断で、というのはあまりしない。こうしてきたらこう、こうだったらこう、という風に、その時々で悩んで、しっかりとした答えを出してから行動するのがカトレアだ。こういう風に、自分の意思に寄らない行動をし続けるのは違う。

だったら、これは、いつもとは違うのだから、本当の自分じゃない？ もちろん、そんなことは言えない。特に、こうやって、無意識でやるということは、まさに、本当はこうなんだよというのを示されているということになる。

「カトレア……………その、さ。な、なんでこんなことを……………」

もう一度聞かれる。

だけど、なんて答えたらいい？ 自分からこうやって唇を重ねたわけを、ああいうことをされて、今まで自分がやってきていたのは数段違っくらいに濡れた下着と。

分からない。

顔を合わせるのも、すごく恥ずかしい。まともな精神状態である。それは間違いないはず。間違いないはずなのに、こうなってしまうている。

けど、ユーユウはこういう反応をしてくれるということは、少なくとも、嫌なことではないんだ。それは、とても嬉しい。

（嬉しい……？）

なんだ、それは。

そう感じてしまうということは、さっきは否定したのだけれども、やっぱりそういうことなんだろうか。

いや。

違う。ちがう。違う、はず。違ってるんじゃないだろうか。ちがうって、ちょっとはかんじたけど。違うかもしれない。違うの、かな。え？ 違う？ 違うってことは、ないと思うけど。違わない、かもしれない。違わないんじゃないかな。うーん…… 違わないよ。違わない。なにいつてるの？ 違わないわ。

そう、合ってる。

嬉しいと感じた。そこから予想される、自分の彼に対する気持ち。違わない。違うはずがない。だけど、なんというか、確証がもてない。宙ぶらりんになっている感じ。

（心が読めれば、苦しくないのに……）

こんなことを考えるということは、カトレアは、自分がなにをしにきたのかまったく忘れてしまっているということだ。

しかし、宙ぶらりんだということは、まだ確実じゃなくて、もしかしたら、一時の気の迷いでこういうことをしてるのかもしれない。

他に誰もいなければ、こんな感情でもいくところまでいってしまっただけでも、そうじゃない。いる。少なくとも一人は。ユーユウに、完全に入れ込んでしまった人間が。

その人の存在が、この行動のストッパーになる。そう思うことで今のこれを、やめることができる。

「カトレア？」

「……………」

でも、だけど……………惜しい。

やめてしまうのが、とてももったいない。もし、もしも、もし万が一、いまこのときの気分でこうしたのではなくて、心の底からの気持ち、本気だったら、これはチャンスだ。

ユーユウの左手は、見つければ言い逃れのできないところにあり、そして、自分はそれを嫌がっていない。彼はずっと困った状態のまんまにいる。つまりは、こっちの思った通りにできるということになる。

それなのに、こんな好機なのに、自分から逃してしまう。良いのか？ そんなことをしてしまっ



そんな動揺が、密着していた体勢に隙を与えて、左手を抜き取るチャンスを与えてしまった。

さっきからそのことばかりを考えていたユーユウは、当然、自身の手をカトレアのズボンから引っこ抜く。

「な、なにをしているの……！」

「な、なにつて、カトレアが押さえつけてきかないから、無理くり抜いたんじゃないか」

「そ、それは、ここにはくはないけなかつたの！」

「そんなの無茶苦茶だ！ だいたい、こんなのがバレたら僕ら、殺されちゃうかもしれないんだぞ！」

「うるさいバカ男！ 自分に向けられてる気持ちも知らないで、都合の良いこと言わないで！」

「き、気持ちつて、なんのことを言つてる！？」

驚いた。

空いた口がふさがらない。この男は、まるで気づいていない。言葉を返そうと思ったのだけれども、しゃべる気力もなくなってしまった。

「アナタ、ホントに分かってないの……？」

「だから、なんの話になつてるんだ？」

「……………」

「あん？」

「はあ……………やっぱりバカ男」

なんでこう、至近距離であからさまにため息をつかれなくてはならないんだろう。ユーユウにはさっぱりわからなかった。

ただ、この様子を見るに、もうおかしい行動をとったり、こつちのやったことを責めるようなことはしなさそうだ。

「しかも、最低クラスのバカ男、ね」

「……………ひっでえ言われ様だ」

「そう？ アタクシからすれば、かなり適切な表現なのだけれど」

言葉はかなりひどいが、暗い中で時折見える表情は笑っている様に感じられる。夜じゃなかったら、それをはつきりと見られたろう。

ユーユウの頭には無表情のイメージがやはり強いので、今のこの暗さはちょっと恨めしい。

明るければ、その微笑しているであろう顔をじっくりと眺められるのに。

「ん……………」

変わらず、ユーユウとカトレアはくっつきあって、抱き合っている。こういう話をしているが、二人の鼓動の早さはとんでもないものだし、おっ立つ部分はそのままだし、濡れるべきところからは今

もそのドロリとした液体が供給され続けている。

だから、こうやって話し合ってるのはただの誤魔化しだというのは正解かもしれない。けれども、二人にとっては救いだ。

こういうことをやらないと、勢いに任せてとんでもないことをやってしまうという危機感が、二人ともにできていた。

本当は、どちらかが出て行けばそれで済む話なんだというのは、二人とも理解している。しかし、ユーユウは、爆弾が大量に置かれている部屋に誰かを残して自分だけ出ていくなんて絶対に嫌だし、カトレアは今は立ち上がれない。それに、濡れたトコの処理も必要だ。

けれども、そんな状況は長くはもたない。

というのも、今は深夜。みんな、普通なら眠っている時間だし、夜更かしが好きな人だって、襲って来る睡魔に負けてしまうような時間だ。そして、ユーユウもカトレアも寝るのが大好きな人間。

今の自分らを考えると、昼間ならばもつのだけど、夜はもたない。

先に睡魔にやられてしまったのはユーユウだ。カトレアはもうちよつとだけ粘れた。

出ていくことも、本来の目的を達することもできるくらいの時間はあった。

しかしながら、カトレアはそれを、あろうことが先に寝てしまったはずのユーユウに最後の口づけをするのに使ってしまう、それから夢の中へと落ちていったのだった。

## 12・それは、ないな

目覚めは最悪だった。それもこれも、部屋の中に侵入してきたカトレアがちゃんとカギを掛け直さなかったからだ。

フウロのものが、トウコのものか、はたまたロイズのものか。それは分からなかったが、絶叫によって目覚めたという状況。もちろん、そういう状況の中で目が覚めたということは、ベッドの中がどうなっているのか、言い逃れが絶対にできないところをおさえられてしまったということだ。

すぐにひつpegがされて、部屋から出されてしまう。左右両方を抱えられている様は、もう犯人連行という言葉がしっくりくる。

ユーユウとカトレアはソファアへと座らされ、正面にトウコとフウロ、ユーユウ側のソファアの後ろでロイズが立っていた。

キッチンで朝食を作っているカミツレは、そんな様子を見ても、こちらを助けようという素振りはない。というか、なんで鼻歌交じりなんだ！？ 面白がってるようにしか思えない。

「さて、とりあえず、経緯を聞かせてもらおうかしら……？」

座り込むなり、いきなりトウコの低い声が飛んでくる。敬語じゃないから対象はユーユウだ。正直、やってられない。

なぜこんな朝っぱらから、犯罪者よろしく取り調べまがいなことを受けなくちゃならないんだ？ まだ眠いの無理やり起こされて、しかも飛んでくるのが冷たい視線と低い声。ユーユウとしてはいち早くベッドへと戻りたい気分だ。

「経緯もなにも……僕は普通に寝ただけで、だから、聞くのなら、僕じゃなくって、カトレアの方が……」

「経緯を聞かせて欲しいなあ……」

今度はフウロ。

ダメだ。

まったく、こっちの言い分を聞くつもりはないらしい。困った。しかも、頼みのカミツレは助け舟を出すことはなさそうだ。

カトレアは……まったくダメだ。早く起こされてしまった。いつもの睡眠時間じゃない。それは分かるし、自分だってそうだ。けど、なんでこの状況で眠っていられるんだ？ この、身体中を焼くような強烈な視線が気にならないのか。

というか、尋問してる三人はいいのか？ これじゃあ個人攻撃してるだけじゃないか。

もちろん、ユーユウはそんなことを口に出せるわけもなく、ただ、向こうの言い分に対してハイハイと頷くだけという心づもりだ。言いたいことは山ほどあるが、言ってしまったら多分、悲惨な目にあってしまうだろう。そこらへんは学習した。まあ、起きたなりにトウゴにぶっ飛ばされてしまったわけだが。

「経緯、ねえ……と言っても、僕からは、あんまり話すことは無いんだけど……」

ガッ。

ユーユウがそこまで言ったところで、背後にいたロイズからおもいきり両肩を掴まれる。

ギリギリと音をたててるんじゃないかというくらいに力を込められてしまっている。ものすごく痛い。まったく手加減してくれていない。

「ユーユウ。そんなはずは無い、なあ……？」

「い、痛いんだけど」

そんな風に言ってみると、握って来る力がさらに強くなるのだからたまらない。一応は怪我人のはずなのだけけど、そういうのはまったく考慮されていないみたいだ。

だから、仕方ない。

喋ることのできる範囲内で、本当のことを言うしかなかった。カトレアを売ってしまうことになるが、大事な部分をぼかしてしまえば、今回は完全に被害者だと言える。彼女だって、夜あったことすべてを包み隠さず話して欲しいとは思わないだろう。

「はあ………だからさ、僕が言えることはあんまりないんだって。ドアのそこは力ギをかけてて、カトレアがいつのまにかそこを乗り越えてた。それが全部だよ。そうなった理由も、なんで出てかなかったのかも、僕は知らないんだ」

知らない。

そう告げるとほぼ同時に、疑惑の視線を向けられる。しかし、こうとしか言いようが無い。

部屋に入ってきた理由も、出ていかなかった理由も、本当に知らないのだから。言ったら命が無い部分をぬいてしまったら、ユーユウが言えるところは本当にこれだけなのだ。

けれども、あんまり納得してくれてはいない様子。だったらカトレアを起こして、そっちに尋ねればいいはずなのだが、誰もそうしようとはしない。本当、心底ため息をつきたい。目一杯に。

「だからさ、カトレアに聞いてみてくださいよ。僕が言えることなんて、ホント、これだけですから」

そう言ってみる。言ってみるが、フウロもトウコもロイズもそうしようとはしない。開放もしてくれなさそうだ。

こんな朝っぱら……ではないが、起きたなりから連行されて、寝癖をなおすことも歯磨きをすることも二度寝をすることも許してもらえない。勘弁してくれ。ユーユウは肩をすくめたい気分だった。キツく掴まれているので出来ないが。

「さて、みんな、もうそろそろ朝食だから、さっさとケリつけなさいよ」

カミツレの声。心配する様子はない。本当に、ただ、知らせる為に言っているだけだ。こっちから何回も援護要請をアイコンタクト

で送っているのに、まったくきいてくれない。

ああ、なんか、ジムリーダーって冷たいなあ。と思わないでもない。きつとユーユウがこれを言ったら、この尋問にガソリンを注ぐくらいのことはやってくるだろう。

苦し紛れにテレビのリモコンに手をのばしてみるが、たいしたニュースはやってない。なんちゃらベ이스ターズとかいう球団が、シーズン前半時なのに自力優勝の可能性が消えたとかなんとか。毎年恒例の行事だ。ユーユウはこの野球チームのファンではないので、ああ、今年もそんな季節なんだなあというぐらいの感想しかない。

ただ、こういうくだらないニュースでも、なにもないよりは全然マシだ。もしこれから怒られたとしても、こういう雑音に意識を集中できるから、辛さをあまり感じないで済む。

悪いと思ったときは真面目に聞くつもりでいるのだけど、今回のこと、本当にこちらが悪いんだろうか？

いや、カトレアから責められるならまだ分かる。完全にユーユウが悪いんだから、なにをされたって文句は言えないし、どんな罰でも甘んじて受ける。

しかし、なんで被害者でもない人間が怒るんだろう？

（聞いてみたいけど……やっぱり怒られるのかな……）

けど、このまま一方的に言われっぱなしになるというのは気に入



らない。

「ユーユウ君、なんで私が怒ってるかわかる？」

「さあ？ 昨日のも、ですけど、なんでそんなに怒ってるのやら...」

「.....鈍感」

「はあ？」

なんでそんな話になる？

思いもしなかったフウコの言葉に、ユーユウはすぐさま食いつく。言っことにこかいて鈍感？ どこが？

さっぱり分らないし、納得も出来ない。

「僕は、自分では結構、感性は鋭い方だと思ってたんだけど.....」

「それは、ないな」

「ないわね」

「ユーユウ君、本気？」

「キッチンから失礼するけど、私もないと思う」

「.....バカ男」

いつのまにか起きていたカトレアからも否定される。非難号号である。ユーユウからすれば到底納得できるものではない。

なんでこんな朝っぱらから、こんなことを言われなくっちゃならない？ で、なぜにカトレアはこっちに寄り添って来るんだ？

その様子を眺めていた三人の、ユーユウに対する視線がさらに冷たいものへと変わっていく。視線は冷たくなっていくのに、三人が三人とも笑っているのが不思議だ。

多分、これを指摘したらトウコにぶっ飛ばされるんだろう。

そこまで分かっってしまうから、ユーユウの背中を汗が流れていく。部屋の中はまったく暑くない。そして、その汗を抱きしめるようにしてぬぐってくれた手があった。言うまでもなく、カトレアだ。

「こ、こいつまだ寝ぼけてんじゃないか!？」

ユーユウからすればもう必死の抵抗である。ぶわっと一気に背中に冷や汗をかく。これだったら、ぬぐってもらわないほうが全然良かった。

そして、その表情は笑顔になっていくが、フウロたちのものとはベクトルが違う。流石に、今こういうことをされたらどうなるかなんて誰にだって分かる。もう泣き出したい。

「……ユーユウ」

「う……………」

うめき声を漏らしたくなるのを必死に飲み込む。いつもこうなると暴力的な行動をするのはトウコだった。今回もそうなるんだろうか？ 笑顔がすごく怖い。

でも考えてみて欲しい。今のこれは、こっちからは何もしてない。向こう側が、勝手にしてきたことだ。だから、こっちは悪くない。悪くないはずだ。

こう言いたい。自分に非のないことを主張したいのに、口がうまく動いてくれない。余計なことはペラペラペラ出て来るのに、肝心なときはこれだ。一体全体、どういつくりになってるんだか。

「バカ男……嘘つきはいけないと思う……」

「な、な、な、何を言ってる！　嘘なんかついてない！　ぼ、僕はっ、他人に話せないようなことなんかなんにもしてないっ」

あきらかに動揺した態度。

それがさらなる怒りを買うことを、ユーユウはちゃんと分かっているんだろうか？　いや、分かっている。分かっているのに、それを回避することが出来ない。

口が乾き、背中の汗は出続ける。身体中の水分がもってかれてる感覚。命の危険が迫ってきているわけではないはずなのに、強烈なプレッシャーと金縛りになってしまいくらいの緊張感。しかも起きたなりだ。

「カトレアさん？　どうということなんです」

キッチンからのカミツレの声。もう最悪である。たまらないころではない。

しかも、カトレアの方も、ギュッと密着して、それからユーユウの胸元で頭をスリスリさせて甘えている。絶対にわざとだ。

（こ、こいつら、僕を保護するって………ぶっ殺しに来たんじゃなからうな……？）

まともな状況なら、そんなことはないんだと分かるのだけれど、こんな状況だとそういう想像もしてしまう。

しかしとりあえず、胃に穴をあけにきたのは確定だろう。これは間違いない。確認をとってはいないが、これを否定することのできるようなものを持つてはいないはずだ。

「ユーユウが、アタクシにいやらしいことをしたの」

「おいーっ!？」

ど真ん中直球。

これで確定した。

カトレアはユーユウを殺しにきたのだ。そうでなかったら、顔を赤らめてこんな恥ずかしいことを何も知らない人間の前で言うわけがない。

「ライ、ドワイウコトダ……」

ギギギ、と機械のようなギクシャクした動作でトウコは立ち上がり、ゆっくりとユーユウの顔へと手をのばしていく。

怖い。とんでもなく怖い空気を纏っている。自分の母親に怒られた時だって、こんな感じではなかった。無事で済むことはないと相手に確信させるほどの凄み。黙っていれば可愛いのに、なんだってこんな、と思わないでもない。

「と、トウコ……その……もったいない、ぞ」

「ア……？ ナンノコトヲイッテル？」

「そ、そ、その………そういうふうに怒っちゃったら、その、男が、寄ってこなくなっちゃうって……せ、折角さ？ 可愛い顔、してるのに」

こういう顔にさせた原因を分かってないのか、と声を荒げることにはなかった。ユーユウとしては、そうやってちよつと怒らせてからなんとか話をすり替えられないかと考えていたのだけど、

「……………」

あれ？ どうして黙ってしまふんだろうか。トウコだけではなく、フウロも、ロイズも、そして抱きついたままのカトレアも、身をかくしてしまっている。カミツレはというと、

「……………あらら」

こんな反応である。

なんだ？ これって、こういう反応が来るっていうのは、さっきのはそんなにいけないことだったのか？

「あ、あの……ユーユウ？ そ、その、今のって、どういう意味……」

「…？」

恐る恐る確認して来るようなトウコの声色。

実際、今のユーユウの発言は、そこまで悪いものではなかった。気をそらす意味でも、怒りをなだめる意味でも。

だけどそれは、怒っているのがトウコだけで、マンツーマンだった時の話だ。事実、トウコからは、怒りの色は完全に抜けてしまっている。

「バカ男っ！」

「痛っ……！？」

で、その雰囲気がまるまるカトレアに乗り移った、と言ってしまっ  
って良いだろう。抱きつかれていた肩が、目一杯の力でつねられる。  
たまらずカトレアの方をみると、若干ではあったが、目尻に  
涙が溜まっているのが見えた。

「え……？ あ………カトレ、ア……？」

これには流石に心を動かされる。というより、意味がまるで分  
からない。今の発言のどこにカトレアを泣かせてしまうような要素が  
あったのやら。

けれども、やっぱり泣いているらしいというのは事実で。目尻に  
たまりきった雫が一つ、二つ、とカトレアの頬を伝った。

そんな彼女の様子を、周囲の人間は口を開き、心底驚いた様子で見ている。部外者であったはずのカミツレも例外ではないということとは、カトレアを泣かせたというのはよっぽどのことなのか？

そういうふうになると、悪いことをしたなあ、という罪悪感がユーウの中に生まれるのは当然だ。ユーウからしてみても、こうやって女の人を泣かすような事をした覚えがない。

「え？ あ、あの……な、なんで………？」

かといって泣いている理由も分からないので、かろうじてこんな弱々しい声を捻り出すのが精一杯だ。

そしてそれは、分かってくれていないというのを明確に誤解なくカトレアに伝えていた。

だから、ポロポロと、ただ漏れていたただけの涙はいつのまにか止まらなくなる。

「バカ男っ……バカ男……バカ男……」

念仏でも唱えるかのような恨めしい声。泣き顔を見られたくないというユーウのシャツに強く顔を押し当てたが為に、それは一気ににじんできく。

どうすればいい！？ 助けを求める視線を同級生に送ってみるが、それは間違いだったかもしれない。今のカトレアの様子に一番驚いているのがロイズだった。

昨日の一件から、どうやら、付き合っているわけではなさそうだ

ったけれど、ただ、親しい間柄にあるという見立ては間違っていないと思う。そのロイズがうるたえている。視線は合わず、口は金魚みたいにパクパクさせている。

ユーユウ自身、この同級生がここまで動揺しているのを見た事がない。もしお前が女だったら、速攻で襲ってやるよ、と言ったときでもこんなではなかったはずだった。

「うえっ……うええっ、うええええん……」

で、ついには声をあげて泣き出してしまふ。うええ、と言いたいののはこっちのほうだ、なんていうのは口が裂けても言えないし、女性を泣かせているこの立場では、きつと、何を言っても悪者になってしまう。

というか、こんなので本当にカミツレよりも一つ年上なのか。フウロの方は……まあ、いいや。

抱きつかれたままこんなことをされるのは非常に良くない。社会的にはもちろんそうだし、その、こういう密着というのは昨夜のことを思い出してしまふ。精神衛生上でも良くない。

しかし、ユーユウにはなんとかしようなどという気はなかった。カトレアの体から伝わってくる感触が良いというものもあるが、それ以上に、起きたときから感じさせられている妬みの視線が強くなってきたのだ。

だけれども、この状況で、妬んでいるだと？ 誰に対してだ？ カトレアに、というわけではないというのがユーユウの結論だ。



だったら、あやしている自分に対して、なのだろうが、妬むって  
いうなら代わってもらいたい！

当然、そんなユーユウの予想は当たっていない。助けを求めて、  
視線を泳がせるだけだ。けれども、誰もまったくダメだ。期待にこ  
たえてくれそうな人間は見当たらない。

とりあえず、なんとかしてカトレアを引っぺがそうとするのだけ  
ど、がちりホールドされてしまっていて、無理やりにもないと  
離せそうにない。どうしたもんか。ため息をつきたくなる。

「ユーユウ君……」

落ちに落ちた。これよりも下がることはないんじゃないかとい  
うくらいのトーンになっているのはフウロだ。

どこか悲しげでもあって、その色は悩ましくさせる。ユーユウに  
とってはあまり好きなものではないし、なにより、フウロのイメー  
ジにあっていなかった。

が、

「ユーユウ君」

「……なんです」

「抱きついてても、いい……？」

「は？ …… はあっ！？」

ちよつと待つて欲しい。落ち着かせて欲しい。なんだ？ いま、いま、なんだって？

フウロは、いったいなんて言った？

カトレアが抱きついてきたり泣いてしまったことによって乱れに乱れた場の雰囲気。そこに、また別の混乱が加わってこようとしている。呼び込みなどまるでしていないのに、向こうから飛び込んでくる。いったいどうなっている！？

ユーユウの考えていることはこんな感じだ。まあ混乱しきっている。泣きっぱなしのカトレア、思い切ったフウロ以外の人間は、ユーユウだけでなく、だいたい何が起きているのかをまるで理解できていなかった。

けれども、泣いたままのカトレアと、思い切ったフウロと、さつきは喜んでいたトウコと、ただボーツと突っ立っているロイズ。その四人には共通の認識があった。

混乱している。

色々なことが起きて、なんだかおかしいな雰囲気になってしまっている。一人ひとり考えていることだって違う。

だけれども、ユーユウが悪い。

これだけは変わりそうにない事柄だった。

「ユーユウ君……！」

ユーユウがドギマギしてどう行動するか迷っているうちに、フウ口は行動を起こしてしまった。

背中全体が柔らかな感触を知覚し、顔の近くに自分のものでもカトレアのものでもない暖かさを感じる。わざわざ説明するまでもなく、背中から支えるようにしてフウ口が抱きついてきているのだ。

（だだだだっ、誰か代わってくれーっ！）

心の叫び。

ユーユウの絶叫。もっとも、誰にも聞こえないが。しかし、周囲の耳をつんざくほどの雑音を出さないあたり、こっちの方が迷惑がかからなくていい。

どうせ、誰も代わっちゃあくれない。

そして、ここまでされてしまったら、トウコだって黙っていられない。だって、この男は自分が最初に目を付けたのだから。言わば、最初に口をつけた、おしっこをかけて、マーキングをした。

それがあとから来たのにとられる？ 「冗談じゃない。

牽制にとキツイ視線をフウ口とカトレアに送ろうとしてみるが、どうやらその必要はなさそうだ。さっきまではフウ口と互いに牽制しあったりしていたが、いまは意識がこちらに向いていない。

そして、そんなことをしていたら機を逃してしまう。

「ととととと、トウコさん!？」

ああ、ホント、動揺し切っている。結構可愛い。

トウコはフウロとは違って、動けないユーユウにギリギリと近づいていく。その反応を楽しんでいるんだというのは、少し離れたカミツレからも分かった。

だけでも、早くして欲しい。

ハムは焼き終えて、人数分のパンも用意し、買ってきた野菜も細かく切ってサラダにし、ドレッシングもある。スクランブルエッグも作り終えて、皿への盛り付けも済んだ。

準備万端なのだ。洗い物も、あとは食べ終わったあとのお皿をなんとかするぐらい。お腹だつてすいてきた。それもこれもユーユウが悪い。

そのユーユウの空いたところをなんとか見繕ったトウコがそこへ飛び込んだところまで見てから、カミツレは目を逸らした。見ちゃいけない。

一歩外に出た状態で中を眺めると、フウロもトウコも自分が知っている……よく見ている目とは全然違っているのをよく理解することが出来る。

頬を赤らめて互いにユーユウを引き寄せあっているその姿は、外から見ている分には微笑ましい。ユーユウからすれば堪ったものではないだろうが。

「けど、自業自得、ね……」

誰にも聞こえないような声。

まさに正解だ。あっちこっちからの言葉にわけもわからず踊らされているからこういうことになる。

最初からユーユウが自分の意思をはっきり伝えていれば、こんなことにはならないのだ。

しかし、こんな男のどこがいいんだろうか？

刺激はまったく感じられないし、態度だってなかなかはつきりしない。今度、一人ひとり呼び出しをして、問いただしてみたい気分だ。一体なんて返してくるのだろうか。

カミツレには、あまりよく分からない。一步引いた視点から見れば、良さが無いわけではないが、三人があんなことをするくらいの人間には思えない。

「バカ男、こっち……！」

「ユーユウ君、私は……？」

「分かっているわよね、ユーユウ」

「私は、私は………」

うーん。

頭を捻ってみる。ポケモンバトルのこと以外となると、あんまり使えた試しがない頭なのだけれど、今回はあてにして大丈夫なんだろうか？ どうだろう。

とりあえず、いまはあの連中の中に突っ込むつもりはない。もう少しばかりは傍観者でいいや、と。中に入っていくかどうかなんて、

もつと後に決めてしまえばいい。

ひとまずは、自分はまだ、ユーユウにそこまで入れ込んではいない。それは、自信をもって言えることだった。

13・意味があるんです(前書き)

あらすじ……まあ気が向いたらでいいや。

### 13・意味があるんです

夕方。もう、太陽は大地へと吸い込まれて行こうかという段階にまでできていた。思わず、口からため息を漏らしたくなる。

本当は、今日は休みだった。

ゆっくり眠ったり、のんびりボートとしたまま時が過ぎるのを待ったり、そういう風にして、加熱されていた頭を冷やし、今後どうしていかなければならないかをじっくりと見定める。そんな時間にしようと思っていたのに。

『ユーユウ』

これである。

起きてから何度名前を呼ばれ、冷たい目で見られたり、よくわからずに引っ付かれたことか。このまま一緒にいれば、確実に胃に穴があくルートに入ってしまうだろう。

そして、いまユーユウはベランダに出ているのだけれど、その隣には、大変な時になんにも助けてくれなかった人間がいる。言うまでもなく、ライモンシティジムリーダーのカミツレだ。

彼女は洗濯物を干していて、ユーユウはそのお手伝いというわけだ。本当はカミツレが一人でやる予定だったのだけれど、さすがに男ものをやらせるわけにもいかず、ユーユウが自分でやると言ったのだ。



本当は洗濯機に突っ込むのだってわかるつもりだったのだけれども、フウロとトウコに強行されて、結局はこうなってしまった。

ヴァルとケイトも一緒にベランダに出しているが、この二匹に手伝わってもらうとかそういうことではもちろんなく、ずっと部屋にこもりっぱなしは悪いかな、という意味が働いたのだ。

「しかし、これは……………本当に良かったんですね」

誰のものが分からない下着を手にとって、ユーユウはそれとなくカミツレに聞いてみる。

普通、こういうことを異性にされるのは嫌なことのはずなのだが、手伝うと言ったときに誰からも反対されなかった。ためらいすらない。あったのはカミツレぐらいだ。

「あの子たちが、それで構わないって言ってたでしょう?」

「そう、なんですけど、本当に大丈夫かな、と。なんか、裏に企みでもあるんじゃないかって。だいたいね? こういうの、カミツレさんの家でやればいいはずなんだけどなあ」

「それで構わないって言ってたでしょう?」

もう一度まったく同じことを言われる。だが、到底納得できるものではない。誰のものが分からない薄水色シマシマのショーツを干しながら、ユーユウは悟られない様にため息をつく。

「ふふ、嫌なら、手伝わなければいいのに」

「……あのですね、僕は、この家の住人ですよ？ カミツレさんだけにやらせるわけにはいかない」

「誰にでも得意なことが苦手なことがあるものよ。ユーウ君の得意なことはまだ知らないけど、どう見たって家事が得意そうには見えない」

「……それを言ったら、カミツレさんだってそうじゃないですか」

「……？」

「モデルの人、というか、カミツレさんが料理をしたり、洗濯したり、って、家事全般をこなしてる姿が想像できないんですね。なんか、散らかされた部屋を彼氏かなんかを使って片付けさせてるイメージが出てきてしまう」

ユーウの物言いに、カミツレは自分の口を若干尖らせる。いや、そういうイメージをもたれるようなことをしているという自覚はあるけども、やっぱり直接言われるとムツときてしまう。

左側からぬつと出てくるのはカミツレの手だ。そこには、これまで誰のものか分からない下着が握られている。自分のものではない。上の方だったら誰のものか想像できるのに。

報復。生意気な口をきいた報復がこれだ。誰かに見られたらあらぬ誤解をされかねない。

出した手の勢いは止まらなかった。そのまま、ユーユウの頬に誰のものかわからない下着が触れる。洗濯機から取り出したばかりの冷たさと、その行為のおかしさに、ユーユウの身体はビクンと跳ねた。

「な、なにしてんですか」

「生意気なこと言っただから、報復」

「それは分かりますけど、でも、こついつの、やり過ぎじゃないですか？」

「……嫌じゃない癖に」

「そ、それは、ですね」

そこまで言っただけで、ユーユウは深いため息をついた。遊ばれてる。カミツレのニヤニヤした表情が目に入ってくる。

ほら、やっぱり嫌じゃない。言葉に出さなくたって、その顔がそう語っていることが想像できた。

「……意地悪ですね」

「ユーユウ君にだけ、ね？」

また悪戯っぽい瞳。小悪魔っぽい、というのとは違う。どのように表現したものか……ユーユウの語彙力では難しい。

良くないことを考えている、それは間違いなかった。もう何度目かのため息をつきたくなかったが、ついだらついたらまた何かしらをされるかもしれないので出来ない。

黙って淡々と自分の作業に戻るだけだ。カミツレの手は止まったままなのけど、そこは気にしないようにする。自分が受け持ったカゴの中には、もう女物はないはずだった。

「……………」

ユーユウに気づかれないようにしながら、カミツレはその表情をチラリと伺う。

手伝うと言ってくれた。それは素直に嬉しかったのだけれど、だけれど、どういふつもりなんだろう。

さっき言ったとおり、家事は得意じゃないということはもう間違いない。料理も出来ないと言っていたし、部屋の掃除も母親にやってもらっていたはずだ。

というのも、カミツレは、昨日ユーユウの部屋にあるベットで眠ったのだけれど、自分が入る前からそのベットに敷かれている布団は乱れていた。ユーユウが起きてから、まったくなおすようなことはしていなかった。

押入れの中も、マンガがグチャグチャに積まれていて、そのせいで折れ曲がっているものもあった。きつと、急いで綺麗にするために無理やり入れたんだろう。

ムフフなプライベート本が入った箱は、その奥にこれまた乱雑に置かれていた。

そんなユーユウが綺麗好きなのがないのだが、彼の部屋には目立った汚れも大きなホコリもない。ということはユーユウの母親が定期的に掃除をしてくれたんだろう。

洗濯物を干す手際の悪さからも、彼にこういう経験がまったくないという証拠だ。そして、こうやって積極的に手伝いにきたわりに

は、どこか気だるそうに見える。

ちよつとからかってしまった、というのはあるのだけれど、それだけではないことはカミツレには分かっていた。そこまでしてこういうことをするということは、多分きつと、何か別の目的があつてのことだろう。

受け入れるつもりでいる。無理なことをお願いされない限りは。できるだけの事ぐらいは。彼のされたことを考えれば、可能なことは叶えてあげたい。

そう思いながらも、ユーユウから切り出さない限りは何も出来ない。しゃべらないようになってから何分か経つたが、話し出そうという気配は感じられない。

どうしようか？

こつちから話を振ってあげようか？

けれど、思い過ごしだったら？

そう考えると、カミツレの方からはなかなか行動に移せない。

「……聞かないんですね」

意を決したのか。

ユーユウが口を開いたのだけれども、それは確認だった。じれつたい。

いったい、フウロやトウコはこの男のどこが良いというんだろう？

「……何が？」

聞き返してみる。

ユーユウは少しだけ考える素振りを見せ、それからすぐに返事をした。

「カミツレさんは、凄いつてことです」

「はつきり言いなさい。私を混乱させるのが目的なんじゃないですよ」

ちよつとだけイラつときて、ぶっきらぼうな言い方になってしまふ。だけど、今の踏ん切りの悪さは好きじゃない。

そばにいて欲しい。そう言った時と比べるとまったく魅力的じゃない。

「良いじゃないですか……ちよつとぐらい、長く話したって……」

ブツクサ。

ユーユウの横顔には、情けない様子があった。もしかしたら、こんな様子は初めて見たかもしれない。今朝の一悶着の時だって、戸惑ってはいたけれどもこういう顔はしていなかった。

親しい人間を失った者の顔としてはこれで正しいのかもしれないが、これまでこういうのを見ていなかったために、カミツレは呆気にとられた。

「いまの僕には、話し相手っていったら、カミツレさん達しかいませんからね……」

情けない顔。そこから今度は自嘲気味な表情へと変わっていく。  
それは、やっぱり気に入らない。

「ユーユウ」

「……すみません。……けど、あと少しなんです。こういうの……」

「やっぱり、アナタ……気持ちは変わらないってことね」

「そりゃあ、今の僕の……言わば、生きる理由みたいなもんですか  
らね」

復讐。諦めてないっていうのは分かっていたけれども。だけどそれでも、なんとか忘れさせようとかやってそばにいたのだ。

こうやって言われてしまうのは、やっぱり悲しい。そう感じている。

けれども、まだ、聞かされたのが自分で良かった。これがもしフウ口だったら、ユーユウに対してどういう行動を起こしたことやら。

『きっと、ユーユウ君も忘れてくれるよ！ 嫌なことを、それ以上の良いことで埋めてあげればいいんだから！』

昨日の夜、ユーユウが部屋へと引っ込んだあとでフウ口が言った言葉。こちらがドキリと感じてしまうくらい笑顔だったのがとても印象的だ。

「どうやら、その表情は崩さなくてはならないらしい。伝えないわけにはいかなかった。ここで、なんとか説得出来ない限りは。」

「ユーユウ君の行動を止めるつもりはないけれど………何も、得るものはないわよ?」

「それは、分かってます。トウコにも、会ったばかりでまったく同じことを言われました。そんな怨念、返したところでなんの意味もないぞって」

「なら、ユーユウ君はバカじゃないんだから、二人に言われるのがどういう意味を持っているのか分かるわね?」

「カトレアには、バカ男バカ男って言われますがね……」

それは別の部分に問題があるのだけれども、本気で言ってるわけではないと知っているから言及はしない。

ペラペラと喋り返して来てはいるが、きっと、ユーユウ自身の気持ちはそんなに楽じゃないはずだ。それを考えると、カミツレとしては少し申し訳ない。けど、これは話さなくてはならないことだ。

「やめた方がいいわよ。そういうの。……今は多分、あいつが憎いんだって感情がアナタを占めているかもしれないけれど、でもそれは、時間が忘れさせてくれる。どれほどの苦痛を見ないようにする術を、人は身につけてる。完全に消し去るのは無理だけど………ただ、アナタ一人で対するよりかは、こうやって過ごす方が、無



理なことじゃないと思う」

「……なら、僕がやらなくたって、誰かがあの男に鉄槌を下すと？」

「ユーユウ君も知っているでしょ？ だから、私たちは今日、アナタの学校の校長を捕まえたの。何もしてないっていうわけではないのよ」

「……………」

こう言われて、ユーユウは押し黙る。これで引き下がってくればいいのだが、というのはカミツレの希望的観測になる。

思った通りだった。

少し考えるようは格好にはなってくれたが、だがやがて、力なく首を横に振った。まあ、しょうがないか。分かっていたことなので、感想としてはあっさりだ。

もちろんこれがフウロかトウコだったら、こんなあっさりにはならない。コテコテコツテリ。ユーユウはきつとため息をつきたくなるだろう。

「……僕には、カミツレさんが言うような生き方は出来ません」  
「どうしても？」

「どうしてもです。……そりゃあ、冷静に考えてみれば、僕なんか

がやるよりもカミツレさんたちに任せたほうがよっぽど良いのかもしれない。戦ったことのない人間が強いトレーナーを殺すなんて、無理なことなのかもしれません。そもそも、もう一度合間見えることがあるのかどうかも分かりません。……………だけれども、そうなんだろうけども、だからって、僕は自分の気持ちを捨てるなんて出来ません……………！」

よくみれば、ユーユウの肩も声も、同じように震えていた。そして、夕日を浴びていたヴァルとケイトも、自身のマスターの感情が高ぶっていることを感じて、どこか不安そうにしている。

そこには、さきほど少しだけ感じさせられた情けなさはない。いつのまにか消えてしまっているようにカミツレには見えた。

「僕は自分の怨念を晴らす。母さんの命を奪った人間に、自分がどういうことをして、代償に何を払わなければならないのかというのを、教えてやる……………それが、二人目、三人目のユーユウを出さないことにも繋がるのだから」

「繋がる？」

「……………プラスマ団のこと、調べましたよ。三年半前、行動が表面化し出した頃の様子が、インターネット上に転がっていた。確かに、ひどい事をしていたみたいだけれど、だけど、誰かを殺すなんて事はしていなかった」

「そう……………」

それは、カミツレの側でもよく知っている事だった。自分たちの主張を街中で声高らかに話していたし、実際に被害にあっている現場に直面したものもいた。それに、カミツレ個人としても、プラズマ団と戦いもした。一時はポケモンリーグも制圧されかけたのだ。

これだけの事をしていたが、積極的に人殺しをやったという話はない。なかった。

「だったら、どうしてって思いもしたけど、僕にとっちゃ、プラズマ団の昔は、別にいいんです。どうだっていい。誰かが名前を騙っているだけだとしても」

「騙っている、か」

それは考えなかった訳ではない。

特にトウコは、プラズマ団の一人と関係があつたがために、人殺しをしたということに対して理由をつけたがつていた。

「僕は怨念を奴に返す。勝つ事も、また出会う事もないかもしれないが、だからといって、諦めるのは出来ない。人殺しの息の根を止めなくてはいけない。たとえ僕の命を使い切ろうともです。もし僕が奴を殺そうと行動する事によつて、ただの一人でも大切な人を殺されないで済むのであれば、個人的な感情をぶつける事に意味があるんです。……だったら、僕はそれをやる。だから、もしできるのであれば、僕に、知ってる事を教えてほしい」

強い瞳だった。喋っている事にも、強い意志を感じた。そして頭

を垂れて、こちらにお願いをして来ている。少し前まではこうなる  
とはまったく思ってたなかった。

どうすればいいんだろう。カミツレは少し悩んでいた。こういう  
風に悩んでしまうのも、ユーユウがあんな事を言うからだ。

情けないままでいてくれたなら、適当に返事をすれば良かった。  
けれど、こういう風に理由を話されて、黒色の瞳でまっすぐにこち  
らを見てきて……それでは適当な返事なんて出来ない。

なるほど。もしかしたら、フウロは一度こういうのを見せられて  
いるのかもしれない。言葉じゃなくても、ユーユウは本当はこうい  
うことをやってたり、しようとしているんだというのを見せられれば、  
少しは特別に見たくなるというものだ。

しかし、しかし、本当、どうしたものか。なんと返事をすればいい  
か。きつと、一生懸命やるから、なんて言っても分かってくれない。  
だけど、ユーユウの行動を認めるわけにもいかない。

何も持っていないければ、ユーユウがなんと言おうとそんなことは  
出来ないとはねるのだが、持っている。何かが成せる力、身の振り  
方を決められる力を。自分たちからすればまだ微々たる力しかない  
が、もし敵にまわしてしまったら、いつかは強大な存在となって立  
ちふさがる時が来るだろう。次の一言によって、もしかしたら、そ  
れが決まるのかもしれない。

しかし、これは、

「ダメだよ」

「……………」

その声は、カミツレからのものではなかった。いつもならば、彼女よりも明るめの声色をしている。

「ダメだよ。ユーユウ君」

しかしながら、今はその色はなりを潜め、カミツレもあまり聞いたことのない低音をしていた。

モデルを副業としている自分よりも、よっぽど豊満な身体付きお尻と胸の部分だ。それでいて、ウエストは太くない。まったく不公平である。

「フウロさん……………」

「ユーユウ君を、人殺しにはしない。そんなこと、私許さないもん。身体を張ってとめるよ」

中と外。部屋のほうとベランダとを隔てている窓を開け、フウロもベランダへと出てくる。

それなりに広いので、別に二人が三人になったところで、あまり変わらない。ただ、フウロがユーユウの手を取り、自身の方へと引き寄せているところを見ると、カミツレは、自分はひょっとしてお邪魔なんじゃないだろうかと考えざるをえない。

正直なところ、出て行きたい。けれども、今の状態のフウロには、

きつとフォローが必要になってくるだろう。

「べ、別にですね、僕は、人殺しになるわけじゃなくってですね？  
奴を止めなくっちゃ、僕とおんなじ人間が出てしまうって」

「良いよ」

「ちょ……………良いってことはないでしょう！ 僕とおんなじこと  
なんて、他の人が味わうなんて、そんなのはいけない」

「だから、それはポケモンリーグの方で対応するよ」

「ポケモンリーグだって、何かしらをやってるって言っても、だ  
けど、ピンポイントじゃない。出来ないんだから、僕がやるうとして  
んですよ！」

「ダメ！ ユーユウ君にそんなことは絶対させないっ！」

はあ……………。

二人の言い争いの最中なのだけれど、カミツレは心の底からため  
息をつきたくなった。

せっかく落ち着いて話をする事が出来ると思っていたのに、フ  
ウロが頭ごなしに声を荒げて否定してしまうから、これでは冷静に  
話をする事も、ユーユウをなんとか説得することも出来ない。

「そういう風に無理やりってのは気に入りませんね！」

「どついう風に言っただってユーユウ君が考えてる通りにはさせない  
から！」

「なんでそんな強情なんだ！ 僕の勝手にさせてくださいよ！」  
「強情なのはユーユウ君の方でしょ！」

こうなる。

頭を抱えなくなってしまう。とりあえず、手伝うと言ったのだから、ユーユウは口よりも手を動かしてほしい。

そしてフウ口。

ユーユウもだけれど、そんな大きな声で怒り合うのはやめてほしい。ガラガラガラガラ。近所の部屋のベランダへの窓が開くような音がする。原因は言わずもがなだ。

「ねえカミツレちゃん！」

「そんなことないですよカミツレさん！」

……名前を呼ばないでほしい。

近所迷惑もいいところだ。しかも、隣近所から聞こえてくる音が慌ただしいものへと変わってしまう。

まずい。

これ以上騒がれるのはカミツレとしては全然嬉しくない。

「とりあえず、アナタたち、凄いうるさいから喧嘩するなら中でやって」

「……よし。ユーユウ君のお母さんの部屋で決着だ！」

めんどくさい気分になりながらの提案だったが、フウ口は乗り気なようだった。あまりジムリーダーとして相応しい行動とは言えない。

ユーユウの手を引っ張って、中へと連れ込もうとする。けれど、引っ張られてる側はそんなつもりはないらしい。

「だっ、ぼ、僕は、カミツレさんに聞きたいことがあって……！」

ああ、そういえばそうだった。ユーユウは確かそういうつもりで来たんだった。すっかり忘れてしまっていた。

どうしよう？ 助け舟を出そうと思えば出せるし、話を聞くことだって出来るのだけど……。

「か、カミツレさん。カミツレさんからも言っただけで……」

チラリ。それとなくユーユウの顔を見て、それから、彼が手伝ってくれると言っで、さっきまでは受け持ってくれていた、洗濯物が入っているカゴを見た。

だいたい、カゴの半分弱くらいが埋まっているように見える。初めた時は万ぱんだったので、助かったといえは助かった。ちなみに、カミツレはもう終わりかけている。

（まあ、これくらいなら、良いかな）

そう思った。

だから、助けてあげようと思った。再度ユーユウの方を見る。視線がピッタリとあう。フウ口はなんだか面白くなさそうだ。

微笑を浮かべてみせるとユーユウはカミツレの意図が分かったのか、少しだけ安心したような顔になる。



しょうがないなあ。

少しばかりお世話してあげよう。そんなつもりだった。

「……………」

だけど、ちょっと待て。いいんだろうか？

聞いてくるとしたら、確実にプラズマ団に関わることだろう。それは話の流れから考えても間違いない。

フウロがユーユウにそういうことをさせたくないように、カミツレだって出来ればそんなことはさせたくない。だったら、この場面で助けてしまってもいいのか？

そう思ったら、一度そんなことを思ったら、もう出来ない。それに、そうだ。

自分自身、ユーユウをなんとか説得しようとしていたんじゃないかな。つたか。

カミツレは言うことを決めて、ゆっくり口を開く。

「フウロ」

「……………なに？」

フウロの機嫌は、思った通り良くない。大丈夫。そんなの盗りはない。そう言ってあげてもよかったかもしれない。

「それ、持ってきなさい。私は、もういないから」

「な……！？」

「うん！」

ユーユウの驚きと困惑が混じったような声と、フウロの本当に嬉しそうな声。そのまま強引に、二人は中へと戻って行った。

「はああ……………」

ため息。

ただ洗濯物を世話するだけだったのに、こんなことになってしまった。

けれども、ユーユウのさっき見せてくれた目は……………まあ、ポケモントレーナー向けなんだろう。彼の場合、その目が持っている力がいっとう強い。

そういつのを見せられてしまったら、フウロがああなってしまう理由というのも、なんとなく分かるというものだった。

#### 14・自分で言った事だろう

夜ご飯は、カミツレが作ってくれた。それ自体はありがたいことなのだけれど、ということは、今日も居座る……もとい泊まるつもりなんだろうか。

正直、もう、もうそんなのは勘弁してほしい。けれど、さっきフウロと言い争っていたとき、ずっと居座ってやると、絶対に出ていかないからと言われてしまった。

そのフウロはというと、一応、夜ご飯のときにユーユウの隣の席を確保していた。

むすっとしたままで表情は変わっていないのだけれど、隣の席。それ自体は喜ばしいことだ。

「……………」

自分にしては、珍しくため息をつきたい気分だ。せつかく、ユーユウの隣になれたというのに。

ここに行き着くまでは、いろいろ苦難の道のがあった。と言っても、ただのじゃんけんなのだけれど。そういえば、カミツレも不思議そうな目で見てきていた。いや、どっちかというと、あれは引いてたんだろうか？ 終わったあと、汗だくだったのだから。

トウコとロイズを含めた三人での総当たり。見事に二人に勝ってこうなった。ユーユウは端っこで、真ん中がフウロ、その隣に一勝したトウコ。

まごうことなき真正銘の自分だけが隣にいる状態。それなのに会話は全然だ。せつかくとったのに、ユーユウはカトレアとカミツレに盗られている状態である。

「や、ですからね？　いつまでここにいるんだって話ですよ」

「身の安全が確認出来れば、私以外の人間は、多分帰ることになるから、それまでは辛抱ね」

「ジムリーダーの仕事があるでしょ。モデルの仕事だって。カミツレさん、結構人気あるんですから、暇だってことはないでしょう？」

「あら？　朝は学校まで送ってあげれば済む話だし、夜からは一緒にいればいいんだから、ジムリーダーもモデルも出来る。問題なんて無いわよ」

「大有りでしょ……………そんなの、リーグのお偉いさんが許してくれないでしょ。カトレアだって、きっとそう思ってる」

「……………そうね。バレたらきつと、周りが黙ってくれないでしょうね。知名度もある人がそういうことをするリスクというのはかなり高いはず。許されない、かな……………」

「だよな？」

「だから、アタクシやロイズがこのバカ男の様子を見てあげる。カミツレは気にしないでいい……………」

「や、私の街で起こったことですから、私がユーユウ君の面倒を見ます」

「……………誰も見ないってのは無いわけですか」

こんな感じだ。

夜ご飯をとり始めて少ししてから、ずっとこの話題がぐるぐると回っている。

いったいユーユウの面倒を誰が、いつまで見るのか。それを三人だけで話して、三人の中で決めようとしている。ズルい。

とりあえず、ユーユウは迷惑をかけたくないのかはたまた邪魔だと思っているのか……ずっと誰も面倒なんか見る必要は無いんだと言いつけているが、きっと、彼の望み通りにはならないだろう。

殺す。あれだけそういうことを言ったあとで、何もしいしされないから大丈夫だなんて主張が通るわけがない。カミツレもカトレアも、はなからユーユウの喋ってることを真剣には考えちゃいないもちろん、言葉を発することのないフウロ、トウコ、ロイズも同じだ。

しかし、しかし、苦勞したのに報われない。確かに運。運によるところが大きかったのだけれど。でも、必死で勝ち取った席なのに、見返りがない。

最初はこうじゃなかった。夜ご飯をとり始めたときは話そうと思った。ついでに、怒りすぎてゴメンねと言おうと思った。思った、のに。

それをことごとく邪魔したのがカトレアだ。それこそ、狙ってるんじゃないかというくらいに。あんまりにもそれが過ぎた。結局、フウロは度重なる妨害に負けてしまい、ユーユウと喋ることは未だ叶っていない。

で、気落ちしたフウコとロイズは出し抜こうとしたのだが、こちらも同様である。カトレアと、あとはたまにカミツレにも邪魔された。

言うまでもないが、全て狙ったことである。三人の好きにやらせてしまったら、肝心のことが全く話せなくなるというのは、これまでのことから簡単に想像出来た。

カトレアが頑張った甲斐あって、今は進捗はどうあれ大事なことを夜ご飯でみんなが集まっている時に話せている。

そんな苦労も知らず、何をすべきかも見えていない三人……特にユーウの隣になれたフウコは機嫌を悪くしているということだ。ヴァルとケイトはベランダに出たままで、ポケモン用の食べ物を食べているので、六人の間に入れる状態じゃない。

自身のマスターを守らなくてはならないのだけど、本当に生命を賭してまで守らなければならぬ時と、そうで無い時とを心得ているのだ。今は、関わるべき時じゃない。

（ユーウ君のバカ……）

心の中でこういう感情がうまれてしまうのかもしれない。手を出せるならばまだいいけれど、お説教してしまったがために、出すことを、会話に参加する事をためらってしまう。土俵にすらあがってない。思った通りにならない。

ユーユウの逆側、フウロの右に座っているトウコは、しきりになんとかしてくださいよと肘で小突いてくる。そんなの分かってる。だいたい、トウコだって同じだったのに、今は責めるだなんてなんて酷いんだろう。

そういうのも合わさってのユーユウへの思いだ。黙ってはいるが、炎はメラメラと上がっている。

当然、ユーユウだって気がつかないわけがない。不気味だ。さっきからずっと黙っている事は……まあそれはいい。だけど、これまでだってそうなのだが、何も喋ってないのに、悪い事なんてしていないはずなのに、こういう圧力をかけるような真似はやめてほしい。

で、だ。

これまでだってそうだったが、こういう状況下に置かれると、ユーユウはまずそれから逃げる事を考える。あるいは、逃げられる何かがないものかと模索する。

それはそうだ。

だって、原因が分かってないんだから。

分かっているれば、取り除いてやればそれで済む。毒を浄化してやればいい。しかし、毒がある原因も出どころも対処法も不明ではどうする事も出来ない。

だから逃げる。逃げたい。

そういう思い。

それに都合よく、答えてくれるものがあつた。

「……………」

ズボンの右側、ポケットが震える。数秒ほど待ってもそれが途切れない事から、誰かからの着信が入ったのだという事がわかる。

そして、ロイズがいて、フウロがいて……みんながいるこの状況ならば、誰からのものなのかと想像するのは簡単だ。

前にかかってきた時は少ししたら切れた。だが、今日のは違っている。１分ほどまってもバイブレーションはおさまらない。緩み切っていた神経、感覚が引き締まってゆく。

「あー、ちょっと、電話がかかってきちゃった」

宣言をし、イスから立ち上がる。きつと、ここでは出来ない話をする。だから、なるべく平静を装う。いつも通り。肉親を殺されたにしては少し妙な、だけど、五人がいてくれたおかげで悲しい事ばかりにとらわれずに済んでいる人間になる。

「……………」

一人になれる場所。外はダメだ。自分の部屋もダメ。母親の部屋……あそこならば、部屋に入ってしまったて鍵をかけてさえしまえばもうそれで終わりだ。



そういう結論に至った。ゆっくり足を動かす。感づかれてはいけない。絶対に早足にならないよう、細心の注意を払いながら部屋へと向かう。

目当てのドアノブに手をかけた。

が、

「あ……………!？」

開かない。正確には、ノブを下までおろし切ることが出来ない。

カギがかけられている。それは間違いない。だが何故だ？ ご飯を食べる前に、一度ドアを開けてそのままのはずだ。カギはかけてない。

なぜ？ どうして？

動揺によってつくられた雫が背中をつたい、困惑した様子で周りを見渡す。

「カトレア…………？」

長い金髪は逆立ち、まっすぐな目で、こちらを射抜いている。カトレアだけじゃない。五人が五人とも気づいた。ユーユウの今の行動に何かあると。

「……どこに行くの？ バカ男……」

威圧感。プレッシャー。言葉にすればそう変わりはないが、これまで感じたものとはまったく別種の間感。絶対にここから逃がさないという意思。

ユーユウには決して抗えない。きっと、抵抗したところで無理やり強制的にここに置くに決まっている。逃げることは無意味だ。捕まえる手間が数秒あるだけ。それだけでしかない。そして、抗うだけの度胸もユーユウにはなかった。

だが、抵抗は出来ないが、言いくるめることは出来る。そう。こいつは、他人には聞かせられない会話になるだろうから。

「……ただ、電話がかかってきたただけなんだけど……」

「別に、他の部屋に行く必要がある……？」

「その、さ。なんでもかんでもあらわにしなくちゃならないものなのか？」

「そういう意味では、今のユーユウ君には間違いなくある。アナタ、自分の置かれている状況は理解してるでしょう？」

これは、多分ダメだ。そんなことを予感する。このまま話を続けていたら、また電話が途切れてしまうかもしれない。

だから、うちあけなくてはならない。でも、それが本当のことで

ある必要はない。嘘、嘘をついてしまえばいい。そんなことにためらいなんかない。

「だから、その……学校の、友達からの電話ですよ……」

しかし、この嘘のつき方はまずかった。

「嘘だな。それは」

わかる人間。ロイズがすぐ間近にいるというのに。

けれど、一度言ってしまったからにはユーユウも引き下がれない。なんとか、なんとか押し通さないといけない。

「な、なに言っただ。し、失礼な奴だな。今は、一年の時に一緒だったやつからなんだぞ？ お前、去年は一緒のクラスじゃなかったじゃないか」

「嘘をつくな。ユーユウ」

ダメ。どうにか言い繕いたかったが、その場で思い浮かんだことをポンポン言っているようではまるでどうにもならない。

「お前に、中学高校時代に私以外の友達がいたことがあったか？  
いないだろう」

「ぐぬぬ………」

なんて失礼な物言いをする人間だろう。まったく。だがしかし、言い返すことは出来ない。不本意ではあったが、いま同級生が話したことは紛れもない事実になるんだから。

その事実がロイズの口から告げられる。周りの反応は一貫していた。口々に意外そうな声を漏らす。ユーユウはそれが嫌だった。見世物にされている気分になる。もう慣れっこだが、嫌なことには違いない。

こんな状況でなかったら、きっとなんでだと聞かれるんだろう。そういう意味で考えれば、それだけで考えれば逆にいいのかもしれないけれど、そんなわけにはいかなかった。

「バカ男、ここで話しなさい」

「……………」

仕方がない。逃がしてくれそうにない。大丈夫だ。ようは、自分が、感づかれてしまったらマズイことを口に出さなければいい。

そうだ。彼の言うことに対して、ハイかイエエで答えればいい。それが出来れば、なにを言われたとしても問題ないはずだ。

「……………分かったよ」

不満そうな態度を外向けに出しながら、ユーユウは意を決して折りたたまれている携帯を開かせる。

一体どんな話をされるんだろうか……………そう思いながら通話ボタン

を押そうとする。まだバイブレーションは止まってない。しかし、

「ユーユウ君。スピーカーモードにしないさい」

「じょ……」

「冗談じゃない！ と声を張り上げそうになった。視線の先、届いた声の主……カミツレはしたり顔をしている。

そんなことをしてしまったら、会話が筒抜けになってしまう。大事な話、聞かせたくない話、聞かれたらマズイ話が聞かれてしまう。

彼だって、道の真ん中でどちらに行くか迷っているユーユウには大事な人物だ。間違っても、彼が落伍するようなことがあってはならない。

だから、ゆっくり首を振って、それから無理やりに通話しよう。

あわよくば、ここから逃げ出すようなことだって出来るかもしれない。そう考えた。だけど、それは望みすぎだ。

「いい。アタクシがするから……」

え？

カトレアの言葉。彼女の声によって、ユーユウの頭に大量の疑問符が浮かび上がる。と同時に、耳に当てようとしていたのをやめて、ディスプレイに注目する。

いつのまにか、携帯電話のスピーカーモードがオンになっている。自分がやる。そう言ってから数瞬なのに。こいつ、一体何者なんだ……？

警戒を最大レベルにあげる。電話にでない選択肢もあるにはあるが、多分、いまこんな状況になってしまったことを考えると、またかかって来るまで居座るつもりだ。

誰からの電話なのか。

それはもう、この場にいる全員が承知しているらしい。

「……………もしもし」

カトレアから特に目を離さないようにして、ユーユウは電話に出る。ここまで待ってくれた。きっと普通じゃない案件だ。

少し待つ。時間に見れば五秒ほど。一拍を置いた。それから、あの男の声がスピーカーから聞こえてくる。

『ユーユウ君……………』

「エバーグさん……………」

互いに名前を呼び合う。聞いている側は特になんとも思わない。やっぱりそうだったか。そう思うだけだ。

『聞かなかったか？　そこにいる連中、私の本当の名前を言っていると思ったが』

「さあ…………？　僕は、あなたからは、エバーグだって名前しか聞いてないですからね。他の人間がなんと言おうが、僕にとっちゃ、その名前は違うと言いますよ。嘘だとはつきり分かっててもね」

『そうか』

「なぜ、電話などして来たんです？ 僕の置かれてる状況……あなたは知ってるんでしょ。エバークさんを追ってる人間がここにいて、筒抜けの状態じゃないと電話させないって脅されたんですよ？」

ピクリ。

意識を集中させていたカトレアの眉がわずかに動く。けれど、怒るというのは無いだろう、きっと、多分。だって言われたことはちゃんとやっている。そして、サカキに対してジムリーダーや四天王がいるということを口にしないようにとはユーユウは言われていない。

トウコが立ち上がるような素振りを見せたり、フウロなんかは立ってしまっているけれども、止めにこないのはそういうことだろう。

『そういうのを選んでいられない時となった』

「は……？ どういうことです？」

『私にとっては、是が非でも君の力を借りたい状況になったということだ』

「……借りる？ なに言ってるんですか。僕と、僕のポケモンのどこに、そんな力がありますか？」

『あるさ』

「……ないです」

『気づいていないだけだ。ユーユウ君。君は、ジムリーダーのポケモンを殺しかけたのはただの偶然だと考えているかもしれないが……』

「……………」

『偶然じゃない。分かっていたはずだ。敵がなにを考えているのか、次になにをしてくるか、どうすれば、相手を死に至らせることが出来るのか。手に取るように、理解してたはずだ』

違います、という言葉はすぐに出てこない。思いつきもしなかった。だったら、サカキの言っていることが正しいのか？　というと、それも違うように思えた。

あっているような、あっていないような、宙ぶらりんな感覚。過去に、そういうことができる人物がいたというのはニユースか何かで聞いたことがあるが……そういうのではないと思う。

「……ありませんよ」

だから、ユーユウはこう言う。分からないから、実感出来ないから、こう言わざるをえない。

だいたい、相手の考えていることを理解できるというならば、あの男と対面した時だって、傍にはヴァルがいたのである。なんで戦うことも、相手の意思を読み取ることもできなかったのか。

『……ならば、なぜそこにいる連中はなかなか出ていかない？　なぜ、君と一緒にいようとする？』

「……………それは、分かりません、けど……………」  
『君に力がある。もし本当に、親だけがそうであって、君に力が無いというならば、そうやっているようなことはない。事情を尋ね、



家を調べ、それで終わりだ。その後で、君が何をし結果死を迎えてしまおうが関係ない。だが、そうじゃない。ということは、君がどんな人間かを知っていて、利用するに値する人間だと、分かっているのではないかな？』

「そんな……ことは……」

『無い、とは言えないだろう。君は、助けてくれた人間だからということで、特別な意思を持ってそこにいる連中と一緒にいるらしいが、それは間違いだ。どれほど危険なことなのかをまるで理解していない』

危険。

そういう風に言われてしまうと、ユーユウの中でも疑惑がうまれてしまう。現実的かどうかはともかく、もしかしたら、この五人が利用してやろうという意思の元でこういうことをしているのではないかと思うてしまう。

それに、ライモントレーナースクールの校長がプラズマ団員らしいというのもある。実際に捕まってもいるらしい。

あれがなければ、それは違うんじゃないかと思うこともできるが……しかし、校長の任命権は確かポケモンリーグにあるのだから、繋がっている人間がいるというのはもう間違いない。直接力トレアなんかと繋がっていることだってあり得るのだ。

だから、疑惑の念は消えない。

わずかでも可能性がある限り、現実味が無くとも、危険であるというサカキの言葉は正しい。

ユーユウからしても、まるで考えていなかった訳ではない。そう

じゃなければ良い、そう思っていたのだが、こうやって他人に指摘されると、意識せざるを得ない。したくなかった考え、嫌な考えとこののをしてしまう。

そして、そういう考えをしてしまったら、たとえ意識していないにしても、一步、また一步と後ずさりしてしまう。逃げられないことは分かっているが、距離をとってしまう。

「……………」

感づかれないようにしたつもりだったが、五人ともがユーユウの動きに気づいてしまったようだ。もちろん当たり前だ。電話をしていて、室内で唯一他人の耳にも届くような音を出していて、そうすれば当然視線が集中するわけで……そんな状態で気づかれないように、などということが出来るわけがない。タイミングも最悪だ。

『ユーユウ君、君は本当に親の仇をとるつもりがあるのか？』

「は……？」

どういう意味だ？

サカキの言った意味を考えてみる。仇をとるつもりがない？ そんなバカなことを尋ねられるとは思っていなかった。

学校をやめ、殺す意思を決め、カミツレにもそう言った。なのにそんなことを言われるとはどういうことなのか。

そんな風に思っていると、スピーカーの向こうから短くため息をつくのが聞こえた。その行為にユーユウは若干の苛立ちを覚える。

『さっきと同じことを聞くが……なぜポケモンリーグの人間と共にいる？ 君が自分で言った事だろう。私を捕まえようとする人間が、近くにいて、会話しているのだぞ？ と。君は、自分が親の仇を討つのだから、私と同じ立場の人間にはならないとも思っているのか？』

「い、いや……！ 僕は……！」

『君は、そういう事では到底駄目だ。そんな気持ちでは、奴と戦うことも叶わない。欲でも、怨恨でも、リーグのやることは同じだ。ポケモンにより法を犯すものを罰する。君だって犯すものだ。それは分かっているな？ 彼女らがなぜジムリーダーや四天王になれたか分かるか？ たとえ親や恋人、子供であったにしても、慈悲を加えることはないからだ。だから、選ばれた。ましてや協力してもらおうなど……到底無理なことは抱かないことだ』

ドサリ、とユーユウはその場に座り込み足をのばす。一度大きく息を吐いてみるが、ついさっき胸の内で大きくなったつかえがとれることはない。

『一部の人間が把握していることが共有されれば、君もただでは済まない。分かっているのか？ このままなら、君はいずれ彼ら、彼女らの道具に成り下がるのだぞ？』

サカキがそこまで言って、ユーユウが息をのみ、涼しい部屋の中で額から一筋の汗を垂らした時だった。

「うるさいっ！」

「……！？」

座ったきりだったフウロが勢いよく飛び出してユーユウに掴みかかり手に持っていた携帯を奪い取り思いつき怒鳴る。眉間にシワを寄せ、柔らかなイメージを与える瞳を目一杯尖らせ、鼻の穴が興奮して膨らむ。

さりげなくユーユウの胸に飛び込んで抱きつかれるようにしたのは秘密だ。

「ヒトのモノに、無いことばかり吹き込むな！」

そのままの勢いで、フウロは通話を終わらせるボタンを押し、ユーユウの電話を床にぽつぽり出す。人の電話だということをまったく分かってないみたいだ。

そして、今のフウロの行動によって、出来る限り情報を引き出すというカトレアやカミツレの目論見は崩れてしまっていた。

静寂。唯一の音が消えてしまい、場は静まりかえる。いや、フウロがグシュグシュと鼻を鳴らしている音はしていたが、そんなものはあってないようなものだ。

ユーユウはフウロの顔を両手で掴み、伏せたままの状態をやめさせ、見つめ合うようにする。想像したとおり、目は潤んでいて、鼻は赤くなりかけていて、今にも泣き出しそうなのが一目でわかる。本当は顔を無理にあげさせるようなことはしたくなかったが、しようがない。言わなくてはならないことが、一つだけあったのだ。

「フウロさん……………その、僕は、フウロさんのモノじゃないよ…  
…？」

「……………！」

もちろん、この後すぐに、フウロが大声で泣き出すのは言っまでもなかった。

## 15 やるわけない(前書き)

今回は、会話文がかなり多めです。

ま、たまにはこういうのもいいよね？

## 15・やるわけない

深夜。時刻は……暗くて時計を見ることは叶わないが、きっと、もう、明日になってしまっているだろう。

けれども、カトレアは眠れないでいた。数日前、サカキが言ったことがなかなか頭から抜けてくれない。

一部の人間が把握していることが共有されれば、ユーユウはただでは済まないという。どういふことなんだろうか？

一部……どうやら、自分はそれには含まれないらしい。ということとは、きっと、トウコだけがわかつている、ということなんだろう。

ユーユウと、サカキと、話の内容から考えるに、プラズマ団関係のことに違いない。

(……気になる、けど)

しかし、トウコに聞いたところで教えてくれるかどうかは分からない。きっと、伝わってしまったらマズイことなんだろう。だから、ユーユウやトウコが何かを隠しているという分かってはいたが聞かなかった。

出来るならば、ユーユウが自分から話して来るのを待ってみようと考えただけでも。けれど、ああいう電話がかかって来るのだから、そんなに時間はかけられない。

夜、ユーユウの部屋に飛び込んで、けれども翌朝に諦めて、長期戦になるかもしれないと覚悟したのだけど、やはり駄目だ。

あの電話からもう何日か経って、足の包帯も解かれたのだけれど、

これ以上は待てない。言っても聞き入れてくれないならば、直接覗きにいくしかない。本当は、本当は行きたくない。行きたくないはずだ。だけど、他にこれが出てくるのがないのだから仕方が無い。そう、仕方が無いことなんだ。

（ロイズだっていない……）

それも気になった。いや、どこに行っているのかはだいたい想像出来るのだけれども。

もしもこれから行くところにいたら、罰を与えなくてはならない。

そんなことを考えながら、カトレアはあまり音を立てないようにすり足でユーユウが眠っている部屋、彼の母親の部屋の正面に移動する。

さて、前の時は部屋にカギがかかっていたのだけれど、今回はどうだろうか。ドアノブに手をかけ、慎重に下へとおろしていく。途中では止まらない。あいている。ロイズがいるんだという確信も持った。

ゆつくりとドアを開ける。当然全開では無く、カトレアが通るのに支障がないくらいだ。素早く中へ入り、ドアを閉め、カギをかける。

入れた。問題無く、入ることが出来た。ホッと一息ついて、部屋の中を見渡す。

「カトレア……？」



「……………」

もう聞き慣れてしまった声、唯一の男の声。ユーユウだ。まだ起きている。ベットのがある方から聞こえて来たのだけど、中からではない。ユーユウ自身は床に座り、背中をベットのふちに預けている。部屋の電気はついていない。暗闇に慣れた程度の目ではそのくらいしか分からず、ではベットの中には誰がいるのかというまでは判別できない。最も、目で見えなくともロイズがいるということくらい分かっているのだけど……だけど、一人だけにしては、その膨らみはかなり大きい。

「どうしたんだ？ 僕に、なにか用事でもあるのか」

「ええ……」

そのまま、カトレアはユーユウの隣に腰をおろして、特に考えるようなこともなく、ごく普通にユーユウへと寄り添った。そのせいでどのくらいユーユウがぶっ飛ばされたのか分からないわけではなかったが、もう癖みたいなものだった。

「その前に、トウコとロイズとフウロさんをどっか連れてつてくれよ。これじゃ、僕が寝られない」

そうか、と、カトレアはある一つのことに確信を持った。あの電話があつてから、ユーユウがこちらに対してある程度の警戒心を持っていたのだけれど、今はそれがない。

ということは、情報のやりとりは終わって、後は実行するだけに

なってしまったんだ。そういうことでは、今日今夜というのは、滑り込みセーフなのかもしれない。

「しかし……ロイズが本当に男だったら、これは相当問題ある絵面だな」

「……………なあに？ 気づいていたの？」

「もちろん。一回みんなに否定されちゃったけれど、僕は鋭い方だつて言つたろう？ で、ロイズは嘘をつくのが下手ときてる。中学二年ぐらいには、もう分かつてた。けれど、あんまりにもコイツが男だつて言い張るものだから、面白そうなので、黙つてた」

「意地悪ね…………？」

「ついでに言うと、中の三人は寝たふり中ときてる。ぶつ飛ばされたくないんで、変なことは言つなよ…………？」

「ロイズがアタクシの妹だつてことは？」

「そいつは知らなかったな…………姉さんって呼んだのは、確かあつたような気がしたけど」

彼にしては、ちょっとばかりテンションが高い。いつもより声にハリがあり、弾んでいるような感じだ。いや、これが普通なんだろうか？ 普段のユーユウを、悲しみによって日常という言葉を奪われる前の彼を見たことがないカトレアには、よく分からない。そういう意味でも、ロイズがすごく羨ましい。

「ぶつ飛ばされるのはアタクシのせいではなく、バカ男が、バカな

ことばかりしているからでしょ？」

「いやいや……僕が何度、カトレアやカミツレさんのためにトウコやロイズに痛い目に合わされたと思ってる？ 二十回を超えたんだぞ？」

「だから、それが全部、アナタのバカな行動によるものでしょ？」

「……………僕は鋭い。そんな、誰かにぶっ飛ばされるくらいのコトを二十回もやるわけない」

「まったく……………バカ男は、変なところでニブチンね…………？」

「そんなつもりはないんだけど……………」

ユーユウは視線を入り口近くの方に移した。どうやら、門番よろしく置いておいた、自身のフシデ……………ヴァルの様子を気にしているらしかった。もう寝息をたてている。

手持ちのもう一匹、ミニリュウの方は、ボールの中に収納されてベットの近くにおいてあるサイドテーブルの上だ。暗いから、これぐらいの情報を得るだけで、カトレアは自分の目に神経を集中させなければならなかった。

「ケイトに門番をさせた方が、良かったのかな？ けど、最近、こいつも大抵眠ってるんだよなあ」

困ったもんだ、と後に続ける。

表情が見えるコトはないが、きっと本当に困ってはいないだろう。やれやれこいつは、と、ちょっとだけ苦笑するような顔をしているんじゃないだろうか。

「ヴァルには、なにか包ませてる？」

「タオルケットを掛けておいたから、問題ないよ」

ユーユウはヴァルを見るのをやめたようだ。カトレアにも、彼がそれをやめたというのが、身体を密着させているがゆえに、微妙な振動によって伝わった。

短く息を吐く。彼のそれにどんな意味が込められているのか、それは考えられなかったが、カトレアからすれば、これからしようとしている事が事なので、それに対して、行為に至る前から呆れられているのではないかという風に思う。

「なんでさ、ロイズは自分の事を男だと偽る必要が……？」

「……………内緒、ね。女の子には、いろいろな事情があるの」

「まあ、さ。本人が言わないんだから、それなりの事情があるのは分かるし、だから僕だってロイズから言われない限りは男同士として接するつもりだけど……………だけどさ、ズルいよな。人には散々問い詰めるようなことをして、自分たちに関する質問は何にも言わないなんてさ。不公平じゃないか」

「……………本当に言えないことなの。トウコやフウロにも、ロイズが女だとは言ったけど、理由は教えてない。とても、大事なことから」

「……………話したくないことは、誰にだって一個はあるっていうけど、だけど、寂しいよ、なあ……………」

「寂しい？」

「僕とロイズは、学校最下位と最優秀者のコンビになるんだけど、

結構仲が良かったんだよ。ロイズが転校してきた一年後くらいからずっと、な。たまに喧嘩もしたけどさ。だけど、あいつにはエロ本を買ってもらって一緒に見たこともあったし、違法な動画をディスクに焼いてプレゼントしたこともあるし、パンチラスポットの開拓にも行った。街中で、通りすがりの女子軍団の中で誰が一番好みだったかを言い合いもしたっけ……。ま、女の子なら誰でもいいやつて結論だったかもしれないけど」

一歩間違えれば犯罪である。

いや、もう間違えているのだろう。

カトレアからすれば、こんな話をユーユウの口からして欲しくなかった。バカ男という呼び名は不動のものとなりそうだ。きつとベットの途中でこの話を聞いているトウコとフウロも、ユーユウに対する評価をあらためることだろう。

「まあ、真面目にさ、仲良くやってたんだ。ロイズが実は女なんだって分かった後もな？ けれども、本人から教えてくれない。きつと理由も言ってくれないってなったら、そりゃあ、やっぱり壁があるんだなって感じちゃうよ。で、僕にもそういうのが出来たら、やっぱり言ってくれないんだからこっちだって言いたくない。……そうになったらさ、僕らは、もう友達とは違うんじゃないかって思っさ」

「そ、そんなことはないっ！」

声を張り上げている。強烈な否定の意思がこもった声。ベッドの中からのものなので、透き通ってはいないのだけれど、彼女の声はまったく違和感なくユーユウとカトレアの耳に届いた。

必死さが伝わってくるその声に、隣にいる彼は苦笑し、スッと立ち上がりベッドの方へと向く。

手をのばしてロイズがいるであろう部分、顔があるであろう場所に手を置いて、ちょっとだけ撫でるようにする。

「寝てるやつは、喋っちゃダメなんだぞ？　僕は男で、お前だってそうなんだからな？　隠し事してるのは僕だけなんだ。なんにも気付いちやいない。みんなだって言ってたよな？　僕は鈍感みたいなんだから」

それだけ言うと手を離して、ユーユウはまた床に座った。ほとんど同じ場所に。カトレアに密着しなくなる位置に。

もちろん、すぐにカトレアが寄ってきて、その行為の意味はなくなってしまうのだけれど。

「……確かに、カトレアの言う通り、僕はバカなのかもな」

「なぜ、そう思うの？」

「僕がいま、みんなに隠していることなんか、スパツと話しちゃえば良いんだよ。だけど、エバークさんの言ってることが引つかかって、僕が捻くれてるってこともあって、言えないでいる。一人で抱えてて、それで、言ってしまうとちょっと苦しくなっちゃうからって、飲み込んでしまっているんだ」

「……アタクシも、四天王として様々な人間を見てきたけれど、けど、……いいえ、そういうのは関係なしに、アナタの言ったとおり、

ね。人は誰だってそういうのを一つは持っているものよ。もちろん、バカ男が素直に喋ってくれば、それが一番良いのだけれども」

ああ、もう。

もう少しぐらい、うまいこと喋らせてくれないものかと、カトレアは自分の口を呪いたくなった。

言いたいことは、ちゃんと頭に浮かんでくれる。だけど、それを実際に言葉にするととなると、うまく変換することができない。

しっかりと伝わってくれば良いのだけど……そこらへんは、ユーウの理解力に頼るしかない。

「バカ男、そろそろ、教える気にならない？」

「……………何をです」

「サカキから、一体何をお願いされたのか、よ」

「……………さて、何の話をしているのやら」

「あれから電話、一度だけあったでしょう？ 学校で、授業中に電話があつて、それでアタクシたちの目を逃れたことは、妹が確認してる」

そうなのだ。ユーウは学校をやめられたわけではない。

あの日、ライモントレーナーズハイスクールの校長が逮捕される前に、ユーウは確かに学校に対して退学すると宣言をした。それは間違いないし、実際に、その少し後、カトレアたちが捕まえる瞬間間際に、それを別の人間に伝えてもいた。

だがしかし、処理される前に校長は捕まってしまい、その後で、カミツレとフウロがそれを却下してしまった。当然ユーユウは反発したが、何の力があるわけでもなく、最終的にはそれに従うしかなかったというわけだ。

「何を話していたの？ ううん。何をお願いされていたの？」

ようやく、この言葉を出すことが出来た。この部屋に来た、おそらくは一番の目的。

この質問に答えてくれないければ、彼の頭を覗かなくてはならない。強硬手段をとらなくてはならない。できれば、素直に話して欲しい。あまり、カトレアだってやりたくないのだ。

「……………」

ユーユウは中々話そうとしない。イエスともノーとも言わないから、こちらとしても行動のしようがない。

悩んでいるようだった。

だが、ちょっとだけ待つと、やがてユーユウは口を開いてくれた。

「とある施設……そこを調べてほしいと。そうお願いされたんだ」「……施設？ 施設って、どんな？」

「それは、……エバークさんにも、よく分かってないって。だから調べてほしいって言われたんだ」



「……………そう」

「本当のことだよ……………」

ユーユウの声のトーンが若干落ちる。つまりは、これは本当のことなんだろうとカトレアは確信した。嘘は言っていない。そういう風には感じられない。

けれど、

「それで、他には？」

「他？」

「嘘を言っていないことは理解出来た。けど、まだ言っていないことがあるはずね……………」

「参ったな……………」

やっぱりそうなんだ。

ユーユウが、馬鹿正直に情報を教えてくれるわけがない。だって、全面的に信頼されたわけではないのだから。それどころか、警戒心しか無いのかもしれない。悲しいことだけれど、それが現実だった。だから、ユーユウの心を惹くなりして、どうにか知ってることを教えてもらえるようにしなくてはならないのだけでも、それはフウ口たちに任せよう。カトレアには専門外のことだ。

「はつきりとはして無いんだけど……………その、最近な、調べてほしいって言われた施設には、結構な数のポケモンが搬入されてるみたいだ」

「……………何のために？」

「や、それが分からないから、僕が調べにいくんじゃないか。……………」

ホントはエバークさん自身が行きたがってたみたいだけど、もし万が一あそこで戦うってなったときに、手持ちのポケモンはデカすぎるから手も足も出ないんだとさ」

「……バカ男は、なんて返事をしたの？」

「今回は、プラズマ団の人間は関わっていないらしいよ」

「じゃあ、行かないの？」

「……………普通なら、行かないってとこなんだけどな」

ハハハ、とユーユウの笑い声が暗い部屋の中に響く。彼の状況を考えると、とても笑っているようには思えない。外がどうなっているかは知らないが、きっと、中とはまったく違うんだろう。

顔がうつむいているのはなんとなく分かるのだけど、それ以上のことを把握するのは難しい。部屋の明かりをつければ表情を見ることはできるだろうが、今はそんな話をしているんじゃない。

「あの人って、さ……結構とんでもない人だったんだな。僕、知らなかったよ」

あの人。

この場合、もちろんサカキのコトを言っている。とんでもない人確かに、それが一番しっくりくる表現なのかもしれない。

カトレアは、彼のことはカントーから送られて来た資料でしか知らないのだけど、彼が従えていた部下とは、強さも、その考え方も一線を画しているように思えたのだ。

「とんでもないって、どんななの？」

これは、カトレアではなくトウコの声だった。尋ねようとしていたことを先に言われ、ちょっとムツとする。

別に、二人だけの会話を邪魔されたとか、そういうのではないと思う。きっと。

で、そのイライラを、ちょっとばかり言葉に乗せてトウコにぶつけてみる。

「……寝てる人が声なんてあげないで。このバカ男も、さっきそう言ってたでしょ」

「いえ。……もう起きましたから」

イラッ。

トウコに対してこういうふうに苛立つのは、もしや初めてなのではないだろうか？　今までは、だって、凄いトレーナーなんだなというイメージしか無かったのだ。こうやって、人の会話を邪魔してくる。

話の内容は穏やかとは言えないが、それでも、カトレアなりに、心を落ち着かせて楽しみながら話していたのは確かだ。それを邪魔された。おのれ邪魔しマンめ。そう思わざるを得ない。ユーユウがトウコに対して、しょうがないな、なんて視線を送っているのも気に入らない。

「で？　あんたの言うところのエバークさんに、なにされたのよ？」  
「ん？　ああ。いやさ、僕だつてさ、あの人と手を組んでるわけじゃないし、奴と戦うわけでも無いのにヴァルやケイトを危険な目にあわせるつもりなんて毛頭ないんだ。だから、そんなまるで得にならないようなことをなんでしなくっちゃならないって言っちゃった

んだが……」

「だが？」

今度はロイズだ。カトレアはもう、そのことについては何も言わないことにした。言ったところで、トウコと同じ言葉を返してくるに決まっている。無駄なことをするつもりはないのだ。

ただ、トウコはともかく、ロイズはただでは済まさない。そういう意思は持った。後で覚えておくことね、と。

「だが、まあ………なんだ。見返りとして、得になるかは分からないけど、絶対にやらざるを得ないようなものを出して来たってわけだ」

「ユーユウ君がやらざるを得ないって言うもの……それは？」

これで全員お目覚めということになる。ベットから三人がひよっこりと顔を出し、ユーユウに近づいていく。

ユーユウとしても、声をかけてきた方に注意を向けるから、もうこっちのことは思考の外に出てしまっているだろう。暗いなかでも、そのぐらいは分かる。まったく気に入らない！

「………それ、喋らなくっちゃダメですか」

「うん。ユーユウ君は喋りたくないかもしれないけど、できれば、喋ってほしい。もしかしたら、大事なこともかもしれないし」

「………きつと、大事なことはないですよ」

「それでも」

フウロにそう言われて、下を向いていたユーユウの影がゆっくりと上を向き、一度大きく息を吐く。

あんまり言いたくなさそうにしている。カトレアもそんなのは見なくなかったが、フウロの言うとおり、聞いておく必要があるかもしれない。

それに、今のユーユウなら全部喋ってくれそうだ。そうならば、わざわざ彼の頭のなかを覗かなくてすむ。やらなくて良いのならば、それが一番いい。

「ならば、そうだな。君にとって有益な情報を提供しよう。それならばきっと、ユーユウ君のなかにやる気の炎を灯すことが出来る」

これは、サカキが言ったことをユーユウが言い直してくれているんだろう。

「有益……？　どういんです？」

次に出たのは、きっと、ユーユウが自分で言ったものだ。

ゴクリ。

カトレアのみならず、この場においてユーユウの話を聞いている人間全員が唾を飲んだ。

「あの男がどういう人間で、なぜ、君の父親が、奴に殺される事になったのか、というのではどうか？」

「ユーユウ君のお父さんも、あの男に殺されちゃったっていうの……？」

「……エバーグさんが言うには、そうらしいですよ、フウロさん」

他人事みたいな言い方だが、声には微弱な熱がこもっているようにカトレアには思えた。サカキの言っている事全部を信用してはいないだろうが、父親が、母親と同じ人間に殺されたという事は、まるで信じ切っているように感じる。

「まったく、とんでもない、ですね？」

ユーユウは、また同じ事を言った。確かに、それが本当なら、とんでもない。

「まさか、とつくにいなくなつた父親を、殺されたと宣言され、人質にしてくるとは思いませんでした」

「人質？」

「だって、そうでしょう？ 父さんは、いなくなつちまつて、僕にも、母さんの手元にもいなかった。誰も、最期を見てない。で、やることをやれば教えてやる、です。手元に返してやるってことです。つまりそれは、死人を人質にとつて、脅迫してくるのと一緒じゃないですか。……そんなの、まともな人間のやることじゃない」

その言葉、若干の苦しさが混じっているようにカトレアは感じていた。だから、スッと立ち上がって、入り口ドアの近くにある、部屋の照明のスイッチまで歩く。

もしユーユウが制止しようとしても、やめるつもりはない。する必要はある。自分の心が、そういう風に強く感じたのだ。

ドアの傍に立ち、一拍おく。ユーユウは何も言わない。了承した。

そうとってカトレアはスイッチを入れた。

数度の点滅の後、部屋は暗闇ではなくなる。みんながみんな目が眩んでいる。カトレアだってそうだ。

視力が回復するのを待たないで、ユーユウの元へと歩く。途中で、明るさに目になれる。一番に彼の顔をみた。

そこには穏やかな表情があった。怒りも、悲しみも、苦しみもない。けれど、穏やかなのだけれど、本当にそうなのか？ という疑問を浮かばせる顔をしていた。

なんでもない。思い過ぎした。

そういう風に取りすることもできる顔だ。だけど、そう考える人間はこの場にただの一人もない。当たり前だ。だって、いろいろ抱いている感情の違いはあるかもしれないが、トウコだって、フウロだって、ロイズだって、もちろん自分だって、ユーユウを見ていたんだから。

その程度くらいは、気づくことができる。

「僕が言われたのは、これが全部。隠し事も、もう無い。まったくさ？ 酷い話だ。エバーグさん、僕を人殺しにするつもりだな……」

座る途中で、ユーユウはそんなことを言った。嘲るような口調だ。誰に対して、何に対してなのかは想像つかない。

しかし、これだけは言える。

「……だけど」

「……………」

「だけど、アナタは、行くのをやめないのね……？」

「もちろん」

ユーユウの顔を見る。強い意思の込められた目。決意をした瞳がある。迷いは微塵も感じさせない目。

それは、あのときのトウコと一緒にカラーリングをしている。何かを犠牲にしたとしても、やり遂げなければならぬという義務感に満ちた瞳……というのは、ちよつと言い過ぎだろうか？

「母さんは、父さんがどうなったのか知らないからね………行かないと。僕が、母さんに教えてやらなくっちゃならない。父さんが最期、どんな風になったのか。……それに、僕も、父さんに、何かあったんだって知らされたからさ、モヤモヤしたものができてしまった。僕がそうすることで、それを解消出来るんだ」

「……それ、あんたは、何のためにやるの……？ お母さんのため？ それとも、お父さんの敵討ち？ もしくは、自分のためにやるの？」

トウコの声。ベットから抜け出して、それとなくユーユウとの距離をつめているような気がする。

ガードしたかったが、あいにく反対側だ。ここから防いでしまつたら、流石に怪しまれてしまう。



ユーユウは、そんなトウコに苦笑する。

「それは、トウコにとっては、一緒の事じゃないのか？」

「え……？」

どういう意味で言っているのかよく分からない。トウコの方も、それは同じようだった。相変わらずベットの中にいる人間は、その様子を見るまでもない。

「こんな事をしても、なんにも残らない。そう言ったのは、トウコだったはずだな……？」

言いながら、ユーユウは立ち上がる。その過程で、密着していたのも振りほどかれてしまった。

「あ、あれはねユーユウ」

「言った事には、ちゃんと責任を持ちなよ」

そんなことを言ってから、部屋から出て行ってしまった。フウロはなんにも言わないで、それを追いかけて同じように部屋を出ていった。

喋っていた人間がいなくなってしまっって、部屋の中は一気に静まりかえる。だがしかし、それに反して、カトレアの胸中はまったく落ち着いてない。理解できないざわめきに、困惑しているらしいというのとはなんとなく分かるのだけだ。

そして、そういう状態下では、ユーユーにもう隠し事があるのかどうかなんていうのは、まったく判別できなくなっていた。

## 16・嫌な予感がする（前書き）

まーこういう話になるようにしてたわけなんです、見え見え過ぎるなこれは（苦笑）

## 16・嫌な予感がする

非営利活動法人ポケモン愛護団体「エルス」が運営している施設は、イツシュ地方各地に点在している。

ライモンシティには、その最大規模の施設があった。イツシュ最大の都市、ヒウンシティには同様の施設を建てられず、ライモンシティにてヒウンシティの分も賄っているからである。地上10階、地下5階の建物。中心部とはいえず、地上にある部分は壁が全面ガラス張りになっていて、人々の目をよく引いている。今が昼であれば、の話だが。

その反対側、大きな道を挟んでの建物は漫画喫茶になっていて、ユーユウはその窓際の部屋を取り、サカキより支給されたスコップで施設内部を伺っている。

サーマルビジョンモードで見ているのだけれど、地上にはユーユウが考えていたくらいの熱反応はない。入り口に、警備員らしいの何人かいる。三階から十階までの反応は、おそらくポケモンのものだろう。だが、施設の巨大さに反して、見えるポケモンの数は多くない。きっと、地下の側も、5階までは同様だろう。

「ふう……」

一息をついて、スコープから目を離し、近くのテーブルに置く。ここに来たのは午前中だ。学校で、カミツレとロイズの目をなんとか盗んで抜け出して来たのだ。

コンビニで食べ物を買えるだけ買って、それからずっとここだ。

携帯電話の電源は切つてある。最初はつけっぱなしにしていたのだけれど、案の定ブルブルうるさくてたまらない。学校を出て、ここにくるまでに切つたのだから、居場所が発覚しているかどうかの心配はする必要がない。バレたら殺されるだろう。

昼過ぎからずっと見張っているが、トラックの行き来は多いが、人の出入りは少ない。多分、トラックの方には【保護】をしたポケモンたちが積まれているんだろう。人の出入りが少ないのは……考えを巡らせてみたのだけれどよく分からない。

「っ……………なんだか、嫌な予感がする」

舌打ちをする。分からない事が多い。結局、潜入するしかないのだけれど、これではやりようがない。

中には入れる。それは間違いないらしい。だが、騙せるのは少しの間だけだろう。正体を騙してはいる事になるのだが、バレた後のことが問題だ。一人二人程度ならなんとかするのだけれど、それ以上になつたら抵抗できない。

「お前が頼りだ……相手はあの男じゃないけど、ヴァル、僕と一緒に戦ってほしい」

ポケモン用の食べ物に集中していたヴァルは、ユーユウのその言葉に頷きを返した。よし、これなら大丈夫だろう。目を見て、ユーユウはそれを確信することが出来た。

入った後どうなるか、それは、ヴァルの尾から繰り出されるどくばりので次第だ。気絶させるぐらいの威力でないと、うまくはいかないだろう。

ケイトの出番はない。最近、あまり元気がないのか、ボールからも出たがらない。出したとしても、ミニリユウというモンスターの特性上、身体を使った攻撃がメインになるのだから、この場合は役に立たないだろう。

テーブルに置いていたスコープを手にとった。ずっしりとした重量があるのは、そのスコープの下にダブルアクションのリボルバーがついているからだろう。いや、本当はスコープが付属品になるのだが。

これを受け取ったとき、当然ユーユウは文句を言った。言ったのだけれど、まともなもので手元にあるものはこれしかないらしかつた。

弾丸も装填されているが、一発目に当たる部分のものはユーユウが抜き取っておいた。間違えて撃ってしまうことだって考えられるのだから。

そんなわけで、スコープで覗くとなると必然的にこの回転式拳銃を構えるような姿勢になるわけで、どうも落ち着かない。弾もリユクにあと六十発ほど入っていて、背負うとやっぱりいつもより重い。まるで戦争をしに行くみたいだ。単純な重量だけではない何かが、そこにはあるのだ。

構えて可変ズームスコープをやはりサーマルビジョンモードのままで覗き込む。とりあえず、一通りの操作はマニュアルを貰ったので出来るようにはなっていた。だが、扱いに不安が残っているのは

事実だから、今もユーユウの携帯電話の画面には、取り扱い方法が映された状態である。これがもしもペーパーだったら、あるいは、学校での座席が真ん中付近だったら、とてもじゃないが目を通すことなんて出来なかっただろう。

施設が閉まってから一時間ほど経つが、人間があまり出てこないトラックで搬送された、おそらくはポケモンたちも、上の階にはいなさそうだ。

サカキによつて伝えられた情報がすべて正しいとは言わないが、何かをやっているということに関しては疑いの余地はない。抽象的なイメージではあるが、倫理的に、絶対に許されることがないことをやっていると考えてしまう。そして、もしそうならば、止められるのは自分だけだ。

小型のポケモンを持ち、中に入るためのツールを所持している。

「はあ……………」

一度だけ、深いため息をつく。しかしそれは、通常ため息をつくような精神状態において出たものではない。ある種の決意。これからやることを、躊躇うことなく出来るようにするためのおまじないみたいなものだ。

リボルバーを腰に巻きつけたそれ用のホルスターへしまい込み、右手でプラズマ団のローブ……母親が使っていたものを持ち、拳銃が見えないようにする。左側にはケイトのモンスターボールをつけ

るのだけど、これは隠す必要はない。トレーナーだったら誰もがやる行為だ。最も、今回ケイトを使うかどうかは分からないが。

最後にリュックを背負って、中にはヴァルに入ってもらおう。忘れたものが無いかを確認してから部屋を出た。

「ヴァル、僕が次にお前の名前を呼んだら、リュックから飛び出してどくばりを撃ってくれ」

ユーユウのその声に、ヴァルはモゾモゾと動くことによって了解したという意思を伝える。いざという時に声がちゃんと届くようにリュックにあるチャックは少しだけ開けておいた。

個室の代金を払って店を出た。いよいよ行くとなって、ユーユウの緊張は極限まで高まる。顔に出ない様にするのでいっぱいばいばいだ。声はかすれ、汗をかきはじめる。右手はジツとしているが、左手は腰のモニターボールを何度か叩いている。

そんな状態ではあるが、不思議と足は止まらずまっすぐ施設に向かっていく。近くの横断歩道を渡り、反対側の道へと出る。大きく息を吐くと、頭の中が冷えていく感じがした。

大丈夫。なんとかなる。気づかれなければどうということはない。何かがあるか確認して、抜け出るだけで良い。彼の真意は分かっていたが、とりあえず、言葉では言われてないからいくらでも言い訳できる。

逃げ腰。間違はなく逃げ腰だ。だけど、初めてなのだ。こうでも思わないと動揺は隠せない。覚悟したといっても、それはユーユウが頭だけで考えたことだ。本当の意味での覚悟など、まるで出来て



いない。だから、誤魔化す必要があるのだ。

入り口につく。もう閉まっている時間なのに、正面入り口の自動ドアは作動していた。歩を進める。さっきスコープで覗いた警備員がこちらに歩いて来た。団体とは違うロゴ。さる警備会社が使っているロゴマークが腕に認められたが、サカキによるとそれは嘘で、本当は団体所属のトレーナーがやっているのだという。そうではなくては、ユーユウが入ることは出来ないだろうとも。

武器を所持しているかどうかはわからない。しかし、ユーユウのように、リボルバーを携行しているようなのはいないはずである。

もう何十年も前に、銃火器の排斥運動が起こり、それにポケモンリーグが呼応したことにより、こういうものは根絶されてしまったのだということを歴史の授業で学んだ覚えがあった。そういう運動がより勢いを増す要因だったのが、モンスターボールなのだという。

きっと、ポケモンがいなかったりモンスターボールがうみだされなければ、こうはならなかったろうと歴史担当の先生が言っていたのをよく覚えている。

「……申し訳ありませんが、本日の受付は終了させていただきました。施設員もおりませんので、日を改めて訪れてください」

警備員がユーユウの前まで来てそう告げる。敬語ではあったが、声のところどころに警戒心が見え隠れしていた。不審な行動……不利益になりそうなことをすれば、すぐさまこちらを取り押さえ口封じをやるつもりだ。

けれども、慌てることはない。ここは、言われたとおりのことをすれば切り抜けられるはずだ。

「よろしいですか……？」

「……よろしいも、よろしくないも無いのdarou？」

「………は？」

偉ぶったような喋り方をしてみたのだけれど、やっぱりまだ慣れない。ただ、ここの警備員のようにな、いつも気を張っているような人間にはそれなりに有用らしい。

こちらに対しての警戒心がいつそう強くなっているのが分かった。

「……求めていたものを、我々が渡すことができるかもしれない」  
「……………」

怪訝そうな顔をされる。そこで、ユーユウの母親が残したスペアのロープに出番が回ってくる。二着あったが、白と黒が不均一に混じり合っている中に、稲光が走る様子が青色で大きく描かれているものを持ち出して来た。こっちの方がより畏怖の念を与える装飾がなされていたからだ。それに、もう片方、ユーユウが最初にみた方はとどころいitandでもいた。他人に見せるのに適さない状態だった。

胸の部分にあるPのマークを見せる。

「これは……」

「これがなんなのか、私がどういう人間なのか、あなた方にも理解出来るはずだ……」

警備員たちの目が、このマークを見た瞬間に大きく見開かれてゆく。しかし、警戒心は開かれるのと同時に薄くなっているようだ。そうか、あの人は、やはり嘘は言ってなかったみたいだ。一連の流れを確認し、ユーユウはそんな感想を抱く。

「しかし、こんな子供が……」

「意外か？　しかし、以前の、世間に訴えかけていた時の我々は、今の私の様な人間を、リーダーに据えていたのだぞ？」

もちろん、警備員の言っていることはごもつとも……その通りである。ユーユウだって、自分が警備する側で、高校生ぐらいの人間が一人で来たら、同じことを言うに違いない。

しかし、前例がある。このローブを纏う人間よりも高い地位のものが、ユーユウぐらいの年齢の男だったことが。ならば通れる。プラズマ団が来るのを待ちわびていたならば、通してくれるはずだ。

警備員の一人が、奥に引っ込んで何やら通信をしている。その間に、ユーユウはローブを広げ、ダブルアクションリボルバーを見られないように苦心しつつもそれを身につけ、その上からリュックを背負い直した。

「こちらです。どうぞ」

「すまない。我々も、以前とは違って、外でこれを着るわけにはいかなかったたのでね」

フードを深くかぶり表情を見られないようにする。母親の部屋にあるタンスから持って来たものだから母親のものだと思っただが、

それにしてはやけに大きい。これはもしかしたら、父親の方が使っていたものかもしれない。

警備員のうち二人が案内をしてくれるというので、ユーユはそれについていった。お客様用ではなく、職員用のエレベーターへと案内された。その中の一つは故障中の張り紙がされているのだけれど、警備員がカードを読み込ませると、下に向かう用のボタンが反応し、エレベーターが作動する。他のものにはいまエレベーターが何階にいて上か下かどちらに向かっているのかというのがある。ユーユたちが乗り込もうとしているものにもあるにはあるが、稼働しているというのにいずれかの表示に明かりが灯るようなことはない。これはダミーということなんだろう。

エレベーター内にはいると、案内人は迷うことなく非常時に使えるようにとつけてある外部への通信用ボタンを押す。もちろん外部へ繋がることはなく、エレベーター管理会社によって、異常がないか逐次モニタリングされているわけでもない。そして、外にはあった階数表示は、中には無かった。地上10階から地下5階までのボタンはあるが、きつとこれも偽物なのだ。

けれども、地下へと降りているんだということは感じられる。さて、これからどうしたものか。

「いやしかし、来てくださり助かりました」

「助かった……？」

「ええ、わたくしどもは寄付金を募っているのですが、地下にある設備を運用するには乏しい金額でして、あなた様がたの援助を得られるとなれば、その問題も解決します。なにせ、ライモンシティに集まる税金の一部を回していただけなのですからね」

「ん。そうだな」

「しかし、なぜですか？ 先月こちらからアプローチさせていただいた時には、そんなものは到底受け容れられないという返答でしたね？ どういうことでこうなったのです？」

「……再検討した結果、諸君らのしていることが、我々の求めていることと一致した……つまりは、諸君らの成果が素晴らしいものだと思いますというのではいけないかな？」

この団体が資金欲しさにプラズマ団に接触したがつているらしいというのは聞いていたが、先月プラズマ団に対してアプローチをした……？ それは聞かされていないことだった。咄嗟の判断で、アドリブで言葉を返したのだけれど、あれで良かったのだろうか。

納得したのか不審に思ったのか、それ以上話しかけて来る様子は無かった。会話が無いので、当然だがエレベーターが動く音しか聞こえない。

今、ユーユウは一番奥にいて、二人の案内人はこちらを向いていない。迂闊だ。だから、ヴァルがちゃんとどくばりをやってくれれば、二人をどうにかすることができる。どうする……？ ここでやるべきなのか……？

迷っているうちに、エレベーターは停止しドアが開く。リュックの中でヴァルがモゾモゾと動いている。今、飛び出すべき時なのだと判断したということだ。だが、ユーユウからの支持がないために、飛び出して制圧することは出来ない。

「あとは、まっすぐ行っていたただけです」

「……？ 君たちはついて来ないのか？」

「行きたいのですが、あなた様と、二人だけで話をしたいとのこと  
で、邪魔をしないようにとの命令が、我々には下されています。お  
二人の邪魔をすることは出来ません」

「分かった。まっすぐ行けば良いのだな」

「はい。我々は一階にいます。お戻りになられるときは、サイパー  
氏に案内をもらうといいでしょう」

「サイパー……奥にいますということが良いな？」

「はい。あなた様をお待ちしております」

ユーユウはエレベーターから出て、入れ替わりに警備をやっている  
人間が乗る。二人を見送る。これでもう、ここには自分だけとな  
った。通路の向こう側をみれば、立派な扉がある。他のものはなん  
の装飾もされていないところを見ると、なるほど、あそこは言わば  
応接室みたいなものなのだろう。

「ヴァル、まだ出ちゃダメだからな」

リュックにそうやって言ってみるが、モゾモゾ動くのに変わりはい  
ない。ヴァルはヴァルで、嫌な空気みたいなのをリュック越しにだ  
が感じているみたいだ。

当然、ユーユウだって感じている。今のところうまくいつている  
が、いきすぎている。何かがあるだろうという場所までたどり着く  
のに、一度や二度は戦わなければならないだろうと意識していたか  
らだ。つまりは、正体がバレるであろうと覚悟していた。たとえプ  
ラズマ団のローブがあったにしてもだ。

きつとバレる。そのときは、ヴァルになんとか頑張ってもらって、ポケモンバトルになる前にトレーナーを気絶させて、あるいは拳銃で脅すなりしてやり過ごす。

そういつつもりで来たのだけれど、バレるところか疑われもしない。拍子抜けしたし、気持ち悪くも感じた。普通じゃない。サカキだって、こんなにすんなり出来ることはきつとないと言っていた。

（ということは、僕とヴァルが感じたことが正しいなら、とつくにバレてしまっているってことか？　けど、ならなんであいつらは僕を通した？）

こちらの考えすぎなのか、罠にかかってしまったのか、あるいは、まっすぐ通しても、奥にいる人間が対処できる程度だと判断したのか。

まっすぐ行けばいいと言われたが、それはもう出来ない。考えすぎかもしれないが、今やっていることを思えば馬鹿正直には動けない。幸いにも監視カメラみたいなのは見当たらないし、通路だって一本道というわけではない。よくある映画みたいに、どこかにあるだろう通風用のエアダクトを使ってもいいし、あるいは、

「……………ん、了解した。では、来週は150匹納入出来るんだな？」

人の声が聞こえる。通路右手側、重たそうなトビラの先からだ。

よくみれば、少しだけあいている。だがその声は、聴覚を思いきりきかせないと気づけないほどだった。ヴァルがリュック内右側でモゾモゾしてくれたおかげで、気づくことができた。

壁に背を預けドアから出てきたところを狙えるようにする。リポルバーをホルスターから抜き取り右手に握らせる。リュックが壁に押し付けられる為に、ヴァルも潰されるのだけど、今のユーウにはそこまで気を回す余裕はない。

「ん？ ああ、そうだ。今日はな、大切な客人が来ている。つい今しがた見張りから連絡が入った。我々のスポンサーになっていただけるかもしれない方だ。もう間もなくサイパー主任研究員と打ち合わせに入るだろう」

（気づいてない、のか……？）

この会話を聞く限りはそういうことになる。これが真実かどうかの判断はすぐに出来た。壁、重たいドアの向こう側にいる男は、本当のことを言っている。

一瞬、足音で判断してこういうことをしたのかと疑いもしたが、スコープで覗いたときに、携帯電話を使って誰かと電話している様子が見えた。中には一人だけ。姿がバレていて、こちらに電話をきかせ油断させて、それから襲い捕らえるというならば、一人ではないし電話をしてみせる必要はない。声だけ聞かせれば良いはずだ。

ということは、本当の事を喋っている。そういう判断である。



「ああ、連絡する。そうだ。そちらも、何かあれば連絡するように」

壁の向こう側で、男が電話を切る動作をする。携帯電話をしまつてから、それから別のものを取り出したようだ。それが何かまでは、このスコープでは分からせてくれない。

だが、そこから出て来るものがなんであるかは分かることができた。モンスターボールが口を開き、中から一匹のポケモンが現れた。それはスコープに反応してくれている。詳しい姿や形までは見られないが、人に近い形をしたポケモンらしい。

「さて、貴様は……………なぜ、サイコパワーを出さない？」

（サイコパワー。エスパーポケモンの力の源だと教師は言っていた。ならば、向こう側にはエスパータイプのポケモンがいるということなのか？　しかし…………）

話している内容は、なぜ出さないかということらしい。こういうことを言うのはエスパータイプのポケモンが相手のときくらいしかない。

しかし、穏やかではない声色だ。この後にやろうとしていることが簡単に想像出来る。扉の先から重苦しい雰囲気があふれる。

「せっかく我々が捕まえてやったというのに…………時間を無駄にする結果となった。その原因には、懲罰だな」

捕まえてやった？

その言葉を聞いた瞬間、ユーユウにある一つの事柄が思い出される。野生のエスパータタイプのポケモンが減少しているというニュースだ。もしかしたら、こいつらがやったことなのか？

「これは見せしめだ。非協力的なポケモンがどうなるか、奴らの前で見せてやるんじゃないか」

「……………！」

研究員らしい人間の一言に、ユーユウは素直に憤りを感じていた。気に入らない。この一言を聞いて、リボルバーをホルスターへと戻すのをやめる。

ヴァルをリュックから出して、ドアのすぐ横で待機させ、中へと入って行く。まさか誰かが入ってくるとは思っていなかったらしく、ユーユウのことを驚きの目でみてる。やがてそれは、右手に握られているものへと集中した。

ユーユウはそんな視線など全く気にしないようにして、口を開く。想像以上に冷たい声が出て来た。

「何をしている。いや、何をしようとしていた？」

「それは……………」

「そのポケモン、どうするつもりだ？」

「…………貴様、プラズマ団の人間じゃないな」

「なに……………！？」

緊張が走る。男の目は拳銃に注がれたまま動かない。

「プラズマ団は、ポケモンを人間から開放し、その力を目的としている組織だ。そんな、人間の作った武器を使うような組織じゃない」  
「……………」

「答える。何者だ？」

バレた。

いや、これは覚悟していたから別にいい。しかしながら、こんなことでバレるとは考えてなかった。

人殺しをするぐらいの集団だし、し出す前だって、ネットによれば人のポケモンを無理やり奪うようなこともしていたらしいので、こういう武器を用いて相手を脅すようなことぐらいはやっていると思ひ込んでいたのだ。

こういうことで嘘を見抜かれたことと、プラズマ団でも持たないらしい武器を持ってこんなことをしている。その二つを考えると、なんだかおかしくなつて、笑つてしまう。

「……………ヴァルっ」

ユーユウが笑ったことに対して不思議そうな顔をしている。悪いなとは思つたが、前の会話を聞いていたからためらう必要はない。ヴァルもおんなじ気持ちだったみたいだ。ユーユウが名前を呼んだ次の瞬間には、研究員の男の首筋にどくばりが刺さっていた。

無言のままに倒れる。

意識は飛び、たとえ戻ったとしても数時間は体の節々は麻痺したままだろう。威力調整したそれを、ユーユウはヴァルに撃たせてい

た。

威力超過で死んでいないかどうか心配だったが、研究員の様子を見るに、それは大丈夫みたいだ。

「そうだ。それでいい」

そんなことを言ってみるが、ヴァルはこっちをジト目で見てくる。いや、分かっている。偉そうなことを言ってみただけで、こうなってしまったのは自分のせいなのだ。

ヴァルはずっと前からモゾモゾしていた。今が出るべきときだとずっと言っていたのだ。それを、扱えもしない拳銃ばかりを頼りにしてしまったので、こうなってしまった。判断ミス。そういうことになる。

「……さて、大丈夫だったかな」

研究員がボールから出したポケモンは、人間の少女のような姿をしている。頭にある二つのツノのようなのと、ホワイとグリーンカラーが特徴的だ。確か、キルリアとかいうモンスターで、トレーナーに結構人気があるポケモンだ。学校にいる連中の中にも使っている奴がいたはずだ。少なくとも、フシデよりは人気があるのは確かだ。

そのキルリアは、部屋の角で両手で頭を抱え小さくなっている。怯えているみたいだった。

ユーユウは手をのばしてみるが、一瞬こちらへ目を向けただけで、すぐにまた身体を震わせる。

怖い目に、まさしくあうところだった。この先どうなるかを感知しやすいエスパータイプだからこそ、ここまで怯えてしまっているのかもしれない。

(……こんなの、捨てちゃうか)

モンスターボールからは開放されていて、拘束力は消えている。その気になればキルリアは逃げることで出て出来る。

だから、ユーユウだってこんなことを思うのだけれど、実行に移す気分ではない。今の怯え様を見たら、見捨てて行くななんてことは出来ない。

キルリアが感じた恐怖を、ユーユウも同じように感じていたからだ。この地下についたときから、自分の意識がいつもよりも周囲へと拡散しているように思える。

「ふう……………落ち着くまで、見てやるしかないか……………」

ヴァルに見張りをさせて、ユーユウはキルリアの隣に座り込み、頭を抱えているキルリアの手に、自分のものを重ねた。

びくり、と身体が大きく跳ねるが、逃げ出すようなことはない。そのまま頭を撫でてやると、もう頭を抱えるのはやめたみたいだ。震えはなかなか止まってくれないが。

(ホントは、こんなことをしてる場合じゃないのかもしれないけど

……)

放っておくことは出来ないし、もしかしたら目的の場所まで案内してくれるんじゃないか、あわよくば一緒に戦ってくれば、というスケベ心もあった。

そんな心はきっちりキルリアに読み取られていて、ユーユウに対しての警戒心がちょっぴり増すのだけれど、とうの本人はそんなことなどまったく考えていないのだった。

## 17・実験をしようか（前書き）

今回はちよっぴり短めです。

そう言えば、さっき確認したら、この小説へのお気に入り登録、  
00件こえてました。本当にありがたいことだと思つてます！  
1

## 17・実験をしようか

キルリアの横に座り、5分ほど経過していた。最も、ユーユウにとつてはそれ以上に長く感じたのだけれど。

研究員の一人をこうやって気絶させることになったのだが、それは結果としては良かったことかもしれない。キルリアが本当に怖い思いをしないで済んだし、なにより、彼が持っていたカードキーを使えば、とりあえず来た道を自由に帰れる。

とりあえず、ユーユウはいくつかの質問をキルリアにしてみたのだけれど、知ってることはほとんどなかった。ここがどこなのかも分かっていないようなのだ。ただ、何らかの実験のためにいるというのは想像出来たし、どうやらこのフロアにはエスパータタイプのポケモンしかないらしい。

こんな会話と呼ぶかどうか分からないことしか話していないが、キルリアの方はちょっとだけこちらに身を寄せて来てくれていた。それをまたヴァルがジト目で見てくるのだけれど、どうしてなんだろうか？

「……まだ、離れないほうがいいのかな？」

あんまりじっくりしているわけにはいかないのです、こういう言い方をしなくてはならないのだけれど、答えはわかっている。そばにいてやらなくちゃならない。



自分がこうやって一人になったとき、誰かにいてほしかったように。特に、キルリアは何かを失ったわけではないし、頼りに出来る存在が近くにいてやって、見ていてやる必要がある。離れないで欲しいと、頭を横に振られてしまった。

『……………るか』

「……………？」

『バルト、聞こえるか』

「なんだ……………？ どこから……………」

どこかからか、男の声が聞こえてくる。それが自分を案内した人間のものだということにはすぐに気づいた。どこから漏れているんだ？ バルトというのは、この男のことか？

よく見てみると、白衣の襟のあたりにそれらしいものがあつた。この小さなマイクと小さなスピーカーで、声のやりとりをしているんだろう。向こうからの受信を、小さなランプが発光することで知らせている。

『バルト、まずいぞ。ポケモンリーグの臨検だ。直ちに処刑を中止して、実験機器も全てたち下げなければ……………それに、プラズマ団のお客人も逃がさなくてはならないっ』

お客入、ということとは、感づかれてはいないということらしい。見張りの人間には、だから、やっぱり馬鹿正直に行くべきではなかったのだということに変わりはない。

しかし、そんなことよりも、ポケモンリーグの臨検、そっちの方が問題だ。誰が来てるかは容易に想像できる。こんなところを見られた日には、それこそ私刑される。

『カミツレ、フウロ、カトレア……他にも二人、だと？ どういうんだ？ なぜここにこれ程のトレーナーが来るっ？』

声を潜めてはいたが、焦りの感情で満ちている。なるほど、いま彼女らはさつきユーユウがやったことをやっているらしい。まあ、ユーユウが持っていたものを彼女らは持っていないはずなので、通ることは出来ないだろう。

だが、警戒しなければならぬし、済まないとは思いますがキルリアに構ってはられないだろう。見つかるわけにはいかない。サカキの言ったことが、現実となってしまう。

ここにすることは、いくらでも言い訳できる。しかし、ホルスターに戻された拳銃については、絶対に言い訳出来ないことだ。法を犯したのならば、慈悲は期待出来ない。

もとより、今やっていること、これからやることを許してもらおうなどとは思っていないが、今のままで戦うのはいけない。恐らく、100回やったらやっただけ負ける。

「キルリア、悪い。お前とここでこうしているわけにはいかなくなつたみたいだ」

立ち上がる。弱々しい鳴き声と、ユーユウのローブと左手を握る手があった。

「ヴァル、行くぞ」

それを無視してしまうのは心苦しかったが、ユーユウだってここに遊びに来たわけじゃない。エスパーティプのポケモンであるから、こうやって暖かさに触れている状態なら、なにをしたいが為に立ち上がったのかというのは伝わっているはずだ。

だが、離してくれない。はあ。ユーユウは一度ため息をついてから、少々強引にキルリアの手を引き離れた。

ウウウ、と悲しげな声が耳へと入ってくる。耳栓が欲しい。そう思わせる様な声だ。父親のことがかかってなければ、こいつに付き合ってやるのは構わないのだけでも。

「……………誰かにいてほしいのは分かる」

キルリアに目を合わせ、そう言ってやる。身体までは向けられなかった。向けてしまうと、構ってしまうからだ。

しかし、ユーユウが思ったのとは違い、キルリアは一生懸命に首を横に振っている。

「……………？　じゃあ、僕にいてほしいのか？」

今度は微妙そうな表情になった。こういう言葉が出たのは、才能があるらしいと言われたことによって出来たユーユウのうぬぼれなのだけど、それは違うらしい。ちょっとがっかり来たのは内緒である。

でも、違うというならなんなんだろう？ 高いサイコパワーを持っているポケモンとならば、そういう意思の疎通ができると言うが、キルリアに期待するのは望みすぎというものだ。言葉を交わせるわけではないからユーユウには分からない。もしかしたら、ユーユウの考えをしっかりと読み取っていて、実は危険が待っているんだよということ警告しようとしてくれているのかもしれない。

だから、結果的には足を止めてしまふ。そしてついでに言つと、それは考えすぎだった。

「僕たちに、危険を知らせてくれるのか？」

ただ、ユーユウはこれだと信じ切ってしまったているから、こんな間違ったことを言う。キルリアも、その表情から、ピンと来ていないことを察知したみたいだ。

はあ。今度はキルリアが肩を落としたため息をつく番だった。そこにヴアルが近寄って、元気付けるためなのか尻尾でやさしく肩を叩く。そうしてから、二匹は並んで部屋から出ていった。

「な、なんで僕が悪いみたいになってるんだ……？」

ユーユウからすれば当然納得がいかない。優しい言葉をかけていたのにいきなりため息をつかれるのだから。いや、まあ、二匹につ

いて行くのだけだ。

部屋を出て、通路を歩くキルリアとヴァルについていく。やっぱり、手助けしてくれるつもりなんだろうか。ここの施設のことを分かっているらしく、正面奥にある扉を指差しながらヴァルに何かを話している。ユーユウには何を言っているのかさっぱり分からないが。

二匹はそのまま正面には行かず、そのいくつか手前の十字路を右に折れる。迷いの感じられない動きだ。ついて行くしかない。

途中、何人かの研究員とすれ違うが、別段呼び止められる様な事はない。全員の額に大粒の汗があり、息を切らせながら走り、こちらには会釈ぐらいしかしてこない。余裕がない様子だった。これに関しては、もしここにいることがバレてしまったら、カミツレが誰かに感謝しなくてはならないだろう。

何度か通路を折れ、とうとう一本道だけとなった。少しだけ、さつきよりかキルリアが興奮している様に見える。この先に、キルリアを苦しめていた何かがあるのだろうか。歩くスピードも部屋を出たところより遅くなっている。

もう良いと、あとは自分たちがやるからと言ってしまった方が良いのかもしれないが、遅くなっているとはいえ歩いているのだから止めない。少なくとも、立ち止まるまでは考えないようにする。キルリアが行くという意志を持っている以上は、ストップをかけるつもりはない。

ユーユウもヴァルとキルリアに追いついて、一步を踏み出す。そのときだった。

「……………!？」

それは、前触れなく起こった。

変わったところは何もない。ただ、遅くなっていたヴァルとキルリアに追いつき、追い越しの一步目を出したただけだ。

視界がぐにやりと曲がり、色あせていく。本当に、何もないという印象を抱かせる白。壁はもともとホワイトカラーだったのだが、そんなものとはまったく違う。色に強弱があるので、どこに壁があるってどこに障害物があるのかは分かる。だから足を動かし続けることは出来る。

だが、足を動かすのには大変な苦勞が伴った。別に前にヤケドしたせいでも足を怪我し直したわけでもない。頭の中を妙な感覚が襲っていたためだ。

音がしている。それを感知できる。何か大きな存在が、ユーユウの頭に訴えかけようとしている。そういう音だ。

昔の蛍光灯に明かりがつくときの音のように思える。それが断続的に続いているのだ。嫌だな、というのが最初に抱いた感情だ。

だが、どうすることも出来ない。なぜならば、これは、外部からの働きかけなのだ。ユーユウよりも大きな存在によるもの。拒否権はユーユウにはなかった。

働きかけ、それに違いはないが、頭の中に響く音がユーユウにも分かる言葉へとは変換されない。だから不愉快な音が消えない状態が続いているというのが実感だ。

(……だ、ダメだ。ユーユウ……！ 頭を抱えるのをやめて、前を見るんだ。今、下を向いちやいけない………！)

下を向いてしまったら、絶対に足は止まってしまふ。今はそれが出来る状況じゃないし、ヴァルとキルリアにも心配をかけてしまふ。今から戦うのはヴァルなんだ。自分のことで、能力を落とすようなことはさせられない。

だが、進行方向、正面に目をやると、さらに頭に響く音が大きくなり、不快感が痛みへと変わっていく。余計なことが段々と考えられなくなる。どういうことでこうなったのか理解しようとする心も、失われていく。

ユーユウからは見る事は叶わないが、彼の黒髪も、部分部分でその色が抜けていく。染めた色が落ちたわけでもないのに、そもそも髪なんて染めていないのに、色抜けの部分は白髪へと変わっていた。

(……なんだっていうんだ………！)

苛立ちと痛みの中、ユーユウは正面から流れて来るものを感じていた。それを、自分の頭の中にある言葉で形容するのは難しい。だが、あえてそれでも何かのものに当てはめると言うならば、向こう

側からこちらにむかって川が流れて来ているイメージだ。

もちろん、本物じゃない。上流、下流などというものはなく、四方八方から流れて来ているし、流れているものは水じゃない。細かな黒と白の粒子が、線となって、それらが集まり大きな流れになっている。そしてそれは、一筋だけじゃない。ありとあらゆるところからだ。ユーユウの視界を段々と埋め尽くしていく。

しかし、歩くべきところはなぜか分かったし、この流れの大半がどこから来ているのかも理解出来た。

「この部屋の奥……！」

この眩きのせいで、ヴァルとキルリアに不思議そうな目を向けられてしまうのだが、状況が変わって、ユーユウはそこまで気を回せなくなっていた。やることには変わりはない。歩く。それだけだ。

ドアの前に来る。変わっているわけではない。ここに来るまでにいくつも目にした、実験設備を置いてある部屋へと続く重たい扉だ。そのはず、なのだけれど。

（中から異様な空気が漏れている……。敵がいる。敵じゃないものもいる。そうか……。この先に敵がいるのか……。……！）

不愉快。頭に強烈な訴えかけをしてきて、ユーユウを不機嫌にしていた何か。それなのに、これを分からせてくれた。それがユーユ



ウの実感だ。最も、ユーユウには、自分がただ単純にそう感じただけにしか思えないのだが。

それによって、ユーユウの様子が変わった。ヴァルにはそう見えた。キルリアの方も、雰囲気さがさつきとは変わっていることには気づけた。

「開ける、ぞ」

取手に手をかけ、身体全体を使って重苦しいドアを開いていく。ためらいはあった。だが、もうそれは見ないようにした。かけられているものが、人質にとられているものがあるのだ。ああ、でも、拳銃を使う決心はない。

そんなことを考えると、サカキからこれを受け取ったときの会話が思い出される。

『……なんです。これは……！』

『拳銃。リボルバーだ。分からないか？ まあ、君らの世代では一部の映画くらいでしか見たことはないだろうからな』

『そういうこと言ってんじゃない！ どうして！ 僕にこんなのが必要なんですかっ』

『……？ なんだ。ユーユウ君は、あの男へのトドメをポケモン達に刺させるつもりでいるのか』

『な……………そ、そんなことはしない。しませんよ。だけど、これって……………！』

『刺させるつもりが無いなら、それが必要なのではないか？』

『そ、そんなことを言っ、僕を人殺しにでもするつもりなんだろう！？』

『いやいや、そんなつもりはない。君は誤解しているらしい。私はな？ 君が必要としているだろうから、持ってきたにすぎないのだから？』

『僕が、人殺しになりたがってるとでも……………？ あの男と、同じにするつもりですか……………？』

『そんなつもりはない。そうは言わなかったか？』

『……………そいつは、一応持つて行きます。だけど、全部が全部あなたの思い通りになると思ったら大間違いですよ……………！』

『知っているよ。私や君の思った通りにならないから、我々は今こっやって、顔をつきあわせて話をしている』

フツと、視界が晴れ、周りの景色に色がついていく。ドアの向こう側に入った途端、急に現実に引き戻された。

あの不愉快な音も、今はもうとまっている。髪の毛の色だって、いつも通りの黒主体の色へと戻っていた。

（あれは、なんだったんだろう……………）

本当は、こんなことを考えている時ではないのだけでも、現実離れた、まるでゲームや漫画のような体験をした為に、まだ頭が

混乱していたのだ。

ヴァルとキルリアもユーウの後について中へと入ってくる。そこは、これまでの実験器具を設置したら、一人が自由に動けるかどうかというような、小さな部屋とは違っていた。

中は広く、天井も高い。バスケットボールの競技場みたいだ。上から照明によって暗くてまったく見えないというわけではないが、薄暗いというラインからは抜け出せていないだろう。不気味な印象を与える。

辺りにはコードやら工具やらモンスターボールがところどころあって、もし戦うとなったときは、ここに足をとられてしまうかもしれない。

けれども、そういう風に周囲を観察したのは入ってから数秒の間だけだ。それ以上にユーウとヴァルの目を引くものが、この中央には置かれていた。キルリアは、そこから目を背けている。

培養槽、というのは適切じゃないのかもしれない。そう呼称するには、これはあまりにも巨大だ。それに、ただ眺めただけではあるが、これは培養しているのとは違うように感じられた。ガラス張りになっていて、中の様子を見ることができる。

三つ。線で結べばちょうど三角形になる位置だ。けれども、位置なんてどうでもいい。もっと大事なことは、中にポケモンがギユウギユウに押し込められていることだ。あの大きさならば、ひとつにつき人が5人は中に入れるかもしれないが、今は大小様々なポケモ

ンが、20、30いる。

いずれも、緑色をした液体で満たされている。上の配管から液を投入し、下の配管から排出しているのだろうか。上側はただ液を投入するだけの配管と供給時に液体を排出する大きなホッパーしかついていないが、下側は複雑過ぎてユーユウにはよくわからない。

ところどころバイパスされていたり、色々な装置を通されてはいるがしかし、最終的には小さな一つの装置がゴールらしいことだけは分かる。それは携帯電話の充電器みたいに見えるが、そこに挿されているのはふた組のヘッドギアらしきものだった。らしい、というのは、およそ頭に取り付けるものだというのは伝わってくるが、頭を保護するようなゴツイものではないからだ。

槽内部にいるポケモンは、ユーユウに判別できるものは少ないが、全てエスパークタイプであるというのはなんとなく分かった。キルリアが成長した後の姿をしたものや、反対にキルリアになる以前の姿をしたものもある。そして、ポケモンたちに共通しているのは、みんながみんなぐったりとしてるところだ。キルリアはこうなっていることを知っていたんだろう、部屋を出たときにはちよつとだけ残っていた明るさが消えて、沈みきっている。ヴァルもこの光景に戸惑っているみたいだった。

「なんだこれは……」

何かある。それは知らされていたことだ。こういう景色をまるで考えていなかったわけではない。

しかし、実際に苦しんでいる表情を見てしまうと、啞然としてしまう。後頭部をハンマーでぶたれた様な感覚。それに近かった。いくらなんでも、そこまではやらないだろう。そんな考えをいっきに打ち砕いていく。

「……かつて、モンスターボール、というものがあった」  
「……………!？」

突如、声が響く。それがサイパーという名前をした男のものであるということ、ユーユウは直感的に理解していた。

「その開発は、過酷なものだったという。当然だ。なにせ、ポケットモンスターを、文字通り、ポケットのなかに入れられるようにしなくてはならないのですからね？」

声は低かったが、その持つ色から、どうやらサイパーという人間はひどく興奮している状態らしい。

培養槽らしきものの向こう側から声が聞こえて来るのだが、こっちに出て来るつもりはないらしい。

「この設備……………どう思っね？」  
「……………なぜ、ポケモンたちがこんな目にあっている……………?」

怒りを押し殺すので精一杯な状態だ。右手を左手でとって、おもいきり力を込める。右足を、グリグリと床にこすりつけてみる。眉間にしわが寄っていく。とめられない。

「なぜ？ おかしなことを言うのですね？ モンスターボールが最初に発明された時から、実験途上である程度の犠牲が出てしまうのは仕方が無いことだろう」

「なに……………」

「モンスターを圧縮してボールに収めたり、あるいは展開するのだ。今は当たり前のことだが、当時としては飛躍的なものだ。いくら理論がしっかりとしていても、一度や二度は必ず失敗し犠牲が出る。人、ポケモン、分け隔てなく。ま、私の知る限りでは人間が100でポケモンがその倍以上だったか。それだけの犠牲があつたればこそ、我々はポケモンをペットとすることが出来た。……こんな風にな」

言い終わると同時に、こちらへ向けてモンスターボールが投げ込まれる。ユーウ達との距離は20メートルあるかどうか。つまりは槽のちょうど手前に落ちた。

いつものようにボールが口を開き、中からポケモンが出現する。

全身が刃で覆われた人に近いポケモン。トサカの刃と、腹部にある二つの三日月型の刃、右腕左腕ともにある曲刀状の刃。一見のイメージでは、最近映画化もされた、とある地方の古い伝説に残るブシヨウというのに似ている様な気がする。

ユーウは、このポケモンの名前を知っていた。ライモントレイナーズハイスクールにいたとき、一目見てかっこいいと思ったポケモンだった。

「……キリキザン」

それが正しい名前のはずだ。しかし、ユーユウの頭にあるキリキザンのイメージとは完璧には合致しない。

頭に、さっき見たのと同じヘッドギアのようなものが取り付けられているからだ。

「……さて、では実験をしようか」

「実験……？」

「キリキザンは、あくタイプのポケモン。一般的には、エスパータイプのポケモンのワザは通用しないという。それに例外があるのか、ですな」

言っていることはつまり、ポケモンバトルをして実験に付き合えということらしい。どうやら、こちら側に拒否権は一切なさそうだ。

「ヴァル。……くるぞ。気合入れろ」

ユーユウの言葉を背中に受ける。気負いとかはなさそうだ。この光景を見たことで、ヴァルがどうなるかちよつと心配だったのだけれど、逆に、闘争心を育てたらしかった。

こういう、関係のないところでも、きつと全力で戦ってくれるだ

ろっ。

しかし、

（嫌な予感がする、か……）

施設に入る前に感じたこと。それは当たっている。なぜだろう、  
こういう予感によく当たる。

ポケモンを使った実験をしているらしい。その事実がユーユウに  
嫌な予感を与えたのだと思いたいが……しかし、そんな都合良くは  
ならないんだろう。

結局、こうやって戦うことになる。負けるつもりなど更々無いが、  
こうなった以上は、最悪のことについても考えなくてはならない状  
況だった。



## 18・なんとしても！（前書き）

戦闘シーンの描写は二ガテです（  
――（；

## 18．なんとしても！

長い時を過ごせば、そのうちのひと時は、なにをやってもまるでダメだった、というのがあろう。なんとかしようと頑張った、努力した、けれどもどうにもならなかった。

しっかりと勉強したはずなのにテストの点数がすこぶる悪かった、仕事でのちよつとしたミスが積み重なって挽回出来ず最後には解決出来ない問題になった、あるいは、戦争をしていて、拳銃の弾薬ですら尽きかけているのに強力な戦車に立ち向かうことになった。

どんなことが当てはまるのかは人によって様々で、その長さも、起きる時期も、人によってまちまちだろう。

ユーユウのことでいえば、今がまさにその時だった。

「ヴァルっ！」

攻撃はしている。ヴァルが細かく動き、鋭い尻尾の一撃、どくづきでキリキザンを貫きにかかる。

だが、それはまるで命中しない。どくばりで足をとめ、あるいは無理やり攻撃に転じようとしても同じだ。見透かされている。

確かに、ユーユウのフシデ、ヴァルと、サイパーのキリキザンとではレベルに開きがあるのは確かだ。しかし、フウロのイーグルを相手にした時よりかは開いていない。

キリキザンはヴァルを攻撃しようという意思を持っていないのか、ただ避けるだけだ。つまりは、こちらを舐めてかかってくれているというなよりの証拠なのだ。これは、イーグルの時と同じだ。だというのに、攻撃一つ当てられない。

どくばりを弾幕を張るようにして放ったところで何の進展も見られない。かわす。当たり前のようにその場からいなくなる。

「……………なんで、だ……………」

わかるわけが無い。その言葉には恐怖の心が宿っている。

一応、ウォーグルに二対一で勝ちそうだった。ジムリーダーのメインパートナーに勝利してしまうところだった。それによって得た自信というのは、残念なことに本物ではなく、ユーユウとヴァルの力も、やはりハリボテというのがふさわしいということをキリキザンによって証明されてしまった。なんと言っても、サイパーはまるで支持をしていないのだ。していたとしても、攻撃するな、ただそれだけのはずだ。

「……………!!」

ヴァルが独自の判断で動き、隙についてキリキザンのふところへと潜り込む。自身の口から吐き出させる強度が強く自在に操れる糸をめくらましに使ったのだ。

致し方ないか！ とホルスターから拳銃を抜きキリキザンに照準を合わせる。一瞬だけ撃つのを躊躇った。躊躇したが、しかし、相手がポケモンでいてまだ助かった。しかもはがねタイプだ。傷つきはしても死にはしない。

それがユーユウの指を後押しして、ヴァルの援護をする為に引鉄を引かせた。

「な……………！？」

しかし、弾丸は発射されない。引鉄を引き始め撃鉄が起こされシリンドーも回転する。完全に引いた後でハンマーが元の位置へと戻るのだが、銃身の先から弾は飛び出さず、手にくるであろう振動も思っていたよりずっと小さい。

どういうこと！？ 動揺の心にのまれそうになる。一歩間違えれば完全に混乱してしまうくらいに。

ヴァルも心のどこかで援護が来るのを期待していたのか、ユーユウからなにもしてくれないのがわかって、わずかながらに体勢を崩す。だが、それは関係がなかった。どちらにせよ、ヴァルが繰り出したどくづきが命中することはあり得ない。

結果的に不意をつけた。そういう状況になった。しかし、つけていようがいまいが、キリキザンはヴァルの攻撃をかわしていただろう。

もともと、ヴァルが得意とするどくばりやどくづきという技は、はがねタイプのポケモンにはあまり通用しない。はがね、金属には、毒が回ることがないからだ。

無論、純粋な針の威力、突きの威力というのは通るようにはなっているが、しかし、その攻撃ですら当たらないのでは、これはもう無理なのではないだろうか。

ふところに飛び込むことにかけていたヴァルからすれば、「冗談ではなかった。ただの一撃も加えられない。体勢も崩れ、致命的な隙をさらす。

その腹部へ、キリキザンの刃が入って来るのは、ある意味当然だと言えた。一撃。一閃ではない。というのも、刃の方ではなく、峰にあたる部分で攻撃したからだ。みねうち。斬られるよりかは遥かにマシだが、軽いヴァルの身体に衝撃を与えるにはじゅうぶんだった。

しかし、みねうちをする速度はそこまではやくなかった。ヴァルはちょうどユーユウの手前まで吹っ飛ぶだけで済んだ。つまりは、みねうちをされた上で、さらに手加減をされているということなのだ。

「ヴァル！」

ユーユウはしゃがみ込み手をのびしヴァルの身体に触れる。体力の半分はいまの峰打ちで持っていかれてしまったが、戦うことはま

だ出来るみたいだ。瞳にうつる闘争心も、まだ失っていない。まだやれる。しかし、

（こちらの攻撃がまるで通用してない……なぜだ？ まさか、こっちの攻撃が全部読まれてるとでも……？）

そこまで思ってから頭を振る。バカな考えをしてしまった。そんなわけではないのに、ないはずなのに、一瞬だけでもそういうことに考えが至る。

戦ってる人間としては、恥ずかしい。自分の思った通りにならな  
いからといって、こんなことを考えるなんて。

（それでは……ガキ向けのゲームとか漫画や小説だ。そんなバカな……あり得ないっ。予測と、能力と、状況と、運と……考えが読まれるわけが……！）

だが、それでは説明がつかない。以前ユーユウが戦ったフウ口と比べると、ポケモンの能力も、戦っている状況も、トレーナーの経験だつて、このサイパーはなに一つ敵うところは無いはずだ。

それなのに、勝てもせず、それどころかどんな攻撃もただの一度ですら入らないというのはどういうことなのだろう。どくづきも、どくばりも、まるで届くような様子はない。これまでも、そしてこれからもだ。だから、もう一度考えてしまう。そして、今度は、口に出していた。

「まさか……奴、こちらの攻撃が……どこから来るのか分かっているのか……？」

「それだけではありませんなあ？」

「な、に……？」

自信たつぷりの声。ドクン。心臓の音が跳ね上がる。いやらしさと卑屈さがこめられたその声は、ユーウがそんなわけはないと思つたことにあつさりと肯定の意を返してきた。

サイパーが、ゆつくりと影から出てきて、キリキザンの真横に立つ。頭には、同じようにヘッドギアのようなものがある。

「……君はみらいよちというワザを知っているか？」

「みらいよち………？」

「エスパタイプのポケモンは、未来を見通すという。より強力な能力を有すれば、戦っている相手の未来に攻撃をしかけることも、不可能ではない」

「それが……なんだというんだ!？」

「聞くなよ。分かっているだろう。この頭にあるこれによって、私も、こいつも、貴様らの攻撃を見通していたのだよ」

(そんなバカな……!)

バカな、とは思ったが、現実として攻撃は命中せず大量のエスパ

「タイプのポケモンがここに運び込まれ、実験材料にされている。あの緑色をした不気味な液体に浸され、それによって、サイコパウーがああヘッドギアに充填される。」

「もちろん、攻撃だけじゃあない。貴様がプラズマ団の人間ではないことも、臨検にきたジムリーダー達がここに来ることなく帰ることも、そのフシデとハクリューが、キリキザンにかなわないことも、全て分かっているのだ。なぜなら、私の未来の光景がそうになっているんだからねえ」

ハクリュー……？

いや、そのポケモンがどういうものかは知っている。ユーユウの所持しているケイトもそう。ミニリュウが成長したポケモンの呼び名だ。ケイトがすでにそうになっているというのだろうか。

自信に満ち溢れたサイパーの表情。自分の言っていることが絶対に間違っていないということを確信している。

未来が見える。サイパーはそう言った。いま起きたことだって、それを証明することだ。試しにケイトをボールから出してみると、確かに以前とは姿が変わっているような気がする。

ミニリュウは身体が大きくなるたびに脱皮を繰り返すのだけれど、それをした後の皮の残骸も一緒に出てくる。

なるほど。これは確かに姿形が変わっていると言っている。身体が少し肥大化し頭に小さな角が生え、首に一つ、尾に二つ、水晶のような玉が出来ている。これはケイトのもつエネルギーによってつくられたものなのだろうか。

なるほど、確かにハクリューへと成長……進化しているらしい。



体調が良くなさそうに見えたのは、これの前兆か。

「バカな……」

「いまので分かったのではないか？ 未来を見通せる。私はそれが出来るんだ」

「……だったら、なんで僕をここまで通した？ 矛盾してるじゃないか。プラズマ団じゃないと、敵だと分かったなら、普通ならば、ここに来させる前になんとかするんじゃないのか……！？」

「貴様らにそれをさせる価値があればな」

「なんだと……！？」

「そうだろう？ 貴様達がもし強いというならば、警備のところから相手をさせるし、私だけでこれを使うようなことなどしやしませんよ。しかし現実には、わたしが敗れる光景はみられなかった。ということとは、君にまるで力がないということの証明ではないのかね？」

「証明……？」

「ふ、ジムリーダーたちが帰ったという報告もきた。全て予定通りだ。さあ、どうする？ まさか、このまま返してもらえとは思っていません？」

「……………」

サイパーの問いに、ユーユウは顔を伏せ黙り込む。ヴァルとケイトはまだ戦う気持ちでいる。負けるつもりもないみたいだ。

うつむいた状態は数秒だけだった。それが終わると、ゆっくりとだったが顔をあげる。ユーユウだって、勝負を諦めたつもりはない。

「……そうやって未来を見通せた気になって、勝ったつもりでいるのか」

「……？ そうではないかね！ 貴様のポケモンの攻撃は通らない。キリキザンはいつでも攻撃できる。つもり？ もう勝負はついてるのさ！」

「だったら、そういう気持ちなら、お前は勝てないよ。僕が勝つ」  
「ふん。なにを根拠に……」

と、そこまで言ってサイパーも気づく。ユーユウの髪の色が黒ではなくなっている事に。瞳の色も、それに合わせて変わっていた。染まり切っているわけではなく、ところどころ白かったり黒かったりしている。不気味なイメージ。灰色がメインとなっている。

「こつちが、勝つよ」

もう一度。

短く静かな言葉だというのに、相手に恐怖の念を抱かせるだけの勢い、熱をもっていた。それによって、ヴァルやケイトにも、ただ見ただけでは実感する事が出来ない力が備わっていく。

もしかしたら、自分はいままでずっとどこか呆けた状態だったのかもしれないとユーユウは感じていた。いや、別に寝不足だとか、そういうのではない。ただ、意識が段々と広がっていく感覚は、寝ぼけている状態から、完全に目を覚ます時に味わう感覚とよく似ていた。

だが、サイパーが見られる未来は、自分がやがて目にする景色は変わらない。キリキザンがユーユウの胸に刃を突き立てる。変わらない、はずだ。

「貴様が戦うつつもりだというのは分かった。しかし、なぜだ？ なぜ私と戦う？ そっちにだって、本命、他に戦うべき相手がいるのではないのかな？」

「……………！？」

「ポケモンの使うみらいよちというのは便利でな？ 私に関わる人間のことも、多少は予知する事が出来るのだ。一ヶ月前に、今日の事が分かってな？ お前に起きる事もそれなりに分かったのだ」

「分かった……………？ だと……………？ じゃあ、お前は、ひと月も前から知っていて、なにもしてくれなかった、と？」

「当たり前だ。たいした力も持たず、なのにこちらのやることに反発する人間を、なぜ救わなくてはならない？ それに、その時は、ブルズマ団がダメだということで、ライモンシティの市長に私が独自にアプローチしていた時期だったのだな」

「……………」

「結果は良好だったよ。これで金の問題は解決した」

「己の都合、か……………」

「ああ、そうだとも。だが、自分の都合という意味では、貴様だつて一緒だ。なんの為にここに来たか……………それが自分の都合ではないとは言わせない」

「そうか……………！」

きつと、そうか。そうなんだろう。父親のことを教えると言ったサカキも、いまそばにいてくれる五人も、ユーウやサイパーとかわりなく、自分のためになるからそうしているんだ。

だがしかし、それでも、そうであつたにしても、この光景を見て、エスパーポケモンが苦しむ姿を認識して、なんとかしてやりたいと思つたし、それが正しいことなのだと思つた。

「僕は、あんたとも、サカキとも、ジムリーダー連中とも違つ。ただ見ているフリも、いなくてもいい時にまとわりつくような真似もしない。昔の人の言葉の通りだ。為すべき事を為し、正しいと思つた道に行く。……それが僕の正義になるんだ……！」

「……………貴様も、やはり自分の都合だけだな」  
「そんなことはないっ！」

ユーユウの絶叫が第二ラウンドが開幕する合図となつた。ヴァルが飛び出し、ケイトがそれに追隨する。しかし、先にキリキザンに到達したのはケイトだ。ハクリューに進化することによって、以前よりは遙かにすばやさが上昇しているらしい。もちろん、他の能力値だつてそうだ。

だから、キルリアはそれを把握してか、自身のサイコパワーの矛先をヴァルだけに向け精一杯でだすけている。キルリアはエスパタイプで、そのサイコパワーを用いているのだから、どくタイプのヴァルの能力は普通にてだすける以上に強化されているはずだ。しかし、それでもケイトの方が優れている。

「ヴァル、どくばりっ」

ユーユウの言葉にこたえ、ヴァルはキリキザンに向けてどくばりを放つ。尾から飛び出して行く針の群れは、通常よりかは毒性は非

常に弱く、しかし、その口径は大きく、初速もはやかった。どちらかと言うとどくばりではなくミサイルばりだ。しかし、ミサイルばりと呼称するには威力は低い。当たり前だ。どくばりに工夫を加えたらそうなたただけで、言わば偶然の産物だ。訓練をして確立させたワザと同じ、というわけにはいかない。

だが、キリキザンは同じように回避をする。そこが狙いだった。

「たたきつける！」

今度はケイトがこたえる番だ。ヴァルのミサイルばりもどきによって、特に労せずキリキザンの右脇へと飛び込めていた。

勢いをつけた、強靱な尾による一撃。それは右腕にある刃の腹で受けることによって防がれてしまうのだけれど、いままでヴァル一匹では入れられなかった一撃が入ったというのは、大きい。

「よし……！」

サイパーの表情を見ると、さっきよりは多少は曇っているようだ。当てられると思っていなかったわけではなさそうだが、少しばかり計算違いが発生しているのかもしれない。

（こっちだって、気持ちの緩みがあったのかもしれない……）

ふと、そんなことを考える。フウロに勝ちそうになったという事実。たとえそう思っていなかったとしても、知らず知らずのうちにユーユウやヴァルにたいして悪い余裕というのを与えていたのかも

しれない。けれども、それも終わりだ。死ぬ気でかかる時が来た。

だが、その思いとは逆に、ユーユウは弾を撃ち出すことの出来なかったりボルバーを腰のホルスターにしまい込む。正々堂々、ポケモン同士の戦いで決着をつける！　そういう気持ちだ。

もちろん、三対一をやっている時点で、正々堂々もなにも無いし、その気持ちこそが油断以外の何物でもないのだが。

そついう油断を抱いたのにもかかわらず、戦闘はこちらが優勢であるように見えた。ユーユウの指示は追いついていないところが多いが、そこはポケモンたちの自己判断によってカバーリングされている。

キリキザンの足下にキルリアからのサイコウェーブが放たれる。

強力なサイコパワーの波動を束にして送り出す。キリキザン自身はあくタイプのためにサイコウェーブは通用しないが、地面を破壊し足をふらつかせることは出来た。ヴァルとケイトはその隙を逃さない。やることは分かっている。どくづき、それにたたきつける、だ。

「ヴァル、どくづき。ケイトはたたきつけるだ。キリキザンを挟撃  
っ」

一拍遅れてユーユウの指示が飛んでくる。適切だが、遅い。そこらへんは、素人のトレーナーらしかった。キリキザンは身を縮めて、攻撃を受け止めるらしい体勢をとった。しかし、心なしか、反撃をしかけるタイミングを見計らっているかのようにも見えた。

「きりさく！」

「……………！？」

胸をえぐって来るような感覚に襲われる。これはダメだ！ とう意識がユーウの頭の中を占めた。しかし、それは遅かった。

両の腕の鋭い刃をきらめかせ、その場でコマのように素早く何度か回転する。最終突撃をかけていたヴァルとケイトはよける事が出来ず、キリキザンの刃による一撃をともに受けてしまう。

「う……………」

名前を呼んでやることすら出来ない。ヴァルから、ケイトから、それぞれの身体から噴出する血を見てしまったからだ。たったの一撃で二体ともが後ろへと倒れこむ。

両刃に付着した血を指でなぞり、指につけさせた血を地面に叩きつける。これが実力差。現実だった。

数的優位はあった。あったのだけれど、それ以上にレベル差があったのだ。しかも、いまの攻撃を見る限り、キリキザンはもう油断はしていないだろう。打ち倒す。その気持ちでいる。未来を見据えているおまけ付きで。

「……………さて、さっき、貴様はなんと言っていたかな？」

「……………」

「勝って見せる。そうは言っていなかったか？　しかし、実際はこれだ。フォッチャーの見せた光景の通りになっている」

ぐつと握りこぶしを作る。悔しさに震えた。

「正しいことを為すだと？　貴様は、本当に正しいことをしていると自分で思っているのかい？」

「僕が……」

「本当に、これを潰したほうがいいと思っているのか？　こういう風に、未来の行く先を見通すことの出来るマシンを得たいと思ったことは無いのかね？」

「僕が……！　嘘をついてるっていうのか！」

「きつとあるだろう。一度くらいは。先を見通せればと、分かっていたら、分かっていたら、分かっていれば、救えたのに」

「ふざけるな……！　そんな、エスパーポケモンの命を利用して得られる力なんて、誰が必要とするものか！」

「……そんな、倫理的に認められない、なんてことをわざわざ言うて見せなくとも良いのだよ。そんなアピールをしなくてもいい」

ユーユウは、サイパーを睨みながらも、しゃがみ込み、偶然近くに転がって来ていたケイトを抱き寄せていた。身に力が入っておらず、引き寄せるのにはかなり力をこめる必要があった。

ヴァルの方は、キルリアのねんりに任せてある。邪魔をする様な気配は感じられないから、きつと、難なく引き寄せることができるだろう。



「かつて、巨大な電力を捻出するものがこの世にはあった。それは人々の暮らしを豊かにし、その技術の元で、人々は繁栄し、勢力を拡大した」

「なんの話をしている……？」

「しかし、そんな美味しい技術があるわけもなかった。巨大なエネルギーを得るのと引き換えに、その技術の産物は、幾度となく、我々に毒を撒き散らして来た。人類を死滅させ得るほどの毒だ。完全に人が住めなくなった場所もある」

「……」

「もちろん、何も運動が起きなかったかと言うと、そんなわけは無い。いくつも、何度も、そんな技術は捨てるべきだという運動は起こった。だが、無くならない。当たり前だ。人は楽な方に生きる。その技術を使わなくなってしまうと、明らかに不便になるからな。だから、運動が起こったといっても当然本気ではなかった。みなが呟いたそうですよ。毒があるのは確かだ。だが、これが無くなったらどうする？ と。これ以上に不便になるんだぞ？ と。そこからは大合唱だ。無くなつては困る無くなつては困る無くなつては困ると。呪文のように、な」

「……あんただって同じだ。悪いことをしているのに、ポケモンを犠牲にしているのに、それを知っているのに、まるで止まろうとしない……！」

「だが、これが実現すれば、人々の暮らしは便利になる」

「便利だが、そんなに大事かい……」

「大事さ。今はな、貴様が目にしているのはちょうど未来を見通す

技術の黎明期と言ったところだ。だから、この光景を見て怒りの感情を抱くし、こうして戦ってもいる。だが、知ったのがフォッチャーがじゅうぶん馴染んでからではどうだ？ 自分が使っているものが、数多くの犠牲の上に成り立っているものだと思ったら？ どうするのだろうな？」

「そんなもの……決まってる！」

「そう！ 決まっている。貴様だって人間だ。何も変わらない。だから知ったところで、貴様だからって、言うことは変わらないのだ。土に埋もれた世代と全く同じことを言うだろう。無くなつては困るとね」

「……………」

こんな会話をして、本当はなんの意味も無い。どっちが正しくて、正しくないのか。そんなものを比べているわけではないのだ。

ユーユウの手はさっきよりかは力が無くなっているが、しかし、頭の中で渦巻く感情は真逆だと言ってよかった。

「どんな……………」

「……………」

「どんな御託を並べようが……僕のやることは変わらない」

「分からん奴だな……………」

ユーユウの手には、フウロからちよろまかして来たすごいキズぐすりが握られていた。痛みあまりつぶっていた目が開き、ヴァルとケイトの身体に身軽さが戻っていく。

二匹に手をのばし、戦うことが出来るのを確認したところで、ゆっくりと立ち上がった。瞳には変わらず強い力。

「為すべきことを為す。……なんとしても!」

白も黒も無くなる。

ユーユウの髪の色が、完全にグレーカラーとなった瞬間だった。

## 19・無くなつては困る(前書き)

遅れてしまつてゴメンなさい。なかなかうまく書けんもんです。とんでもない難産だった(^^;;)

## 19・無くなつては困る

戦いの様子は、さつきと違っていた。一方的では無くなっている。それは、ユーユウの髪の色が変わってしまったからと言ってよかった。

マスターからの指示は、何も出ていない。それなのに、ヴァルもケイトも明らかに動きがよくなっている。言葉を交わさずとも、トレーナーの意思がポケモンへと伝播しているとでもいうのだろうか。

ユーユウは不思議な感覚の中にあつた。さつき頭に響いてきた音が、再び戻ってきたのだ。しかも、さつきみたいに蛍光灯に明かりがつく時に聞こえる音が続いているのではなく、火打石に小さなハンマーを打ち付けた時に鳴るような音が連続して聞こえる。他者からの強い働きかけ。

そして、そんな耳障りな音が頭の内側から響いてくるというのに、感覚はびっくりするくらいにシャープで、しかも感じたことがそのまま戦っている二匹に伝わっているようだった。

キリキザンは徐々に押し込まれ出している。頭に広がる光景、次はこうなるだろうという光景がめまぐるしく変わっていく。サイパールの側も一緒だ。フォッチャーがまるで機能していない。

行く末を見つめきっているような目が、そういうものがあるのだという雰囲気はユーユウからあふれる。不思議な感覚、間違つた表現ではないが、しかし、不思議、で言い切ってしまうのはあまりにも寂しい。

（ヴァルが出過ぎている。ケイトのやり方が阻害されている。突っ込みすぎているって気づかせないと、攻め続けることが出来なくなってしまう……！）

そう思った。ただそれだけで、突っ込んでいるポケモンと、少し後ろで援護をしていたポケモンとが素早く入れ替わる。キリキザンに反撃をする間を与えてない。

しかし、元々の能力の差は大きい。今この場で覆すことが出来るようなものではない。反撃してこないのは、ただ単にキリキザンが自身の両腕の刃を用いて攻撃を受け流しているからに他ならない。

キリキザンは構える。先ほどのように回転しながら両腕部できりさくつもりだ。多少のダメージを受ける覚悟をして反撃に移ることだって出来る。

サイパーの口元が釣り上がる。所詮髪の色を変えてみたところで覆せることではないんだ。こんなとこだろ。フォッチャーにも、再びきりさくの攻撃を受け大きな傷を負うフシデとハクリューの姿がうつされ、それがほぼ遅延なく削られることなくサイパーの頭に広がっていく。

だが、しめたと思ったのはサイパーだけではなかった。ユーユウだってそうだ。

今のままでは、ヴァルとケイトが攻撃し続けたとしても、八ちに刺された程度のダメージだって与えることは出来ないだろう。

（ケイトがまきついて攻め気を削ぎ、ヴァルがミサイルばりを目に命中させる……！）

またも思っただけ。

そうすれば良いだろう。そう感じたただけ。しかし、それは何かを介在して、ヴァルとケイトにしっかりと伝わって、それぞれの頭の中でいいように噛み砕かれて、身体の動きへと変わる。キルリアも、それにあわせて二匹をてだすけしようとする。

これは、やはり、キルリアが、エスパータタイプのポケモンが、意思疎通が出来るようにとサイコパワーを用いてやってくれているんだろうか。

だが、外部からの働きかけのおかげでこうなっているのかもしれないという感情もある。どちらなのだろう？ ユーユウには分からない。

しかし、原理は分からないが、ヴァルもケイトもちゃんと動いてくれている。

サイコパワーによる能力補正のおかげですばやさの増したケイトが、以前は地を這うだけだったが、ハクリューになることによって宙に浮かぶことが出来るようになったケイトが、キリキザンにまきつく攻撃を行い大きな力強い枷となる。そこに、キリキザンがさつきと同じようにきりさく攻撃をする。

しかし、動きが阻害されてしまったてはケイトに命中するわけがない。振り払うことも難しい。腕の刃を圧縮すれば、ケイトとの力の差を考えれば簡単に自由になることが出来るのだけれど、それをやるうという考えにはなれなかった。

それはもちろん、ヴァルがいるからだ。タイマンではなく、一対二だからだ。ケイトを振りほどきにかければヴァルが攻撃してくる。針による攻撃にはまったく臆する必要はないが、あの大きな尾を使つての攻撃と、口から吐き出される強度のある糸はまともに受けたくない。どうなるかは分からない。

しかし、それは失敗だった。さっきのユーユウからの指示をヴァルはしっかりと受け取っていて、さらに実行することにまるでためらいは無い。そして、一発では命中することがおそろくない針は、弾幕を張ることによってきつと命中するだろうという表現に変わる。

しかしそんな確率のなかでも目にあてることができる。分かっていた。声にならない悲鳴を口にし、キリキザンのけぞる。きりさく途中だったということを完全に忘れてしまった。

そこに、

「ケイト、たたきつける！」

それは意思ではなく、声だった。だけれども、言うまでもない。最初にそうしようと思った時点で、ケイトには伝わっているのだ。どいうワザを使えばいいのかも、ヴァルのミサイルばかりによつてどいう体勢になるのかも、たたきつける攻撃をどこに当てればいいのかも。

直撃する、頭部……フォッチャーのあるところに。キリキザンのはがねタイプだ。たたきつけるというノーマルタイプ……言わば体躯を活用したワザはあまりダメージがいくことはないのだけれども、



いまの攻撃対象はキリキザンじゃない。

接近戦。一時的とはいえ目を潰されることとなったキリキザンには、ケイトの攻撃をかわす術はない。たとえ、自身に、全身にまわりついてた枷が外れたとしてもだ。

ミニリユウの時よりも遥かに強靱なものへと変わった体躯が、強力な一撃をもたらす。所詮、人間がこれで大丈夫だろうと作ったモノだ。ケイトの一撃に耐えられるわけではない。凄まじい衝撃によって、キリキザンの頭に取り付けられていたフォツチャーは粉々になっってしまった。

フォツチャーが衝撃を受けてくれたことによって、キリキザンにはほとんどダメージは入ることはなかった。しかし、傷をつけられなかったのだけでも、戦闘の帰趨に与えた影響というのは、大きい。

どういう攻撃が来るのか、どうすれば回避することが出来るのか、それが分かるのと分からないのでは、それはもちろん違う。

サイパーの顔が苦渋の色に染まる。それは理解していた。理解していたが、しかし、重要なことではない。もっと大切な事柄が、ユウの頭を占めていた。

（……分かる。僕、僕、には、全部分かる……！ ヴアルやケイトをどう動かせばいいのかも、キルリアのサイコパワーがもたらす効力も、キリキザンを、死に追いやるやり方も。……分かる。僕には何もかも、分かる……！ だけど、なんでなんだ……？ こんな、トレーナーとして、まるで成熟していないのに……！）

この戦いに負ける事はないという確信と、しかし、力の出て来る部分がまるで分かってないという宙に浮いているような感覚。そして、外部からの訴えかけ。とても大きな存在を身近に感じることが出来る。

不思議な感覚と言い切るのはさみしいが、適切だった。先を読み取ることもできるらしい能力も、あるいは相手の脅威を分かることが出来ることだって、どうしてそうなるかは分かっていない。

だが、奴の、サイパーの顔をさっきよりも苦しいものへと変えることができる。それが出来ることだったし、それだけが出来ればよかった。

キリキザンの頭にあるフォツチャーを破壊し、ヴァルとケイトは共にいったん距離をとった。ユーユウからの命令だ。あれでこちら側が有利になったとは思えないのが二匹の感想になるのだけど、マスターの命令だ。それに逆らうようには出来てはいない。そういう意味では、ユーユウが考えていることの全てが伝わっているというわけではないと言える。

「どういっつもりだ……？」

さっきより明らかに焦りの色が混じっているサイパーの声。それはユーユウにさらに大きな苛立ちを抱かせる源でしかない。しかし、イライラした感情に身を任せたところでいい結果を得られるわけではないことは分かっていた。

「サイパー。あんたのフォツチャーは完全じゃない。……このまま、

このまま続ければ、僕は、あんたを殺さなくっちゃならなくなる」

「……私の頭には、そんな景色は映っていない」

「今すぐに、装置を停止しポケモンたちを解放しろ。そうすれば、命まではとらない」

「私がつくったフォツチャーは完全だ！」

「……未来が分かっている。そう言ったな。だけど、これが現実なんだ。力が及んでいない相手に追い詰められ、フォツチャーは破壊されてしまった。エスパタイプは、扱うトレーナーに対する精神状態によって、対する気持ちによって生み出されるサイコパワーは違ってくる。こんな、無理やりみらいよちに使うサイコパワーを取り出しておいて、それがいい結果をもたらすわけではないんだ！ たてえ本当にそれを使うことによって未来を把握できるといっても、そんな間違ったパワーが充填されたものでは、未来を垣間見ることなどとは出来ない！」

「私には未来が見えているんだ！」

未来が見えている。分かっていると言う。しかし、サイパーの目は明らかに焦点が定まっていない。少しばかりおかしくなってしまう目だ。

言っていることだって変になってきている。ユーユウの喋っていることに対しての答えとしては適当だが、そこに冷静さはない。その、熱を持ったままでサイパーはゆったりとした歩みで三つの槽の中央に位置するところにあるコンソールにとりつく。

ここで三つの槽のどのポケモンからサイコパワーをとりだしフォツチャーに充填するかを決めることができる。

（まさか、本当に僕の言った通りにすると……？）

その行動にユーユウは驚く。自分で言ったことなのだけでも、本当にするとはまったく考えていなかった。否定して、また戦うことになるだろうと決めつけていたのだが、そうじゃないのだろうか？

もちろん警戒を解いたわけではなかったが、しかし、サイパーの行動によってユーユウに隙が生まれたのは確かだ。そして、指示を出しているユーユウに隙が生まれたということは、ヴァルとケイトにも一瞬の間が出来てしまうということだ。そして、サイパーに変わらず取り付けられているフォッチャーは、それを完璧に装備者に伝えていた。

「……………！？」

極大の閃光！

視界を完全に覆い尽くしてもまだ足りないほどの光が一気に目に入ってくる。白と黒だけの情景しかなかったが、エスパータタイプのサイコパワーによるフラッシュはより感知しやすかった。だから、ただでさえ強烈な輝きが、それを一層増して入ってくるということだ。耐えられるわけもなく目を瞑ることになるのだが、しかし、遅かった。

何も見えなくなり目も開けられなくなる。どうやら、強い指向性があったようで、こちら側だけにむけてフラッシュを放ってきたらしい。頭のすみで感じていた嫌な予兆が自己主張を始める。

こちらを心配するような鳴き声と、騒がしく必死な二つの声。最

初のがキルリアで、あとの二つがヴァルとケイトなんだろう。目は見えなくとも、この空間に唯一存在する三つの暖かな心が、身を案じてくれている。

けれども忘れてはならないのが、向こう側にいるおそらくはサイパーの存在がより大きく感じられるようになったことだ。それはつまり、先ほどよりもよっぽど敵意が大きくなったという証拠だ。

そして、

「!?!」

今まで生きてきた中でまったく感じたことのない痛みがユー・ユウの右腕を襲った。鋭いものがほんの一瞬だけ腕を走り、普段は空気に触れる事のない部分がさらされる。

「ウツ……………!?!」

たまらず、声にならない叫びをあげた。もしかしたら、三匹は気づいていて、キリキザンが向かってきているのになにもしないユー・ユウを見たためにあんな声を出したのかもしれない。

しかし、真実がどうなのか、などということに気を回せるだけの余裕がユー・ユウにはなかった。

頭を殴られた時に来るような鈍重な痛みとはまた一味違う、繊細で鋭い印象を抱かせる痛み。痛いことにはかわりはないが、かなり違う。殴られたことはいっぱいあるが、こういう風に斬られる痛みというのはあまり経験がない。慣れていなかった。だから、最初に気づいた時には意識が飛ばされそうだった。

内側の肉が見えてしまっているが、骨を断たれなかったのは本当に偶然だった。フラッシュのせいで視界がなくなって平衡感覚が失われた。そのためにユーユウはキリキザンに斬られたのだけれど、フラフラとしていたおかげで斬られる直前に偶然にも後ろ側へもたれるような形になっていた。

もしもそうならいなければ、ユーユウは右腕をもっていかれていただろう。まあ、痛いことに変わりはないのだが。

右腕をおさえながら叫ぶのをやめたユーユウはそのまま倒れこむ。おさえている左手には生ぬるいドロリとした感触。それを実感してさらに痛みは増していく。

耳には身体と身体がぶつかり合う音がする。きっと、とどめを刺しにきているキリキザンを、ヴァルとケイトが止めていてくれるのだろう。

フワリ、とユーユウの身体が宙に浮く。キルリアのねんりきによって、そうなっているらしい。ゆっくりと後方……入り口の近くへと運ばれていく。その途中で、フラッシュによって潰された目の視力が段々と戻ってきた。相変わらぬ白黒灰だったが、ユーユウの予想した通りになっている。

キルリアはこれまでにないくらいに集中してサイコパワーの放出をし、ヴァルとケイトはなんとかキリキザンに食い下がっている。

どれだけ真剣にそれをやっているのかは、額から流れ落ちる異常なほどの汗や、あるいは刃により身体のすみずみにいれられた切り

傷を見ればすぐに分かる。

ドサリ。最後まで傷がより痛むことはなく、ユーユウは後ろへと下げられた。とんでもなく苦しいが、ようやく立ち上がる。視線の先には変わらずに立ち向かう二匹がいた。そこにはもう、必死さしかない。

「や、やめ……………」

幾度となく刃によって傷つけられ、地面に叩きつけられ、しかしそれでも下がることはない。そんな様子を見て、ユーユウは言っではならないことを言ってしまいそうになった。

すぐに頭をブンブンと振り、それを払拭する。

ダメだ。何を考えてるんだ。ヴァルとケイトが傷ついている。見たくないから、これ以上苦しませたくないからもうやめさせよう？ ふざけるな。遊びをやっているんじゃない。

もう始めた。ここまで来た。下がることは出来ない。だいたい、戦うことをやめてしまって、それからどうなるというんだ。これしかない。痛い。確かに痛い。初めての痛さだ。だけど、これが、ユーユウが、決めた道を進んでいるという何よりの証拠だ。

痛みはさらに増している。しかし、歩いていく活力、走り出す活力はフツフツと湧き上がってきている。

「……………行ける」

前を向く。無理やりサイコパワーを引き出しフラッシュをさせられたエスパークタイプのポケモンたちは、もうただの一匹も動かない灯は全て消え去ってしまった。ただの抜け殻が、そこに浮かんでいる。それだけだ。

そして、話によれば、来週は150体だという。

「なぜ、死んでいない……？」

動揺し切ったサイパーの声。もう何度目だ？ どうしてだか、視界にはうつっていない。声は聞こえているのに。

「死んでいるはずだ！ そうフオツチャーによって見せられた！何なんだお前は！？ いったい……！？」

ああ、キリキザンがまたおされ始めた。下がらなくていいのか。死んでしまうのだぞ？

伝わってくる。まったく見えていないのに、何が起こっているのか、ヴァルが苦しんでいるのか、ケイトが傷ついているのか。

走り出す。痛い。痛い、走る。

勝とうが勝つまいが、ポケモンでは、ヴァルとケイトだけでは駄目だ。一人がいなくては、ならない。

「フオツチャーが機能していないなど、あり得るはずが……」

「もう、やめろおおおっ！ 汚い手は使えないっ！ お前はもう手詰まりになってる！」

「なっていない！」



「いとをはく、りゅうのいぶき！」

名前を呼ばなくても、誰にやって欲しいのかを伝えられる。たとえ同じワザを命じても、今のユーユウの状態ならば、ヴァルがどのタイミングで攻撃し、ケイトがどうやってトドメを刺せばいいのか、二匹はちゃんと理解できる。

ヴァルが吐き出した糸が腕に絡まり、ケイトの口から勢いよく放たれた薄青色の息吹がキリキザンの足に直撃する。それでも、致命傷にはならない。なるのは、次の一撃だった。

糸吐きをやめ、ヴァルが懐に突っ込む。得意技。どくづきだ。凄まじい勢いで息吹を吹き付けられることによって、はがねの身体をもつキリキザンの耐久力は一気に低下していた。そして、そこにキリリアによるサイコパワーでのてだすけ。全力を費やしているので、ヴァルの尻尾の危険性が跳ね上がる。

そしてヴァルの尾は、まったく容赦なく、キリキザンの右足を貫いていた。

「……………！」

悲鳴、絶叫が、はじめてキリキザンからあがってくる。だが、まだ終わってなかった。

どくづきをした尾が足から抜かれ、素早くもう片方をも貫く。悲鳴はまだあがり続けている。たまらず顔をあげ天を仰ぎ、その両目から涙が溢れてくる。

左足からも尾は抜かれる。しかしまだ休めない。キリキザンの視界に、ぼやけてはいるがハクリューの姿が飛び込んでくる。しなや

かな尻尾が振り下ろされた。

キリキザンは逆らうことが出来ず、たたきつける威力をそのままに受ける。勢いよく吹っ飛び、数度地面に叩きつけられバウンドし、一番左にあつた培養槽へと突っ込む。

そこでキリキザンはようやく止まれたが、身体はピクリともしない。中の液がドツと漏れ出して動くのをやめた身体がそれを被る。エスパードタイプのポケモンも中から次々と出てくるのだが、それらだってピクリとも動かない。

これで、ひとまずは、ポケモンバトルは終わった。キリキザンの他になにも持っていないのは既に感知していた。

割れた槽のガラスから逃げるようにしていたサイパーだったが、あの緑の液体はぬめるようで、足をとられて尻餅をついてしまった。

別にそんなのを目にしてもユーユウはなにも思わない。ただ歩き、逃げるようにするサイパーの胸ぐらを右手で掴み、引き寄せる。左手には拳銃が握られ、銃口を顎に突きつける。

「もう、やめる……」

静かに、そう告げる。が、鼻息は荒い。興奮しているようで、落ち着きがない。さっき、感情を言葉にしおもしろい吐露したところからずっとこうだった。引いてはいけないもの。ちよつとの衝撃で、簡単に引くことが出来そうだ。

けれど、大丈夫だ。だって、さっき引いた時は何も出なかったん

だから。間違い。そう、間違いなどは起きない。

「もう、こんなのは必要ない……」

相変わらず、まともな雰囲気ではない。そして、ちゃんとした状態じゃなかったのはサイパーだってそうだった。

「ひ、ひ、必要、ですねえ」

「………まだ、言うか！」

「お、同じだ。私……していることは、同じなんだ。モンスターボールを作るのと何も変わらない。き、君だって、モンスターボールを、使っているだろう……？」

左手。指先がプルプルと震える。

「フォッチャーが悪なら、ボールだって悪だ……君はボールを使っている。なら、私がこういうことをしたって文句は言えんはずだ……」

「黙れ……！ エスパータタイプのポケモンが実際にこんな目にあっている。それ以上に大事なことなんてどこにあるっていうんだ！？」

ユーユウは無理やりにサイパーのフォッチャーを外す。それを放り投げ、そこにケイトのりゅうのいぶきが走った。

「せ、成果だつて出ているんだ！」

語気が強まる。サイパーの視線が、サイコパワーを充填中のフォッチャーへと向けられる。それが気に入らなかった。

胸ぐらをつかむ力を強めつつ、一度顎に当てていた銃口をサイパ

「の目線の先に向けて、まったくためらう事なく引き金を二度引いた。」

左手に二度重い衝撃。普通ならば、照準がズレ飛び出した弾丸は目標に命中しない。まったく見ないである分の弾丸しか放っていないのだ。照準もクソもない。当たるわけがないのだ。

しかし、当たる。見ていないのに、たった二発だけで、一セット、二セット、ふた組のフォツチャーを貫いた。

再度、銃口を顎に戻す。銃身は熱くなっているだろうが、そんなのは二人にはどうでもよかった。

「これで、無くなった」

「ぐ……………」

ここで初めてサイパーの目から涙が流れ落ちてくる。それを見るが、感慨などあるわけもなく、そして、自分が引き金を引き、銃弾が飛び出していったことの実感だつてまったく無かった。

だから、怒りにとらわれているのだけど、どこがぼやけた感じだった。そこに、またサイパーの言葉が入ってくる。彼もまた、おかしくなってしまうていた。それはそうだ。ユーユウからすれば気の遠くなりそうなくらいの時間をかけてここまできたのだ。たった一瞬だけ、今日この時だけで失ってしまった。だから、

「君だつて同じだ。フォツチャーを欲しているのに、無くなつては困る、のに、こんなことをしている」

「……………」

「もう、無くなっちゃった。だが、見えるぞ……………フォツチャーがボールと同じように売り出され、手に取り、その後でこのことを知った君の姿が……………」

「そんなことはない……………！」

「……………言っている。言っている。聞こえるぞ。無くなっちゃ困る、無くなっちゃ困る、無くなっちゃ困る！ 未来を見たいと呪文のように叫ぶ君の姿が！」

「そんなことはないっ！」

限界、だったのだ。

だから、ユーユウは引き金をひけた。最初の一度目は弾をこめてなかったことも、さっき二度銃を撃ったことも、完全に忘れていた。

そしてそれは、当たり前のように、頭蓋骨を貫通していた。

## 20・たまらんね（前書き）

ようやく二十話となりました！  
そろそろあらすじ、書かんとな。

## 20・たまらんね

家の前。ドアの手前。ユーユウは三匹を連れて、ここまで来ていた。あの後、どうやって帰ったんだっけ？　とりあえず、施設をもう二度と使えなくしたのと、何人かとポケモンバトルをすることになったのは覚えている。もう二つキズぐすりを拝借していなければ、帰ってくることは出来なかったろう。

人の気がなくなる時間帯。バスだつてとまっている時間だから、歩いて帰るしかない。そしてそのために、ユーユウの右腕の状態はだいぶ悪くなってしまった。ずいぶん前から指の感覚がない。

「まったくよ、たまらんね」

心配そうな顔をそれぞれ向けてくる傷だらけの三匹に、ユーユウは苦笑いをみせる。不安にさせたく無かったし、こうでもしないとユーユウ自身もやってられない。

ケイトはボールに入れることも出来ただけだけど、なんとなくそんな気にはなれなかった。

腰にあったホルスターは外し、リボルバーも弾を全て抜き取ってからリュックにしまっている。プラズマ団のローブだけは、右腕に巻きつけるのに必要だった。身体全体を包むほどの長さがあるのでちよつとかさばったが、おかげでキツく巻くことが出来た。しまうことは出来ないが、一見しただけではこれが何かはわからないだろう。それに、深夜をまわっているのだって良かった。

カギを左手にもたせて穴にさしこもうとするが、それは必要ないらかった。ドアは開いている。中に誰かがいるということ。

「こりゃあ、ぶっ殺されてもなんにも言えないな」

ふざけるような口調で言うが、本心だった。殺されるというのも、大げさだとは言えないんじゃないだろうか。

親だったとしてもぶれる事なく戦い、間違いを正す。それが出来るから彼女たちはジムリーダーになったのだ。ただ単にポケモンバトルが強いから、そうなったわけではない。サカキの言葉だが、ユーウはなんとなくではあるが、それが分かるような気がした。

慎重にドアを開ける。素直な性格でもしているのだろうか。迷惑通りに小さな音しかたてないで家の中に入れた。人の気配は……感じるような、感じられないような、いるような、いないような、つまりはまったく分からなかった。

あの時のままだったら感じられたかもしれないけれど、今のユーウは違う。黒い目と、黒い髪。元に戻っている。感覚だって、研ぎ澄まされてはいない。しかし、カギはあいていたのだから、ただではすまないだろう。

（あるいは、ホントはなんにも気づいてなくて、僕の思い過ごし……とか）

もちろん、そんなうまい話はあるわけがない。それは分かっている。わずかばかりに残った望み、希望……ではなく願望というやつ



だ。

玄関で靴を脱いでそーっとリビングへと入っていく。明るくなっていないのはどういうことだろう。部屋を明るくしたら、誰かが飛び出してくるんだろうか。だが、暗いままにしておくわけにもいかない。

「はあ……」

この後のことを思って深いため息をつく。なんというか、彼女らと出会ってこうなってしまったあとはだいたため息をつくことが多くなったような気がする。

部屋の照明スイッチを押し込み、真っ暗だった室内が一気に明るくなる。けれど、ユーユウの心は反対に曇った。

「な……………！？」

目が見開かれる。痛みによるもの、ではない。視線の先、そこには、女性が素っ裸になってポーズをとっていた。

背は高くなく、胸だって小さい。体全体の印象は細い、というだけだが、お尻はそれなりに大きい。顔は童顔になるのだけど、嫌になるくらいの子供っぽさはなく、ほんのりと色気を感じることできるものだ。とっているポーズはいたって普通……標準レベルなのだけれど、その容姿によって、これはユーユウのお気に入りのパージになっている。

そう、素っ裸でいる女性は現実のものではなく、それほど分厚くない本の一ページにいるものだ。特に折り目がついているページ。

開かれている本はこれだけだが、その隣には同様の趣向のものがうず高く積み重ねられている。

どれもこれもに女性がいる。顔や体型なんかはいろいろあった。痩せていたり、背が高かったり、胸が大きかったり、ちよっぴり太っていたり。

漫画だったり、写真だったり、あるいは動画が入っているディスプレイだったり。

色々だ。様々。違うもの。しかし、女が素っ裸でいるというのは共通していた。ユーユウの、いわばコレクションというやつだ。

「……エロ本を見る気分ではないのだが」

カッコつけているのにやけに虚しい言葉がユーユウの口を突いて出ていく。しかも、聞いているのがポケモン達だけだから余計に虚しい。

そして、自分はどうやら酷い嘘をついてしまったみたいだ。見たい気分ではない。そう言ったのだけれど、リュックを床に置いて、ユーユウは椅子に座って開かれた本を手にとり左手だけで器用にパラパラとページをめくっていく。

もう見慣れたページ、あんまり好みじゃなくて見慣れたとはいえないページ。色々あったが、もうこんなものではどうにもならないというのが共通点だった。面白くない。というより、こういう本にはもう実用性がない。せめて動画じゃないと。

しかし、誰がこれをやったんだろうか。いや、あの五人以外には無いというのは分かるが、もしかして、罰ゲームか何かのつもりでこういうことをしたのだろうか。ユーユウがいつのまにかいなくなつて、電話にも出なくて、夜にまで探すはめに……もしかしたらまだ探してしてくれるのかもしれない。そういう風に考えると、こんなことをされるのは当然なんだろう。

だが、これをやったというならば、必然的に見られてしまったということで。折り目がついていいるとことというのはお気に入りの証明なわけで……なるほど、だんだん恥ずかしくなってきた。やった人間のいるところでこういう状況にならなかったのは幸いだったが、しかし、これは相当顔をあわせづらくなった。

「けれど、足りないな……………他の本はどこだよ」

高く積まれた本を眺めて、少し疑問に思った。おかしい。もう何冊かお気に入りがあるはずだし、絶対数が少なすぎる。主に口イズに買わせた本が趣向関係なく万遍なく消えてしまっている気がする。

と、ユーユウは本をいったん閉じ左手にもたせる。何を見ているんだろう？ そんな不思議な目を向けられているのに気づいたからだ。少しばかり口元が緩む。痛みを忘れられる時間だ。

「ほらよ」

左手でページを開いて、下から覗き込んできている三匹に見せた。選んだのはさっきのとは違うが同じくらい見てオカズにさせてもら

ったところだ。歴戦のツワモノ。そう、歴戦のツワモノだ。

こういう風にオカズになり得るものはいくらでもあって、三年前……14歳くらいの時は何も困らなかった。何も困らなかったのだ。だがしかしそれでも、調子の悪い時というか、どうしても元気になつてくれない時がある。そんな時でもユーユウを元気にしてくれた一枚……歴戦のツワモノ、まさに正しい表現ではないだろうか。

けれど、ヴァルとケイトの反応は薄かった。ヴァルは目を細くして怪訝そうに見てきて、ケイトはなんで女が裸で写っているのかわからないらしく首をかしげている。

「はあ。やっぱ、ポケモンなんだよな。それとも、メスなんだからっていうんで呆れられてるのかね？」

言いながら顔をキルリアへと向ける。キルリアの反応は、他の二匹がみせたようなものとは違っていた。

「~~~~ツ！」

顔を赤らめ目をつむり両手で顔を抱える。それは、こういうのにまったく耐性のない人間がする反応にそっくりだった。思い返してみれば、初めてロイズといかがわしい本を買った時もロイズはこんな顔をしていたような気がする。

「ああ……ということはさ、キルリアはメスってことになるのか」

顔をおさえたままでうんうんと頷く。こっちを見ていない。それ

はちょっと気に入らなかった。

だから持っている本をキルリアの顔の正面へともってくる。目を開ければ裸の女のどアップが見えるということだ。

「ほら、目、開けてみなよ」

ブンブンと首を振られる。相変わらず顔は赤くなったままだ。そんな様子をみてユーユウはニヤリと顔を緩める。ついさっき人殺しをやったようには見えない様子だ。

「まったく、この良さが分からないとはさ……ロイズは分かってくれたっていうのに」

「いやいやだったがな」

「……………！」

玄関から聞こえてくる声。聞き慣れたもの。リビングのドアは開放してあるから、会話は当然玄関からでも聞こえる。なんの抑揚があるわけでもない声だったが、そこに込められた怒りの感情はユーユウにも簡単に察知することが出来た。顔が見えないからすごく怖い。そして出来るならば、このまま顔を見ないで済むような状況になってほしい。

けれど、そんな儚い願いは直ぐに打ち破られる。というのも、ロイズの他にももう一つ声があがったからだ。

「ジムリーダーにこんなことさせるなんてね……」

「すみません、カミツレさん」

「もう、あなたはいいかもしれないけど、私は見られたら、写真を撮られたりしたらそれでダメなのよ？　こんな、悪趣味な本を運ば

せるなんて、ねえユーユウ君。ひどいと思うでしょうっ。」

「まったくです。友達としてすごい悲しい。ロイズひどい」

「ロイズちゃんひどい」

「……………」

カミツレにあわせてやったところで、ブスツとしたロイズの顔がリビングを覗く。その隙間からはひょこつとカミツレの顔も出てきた。

ああ、これは怒られてしまうか。表情を見たおかげでそれが確信できた。だから、何かを言われる前にこつちから発言する必要がある。本当にあつたことを言うつもりは毛頭ない。

「やあ、遅かったな。今までどうしてたんだ？」

「は…………？」

言つた途端、ロイズの表情がぴしりと硬くなる。まあ、なんだ、つまりは、言葉選びを間違えてしまったらしい。おもむろに携帯電話を取り出し、どこかにメールをしている。

一分ほど待つて、それで文面を打ち終わつて送信もしたみたいだ。電話をポケットにしまいこみ、こわいかおをしてこつちをにらみつけてくる。素早さの、大幅低下待つたなした。

そつえば、ロイズは見慣れない格好をしている。

いや、スカートを履いて胸のつかえをとつてそれを表している。いかにも女の子という感じだが、良いんだろうか。学校には男と登

録しているはずだし、ばれてしまったらまずいはずなのだが。

「いま、三人呼んだから、もうすぐ帰ってくる。かなり怒っているから、覚悟しておくんだな」

そんなことを言われる。けれど、ユーユウからしてみれば今のでもう十分、お腹いっぱいだ。

だいたい、ああいうことがあって、大怪我して、かなり消耗した状態でそのまま説教コースなんて絶対まともじゃない。やめてほしいし、今すぐ部屋にこもりたい気分だ。いや、ユーユウにそれを口から出す勇気は無いのだけれども。

「……怒られるようなことを、やったつもりはないよ」

「でもユーユウ君、それを私たちみんなに言える？」

「怒られるようなことをやったつもりはない」

カミツレに対してだって、返す言葉は同じだ。本当のことは言わないし、悪いことをしたのはそうかもしれないが、怒られるようなことをしたつもりはない。だからそういう意味では嘘は言っていない。そう思った。

そんなユーユウの反応を見て、カミツレは隣の椅子に腰掛けた。なるほど、これは、ロイズみたいに簡単にはいかなそうだ。

だから、一度ポケモンたちのことは放っておいて、ユーユウはカミツレの顔をまっすぐに見つめた。そのつもりだったのだけれど、

「その子たちはどうしたの？」

「その子たちって？」

「ハクリューと、キルリア」

「あー……」

さて、少し困ってしまった。ケイトはいつのまにか進化しているし、朝出た時にはいなかったはずのポケモンを連れている。絶対に言い逃れできないところ。

「私だったら、いきなり知らないうちにセヴオットが進化していたらびつくりするけどね？」

「セヴオット？」

「ああ、ゼブライカね。私のポケモンのこと。知ってる？ トレーナーズスクールの人間なら分かるわよね」

「ん。ま、見たことはないですけどね」

「で、ケイトとあの子、どうしたの？」

「それは……」

「じゃあ、その右腕にはなんでそんなのが巻かれているの？」

「カミツレさん……」

もう勘弁してくれ。そういう風に言いたかった。ポケモンのこと、右腕に巻かれているローブのこと、どっちも喋られないことだ。

「喋れないの？」



「それは……そんなことは、無いんですけど」

「怒られるようなことはしてない、そう言っていたはずね？」

これは、参った、なあ……。正直、両手をあげて降参したい。そんなユーユウの思いは行動にはならずじ済み、ほおをかくだけだ。

その脇から、入ってくる手があった。といってもユーユウに何かするわけではない。テーブルの上にあった本を紐で束ねようとする。

「ちょ、ちょっと!？」

抗議の声なんてまるで聞こえていないかのように、ロイズは tant と作業を進めていく。ユーユウの手にあった本だってぶんどる。

お気に入りの本、そうではないが使えはする本、まったくお話にならない本。それらがなんの区別もなく紐で一つにまとめられていく。

抵抗することは出来ない。だって、ユーユウは怪我をしていて消耗しているのだから。

「ろ、ロイズ！ お前、その本をどうすんだ!? い、いや、他の本をどうしたんだ!」

「捨てた。そして、今からまた捨てる」

「は……!？」

わけの分からない言葉だった。言っている意味はよく理解できる。しかし、なんでそんなことをされなくてはならない。ということは、他の本はもう、ゴミ捨て場にいつているということか？

「な、なんでそんなことをする必要がある？」

「お前には、こんなのは必要ないからだ」

な……にを言ってるんだこいつは！ 身体が大丈夫だったらこんな大声だって出せるのに。必要じゃないだと？ いったいロイズは何を言っているんだろう。

「……ぼ、僕にそれが必要じゃない？ なんて、いったい、どんな判断だ！ それがなかったら、じゃあ、僕は、誰を、何を使ってこいつを満足させろっていうんだよ！」

大声が傷に響く。言ってしまったあとで、ユーユウはこんな発言などするべきではなかったと後悔していた。そういえば、格好を見てもそうなのだけれども、身長は高くともロイズは一応は女性なのだった。

ジト目で見られてしまう。昔から何度かこんな目で見られた覚えがある。

「はあ……」

ため息をつかれる。

ゴクリ、と息をのんだ。

「これも持っていく」

「な、なんでそうなるの！」

異議申し立てをしてみるがロイズは止まることなく、束ねられた本を抱えて出ていく。続けて玄関のドアが閉まる音。……ため息をつきたいのはこっちだ。

頭を抱えなくなつて、だけれどもやめて、再びカミツレへと向き直す。

「さっきから右腕がまったく動いていないけど……どうして？」

「……勘弁してくださいよ」

「勘弁？」

「分かつてるんでしょ。僕が何をしてきたか」

「ユーユウ君の口からは、何も聞いてない」

「喋らせて、それから僕を捕まえるつもりなんですか」

「あら？ 怒られるようなことはしてないんじゃないのかしら……？」

カミツレは不適に笑う。ユーユウはもう、どんな顔をしてどんな気持ちでいるのか悟られないように、目をつむって顔を俯かせるしかなかった。

どうやら言葉のやりとりでは、自分はカミツレにはまるでかなわないらしい。

「サカキ……奴に言われたことをして来たのね？」

「奴………そんな風に言われるほど、エバークさんは悪いことをして来たんですか……？」

「話すことは出来るけど、朝までになるわね。ユーユウ君、それでも聞く？」

「……………遠慮しておきます」

顔をあげる。カミツレの表情は優しそうに見えたが、それは表面上のものだ。ああ、サカキの言ってたことは、そういうことか。

ジムリーダー、容赦ない。それは、確かに本当のことなんだ。言えない。やることがまだ沢山あって、何をしたわけでも無いのにこんなことでバカを見たくない。

「ホントのことも、言わないつもり？」

「……………どうしても、為さねばならないことがある。邪魔をしないでくれ」

「母親の敵をとる、ね。私たちがそれを許さないのも分かるわね？」

「はい……………」

カミツレの意思が一気に膨れていく。これから何をされるのか、なんとなく分かるような気がする。

言葉ではダメ、ならば、行動で訴えかけるしかない。そして、ユーウには、カミツレが言葉ではなく行動に移したときにそれを防ぐ術を持ち合わせていない。実力差と、状況と、どれ一つとして有利には働かない。

だが失念していることがあった。そういうのがあって、ただで勝ったという事実があるのだ。だからカミツレにも勝てるだろうということにはならないが、絶対に勝てないということでもないはずだ。

だが、そういった空気はいったん遮断されることとなる。気にか  
けられなくなったポケモンの方から鳴き声があがったからだ。それ  
は聞き慣れた、ヴァルのものだった。

「ヴァル……？」

ブルブルと身震いをし、落ちつかない様子。やがて光につつまれ  
て、その中で身体が肥大化していく。色は薄紫に変わっていき、身  
体はクルクルと巻かれていく。瞳が丸の中央へ移ると、身体中のト  
ゲが少し長くなった。そうして身体から光が抜けると、もうそのポ  
ケモンはフシデとは呼べなくなった。

「フシデが、ホイーガになった……………ヴァル……！」

ホイーガ。その名の通り、車に使用するタイヤのホイールに形は  
似ている。だが、これは虫の繭で、これの中でより強い身体、素早  
く動ける大きな身体がつくられているらしい。

成長をしている。それが実感出来るが、身体が大きくなってしま  
ったので、このままボールにいれないでおいでおくのは結構厳しい  
んじゃないだろうか。

「あー、ヴァル？」

名前を呼ぶ。ユーユウの声に反応してそちらの方を見た。うん、  
姿形はどう変わっても、ヴァルはヴァルだ。どうにもなるものでは  
ない。

「そろそろ、ボールの中にでも入ってみるか？」

体全体を横に振られる。フシデの時と同じ、嫌だという意味表示。変わらない。そういうのをみると、顔が自然と緩んでしまう。

カミツレはそんなユーユウを見て、それからポケモンたちを見て困ってしまった。こんな進化を挟まれてしまったは、さっきの話を掘り返すわけにもいかなかった。

それに、ユーユウは何かをして来たらしいが、それでもあんな顔ができるのだ。それも、話をしづらくなった要因のひとつだ。

（これは、フウロとトウコちゃんが帰ってくるまで待つしかないか。だけど、あんな顔をしてるユーユウ君に、二人はちゃんと怒れるのかしらね……？）

いや、疑問を抱くようなところじゃなかった。あの二人は、心配はして、怒りもするだろうが、入れ込んでいるように見える。本当のことを引き出せはしないだろう。

だったら三人が帰って来て引つ掻き回される前になんとかしなくてはならないのだけど、これは何かしらのきっかけがないと厳しい。

（さて、どうしたものか……）

きっかけを探すためにユーユウを見る。しかし、フウロもトウコもロイズも、もしかしたらカトレアも、こんなのどこが良いんだろうか。

背格好はそこそこかもしれないが、刺激は足りてない。境遇は確かに同情したくなるし、気をかけてやらなければと思うが……ビリビリとした感覚はない。

（フウロたち、それにこのポケモンたちも、どうして……）

と、そんなことを考えていると、こちらを見ている視線があることに気づいた。朝はいなかったポケモン。キルリアだ。ニククネームがついてないということは、多分、仲間にしたばかりなんだろう。それが、おおきな二つの目でこちらを見ている。

この目は知っている目だった。何かをやるうとしていて、だけれどもやっていいか分からないから、許可を求めている目だ。ユーユウに向けていないのは、多分、彼に対して何かしらをやるつもりでいるからだ。

（そっか、この子、さっきユーユウ君にエロ本を見させられて、顔を真っ赤にしてたわね）

きつとその復讐のつもりなんだろう。別段止める必要なんかないから、カミツレは躊躇することなく頷く。何をするつもりなんだろうか。

すつと右腕をユーユウに差し出し、鈍く光り輝く。サイコパワーが集められている。ねんりきを出すつもりらしい。

すると、

「え……？ え！？」

動揺するユーユウ。当たり前だ。

しっかりと縛っていたはずのローブがスルスルとほどけていき、右腕があらわになっていつているからだ。傷だらけの腕。

そして、おさえていた痛みだって復活してくる。

「ちょ……！ え……？ ヴァ、ヴァル！ ケイトっ。おさ、おさえてくれっ」

慌てながらもユーユウはポケモンに押さえさせようとするが、どちらも動かない。腕の治療はしなくてはならない。そう、二匹ともユーユウを心配してくれているのだ。

だからどうすることも出来ず、ローブは小さな音を立てて床に落ちる。

それはつまり、ユーユウの傷がはつきりすると同時にローブに描かれているプラズマ団のマークも見られてしまうわけで。

『ただいまっ！』

玄関から四つの声。怒りの色に染まりきった声。

最悪だ。諦め……遂にというべきか、諦める決心をするしかなかった。

「……まったくよ。たまらんね、これは」



こう言っしかない。驚いたようなカミツレの表情。ドタドタバタと走る音。

本当、たまらなかった。なんでこんな、二次会をやらなくちゃならないんだろうか。

## 21・太くしにいつてたんだよ

右腕にちゃんとした治療が為されたのは、言うまでもないことだった。しかし、治療をされたのは良いことなのだけれど、状況は芳しくない。

病院から出られたのは朝方のことだ。あのあと救急車を呼んで病院に着き、そこで何針か縫ってもらったのだ。

まだ日が登ってあまり時間が経っていないために、歩道に人影は少ない。そんな時間に六人で歩くのはかなり人目を引くのだけれど、先頭を歩いているユー・ユウにそんなことを気にする余裕はない。

背後から飛んでくる警戒心と心配する気持ちと困惑が混じった視線。ちょっとした変な動きをすれば無事では済まないことになるんだろう。

ユー・ユウの左右はヴァルとケイトが並んで歩いていて……いや、ヴァルはホイーガになったために転がっているのだけど、で、ユー・ユウの上にはキルリアだ。肩車をしている。朝日が目に刺さる。眩しい。そして、あの時のフラッシュ……。

「な、キルリアはさ、誰かに捨てられたが為に、あんなところにいたのか？」

様子を伺いながらの言葉だ。そして出来るだけ明るく繕ったもの。答えたくないことを聞いてしまっているという自覚があるのだ。

弱々しく、というわけではないが、少しだけ元気がなさそうに首

を横に振った。それをキルリアの足から微妙に伝わってくる振動によって感じていた。

「じゃ、フォツチャーにサイコパワーを充填させるために、無理やり連れてこられたのだな？」

「フォツチャー？」

「ユーユウ君、その喋り方は似合っていないよ」

トウコとフウロが口々に言うが、ユーユウはそれを無視する。ちよつとだけ待つと、また足から振動が伝わってくる。さっきとは違って、今度は一回きり。頷いたということでもいいだろう。

「……これからどうするんだ」

若干トーンを落としてみる。足からくる振動は二回。首を横に振ったということ。まあ、今回は実際に顔を上に向けてキルリアを見ていたので振動から判断する必要はないのだが。

否定の意味。つまりは考えていないということ。けれど、こうやってくつついていることを思うと、キルリアの考えていることもなんとなく分かってくる。

しかし、ユーユウとしては、それを口に出すことはちよつとやりにくかった。一緒に行く。だけど、本当に良いのか？ それで……。

そんな気持ちがあったから、ちよつとふっかけてみる。それで頷いてくれればそれでいいし、頷いてくれなければ一緒に、なんてことも言いやすくなるだろう。

「別の保護施設の、世話にでもなってみるか」

そんなことを言われるとはまるで考えていなかったらしく、肩車されていたキルリアはびっくりして大きく体勢を崩した。

すっかり支えていたからよかったものの、そうでなかったら肩からずり落ちていたかもしれない。思ったとおり、予想通りの反応にユーユウは苦笑する。

「おつとと……………いやさ、ポケモンの保護施設ってのはいっぱいあるけど、全部が全部、あそこみたいに最悪ってことは無いだろ？だからさ、そっちに行ってみても良いかと思ったんだけど……………」

そこまで言ったところで、キルリアにおもいきり首を横に振られる。また落ちるぞ、なんて言ってもよかったが、左右からそれなりに強いツツコミが入ったのでそれは出来なかった。

ヴァルとケイトにも、いまの話の内容はちゃんと伝わっていて、結論は一つしかないくせになかなかそれを言わないユーユウにイライラしていたらしい。

「分かったよ。……………じゃあ、僕のポケモンにでもなってみるか」

キルリアを見上げながら、ユーユウはそれだけはちゃんと違った。ずっと目を上に向けているわけにもいかないから、正面、進行方向へと視線を戻した。

振動はすぐに伝わってくる。これまでのとは違う、微弱だけれど

も強さを感じさせるもの。しっかりと、一度だけ頷いたのだということが分かる。

だが、予想していたとはいえあまりにも早すぎるために、ユーウは苦笑いを続けるしかない。

「ハハ……もうちょっとさ、よく考えた方がいいぞ」

「ユーユウ君、こっちを無視してるのはわざとやってるの？」

フウ口の声。さっきだって十分なくらいに威圧感と殺気がこもっていたが、今のはその比じゃない。反応しなかったら本当に殺されるんじゃないかというくらいに怖かった。

だけど、ユーユウは今キルリアとだけ話をしているのだから、いくら怖かるうとも途中でやめることは出来ない。そこは、フウ口だって空気を読んでほしい。

で、その重圧から逃げるようにキルリアの顔を見るのだけど、不思議そうな顔をしている。よく考えた方がいい、どうしてそんな言い方をするのか分からなかったからだ。

ユーユウは一度息を吐く。寒すぎることはなく、白くはならないけれど、気持ちを落ち着かせることはできる。それは自分にとってだけじゃなく、キルリアだって一息つけるはずだ。フウ口達の怒りを増幅させる以外はなんの問題もない。

「言っておくけどな、別に、僕は最初っからお前たちを助けたいっ

て思ってたあそこに行ったわけじゃないんだぞ。なんにも知らないままに頼まれ、こういう情報を教えてやるからと行って、実はこうだったんだって知り、お前を助けるのと頼まれ事をするのが一緒だって、だから助けただけなんだ。自分のためだけにこうしただけだったってことなんだ。自己中心的な男なんだよ」

「正確な評論ね……！」

「人ひとりを殺したってのに、何一つリアルに感じられない……」

カトレアの声は、ユーウの返しを考えれば無視することにはならなかったのかもしれないが、意識はしていなかった。口から出た言葉にたいして、完全に音に変わったところで、マズイなと思ったのだけれど、偶然すぐ横を車が通って行ってくれたので、後ろを歩いている人間にまでは届かなかった。こういう巡り合わせ、運というのは案外悪くないのかもしれない。

「ヴァルとケイトとは、繋がりがあある。僕のやろうとしてることと一緒にのこをしたがつてる。だからこうしてる。でも、キルリア……お前とはなんにもない。後ろのいる連中と同じだ。偶然居合わせた。それだけなんだぞ？ それなのに、そんなの風にしか考えてない人間に、命を預けるといいのか？」

視線を上にする。キルリアを見たと同時に頷かれる。弱った。これは、言葉ではどうにもならないかもしれない。まだ迷うようならユーウが見てしばらくドギマギしているようなら説得はできるかもしれない。しかし、直ぐだった。目と目をあわせた瞬間だった。これではどうにもならない。

ユーユウはポケモンの言葉が分からないから、どういつ決心で頷いたのかは分からない。だが、キルリアが強い意思を持っていることは確からしい。それぐらいは普段の状態でもわかる。

そして、力添えをしてくれることをありがたく思っているユーユウがいることも確からしいのだ。無理やり。それこそ実力でなんとかしようとすればなんとでもなるだろうが、そんなことはなんにも考えていないのである。

だから、諦めた。迎え入れることにしたのだ。

「お前、ニツクネームってあるのか？」

上から見下ろすキルリアは頭に疑問符を浮かべたまま首を横に振る。

「じゃ、名前をつけて欲しいとかってあるか？」

そこまで聞いてユーユウが喋っていることの意味が分かったのだろう。表情がパアツと明るくなる。そしてその表情のまま、一度元気に頷く。

さてどんな名前をつけるか……なんて悩むようなことはなかった。口がなんと言おうとも、こういうことに結局はなるのかもしれないとユーユウも予想していたのだ。だから、名前だってちゃんと考えているわけで。

ただ、恥ずかしい。基本的には、そういう名前をつけるようなことはあまりしたことがないので、自分のセンスにあまり自信がない。

だから多少演技することになっても、悩んだふうに見せて、その場でつけるように思わせる。

「えーっと、そうだな……どうするか……」

「ただ……あれ？　なんだか、これも恥ずかしいような気がしてきた。だいたい、キルリアはエスパタイプで、かんじょうポケモンと呼ばれているくらいだ。」

「こんなちっちゃな葛藤だって、手に取るように理解しているのかもしれない。こんなくだらない考えですら把握されていると思うと、きっぱりすぐに言った方がよかったような気もしてくる。」

「まあ、そんな本当にくだらないことで一応は時間は潰すことができた。そろそろ、言ってもいい頃合いだろう。」

「ネル。お前が女なんだったら、そういう名前はどうかだろう」

「エロ本に対してあんな反応をするのであれば、キルリアの性別はミスということで間違いないだろう。」

「ユーユウが告げた名前に特に抵抗は無いようで、悩むわけでもなくネルは頷いてくれた。呼ぶ方からしても、キルリアと呼び続けるよりかはずっと良かった。例えば犬を飼う時に、そのまま犬と呼んで違和感を覚えない訳はない。それと一緒。」

「ネルはご機嫌そうだった。表情は明るいように見えるし、ユーユウの肩の上で鼻歌交じりだ。」

「……後悔するぞ」



脅しみたいな言葉も、今のネルにはまったく通用しないらしい。  
声はちゃんと届いているはずなのだが。

そしてユーユウにはもう一つだけ、気にしなくてはならないことがあった。後ろからズブズブと突き刺さってくる強烈な視線のことだ。なんとかしなくてはならない。ああ、嫌だ。嫌だったけれど、これ以上放っておくのも怖い。

チラリと後ろの様子を伺う。

「……なによ」

あからさまに気を悪くしているトウコと目があったしまった。

「あー……その、さ、いつまでついて来るのかなって」

「はあ？ 一緒のところに帰るんだから、一緒の道を歩くのは当然でしょうが」

「そいう意味で言ってんじゃないよ」

それはもちろんトウコにも分かっていた。ユーユウの言わんとしていることは、ちゃんと理解している。なのにこういう反応をしたのは、彼女なりの考えがあつてのことだった。

少し勝ち誇ったような顔になって、周りを牽制しながら早足でユーユウの隣につく。彼はそれを拒まず、ケイトも場所を開けてくれた。あとで美味しいものでも食べさせなくちゃならない。

「私らと一緒に居たくないんなら、ホントのことを全部しゃべって危ないことはもうやらないって認められなくちゃね。私たちだけに

じゃなくて、この問題に関わってる人らにも、ね」

「……そっか、リーグ関係者でこれに関わってる人はトウコらだけじゃないんだな」

「当たり前でしょ。……ま、今のところ、あんま機能してないんだけどね。ユー・ユウが見てる人よりもっと多くの人が動こうとしてる。そうじゃないとこんなこと出来ないよ」

「そっか、……それは分かったけど、僕が全部のことを喋ってないだつて？」

「そうでしょー？　っていうのが、私と、あとは後ろの四人の見解ね。家帰ったら、洗いざらい吐いてもらうからね」

「……ヤダって言ったら？」

「無理に口を開けると、いろいろ危なそうよね」

「その発言は、だいぶ問題だぞ」

「冗談だつてわかってるくせに。それに、ポケモンリーグ関係者の喋ることと、プラズマ団のロープを持つてた人間の喋ること。例えばライモンシティの人は、どう思うかしらね」

「そりゃあ、さ」

聞かれるまでもないことだ。もしもこのことがニュースにでもなれば、ちよつと前だったら、なんの疑問も持たないでロープを持っていた男が悪いやつなんだろうという認識をもっただろう。

きつとどれだけ怒られるようなことはしていないと言っても、信じることは出来ないし、信じられることはないはずだ。

「……怒られることはしてない。本当、だよ」

「じゃ、なにしてたつていうの？ 人の目を盗んで学校から抜け出して、ついには日をまたぐまで帰ってこなかった。来たと思ったら、ローブと右腕の大怪我」

「……太くしにいつてたんだよ」

「太く？」

「線だよ」

「線？」

具体的なことをユーユウは何一つ言わないから、会話をしているのだけど意思の疎通はできていない。

ただ、その声のトーンは変わっていないのだけど、しかし、若干の真剣さと緊張感の色に薄く染まっているのは感じる事ができた。それを察知したかのようなタイミングでユーユウはしょうがないなあという感じで穏やかに笑いかけてくるのだけれど、まがい物だ。真実のところでは、笑ってはいない。

「トウコの言うことはさ、最もだよ。代償を払わせたって、きっとなにも残らない。けどさ、それが今の僕の全部なんだってことは、想像できちゃいないよな？」

「……違うわよ」

「僕がいて、あの男がいる。見えないほどだったとしても、二人を結んでいる線があつて、それ以外には、何かがある必要も、誰かがいる必要もない。それで全部。それだけが全てなんだよ。逆にこっちが聞いてみたい。なんでただ一つの線を切るようなことをするのさ？」

穏やかだった。でも、逆にそういう風にこられると、どうやってどんな言葉を返せばいいのか分からない。喧嘩腰で来てくれるのなら、こっちもそれで返すだけで済むのに。

「……だって、そんな、その、不健全じゃない」

「不健全？ そうかなあ。仇をとりたい。繋がりを太くしたい。だからそれをしにいった。健全だと思うんだけどさ」

「あんたはそうかもしれないけどさ、私らは、あんたが変なことをたんびにヤキモキしなくちゃなんないのよ？」

「ま、こうなつちまつた以上、忘れるなんてのは無理なものな」

「そ、だから、出来るだけ、心配かけさせないようにしなさいね」

「……頑張ってみるさ」

「で、何をしてきたのよ？」

「やだよ。言ったら、僕を捕まえるんだろ？」

「こっちから出せる情報もあるかもしれないのよ？ あんたが、敵に出会っ助けになるかもね」

「それはいらないよ」

きっぱり。あまりにもハッキリとした否定の言葉を返されて、トウコはキョトンとしてしまふ。サカキのようには言えないが、うまいこと話を進められそうだったのに。なのに打ち切りだ。

「ど、どしてよ？」

「お前がくれるのは、あの男の情報だろ？ だったら知らないよ。調べるのだって、僕は自分の手でやりたい。自分でも、馬鹿なことをやってるって思うけどね、今回のことでそう思ったんだ」

遠くを見る目。トウコの方を見てはいるが、意識の外になつてしまふ。ここじゃないどこかを心に描いている。それが悔しいと思うということは、これはもう、本気の本気だ。

最初はカミツレとの話があつて、久しぶりに同じ年齢の男にあつたから興味が湧いて、それで話しかけてみたのだけど……思い返せば、それは間違いだったかもしれない。

（一万分の一、かあ……）

特別なもの。数字からそれが分かる。しかし、こんな心苦しいものというのは味わつてみないと分からなかった。

「因縁がある。そんな相手なら、なんにもしなくつたつて、向こうから来てくれるよ」

「……？ そうだったのか？」

「うん。私の、場合はね」

今のトウコの短い言葉にどれくらい思いが込められているのか。ユーユウには測ることは出来ない。

「だからね、ユーユウは何もしなくつたつていいの。私が側にいて、守つてあげるわよ」

「何言つてんだか。朝だから、呆けちまつてんのか？ 僕の相手だぞ。邪魔はしないでよ」

「だけど……」

「僕とこいつらがやられて、死んじまつてからだよ。そつちの出番はさ。だいたい、守ってくれるつてさ、なんだつてそんなことしてくれるんだ？」

「そ、それは……」

ユーユウは差し込んでくる光に目をくらませ、細める。手を正面にかざしてみても、目を完全に開くことは出来ない。隣にいるトウコはそんな様子はまったくくない。フラッシュのダメージがまだ残っているらしかった。

別に今は戦ってるわけでもないし、優秀すぎるトレーナーが後ろに控えているから、ちよつとの光で目が眩んでしまっても問題は無い。トウコの表情、顔の変化がよくわからないこと。それだけなのだから。

「あ、あんたのこと、心配って……私はそう言ったでしょ！」

「本当に、それだけ？ 最初から、ずっと僕のことか心配だったっていうのか」

「それは……！ その……最初の時は……す、ううん。そうよ。最初。最初からあんたのことが心配だったの！」

「恋人同士でもないのに、よくもまあ……」

「つ~~~~~!??」

トウコの顔がこれまでになく赤くなった。否定をするものだったのに、動揺してしまう。表面にまで溢れてきてしまうのを止められない。

ユーユウにとっては、なんのつもりもない一言。ただ単純に、トウコの返事におかしくなって、苦笑いと一緒に返したただけなのだ。それはトウコだってよくわかる。

（わかってる。わかってるんだ。わかってるのに……）

なのに、こうやって心を動かされてしまう。どうしてだろう。

何かの雑誌で、あるいはネットで、もしくは人づてで、どれだかは覚えていないのだけれども、内容ははっきり覚えている。

一万分の一。女が男を一目惚れする確率だという。

最初の時は、それを自覚した時、病院で話した時は、そんなバカなことがあるかと思った。こんな気持ちになったのだってしばらくぶり……初めてかもしれないのだ。戸惑った。それは戸惑ったろう。意識はした。でも、それだけだ。それだけで済ませようとした。

けれど、フウロを見て、カミツレを見て、カトレアの行為を知って、明らかに苛立った時から、トリガーが引かれた、おかしくなっていた。誤魔化せなくなってしまったのだ。

一目惚れなんて嫌だ。軽い気持ちで人を好きになるなんて認めたくない。そんな風に考えていたのに、実際になってみると、全然軽くなてない。重い。重すぎてたまらない。でも、逃げ出せない。近くにいたいのだ。今回のことだってそう。心配だった。心配で心配でたまらなかった。だから怒る。いっぱい怒って、反省させなくちゃ、そんな意気込みだったのに、

「……トウコ？　どうかしたのか？」

穏やかな、優しそうな顔。仕返しとか、仇とか、復讐とか、そう

いった兆候をなにも感じさせない顔だ。

これは狡いと思う。特別な感情を抱く人間がこれを見たら、そりゃあ判断を曇らされてしまうだろう。だから怒れない。それに、ライバルかどうかはともかく、ユーユウの周りには今は女の子が多くって、なかなか話す機会が出来ないのが現状だ。そんなことはないはずなのに、持ち回りでユーユウの相手をしているようにも思える。そんな中でのせつかくの二人だけで話すことのできる時間だ。心配でたまらなかったけれど、怒るようなことは最小限にしたい。

「……………あんた、今日はどうすんの？」

「……………ん。退学届を受け取ってもらえなかったからな、普通なら、学校に行かなきゃならないけど、疲れてるからね。サボって、そのんびり過ごしてみるさ」

ユーユウが近づいてきて、そつと耳打ちする。ロイズに聞かれたら非難号号なのは目に見えている。

そんなちよつとした動きによつてですら、トウコは自身の鼓動が一気に加速して行くのがわかった。まったく、いつからだ？　こんな、精神的に弱くなってしまったのは。けれど、誰にも聞こえないように内緒話ができるのはいい方向かもしれない。

「じゃ、じゃあさ、私に付き合ってみない？」

「付き合う？　なにに？」

「あんたの特になることよ」

「ホントかい？」

「ぜ、絶対。損はさせないから」

「損はさせない、ねえ……………ま、分かったよ」

「本当？」

「嘘言ってどうするよ」



ユーユウの返事を聞いて、トウコは離れた。内緒話は終わりということだ。

背中に視線が集中している。それはユーユウだけでも、トウコだけでもない。二人にまんべんなくだった。

ちら、と隣の様子を見てみると、目を向けられているのがわかっていくらしく、じんわりと額に汗をかきはじめている。このあとに何をされるのか、これまでの経験から想像できるからだろう。

けれど、トウコはユーユウのようにとは思えなかった。なんというか、どこか気持ちよささを感じる。優越感、そう言ってもいい。それはユーユウとの気持ちの違いによるものだというのは分かっているが、それにしても気持ちがいい。このまま、腕でも組んでみたらどうなってしまうんだろうか。

やってみようかな……？ そんな気分にもなる。いや、まあユーユウには迷惑なんだろうけれども。

(あ……)

と、一個思い出したことがあった。ユーユウは、確か彼女がいなくって、それを欲しがっていたんだっけ。

そう思ってからトウコの動きははやかった。反応する暇など全く与えず、腕に抱きつく。

「え……?」

増すプレッシャー、強烈な視線、ダラダラとしたたる冷や汗。全部が気持ちよかった。もちろん、腕から伝わってくるユーユウの存在だって。これは、もしかしたら病みつきになるかもしれない。

それはマズイなあと思いながらも、トウコはまだしばらく、特にカトレアの強い視線を受けながらも、ユーユウとの体勢を変えないのであった。と、

（え……………！？）

なんで、カトレアなんだ？

## 22・黙って着替えなさいよ

一度家に帰ってから、ユーユウとトウコは隙をみて悟られないように注意しながら再び家を出る。

そのあとで、夜通しでいたのでだいぶ体力も消耗していたから、二人は漫画喫茶の中で仮眠をとり、そこから動きはじめた。夕闇に辺りが支配され始めた時間だ。

普通なら、一般市民ならば、多分こんな時間に立ち寄ることは少ないだろうという時間帯に、ユーユウたちはライモンシティの市役所へと足を運んでいた。

（金の問題は解決した、か）

フォツチャーの件でのもの、サイパーが言っていた言葉だ。いま、市長は中にいるんだろうか。

（それが本当ならば………本当ならば？）

次が出てこなかった。サイパーの言っていたことが真実であるならば、だったらどうすれば良いというんだろう。同じように、殺してしまうべきなんだろうか。

ライモンシティはヒウンシティにはかなわないが、イッシュ地方ではかなり栄えている都市だ。だから市役所だって、他のとは違い大きい。割り当てられている面積だって他の市に比べれば少ないから、階数を重ねていくしかない。巨大なビルとなっている。

（そんなとこにいる市長を手にかける。僕にできるのか、そんなとこが……）

背中にはリュックがあつて、そこには変わらずにリボルバーと銃弾がある。当然決心の問題で、気持ちの問題であるから、武器があるからといってすぐにやれるというわけではない。だいたい、やるべきかどうかだって不明だ。

ついでに言えば、連れてきているポケモンも一体。モンスターボールに入っていたケイトだけだ。ネルやヴァルだって素直にボールに入ってくれば連れてきたが、入ってくれないんではしょうがない。

まだフシデの状態だったらヴァルくらいは連れてこられたが、あれももうホイーガになってしまっている。どう頑張ってもリュックには入らないだろう。

「で？　こんなとこに来て、何をやるうっていつの？」

実のところ、ユーユウは市役所なんかに来た理由は聞かされていない。つまりは、これから何をするかも分かっていない。説明するチャンスはあったのだけど、トウコがなにも言ってくれなかったのだ。

「内緒」

返ってくる言葉はずっと同じだ。

内緒。良いからついてきて。黙ってて。ねえ、腕組んでもいい？

こういうのばかりだ。最後のやつは、とても惜しかったのだけれど、丁重にお断りしておいた。ユーユウの心の中に、背後から突き刺さっていた視線がまだちらついていたからだ。そんなときに腕を組むなんて…… バツカじゃなかるうか。

「じゃ、これ、着て」

いささか不機嫌なように見えるのは誘いを断ってしまったからだろうか、いや、多分気のせいだと思いたいが。

ひと気の無いところでトウコがユーユウに手渡したのは制服だった。といっても、学生服のようなものではない。ここの市役所の職員が身につけているものだ。

「や、着てって……ここ、外だぞ？ それに、なんだってこんなのを着なくちゃならないんだ」

「いいから、黙って着替えなさいよ」

「だから、外だって……」

「……着替える」

ものすごい剣幕で言われたわけでも、とんでもなく鋭い目になっているわけでもないのに、トウコの口から出てきたのは恐ろしく低い声だった。しかも、彼女からはなかなか聞くことのない命令口調。

渋々ユーユウはシャツとパンツだけになって制服へと着替える。本当、誰もいなくて助かった。見つかっていたら、明日のニュースで取り上げられていたかもしれない。露出狂逮捕！なんて見出し

で、あることないことコメンテーターに言われるのだろう。

(……………なんだって僕がこんなことしなくちゃならないんだよ……………)

こんな愚痴の一つも言わせてもらえない。そんな雰囲気を出されて、ユーユウはトウコについてきたことを後悔し出していた。いや、あのまま家にいるのだってものすごく避けたいのだけど。だけど、これじゃあ避難にならない。……………なぜ着替えまで凝視されなくてはならないのだろう。

「はい、これ」

「ん？」

リュックをトウコに預け、着替えが終わったところで、再び差し出される。今度は制服ではなく、カードだった。いわゆる市職員証明書というやつだろうか。名前や年齢、所属なんかが書かれているが、職員の写真は載せてないみたいだ。

「これがあれば、あんたも入れるから」

「……………なんか僕ばかり、不公平じゃないか」

「私はね、あんたと違ってね、そういうのが無くても入ることができるの」

「そういうことが出来るくらいのことを、トウコは昔やったっていうのか？」

「……………内緒」

「はあ？」

これは本当に不公平じゃないか、とユーユウは口を尖らせる。当たり前前だ。こっちの一挙手一投足は把握したがるくせに、トウコは自分のことは何一つ教えてくれない。それはつまらないだろう。

そんなユーユウの気持ちはトウコだって分かる。

「もう」

だから、そう。終わったあとに、これぐらいは良いかもしれない。ユーユウに近づいて、耳打ちしてやる。唇がくっついてしまったけれど、まあ、それはいいか。

「う、うまくいったら、あんたのしたいことなんでも私にいいから……！」

「な……！？」

「な、な、なんでもしてあげるからっ」

二度同じことを言われる。その表情を見るに、冗談の類でないのは確かだ。真っ赤で、どこか不安そうな、何かを求めてきているような、確証を持ちたいような顔。

「な、なんでもって……？」

「あ、あんたが、私に言われて、それで最初に思ったことよ……」  
「それって……」

そこまで口から出て、だけれども、それ以上は言葉を発せなかった。あのトウコが、目の前で生まれたまんまの姿を晒してくれるなんて、それこそ嘘以外の何ものでもないからだ。ユーユウが思っていることと、トウコの思っていることでブレがあるかもしれない。もしかしたら、そんなことは考えたくないけれども、からかうつもりでああ言ったのかもしれない。

（そうだよ…… トウコが、いや、トウコじゃなくっても、僕にそんなこと言ってくれる女なんかいるわけない。あんな顔してるけど、きつと冗談なんだ）

そういう風に自己完結してしまつて、だけど、正面すぐ近くには変わらずにトウコの顔があつたから、やっぱり困惑してしまう。どういふことでこつこつとをされるのか、ユーユウにはさっぱりだ。

「……行こつ」

トウコが場の空気を変えるように、いたつて真面目な顔をして低い声で言う。ユーユウは、ああ、おふざけの時間は終わりなんだなというふうにわかつたつもりらしいが、それは間違いだった。行かなければならないのは本当のことだけれど、トウコはもう、この話題はしたくなかつたのだ。自分から振つたくせに。

それは分かっていた。重々承知していたのだけれども、怖かつた。今はまだ、言つても玉碎するだけの言葉まで出してしまいそうな気がして。

「何をするか聞かされてないんだが……」

そんな抗議はまるつきり無視して、ユーユウを先頭に立たせて職員用入り口から中に入っていく。あまり批判の対象にはされたくないから、そこまでお金はかけたくないといくられたエントランスみたいだが、トウコにはとてもそうは思えない。ちよつと前に、トレーナー用グッズを販売している大きな会社が入ったオフィスビルを訪問したことがあるのだけれど、そこと比べても遜色ない。



何かのポケモンをモチーフにした像を使った大きな噴水があつて、それが見られるように来客対応用のフカフカしたソファがあつて、無機質なものではなく暖かさを抱かせる色合い。これで金を使っていないだなんて、どの口が言っているのだろう。

ユーユウは変わらずに前にいる。市役所に入る前は押されながら渋々だったのに、今は違う。ちゃんと自分の足で、前を歩いてくれている。

「トウコ」

振り返られることなく名前を呼ばれる。だが、トウコはそれにまったく気づかない。ジッと、ユーユウの背中を見つめていた。

「……トウコ」

そこから、彼の背中から溢れている空気。雰囲気。当然、トウコだってそれにあてられる。なんだろう？ 昨日の朝と今とでは、それがまったく異なっているように感じられる。どういう風に違うのか……これだ、とはつきり言い切るのは難しい。だけど、なんというか、女にはない強さ、いわゆる男らしさというのが増したように見える。

「トウコ………！」

「え？ あ、うん。……なに？」

三度目の呼びかけでようやく気づくことが出来た。火照り。身体中から溢れてくる熱を抑えられない。ただ、名前を呼ばれただけなのに。それだけ。名前を呼ぶという行為だけ。しかし、他の人間に

そうされるのとは違う何かがあった。この感じは、よくわからない。

「トウコ。どこに行きたいのか教えてくれないと、ここで立ち往生になっちゃうんだが……」

「あ、えと、その…………… 17階に行きたいの……………」

急に言葉に元気がなくなっでしどろもどろになったせいか、ユーコウに不思議そうな目で見られる。

ただ、彼はトウコよりかは冷静だ。すぐに視線を各階の案内表示へと移し、それから数秒もしないうちに受付をしている女のひとりと話し始める。自然な動作だ。警備員だって、ユーコウに疑いの目なんかまったく向けていない。なぜだろう？ 同じようなことを、以前やったことがあるのだろうか。トウコには想像つかない。

「悪い。セキュリティ再申請が切れちゃってさ、だから、変わりのカードを貸してほしいんだけど…………… え？ 職員コード？ ああ、こいつに書いてあるやつね。ん？ ここに書けば良いんだな？ 分かったよ」

ユーコウに持たせたカードは、今回の為にポケモンリーグが極秘で製作したものだ。そこに書かれているコードも、住所も、偽名も、全てデータベースに登録されているものだ。セキュリティ許可だつてとってあるし、使うことに問題はない。

けれどもユーコウはわざわざカードを借りた。なぜだろう？ よく分からないままに、こちらへと戻ってくる。

「お待たせしてすみません。行きましょう」

少し大きめの声だったのは、トウコがお客様で、ユーユウはそれを案内しているのだぞ、ということアピールしておく為だろう。

トウコが受付や警備員にまで名が通っているとは考えていないが、お客様を連れているとなれば、かけられる声は激減するだろう。誰だって、客に対してなにかしらをやって、自身の評価を下げるようなことはしたくないはずだ。目立つが、ゆえに腫れ物扱いされる。こうすれば声をかける人間が誰一人いないところなんだということ。ユーユウは理解していた。

ことし一度だけ市役所にくる機会があったのだけれど、ただそれだけで分かってしまうぐらいなのだ。

入ってきた時と同じようにトウコの前をユーユウは歩いて、エレベーターの前までくる。上へ行く為のボタンを押すと、すでに1階に止まっていたらしく、待つことなくエレベーターに乗ることができた。ドアが閉まってくれて、そこでトウコは一度息をつく。ユーユウは変わらずに、適度な緊張感を持ち続けた。

「ねえ、なんでもう一枚借りたの？ 必要ないじゃない」

さっきのことを聞いてみる。だが、ユーユウは周りの様子ばかり気にかけていて、こっちの声に応えてくれない。ここはエレベーターで、個室で、他に誰かがいるわけではないのに。

ゆつくりと、警戒を解かないまま周りの様子を伺って、やがて納得したような仕草を見せたかと思うと、トウコの方へと向き直った。そこには、ついさっきまで感じる事ができた警戒心は微塵もなかった。

「ユーユウ、今の、なに……？」  
「ん？ なにが……？」

ああ良かった。トウコはあまり無い胸を撫で下ろした。もう、いつものユーユウだ。そう、そうだ。受付で話していた時から感じていたけど、さっきまでのユーユウは、トウコが知る彼とはだいぶ違っているように思えた。それがなんなのか……分かったような気がする。以前にも、感じたことがあったからだ。

似ていた。殺してやるとまでのたまいたプラズマ団の人間から出される雰囲気、どこか似ていたのだ。その人よりは遥かに静かなものであったが、確かにあったのだ。あのときは。

（自分がどういう気持ちでいたか気づいてない、のかな……）

それはとても大きな問題だった。何をやったのかはいまだわかっていないが、大変なことをしてきたのは疑いようのないところだ。もしそれでこうなったのだとしたら、真剣に、ユーユウの隣に居続けることを考えなくてはいけない。

今まで中途半端な気持ちで居たわけではないのだけれども、意味合いがまるで違ってくる。

「ユーユウ、あの、その、カード、って……」  
「？　なんでそんな緊張してる。知らない仲じゃないんだからさ」  
「い、いやね？　そういうことじゃなくて……」  
「なんだよ。こんなこと、初めてなのか？　大丈夫だよ。そうそうバレルものではないよ。頼りないだろうが、僕だっているんだからさ」

こちらに苦笑いをしてくる。

あー！ あああ、だから、だからさあ！　なんでそんな顔するかなあ！　と、トウコは頭をかきむしりたい気分にかられる。ベットの上でゴロゴロ転がり回りたい気分と一緒に。ユーユウのベットだったら尚いい。ユーユウのパジャマを着てたら最高にいい。

「……ボーツとはして欲しくなかったんだけど」

ユーユウに言われてハツとなった。いけない。フワフワとした気分が全然抜けてくれない。任しちゃいけないのに。自分でやらなくちゃいけないのに。それなのに頭はまともに働いてくれない。

（私、病気なんだ……）

こんな俗っぽいことだつて考える。ちょっと前にはまるでなかった感情が、いつの間にか生まれていて、気にしないうちに育つていて、今溢れようとしている。怖い。怖いことだけれども、自分の心は委ねる気持ちで満ちている。

「……………」

と、いきなりその呆けた気持ち振り払われる。エレベーターが、目的の階に到達などしていないのに、いきなりとまってしまったからだ。ドクン。心臓が大きくはねた。忘れかけていた緊張が舞い戻ってきて、頭の中に充満する。自身の反応速度はこれでだいぶまと

もになつたはずだ。

ユーユウの方をしてみるが、冷静だ。落ち着いている。まるでこういうことになる、あらかじめ分かっていたかのように見える。

「……トウコ、このセキュリティ管理をやってる人間って、お前が来て、誰かを同伴させて、そいつにこれを使わせるってことを知ってたのか？」

「え？ あ……うん。10日前から準備してて、ホントは私だけだったんだけど、その、ユーユウの為になる情報だつてあるかもって……だから、その、問題ないって思ってたんだけど……」  
「ここには監視カメラがついていないから、中の様子を見ることはできないはずだよな」

言われて、注意深く周りの様子を調べてみる。相変わらず、他と比べれば良い装飾をしていたが、ユーユウの言うとおり、こちらを監視するようなものがつけられているとは思えない。

「そうだけど……」

なんだろう。ユーユウの言わんとしているところがイマイチよく分からない。嫌な予感がしているというのは、トウコだってわかることが出来るのだけど。ダメだ。ぼけているつもりはないが、まだまだ神経が機敏になっていないのかもしれない。

「トウコがここに来て、何かしらをするということはセキュリティ管理者には伝わっている。ということは、極力問題を起こさず、いつも通りにしなければならぬのは分かっているはずだ。分かって

いながら、こんなことをする。……なぜだろう」

「何にもなくて、こんなことするわけないわよね」

「そうだ」

「……だったら、私らのやろうとしていることが、やられるとまずい連中にバレちゃったってこと？」

「セキュリティ管理をやってる人間もグルだったとか、あるいは、トウコがものすごく強いトレーナーで、ポケモンリーグ内にそれを邪魔だと感じている人間がいて、そいつが今回トウコをお願いをした」

「っ……………！」

「とか」

「アデクさんはそんなことしないっ！」

「……………可能性の話だよ」

ああ、つい、怒鳴ってしまった。可能性の話。その通りだ。そういう可能性があるかないかと言えば、あるに決まっている。当然のことなのに、怒ってしまった。

ふう、と短く息を吐かれる。ユーユウからすればなんともない行為になるのだけれども、トウコからすれば大きなものだ。ため息じやないのに、ため息をついたように聞こえる。もしかして、嫌われたんじゃないだろうか、と。

「ここから出なくては……………このままでは、捕まるのを待っているだけだ」

言いながら、ユーユウはモンスターボールを取り出す。トウコは変わらずにいる。何をするかは分かっているし、今は彼の考えてい

ることに乗ってしまった方がいいような気がする。

ボールから光が溢れエレベーター内を満たし、ケイト、ハクリューが姿を現す。その艶のあるしなやかな身体は、すぐにユーユウに寄り添った。それで、ユーユウは今度は本当にため息をつくのだけれど、それを含めてケイトは楽しんでいるらしい。

「ほら、そういうのはいいから、ボールの中から状況、見ていたんだろ？ さつさとやってくれよ」

うんざりしたようなユーユウの言葉なんてまるで聞いていないみたいだ。ユーユウの身体に自身の身体を巻きつかせていく。

（仲いいんだなあ………そういえば、ケイトってメス………女の子なんだっけ）

いや、ちょっと待つてほしい。今、何を考えていた？ ケイトはポケモン……ポケットモンスターなのに、男とか女とか、どうしてそんなことを考える必要がある？

ケイトが上に向けてりゅうのいぶきを吹きかける。ケーブルを傷つけるわけにはいかないので威力や範囲は控え目だが、薄青色の輝きは、そういうものを受けのことを考えていない部分、上部に穴をあけていた。

（ま、まさか………いや、でも………ううん、だけど………そうとし



か……)

結構な音がしたのだけれど、トウコの耳はそれをとらえていたのだけれど、脳までは届かない。まるでなかったかのようになってしまっ。

認め難い、いや、認めたくない一つの言葉が頭の中をグルグルとまわっている。もちろん意味はわかっている。少し前まではまるで実感できなかった事柄のものだ。

違う。違うはず。はずなのに。だけど、きっとこれは、そう言っ  
てしまっしかないものなんじゃないだろうか。

(でも、そんな……私、私は、ケイトに、ハクリューに、ポケモン  
に……嫉妬、しちゃって……?)

考えてみる。どう思っても、馬鹿らしいという判定しか出来ない。  
そんなことはあり得ないと、頭では考えている。

けれども、目で見て感じて、それで思ったのは確かに、それに該  
当するような心の動きで。あり得ない。そう思ってる、思いたいの  
だけど、完全に否定することは出来ない。

「トウコ」

名前を呼ばれる。ユーユウの声。上からだ。もう、先にあがつて  
しまったらしい。こちらを引き上げるために、手を差し出している。

迷いなくその手をぎゅっと握る。はねた。もう自分の心臓はネジが吹っ飛んでしまったとしか思えなかった。そのまま上がってけば良かったのだけど、トウコがユーユウの手しか握らないままにジャンプしてしまったから、そのままの体勢だ。宙ぶらりん状態。

「トウコ……！ 上に手をかけて、さっさとあがれよっ」

「……いや」

「はあ！？」

こんな体勢のままでトウコを引つ張りあげたり、あるいは身体を抱き直して上にあげたり。悲しいかな、ユーユウにそんなパワーはない。ジリジリと下に下がっていく。

「トウコーっ！ 早く上がってくれーっ」

苦しさを訴えかけてくるのだけど、トウコはまだ上がる気はない。指は痛かったが、こうでもしないとユーユウと手をつなぐことなんて出来ない。

と、

「わっ！」

いきなりの浮遊感。トウコが驚いているうちに、身体はエレベーター室内から抜けて、上へと達していた。

なにごとだろう。ユーユウに引き上げる力はないはずだ。だってら、なんで。疑問がうまれる。が、それはすぐに、ユーユウの声に

よって解決した。

「はあ……………助かったよ、ケイト。ったくよ、なんだってすぐに上がってくれなかったんだ」  
「……………」

文句を言うユーユウを尻目に、トウコの目はケイトを探す。……いた。睨んでみる。……睨み返されてしまった。そうか、これは挑発で、妨害なんだ。その認識は、すぐにできた。

「行こう」

ユーユウの声を、一人と一匹は完全に無視する。その時間ずっと、睨み合いを続けているからだ。

強力なライバルが生まれた。人間とポケモン。その差は圧倒的。圧倒的なはずなのだが、どうしてだろう。いまいち勝つ算段を見い出せないでいるのは。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8545v/>

---

ポケットモンスター グレー

2011年11月20日02時14分発行